富山県文化振興財団
埋蔵文化財発掘調査報告第22集

道場Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告

―― 公害防除特別土地改良事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ ――

第一分冊

２００４年

財団法人 富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所

道場Ⅰ遺跡Ａ地区（平成10年度調査地）全景

上＝道場Ⅰ遺跡Ａ地区（平成10年度調査地）遠景（西から）
下＝道場Ⅰ遺跡Ａ地区（平成10年度調査地）全景（西から）

上＝道場Ⅰ遺跡Ａ地区（平成11年度調査地）全景（西から）
下＝道場Ⅰ遺跡Ａ地区半地下式建物　SB201（東から）

上＝道場Ⅰ遺跡Ａ地区 SK706出土銅製提子
下＝道場Ⅰ遺跡Ａ地区 SE105出土墨書木札

富 山 県 文 化 振 興 財 団
埋蔵文化財発掘調査報告第22集

道場Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告

―― 公害防除特別土地改良事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ ――

第一分冊

２００４年

財団法人 富山県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 事 務 所

序

当埋蔵文化財調査事務所では、平成7年度より県営公害防除特別土地改良事業に伴う発掘調査を行っております。

本書は、平成10・11年度に実施した、婦負郡婦中町道場Ⅰ・Ⅱ遺跡の発掘調査成果を一冊の報告書としてまとめたものです。

道場Ⅰ・Ⅱ遺跡では、おもに中世全般にわたる集落の跡がみつかりました。とくに道場Ⅰ遺跡は調査面積が約1万8千㎡とまとまっており、調査地区の全域で中世の遺構・遺物を多数検出しました。

主要な遺構としては、規模の大きな半地下式の石組建物や、大・小の掘立柱建物群、これらの建物群に伴う井戸100余基などがみつかりました。集落自体の形成は鎌倉時代前期に遡りますが、室町時代後期頃になると、集落の東側を流れる旧河道に面して、堀や溝で区画された大小の屋敷地が整然と並ぶ村落景観であったことが明らかとなりました。

また遺物では、花押と年号が墨書された木札、銅製の提子、烏帽子などが出土しました。この他にも中国陶磁、瀬戸美濃施釉陶器、山茶椀、滑石製石鍋、瓦質土器など遠隔地からもたらされた流通商品、あるいは集落内での生業に使われたと考えられる珠洲焼や八尾焼などが多量に出土いたしました。

今回の道場Ⅰ遺跡の調査では、集落の四囲が明らかになっており、当地にかつて営まれた中世の集落のほぼ全容を知ることができました。このような事例はまだまだ全国的にも少なく、今後の中世村落研究において貴重な資料となり得るものと確信しております。

最後に、本書を作成する過程において、多大なご指導、ご助力を賜りました関係機関・団体および諸氏に、厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

財団法人富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所
所長　桃野真晃

例　　言

1　本書は富山県婦負郡婦中町道場202-2外に所在する、道場Ⅰ・Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。

2　本書は２分冊からなる。第一分冊には本文、挿図、表および遺跡・遺構・遺物図面を、第二分冊には写真図版を掲載する。また遺跡全体図は付図として本書に添付した。

3　調査は富山農地林務事務所からの委託を受けて、財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所が実施した。

4　発掘調査と内業整理の期間については以下のとおりである。

　発掘調査期間　　平成10（1998）年５月12日～12月23日
　　平成11（1999）年５月17日～11月５日
　内業整理期間　　平成12（2000）年４月１日～平成16（2004）年３月31日

5　本書の執筆・編集は全て森　隆が担当・実施した。

6　出土遺物の写真のうち、木製品・石製品・金属製品については　楠華堂（代表　内田真紀子）、土器・陶磁器および銭貨については　寿福写房（代表　寿福　滋）に委託した。

7　本書に記載される図面・図版・記述の凡例については、必要に応じてその都度本文中で言及した。

8　本書で使用した遺構の略号は次のとおり
SB：掘立柱建物　SE：井戸　SX：大型土坑等　SK：土坑等　SP：柱穴等　SD：溝　SR：川

9　本書の作成にあたり、出土石製品の石材については赤羽久忠氏（富山市科学文化センター学芸課長）から、瀬戸美濃施釉陶器については藤澤良祐氏（財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター）から、中国陶磁器については中島恒次郎氏（太宰府市教育委員会）、山本信夫氏（山本考古学研究所）から、SE105出土の墨書木札については富田正弘氏・鈴木景二氏（富山大学）から、多大なご教示・助言を得た。記して感謝申し上げたい。

目　次

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境 …… 1

1　地理的環境 …… 1

2　歴史的環境 …… 1

第Ⅱ章　調査経緯 …… 5

1　調査に至る経緯 …… 5

A　調査の契機 …… 5　　B　分布調査 …… 5

C　試掘調査 …… 5　　D　本調査 …… 6

2　調査経過 …… 6

A　調査方法 …… 6　　B　調査の経過 …… 7

C　調査体制 …… 7　　D　現地説明会 …… 8

E　整理の経過 …… 9　　F　整理体制 …… 9

第Ⅲ章　道場Ⅰ・Ⅱ遺跡の調査 …… 11

1　調査地区の設定と基本層序 …… 11

A　調査地区の設定 …… 11

B　基本層序 …… 12

2　A地区の調査 …… 13

(1)　近世の遺構 …… 13

(2)　中世の遺構 …… 14

(3)　古代の遺構 …… 98

3　A２地区の調査 …… 99

4　A３地区の調査 …… 100

5　A５地区の調査 …… 101

6　B１地区の調査 …… 101

7　道場Ⅱ遺跡の調査 …… 101

8　遺物 …… 103

(1)　土器・陶磁器 …… 103

(2)　木製品 …… 118

(3)　金属製品 …… 123

(4)　石製品 …… 129

第Ⅳ章　総括 …… 133

（付図）道場Ⅰ遺跡遺構全体図

図 面 目 次

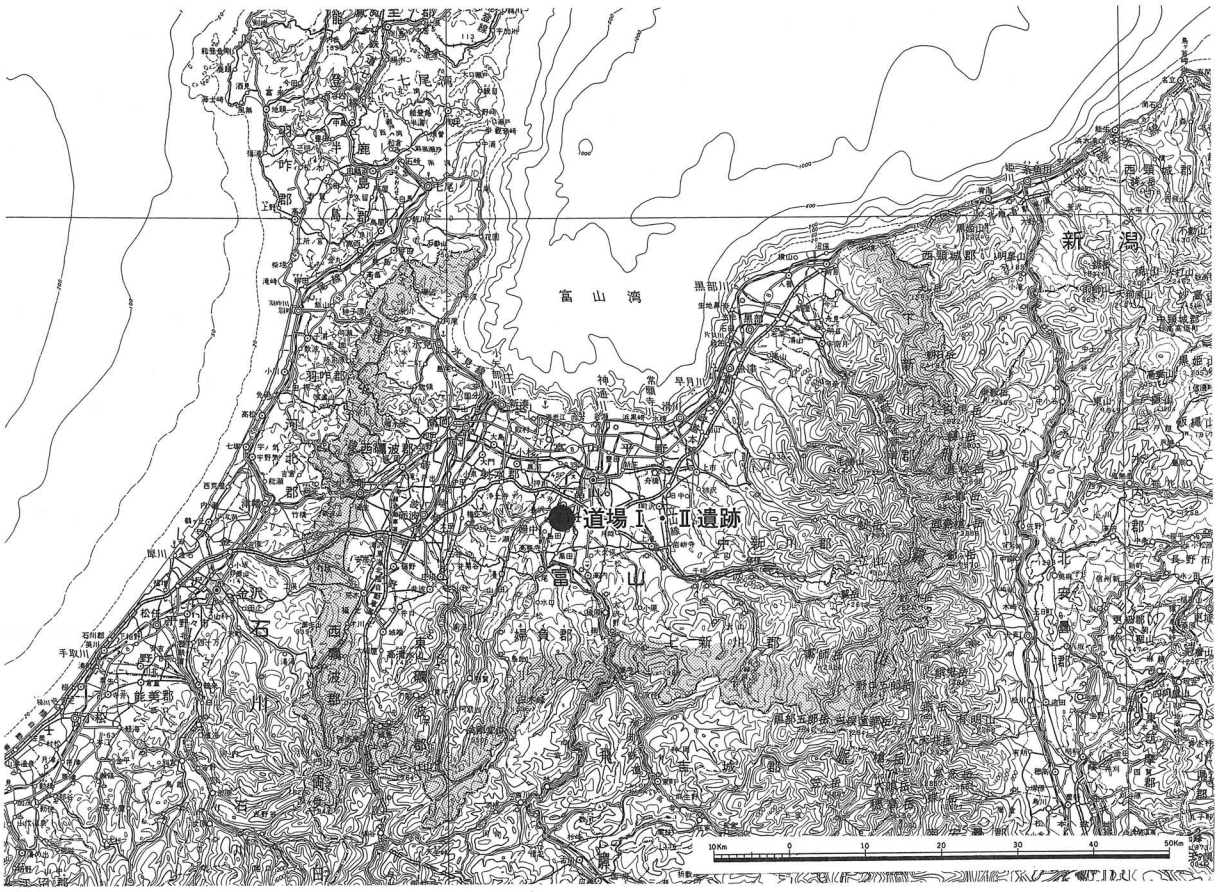
図面001：道場Ⅰ・Ⅱ遺跡位置図
図面002：道場Ⅰ・Ⅱ遺跡周辺遺跡分布図
図面003：道場Ⅰ・Ⅱ遺跡調査地配置図
図面004・005：道場Ⅰ遺跡 A 地区近世面遺構全体図(1)(2)
図面006：道場Ⅰ遺跡 A 地区・A3地区遺構全体図分割区割り図
図面007～025：A 地区遺構全体図(1)～(19)
図面026～056：A 地区掘立柱建物実測図(1)～(31)
図面057～059：A 地区半地下式建物 SB201実測図(1)～(1)(3)
図面060：A 地区半地下式建物 SB202実測図
図面061・062：A 地区半地下式建物 SB203実測図(1)(2)
図面063～091：A 地区井戸実測図(1)～(29)
図面092：A 地区 SR01内石組遺構01
図面093：A 地区 SR01内石組遺構02
図面094～149：A 地区土坑実測図(1)～(56)
図面150～152：A 地区土坑群実測図(1)～(3)
図面153～168：A 地区溝・土坑断面図(1)～(16)
図面169：道場Ⅰ遺跡 A 地区古代面全体図
図面170・171：道場Ⅰ遺跡 A 地区古代面遺構全体図(1)(2)
図面172：道場Ⅰ遺跡古代面遺構図（平成11年度調査地）
図面173：道場Ⅰ遺跡 A2地区調査地配置図・土層断面図
図面174：道場Ⅰ遺跡 A3地区周壁土層断面図
図面175：道場Ⅰ遺跡 A5地区遺構全体図
図面176：道場Ⅰ遺跡 A5地区土層断面図
図面177：道場Ⅰ遺跡 B1地区遺構全体図・土層断面図
図面178：道場Ⅱ遺跡調査地遺構全体図・土層断面図
図面179～185：道場Ⅰ遺跡 A 地区出土遺物（土師器皿）
図面186：道場Ⅰ遺跡 A 地区出土遺物（中国陶磁）
図面187：道場Ⅰ遺跡 A 地区出土遺物（中国陶磁、山茶椀、瀬戸美濃施釉陶器）
図面188：道場Ⅰ遺跡 A 地区出土遺物（瀬戸美濃施釉陶器）
図面189：道場Ⅰ遺跡 A 地区出土遺物（瀬戸美濃施釉陶器、土師質土器、瓦器、瓦質土器）
図面190：道場Ⅰ遺跡 A 地区出土遺物（瓦質土器）
図面191～197：道場Ⅰ遺跡 A 地区出土遺物（八尾）
図面198～218：道場Ⅰ遺跡 A 地区出土遺物（珠洲）
図面219～247：道場Ⅰ遺跡 A 地区出土遺物（遺構別）
図面248：道場Ⅰ遺跡 A 地区出土遺物（古代・近世）
図面249：道場Ⅰ遺跡 A2・A3・A5・B1地区、道場Ⅱ遺跡出土遺物
図面250～300：道場Ⅰ遺跡 A 地区出土遺物（木製品）
図面301～305：道場Ⅰ遺跡 A 地区出土遺物（金属製品）
図面306：道場Ⅰ遺跡 A・A2・A3・B1地区出土遺物（金属製品）
図面307～313：道場Ⅰ遺跡 A 地区出土遺物（石製品）
図面314：道場Ⅰ遺跡 A・A3・A5・B1地区出土遺物（石製品）

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境

1　地理的環境

本書で報告する道場Ⅰ・Ⅱ遺跡は、富山県婦負郡婦中町に所在する、中世を主たる時期とする集落遺跡である。

富山県は、北東日本海側の能登半島の付け根付近に位置する。県内は中央部を南北に走る呉羽丘陵で大きく東西に二分し、それぞれ「呉西」「呉東」と呼称されることが多い。婦中町は後者に入るものの、県のほぼ中央部に位置する。一方県域全体を見渡すと、県域南部は大きくは山岳地域に、県域中央から北部の海岸線に沿っては平野部が発達している。この平野部は大きくは４つからなり、西から東にかけて氷見平野、砺波・射水平野、富山平野、黒部平野と続く。このなかで富山平野は県中央部に位置し、東は早月川扇状地を東端に、西は前述の呉羽丘陵を西端とする地域に広がりをみせる。平野内には早月川、神通川、常願寺川などの水系があり、とくに常願寺川扇状地の発達が最も著しくみられる。婦中町は富山平野内では常願寺川からさらに西側の、神通川左岸から呉羽丘陵付近までの、富山平野のなかでも西端付近に位置する。この中で婦中町の地形は、西側の丘陵部と東側の低地部からなる。丘陵部は呉羽丘陵から南の牛岳へと連なっている。低地部は神通川と井田川が形成した複合扇状地が主体となる。このうち神通川は町域の東部に沿って北流する。井田川は婦中町の中央部を貫流し、これに支流の山田川が西南部の山谷から出て羽根付近で合流する。本書で取り扱う道場Ⅰ・Ⅱ遺跡は、井田川右岸に近い標高20m前後の微高地上に占地している。



第2図　道場Ⅰ・Ⅱ遺跡位置図（1：500,000）

2　歴史的環境

婦中町では、旧石器時代から近世までの各種の遺跡が見られる。

旧石器時代の遺跡では、細谷遺跡など数カ所が知られる。とくに細谷遺跡は表面採集資料が中心だが、富山県における旧石器遺跡の早い時期の調査・研究事例として知られる。

縄文時代の遺跡では、平岡遺跡で前期中葉の土器の他、石鏃・石槍・石錘・石匙・磨製石斧・凹石・抉状耳飾りなどが出土している。また滝谷遺跡（中期前葉）や牛滑遺跡（中期中葉）では竪穴住居が発掘調査でみつかってる。

弥生時代の集落遺跡には、南部Ⅰ遺跡、鍛冶町遺跡がある。また六治古塚や富崎遺跡、鏡坂遺跡などでは、山陰地域との文化的接触を物語る四隅突出墓がみつかっている。弥生時代から古墳時代では千坊山遺跡で竪穴住居がまとまって調査されており。近年は六治古塚などの弥生墳墓群とともに、千坊山遺跡群と呼称され、研究・調査が進められている。

古墳時代では杉谷Ａ遺跡、五つ塚古墳、富崎千里古墳群などが知られる。西部の丘陵上には王塚古墳、勅使塚古墳などの首長墓級の前方後方項が築造されている。古墳時代後期には、呉羽丘陵の斜面を利用した横穴墓がみられる。

古代になると低地側の扇状地上にも多くの集落遺跡が形成されるようになる。律令期の国郡制のもとでは、婦中町は婦負郡の郡域にある。「和名類聚抄」によると婦負郡内には十余りの郷名が知られるが、史料的に裏付けされるものは少ない。この中で川合郷のみが平城京木簡等によってその存在が確認される。川合郷の位置は、その名称の由来からも神通川や井田川、山田川など複数河川の合流点付近に想定される。本調査地の周辺もまたその候補地となりえる。道場Ⅰ・Ⅱ遺跡では古代の集落遺構は確認できなかったが、周辺では中名Ⅰ・Ⅴ・Ⅵ遺跡などで、奈良・平安時代の竪穴住居や掘立柱建物がみつかっている。また道場Ⅰ遺跡の東側に隣接する熊野神社は、『延喜式』の神名帳に記載された式内社と推定される神社の一つである。婦負郡には「延喜式」(927.年）の神名帳にその名が記載された所謂式内社が７箇所ある。このうち熊野神社は稚児舞で知られる神社で、伝承によると久寿二年（1155)、立山山麓の五智山円福寺が萩の島に移され、それがこの神社であるという。

中世になると付近は徳大寺領宮河荘の一角にあったものと推定されている。この宮河荘は文和三年（1354年）の足利義詮御判御教書案（徳大寺文書)、新潟県小千谷市魚沼神社所蔵の大般若経の至徳二年（1385年）十月六日付の奥書「婦負郡宮河荘押上」、同四年五月十二日付「宮河荘新保」、嘉慶二年（1388年）五月付の「婦負郡宮河荘鵜坂社」などによって名が知られ、その荘域は現婦中町の神通川左岸から対岸の富山市の熊野川に及ぶ広大なものであったと考えられている。

宮河荘の推定地のうち婦中町側に所在する中世遺跡としては、清水島Ⅱ遺跡、中名Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ遺跡、持田Ⅰ遺跡などがあり、道場Ⅰ・Ⅱ遺跡もその中に含まれる。これらの諸遺跡は東西１㎞、南北１㎞の範囲内に密集して所在しており、さながら一続きの中世遺跡群を形成しているかのような様相を呈している。また中世城郭では、豊臣秀吉が佐々成政を攻めた際の陣営の一つとなった安田城跡や富崎城跡などがある。

近世の集落は、主に過去の遺跡調査に付随して検出されることが多い。とくに今回の道場Ⅰ・Ⅱ遺跡の調査では近世遺構は少なかったものの、同じ県営公害防除特別土地改良事業に伴う中名Ⅰ・Ⅴ遺跡の発掘調査などで、近世の建物跡や遺物が多く検出されている。村落の周辺に広がる水田地域を含め、現代に連なる村落景観が成立するのは、基本的には近世以降のことと考えられる。

婦中町
河原町
高田
下吉川
上吉川
上井沢
高善寺
上高善寺
福島
新田
奥田
三田
下井田
井田新
石戸
舘本郷
寺家
合場
黒田
浜子
中島
横野
成子
杉田
為成
新屋
広田
田屋
萩島
水島
添島
蔵島
砂古田
板倉
増田
繰田
塚原
下坂倉
笠倉
下条
下邑
羽根
麦島
宮島
分田
東本郷
西本郷
安田
高山
金本
屋線
庄高田
鵜島
下野
新野
高田
有沢
羽根新町
中
婦
泉
坂
境野新
北押川
杉谷
椎止
西押川
本新
山本
開ヶ丘
平岡
ゴルフ場
羽ゴルフ場
長沢
蓮花寺
丘の夢牧場
三田
奥田
新田
松原
外谷
妙川寺
福島
丸山川
添谷
酉勝寺
城生
野飼
ひがしやつお
薄島
城尾
中神通
西神通
神通
福居
上福居
南中田
押
吉倉
青島
新成子橋
新保
久保
荻島
鉄工団地
五丁
地角
ねむの木
瑞穂
下井田
首用水
企業団地
中央植物園
富山空港
経田
秋ヶ島
八日
荒屋
西寺
刑務所
塚原少年矯正
秋原
塚原
富山大橋
護国神社
花園町
有沢橋
鵜坂
分田
宮島
下坂倉
下条
下邑
羽根
長沢
麦島

番号	遺　跡　名	所　　在　　地	種　　類	時　　代
1	中名Ⅰ・Ⅴ遺跡	婦負郡婦中町中名字阿弥大地	集落	古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
2	中名Ⅱ遺跡	婦負郡婦中町中名字大百苅	集落	古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
3	中名Ⅵ遺跡	婦負郡婦中町中名	集落	古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
4	持田Ⅰ遺跡	婦負郡婦中町持田	集落	古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
5	堀Ⅰ遺跡	婦負郡婦中町堀字立寺町	塚状遺構・墓	中世（室町）・近世
6	清水島Ⅱ遺跡	婦負郡婦中町清水島字奥ケ口	集落	中世（室町）・近世
7	道場Ⅰ遺跡	婦負郡婦中町道場字江戸田	集落	中世（室町）・近世
8	道場Ⅱ遺跡	婦負郡婦中町道場字粕塚	集落	中世（室町）・近世
9	砂子田Ⅰ遺跡	婦負郡婦中町砂子田	集落	古代・中世（鎌倉・室町）・近世
10	袋遺跡	婦負郡婦中町袋字宿免	散布地	古代（奈良・平安？）
11	下轡田Ⅰ遺跡	婦負郡婦中町下轡田	散布地	中世・近世
12	宮ケ島Ⅱ遺跡	婦負郡婦中町宮ケ島	散布地	中世・近世
13	鵜坂寺跡	婦負郡婦中町鵜坂	社寺	中世（鎌倉・室町）
14	鵜坂Ⅰ遺跡	婦負郡婦中町鵜坂	集落	古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
15	友坂遺跡	婦負郡婦中町友坂・下条・安田・小泉	集落・城館	縄文・古代（平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
16	友坂天神遺跡	婦負郡婦中町友坂字天神	集落	縄文・古代
17	安田城跡	婦負郡婦中町安田川原他	城館	中世（鎌倉・室町）・近世
18	杉谷古墳群	婦負郡婦中町友坂、富山市	古墳	縄文・弥生末・古墳
19	野下遺跡	婦負郡婦中町小長沢、富山市	集落	先土器・縄文（中・晩）・古代（奈良）
20	平岡遺跡	婦負郡婦中町小長沢字大畑・字宮ノ高・字大山、富山市	散布地	縄文
21	新開遺跡	婦負郡婦中町小長沢字新開、富山市	集落	先土器・縄文・古代（奈良・平安）
22	新町Ⅱ遺跡	婦負郡婦中町新町	集落	縄文・古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
23	下邑遺跡	婦負郡婦中町下邑・小長沢	散布地	縄文・古代（奈良・平安）・中世・近世
24	下邑東遺跡	婦負郡婦中町羽根	集落	古墳（飛鳥）・古代（奈良・平安）・中世・近世
25	千坊山遺跡	婦負郡婦中町羽根字千坊・長沢字天王	古墳	先土器・縄文・古墳
26	王塚古墳	婦負郡婦中町羽根字上平	古墳	古墳（初）
27	勅使塚古墳	婦負郡婦中町羽根字上平	古墳	古墳（初）
28	五つ塚	婦負郡婦中町勅使塚	古墳	古墳
29	向野塚	婦負郡婦中町長沢字向野	弥生終墓（前方後方形墳丘墓）	弥生終
30	六治古塚	婦負郡婦中町長沢字向野	弥生終（四隅突出型墳丘墓）	弥生終
31	鍛冶町遺跡	婦負郡婦中町長沢字鍛冶町・笹川・中江	集落	弥生終・古代（奈良）・中世・近世
32	鏡坂Ⅰ遺跡	婦負郡婦中町外輪野字鏡坂	集落	縄文（中）
33	蓮花寺遺跡	婦負郡婦中町長沢字寺屋敷	社寺（寺院）	中世（室町）
34	富崎城遺跡	婦負郡婦中町富崎	散布地・城館（山城）	縄文・弥生・中世（鎌倉・室町）
35	富崎千里古墳群	婦負郡婦中町富崎	古墳	古墳
36	ゴダイ塚	婦負郡婦中町富崎	塚	中世（鎌倉・室町）
37	富崎遺跡	婦負郡婦中町富崎字二俣川他	散布地	近世
38	千里Ｄ遺跡	婦負郡婦中町千里	散布地	古墳・古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
39	上吉川Ⅰ遺跡	婦負郡婦中町上吉川	集落	縄文（晩）・古墳（前）・古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
40	南部Ⅰ遺跡	婦負郡婦中町熊野道・上井沢・島田・高日附、八尾町	集落	弥生（終）・古墳（前）・古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
41	前山Ⅰ遺跡	婦負郡八尾町福島字前山	集落	縄文
42	天ノ平遺跡	婦負郡八尾町福島	散布地	先土器・縄文
43	井田館跡	婦負郡八尾町井田	城館	中世（室町）
44	長山遺跡	婦負郡八尾町深谷長山	集落	縄文
45	滅鬼遺跡	婦負郡八尾町滅鬼	集落	縄文
46	大杉遺跡	婦負郡八尾町大杉	集落	縄文（中）
47	長者塚	婦負郡八尾町深谷	墓	中世（鎌倉・室町）
48	押上古墳	富山市押上	古墳？	古墳？
49	南中田Ｄ遺跡	富山市南中田	集落	縄文（晩）・古墳（古墳・白鳳）・古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
50	吉倉Ｂ遺跡	富山市字柿ノ木又割・押上字藤地割・南中田字土居野割・任海・新保	集落	古代（奈良・平安）・中世
51	任海遺跡	富山市任海	集落	古代（奈良・平安）・中世
52	任海宮田遺跡	富山市任海字宮田割・字大塚割・字桜町割・字前田割・字沼割・字仙田割・字株原割・字三十刈割・友杉字堤田割・字大鴨割	集落	縄文（晩）・古墳（古墳・白鳳）・古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
53	友杉遺跡	富山市友杉字北条田割・字辻ノ内割・字田割・字堤田割・任海字桜町割	集落	古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
54	杉谷Ａ遺跡	富山市杉谷字上野山畑	墓	弥生（末）・古墳（初）
55	向野池遺跡	富山市境野新	集落	先土器・縄文（早・前）・古代（奈良・平安）・中世・近世
56	北押川Ｃ遺跡	富山市北押川	集落	縄文（前）
57	池多東遺跡	富山市池多	散布地	先土器・縄文（前）・古代（奈良・平安）・中世・近世
58	御坊山遺跡	富山市池多	集落・生産（製鉄）	先土器・古代（奈良・平安）
59	開ヶ丘狐谷Ⅱ遺跡	富山市開ケ丘狐谷	集落	縄文（中）・古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）
60	開ヶ丘狐谷遺跡	富山市開ケ丘狐谷	集落	縄文（前・中）・古代（奈良・平安）
61	開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡	富山市開ケ丘狐谷	集落	縄文（中）・古代（奈良・平安）
62	田中館跡	婦負郡八尾町田中	城館	中世（鎌倉・室町）

第１表　　遺跡地名一覧

第Ⅱ章　調査経緯

1　調査に至る経緯

A　調査の契機

明治時代に亜鉛の採掘を開始した岐阜県神岡鉱山から排出されたカドミウムは、神通川を経由して下流域の水田地を広く汚染し、同時にこの地に住む人々の身体をも蝕ばんだ。このなかで昭和45年に農業用地の土壌汚染防止法が公布され、、昭和49年・52年には、県は神通川流域の829.9ha を農用地土壌汚染対策地域として指定した。その結果昭和54年から、県営公害防除特別土地改良事業による本格的な土壌復元が始まった。この事業により、婦中町町域でも１～３次地区、２期地区に分けて復元工事が進められることになった。事業は大型圃場による区画整理で、汚染対策地域と指定された農地に隣接する地域を併せて行われることとなった。復元工法は上乗せ客土工法と埋め込み客土工法の二つの工法が採用された。両工法とも地下の埋蔵文化財に影響が及ぶことが予想されたため、個々の復元計画の内容に応じて発掘調査が必要な場合、事前協議のうえで発掘調査の計画を立案した。

婦中町の第１次地区は12ha で昭和55年に始まり昭和58年に完了、第２次地区は165ha で昭和59年に始まり平成４年に完了、さらに第３次地区の工事が平成４年から平成16年までの予定で着手された。この第三次地区は、残余の329ha が対象地域となった。そこでこれらの工事に伴い破壊される可能性の高い埋蔵文化財について、まず対象地内の分布調査を行うことにより、遺跡の有無・範囲・遺存状況の把握が試みられた。次いでこの分布調査結果に基づき、該当地域の埋蔵文化財の保存措置を講じるための処置が検討・協議され、さらに必要に応じて試掘調査、本格調査へと段階を踏んで進む運びとなった。

B　分布調査

分布調査は、婦中町教育委員会と富山県埋蔵文化財センターが担当し、昭和53年から開始された。この調査は、平成５年からはさらに富山大学考古学研究室の協力を得て実施された。調査の結果、１次地区と２次地区では埋蔵文化財包蔵地は確認できなかった。続く３次地区（工期：平成４～16年、工事面積：329ha)、２期地区（上期：平成９～18年、面積：36ha）の調査は、対象地が広範囲であったこともあり、分布調査に６ヶ年を費やすこととなった。とくに平成５～９年度の調査において、対象地域内に多数の埋蔵文化財が包蔵されていることが確認された。その実数は埋蔵文化財包蔵地33カ所、推定面積で約164.4ha に及ぶことが最終的に判明した。

C　試掘調査

分布調査で存在が確認された埋蔵文化財包蔵地に対する試掘調査は、婦中町教育委員会と富山県教育委員会が担当した。試掘調査は、地表面を対象とした分布調査だけでは確認しえない遺跡の具体的な様相を把握するために実施する調査である。この試掘調査によって、はじめて地下に眠る遺跡の実態が明らかとなるわけだが、汚染田の復元工事が前提となるこの試掘調査では、とりわけ遺構面の平面的広がりと遺構深度の確認が重要となる。すなわち遺構面が工事施工面の影響深度よりも浅い場合は、客土の上乗せ盛土保存が可能となり、遺跡自体もまた現状のまま保存されることになる。逆に

施工影響深度が遺構面よりも深い時や、汚染土を埋め込む深い溝や穴を掘削する時、遺跡は工事により破壊されることになる。この場合記録保存を前提とした緊急発掘調査（本格調査）が必要となる。埋蔵文化財保護の立場からは、できるだけ現状で遺跡を保存するほうが望ましいが、この保存処置は工事の施工法等の変更や調整によって達成できる場合も多い。それだけに早急な試掘調査による遺跡の実態把握が必要となる。

このような観点から、分布調査で確認された遺跡推定地のうち、工事対象となった32箇所において試掘調査を実施した。調査は平成５年度から10年度にかけて延べ６ヶ年、７次にわたるものとなった。その結果、古墳時代から近世に至る11箇所の遺跡を確認した。とくに古代から近世にかけて形成された遺跡は、式内社である熊野神社と鵜坂神社周辺に大きく２つの遺跡群に分かれてみられる。このうち道場Ⅰ・Ⅱ遺跡は熊野神社周辺の遺跡群に含まれる。道場Ⅰ・Ⅱ遺跡の試掘調査は、第３・５・６次調査と複数年に分けて実施された。道場Ⅰ遺跡の調査では中近世の遺構・遺物の存在を確認した。14世紀から16世紀にかけての時期が主体で、遺構面は、南側では中世２面、北側では中世１面と考えられ、また一部には近世の遺構の存在も予測された。道場Ⅱ遺跡はⅠ遺跡の北側に隣接所在する。試掘調査では構、石列、土坑、ピット等を検出している。詳細時期は不明だが、近世以降の可能性もあるという。周辺では道場Ⅰ・Ⅱ遺跡の他、清水島Ⅱ遺跡、中名Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ遺跡、堀Ⅰ遺跡などにおいて、地下に遺構・遺物が存在することが、試掘調査の結果確認されている。

D　本調査

前述のように、汚染田復元工事の工法は、大きく埋め込み客土工法と、上乗せ客土工法とがあるが、工事による破壊が予想される遺跡については、事前に緊急発掘調査による記録保存が必要となる。このため試掘調査の結果をもとに、富山県耕地課、富山県農地林務事務所、婦中町農地課、婦中町教育委員会、富山県教育委員会文化課（現文化財課）、富山県埋蔵文化財センターからなる事前協議がなされ、計画田面高の調整による遺跡の最大限の保存措置が考慮・検討された。田面調整では、遺構・遺物包含層の高さに保護層10cm上乗せした数値を工事掘削の限界深度とし、この深さに達しない範囲で施工可能なら現状保存、さらに深く掘削が及ぶものについては記録保存を目的とする緊急発掘調査（本調査）を実施することとなった。

このような経過を経て、平成６年度より中名Ⅱ遺跡において遺跡の本調査が開始された。この中で、財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所では、平成７年度より県営公害防除特別土地改良事業関連事業として発掘調査を富山農地林務事務所から受託し、本調査を開始した。事業開始年度となる平成７年度には、婦中町エリアでは清水島Ⅱ遺跡、中名Ⅱ遺跡を、平成８年度は中名Ⅱ・Ⅴ遺跡、持田Ⅰ遺跡を、平成８年度～11年度には中名Ⅰ・Ⅴ・Ⅵ遺跡、道場Ⅰ・Ⅱ遺跡の調査を実施した。そして平成12年度の中名Ⅴ遺跡、砂子田Ⅰ遺跡の本調査をもって、財団が委託する婦中町内遺跡の本調査は全て終了した。このなかで道場Ⅰ・Ⅱ遺跡の本調査は、平成10・11年度の二ヶ年にわたり実施された。

2　調査経過

A　調査方法

道場Ⅰ・Ⅱ遺跡は両側を谷に挟まれた南北にのびる微高地（標高約20m、東西幅約200m）上に広がる。このうち道場Ⅰ遺跡は、分布調査の結果、当初遺跡は北へ大きく広がるものと推定されていたが、試

掘調査の結果、遺跡の広がりは県道館・本郷・添島線より北約350mまでと確認された。道場Ⅰ遺跡の本調査地は、この遺跡推定範囲のほぼ南端にあたる県道館・本郷・添島線に面した北側部分に位置する。試掘調査では14～16世紀の遺物が主体的に出土し、該期の集落跡と考えられた。遺構面は調査区の南側で中世２面、北側が浅く後世の削平により１面と考えられた。これに加えて近世の遺構の存在も予測された。また道場Ⅱ遺跡は、道場Ⅰ遺跡の北東約300mに位置するが、小規模な調査地である。道場Ⅰ・Ⅱ遺跡の発掘調査の基準となるグリッドは、国家座標を用い設定した。道場Ⅰ・Ⅱ遺跡の場合70,680.00　－570.00、をＸ０Ｙ０の基点とし、南北方向をＸ軸、東西方向をＹ軸とした。グリッドは２×２ｍの方画を遺物取り上げ等の基本区画とし、グリッド名は北東角のＸ軸・Ｙ軸の座標名で呼称した。発掘調査は表土・耕作土を機械で掘削・除去した。次いで遺構面に至る包含層掘削、遺構検出および個別の遺構掘削については、作業員の人力によった。遺構掘削の過程において、または完掘後、必要に応じて適宜遺構断面図、出土状況図などの図化作業、および写真撮影作業などを、調査補助員の協力を得て実施した。また調査区全域にまたがる遺構平面図の作成には、空中写真測量を利用した。空中写真測量には、広域の対象地についてはヘリコプター実機の使用、小規模な面積での平面測量にはラジコン・ヘリコプターを使用した。その他調査方法の詳細については、すでに報告済みの他財団調査地などと基本的に共通する基準で実施している。

B　調査の経過

調査は富山農地林務事務所と協議のもとに実施し、発掘調査中も進捗状況等によって、必要に応じて協議を継続した。当財団の場合、現地で調査にあたる技術職員は２名１班体制を基本としているが、平成10年度の道場Ⅰ遺跡の調査では、広域の単一調査地のため、各担当調査地を細かく分割するより大きく二分した方が調査効率が良いため、実質３名１班の体制を準用（調査終了間近にはさらに２名１班の増員）して調査を進めた。道場Ⅰ・Ⅱ遺跡は平成10・11年度に調査を実施している。このうち平成10年度調査（道場Ⅰ遺跡Ａ地区）は、調査対象平面積12,664㎡、延べ面積20,765㎡、調査期間は平成10年５月27日～12月23日、調査員８名の調査体制で実施した。平成11年度調査（道場Ⅰ遺跡Ａ１～Ａ３・Ａ５、Ｂ１地区、道場Ⅱ遺跡）は、調査対象平面積5,432㎡、延べ面積6,234㎡、調査期間は平成11年５月17日～11月５日、調査員２名の体制で実施した。

C　調査体制

平成10年度（1998年度）

総　　括	桃野　真晃	埋蔵文化財調査事務所所長
	谷井　保男	埋蔵文化財調査事務所副所長
庶　　務	宮成　真幸	埋蔵文化財調査事務所主事
	江本　裕一	埋蔵文化財調査事務所主事
調査総括	池野　正男	埋蔵文化財調査事務所調査第一課課長
調 査 員	酒井　重洋	埋蔵文化財調査事務所調査第一課係長
	森　　隆	埋蔵文化財調査事務所主任
	武田健次郎	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	青山　　晃	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	吉田　裕子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

内田亜紀子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
野口　雅美　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
戸谷　邦隆　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

平成11年度（1999年度）

総　　括　桃野　真晃　埋蔵文化財調査事務所所長
谷井　保男　埋蔵文化財調査事務所副所長
上野　　章　埋蔵文化財調査事務所副所長
庶　　務　宮成　真幸　埋蔵文化財調査事務所主事
江本　裕一　埋蔵文化財調査事務所主事
調査総括　池野　正男　埋蔵文化財調査事務所調査第一課課長
調 査 員　三島　道子　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
金三津英則　埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

(1)　道場Ⅰ遺跡

地　区	調査期間	延日数	調査面積	調査担当者	検出遺構	出土遺物
A地区　中世上層	H10.5.27～10.22		12,664㎡	酒井重洋・森　隆・武田健次郎・青山晃・吉田祐子・内田亜紀子・野口雅美・戸谷邦隆	石組半地下式建物、掘立柱建物、石組井戸、木枠組井戸、土坑、溝、堀、旧河道	中世土師器、瀬戸美濃施釉陶器、中国陶磁、瓦質土器、珠洲、八尾、石鍋、鉄、石、金属製品他
中世下層	H10.10.23～12.23		8,100㎡			
A1地区　中世上層	H11.5.17～8.31		3,795㎡	三島道子・金三津英則	掘立柱建物、石組井戸、木枠組井戸、土坑、溝、堀、旧河道	中世土師器、瀬戸美濃施釉陶器、中国陶磁、瓦質土器、珠洲、八尾、石鍋、鉄、石、金属製品他
中世下層	H11.9.1～10.4		802㎡			
A2地区　近世面	H12.6.30～10.21		358㎡	三島道子・金三津英則	溝、土坑	越中瀬戸、越中丸山
A3地区　中世面	H12.7.28～9.24		739㎡	三島道子・金三津英則	旧河道	中世土師器、瀬戸美濃陶器、中国陶磁、珠洲
A5地区　中世面	H12.6.23～8.6		132㎡	三島道子・金三津英則	溝、土坑	中世土師器、瓦質土器、中国陶磁、珠洲、八尾
B1地区　近世面	H12.10.12～11.5		298㎡	三島道子・金三津英則	近代の堀、谷	越中瀬戸、伊万里、珠洲

(2)　道場Ⅱ遺跡

地　区	調査期間	延日数	調査面積	調査担当者	検出遺構	出土遺物
——	H12.9.20～10.21		111㎡	三島道子・金三津英則	掘立柱建物、土坑、溝	中世土師器、中国陶磁、珠洲

D　現地説明会

当財団の発掘調査では、その調査成果を地元の方々をはじめ広く一般に周知していただくため、現地説明会を発掘調査現場で開催している。道場Ⅰ・Ⅱ遺跡の発掘調査においては、平成10年度の道場Ⅰ遺跡A地区を主たる会場とした現地説明会を計画・実施した。開催日時は、平成10年11月8日(日)午前10時から12時。当日は調査地区内に順路を設定し、各主要遺構の周辺には説明員を配置し、遺跡見学の際の便宜を図った。当日は、調査現場事務所前での発掘調査概略説明の後、調査現場であるA地区へ見学者を誘導し、実際の調査現場を見学していただいた。見学順路の各所には説明員を配置し、現在掘削中である遺構や完掘済みの遺構について適宜見学者に説明した。また現場調査事務所においては、道場Ⅰ遺跡A地区出土遺物を中心に、当年度に同時並行で調査中の中名Ⅰ・Ⅴ遺跡の出土遺物や、過年度の隣接調査地の出土遺物もあわせて展示した。また遺跡・遺構などの写真パネルの掲示もおこなった。同時に当年度調査地の現地説明会に至るまでの調査過程をスライド化して上映した。遺物展示では調査員による説明の他、ノート・パソコンのプレゼンテーション・ソフトを利用し、出土

遺物の凡例解説をおこなった。当日の見学者参加人数は約120名を数えた。平成11年度は、10月３日に中名Ⅴ・Ⅵ遺跡・道場Ⅰ遺跡の現地説明会を実施した。この時は、発掘調査地での現地説明は行わなかったものの、パネル写真による調査成果の紹介や出土品解説を実施した。

E　整理の経過

現地での発掘調査作業段階から並行して土器・陶磁器等の出土遺物の洗浄・注記等の作業を実施した。現地発掘調査は通常年内（12月頃）までに終了するが、以後年度末にかけて埋蔵文化財調査事務所において当年度調査の基礎的な整理作業をおこなった。これらの諸作業には調査員による遺構カード、写真台帳、木製品・金属器製品・石製品台帳、遺構別出土遺物台帳等の作成がある。同時に概要作成に向けての出土遺物の選別・実測図作成作業や空中測量図面の最終校正もこの時期に実施した。なお当年度調査の一部成果については概要報告（『埋蔵文化財調査概要－平成10年度－』『埋蔵文化財調査概要－平成11年度－』）として年度末に刊行している。以上の作業は、後の報告書作成のための本格整理に先立つ基礎整理作業の段階となる。また木製品、金属製品、石製品の遺物写真撮影・実測については業者委託となるため、これに先立ち各出土遺物の法量計測、メモ写真撮影、整理台帳等を整理作業員の補助のもとに作成した。木製品については大型品はコンテナに、小型製品はタッパーにて水浸けの状態で、また製品によってはオートシーラーと専用フィルムを用いてパックし、実測や保存処理を委託するまでの仮収納とした。

報告書刊行に向けての本格的な整理は、平成12年３月に開始した。遺物の実測のうち土器・陶磁器については調査員がおこなった。木製品・金属製品・石製品については平成12・13年度に株式会社シン技術コンサルタントに委託し、校正作業ののち実測図の納品を受けた。遺構の実測図・写真・航空測量図はそれぞれ調査員が台帳を作成・整理し、遺構カードとともにパーソナルコンピューターを使用してデータ入力した。データ入力は人材派遣会社に委託し、これを整理作業員が補足した。遺物の写真撮影は業者委託（木製品・金属器製品・石製品は「写房楠華堂」、土器陶磁器は「いろは写房」）し、４×５インチ判及び５×７インチ判で各々白黒・カラースライドフィルムで撮影し、それぞれ納品を受けた。自然科学分析は①種実遺体同定②骨類同定③昆虫同定④炭化材同定⑤微細物分析の各項目について、平成12・13年度にパリノ・サーベイ株式会社に分析の委託をおこなった。また漆器塗膜分析については漆器文化財科学研究所（平成12・13年度）に、鉄滓分析については川鉄テクノリサーチ株式会社（平成13年度）に、出土木製品の樹種鑑定と木製品・金属器製品の保存処理については財団法人元興寺文化財研究所（平成13～15年度）に、それぞれ委託した。

本報告書の写真図版作成、遺構・遺物図版のレイアウト・トレース作業、遺物・遺構一覧表の作成、および本文原稿の執筆・編集・校正等については、平成15年度に森隆を担当に、整理作業員の協力を得て埋蔵文化財調査事務所で実施した。

F　整理体制

平成12（2000）年度

総　括	桃野　真晃	埋蔵文化財調査事務所所長
	肥田　啓章	埋蔵文化財調査事務所副所長
	上野　　章	埋蔵文化財調査事務所副所長
庶　務	竹中　慎一	埋蔵文化財調査事務所課長補佐

	江本　裕一	埋蔵文化財調査事務所主事
整理総括	狩野　　睦	埋蔵文化財調査事務所調査第二課課長
担　　当	酒井　重洋	埋蔵文化財調査事務所調査第二課係長
	吉田　裕子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	野口　雅美	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

平成13（2001）年度

総　　括	桃野　真晃	埋蔵文化財調査事務所所長
	肥田　啓章	埋蔵文化財調査事務所副所長
	上野　　章	埋蔵文化財調査事務所副所長
庶　　務	竹中　慎一	埋蔵文化財調査事務所課長補佐
	江本　裕一	埋蔵文化財調査事務所主事
整理総括	酒井　重洋	埋蔵文化財調査事務所調査第二課課長
担　　当	青山　裕子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	野口　雅美	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

平成14（2002）年度

総　　括	桃野　真晃	埋蔵文化財調査事務所所長
	肥田　啓章	埋蔵文化財調査事務所副所長
	上野　　章	埋蔵文化財調査事務所副所長
庶　　務	竹中　慎一	埋蔵文化財調査事務所課長補佐
	広田　英貴	埋蔵文化財調査事務所主事
整理総括	酒井　重洋	埋蔵文化財調査事務所調査第二課課長
担　　当	森　　隆	埋蔵文化財調査事務所主事主任
	青山　裕子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

平成15（2003）年度

総　　括	桃野　真晃	埋蔵文化財調査事務所所長
	関　　清	埋蔵文化財調査事務所副所長
	盛田世津子	埋蔵文化財調査事務所副所長
庶　　務	竹中　慎一	埋蔵文化財調査事務所課長補佐
	広田　英貴	埋蔵文化財調査事務所主事
整理総括	宮田　進一	埋蔵文化財調査事務所調査第二課課長
担　　当	森　　隆	埋蔵文化財調査事務所主事主任
	中村　亮仁	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

第Ⅲ章　道場Ⅰ・Ⅱ遺跡の調査

1　調査地区の設定と基本層序

A　調査地区の設定

本書で報告する道場Ⅰ・Ⅱ遺跡の発掘調査とは、平成10年度に調査を実施したＡ地区、平成11年度に調査を実施したＡ１地区、Ａ２地区、Ａ３地区、Ａ５地区、Ｂ１地区、及び道場Ⅱ遺跡一調査区の、２遺跡７地区の発掘調査のことを指す。

今回報告する道場Ⅰ・Ⅱ遺跡の調査地のなかで最も規模の大きいのがＡ地区で、平面積12,664㎡を数える。この調査区は県道館・本郷・添島線に接して、その北側一帯の水田中に設定されたもので、道場Ⅰ遺跡遺跡の推定範囲（南北400m、東西200m）の中央付近に位置する。

Ａ地区に次いで面積が大きな調査地は、平面積3,795㎡のＡ１地区であるが、このＡ１地区はＡ地区の北東辺に接合している。というのは、両者はもともと一続きの調査地区として設定されていたが、当事務所のおこなう平成10年度事業調査面積の総括調整に伴い、翌平成11年度調査に送られ分割された部分がＡ１地区と呼称された。実際の調査中に検出された遺構のなかにも、当然Ａ地区とＡ１地区に跨って連なる遺構も多くみられる。従って、調査年度が違うからといって両者を別地区として設定する理由はなく、むしろ記述上の便宜からも両地区を再度ひとつに統合し、本書では単に「Ａ地区」と呼称することにする。従って、以下の記述においてとくに理由がない限り、「Ａ地区」とは平成10年度調査Ａ地区と平成11年度調査Ａ１地区とを合わせた調査区のことを指す。汚染田の復元工事計画では、Ａ地区において大規模な抗を掘削し、耕盤土を多量に掘削し、同時に汚染土を埋め込む計画であり、Ａ地区の地下に存在する遺構は確実に破壊される。このためＡ地区については全面完掘をめざす発掘調査となった。

次いでＡ２地区は、Ａ地区の北東側、神明社の参道の両脇に位置する２つの調査区と、さらに神社の北側に接して東西にのびる用水に沿った細長いトレンチ状の調査区からなる。調査面積は３カ所合計で358㎡である。

Ａ３地区は前述の神社北側の水路を挟んでＡ地区の北側に位置する調査地区で、掘削面積は793㎡である。

Ａ５地区は先の用水のさらに西側下流部分の左岸に接して設定された細長いトレンチ状の調査地区で、東端はＡ地区に接して連なる。Ｂ１地区は江戸時代から代々庄屋さんだったと言い伝えられる一町四方の屋敷地（舟木邸）の西辺の境界に沿って設定された細長いトレンチ状の調査区。掘削面積は298㎡を数える。

以上の調査地区以外に平成11年度調査では、当初Ａ４地区が設定されていた。このＡ４地区とは、Ａ３地区の北側に位置する用水路の際に沿って「L」字状に設置したトレンチ状の調査地であったが、用水と近接しており十分な調査余地が取れなかったため、調査自体を断念した。このためＡ４地区は欠番調査区となっている。

道場Ⅱ遺跡は道場Ⅰ遺跡の北東側200～400mほど離れて所在する。遺跡範囲も東西50m、南北150mほどと、Ⅰ遺跡に比べると狭い。試掘調査は実施されているものの、遺跡の実態には不詳な点が多い。調査地区は婦中企業団地外周道路の南辺に接して位置する。本調査とはいいながら、調査地区の規模は

111㎡と大きくない。

B　基本層序

A 地区：A 地区の旧地形は東西に幅が広く、北に向けてに緩やかに傾斜していく平坦地上に位置する。従って東側の旧河道部分を除けば、調査地内は概ねフラットな平面状況を示す。調査前の現況は水田である。調査区は南側がやや高く、北側が低くなるが、これと対応するように、現耕作面から遺構検出面までの土層の厚さは、南側が深く、北側が浅い。とくに北半部は浅く、耕作土直下で遺構検出面となる。遺構検出面の標高は県道側の南端付近が20.30m前後、中央付近も概ね同じ高さで、北半部から北端付近が一段低くなり19.70m（北東端付近）から19.40m（北西端付近）となる。調査地南端と北端の比高差は１m未満で、それほどの大きなギャップはみられない。遺構面までの土層が標高の高い南側に厚く、北側に薄いのは、現況水田を開削する際、水係の便から、北側は地山付近まで土層を削り込み、南側は逆に厚く土を盛ったためと考えられる。調査地内の基本層序は南側で、Ⅰ層：耕作土、Ⅰb層：オリーブ褐色粘質土層、Ⅱ層：暗灰黄色砂粘質土層、Ⅲ層：暗オリーブ褐色砂粘質土層、Ⅳ層：地山層からなる。調査地が広いこともあり、地山の土層は場所によってかなり異なるが、概ね暗灰黄色粘質土層、暗灰褐色粘質土層ないしは基盤礫層の直接露出となる。基本的には本調査地の中世集落が廃絶後、現況に連なる水田へ再開発される過程で、盛土かあるいは削平がなされたものと考えられる。従って遺構面上を厚く覆うような一次包含層などは形成されておらず、包含層からの出土遺物も、全て後世の開墾・掘削等に伴い、下層の中世遺構面から混入したもの考えられる。また検出遺構がほぼ中世に限定されることからも、古代から中世に及ぶような遺構面の重層性は見受けられない。近世遺構としたものも、南端付近で一部下層の中世遺構と分離できるかにみえる地域はあるものの、基本的に覆土、切り合い関係、出土遺物等で判別せざるをえない状況である。ただ当初の調査過程で、県道に接した南端部分のみを近世面として分離して調査したため、本書では一応この部分のみを近世面として分離して示しておく。

但し近世の建物や集落跡は本調査地では検出されておらず、近世遺構としたものも、大半が耕作関連と考えられる溝状遺構が中心である。また本調査地の中世集落に先行してみられる下層の耕作溝、自然流路についても、中世遺構検出時に既に同時検出されており、両者の混在をさけるため、あえて図上で下層遺構面として分離している。なお古代の遺物は若干出土しているものの集落跡等は本調査地ではなかったものと考えられる。基盤礫層中には洪水起源と考えられるものもあるが、形成時期は不詳である。

A 2地区：A 2地区ではⅡ～Ⅳ層が水田耕作等により削平されているものと考えられ、削平後の堆積層及び、Ⅴ層相当の面で中世以降の新しい時期の遺構を検出した。

A 3地区：A 3地区では、A 1地区から続く自然河道が調査地区の大半を占めている。また河道の東岸では耕作土直下に砂礫層が隆起している状態が確認できた。

A 5地区：A 5地区は既存の排水路を拡張のための事前調査で、水路に沿った細長いトレンチ状の調査区を設定した。基本的にはA 1地区と同様の層序であり、Ⅱb層の上面で遺構を検出した。

B 1地区：B 1地区では近代以降に削平・盛土による改変を受けている。このめ他地区と同様の基本層序は当てはめることはできない。基本的には、盛土直下で中世以降の自然河道を確認したのみである。

道場Ⅱ遺跡調査地区：道場Ⅱ遺跡の調査地区の基本層序は、Ⅰ層：黒褐色粘質土層（現耕作土層）、Ⅱ

層：黄灰色砂質土層、Ⅲ層：灰色砂質土層、Ⅳ層：オリーブ褐色粘質土層、Ⅴ層：暗灰黄色砂質土層または砂礫層で、Ⅱ・Ⅲ層が遺物包含層、Ⅲ層上面、Ⅳ・Ⅴ層上面の２面が中世の遺構検出面となるため、Ⅲ層を中世上層、Ⅳ・Ⅴ層を中世下層とした。遺構検出はⅣ・Ⅴ層が中心となり、Ⅲ層では溝一条のみを検出した。Ⅳ層は調査区の西半部では比較的安定してみられるが、東へ向かうに従って希薄となり、東部ではⅤ層の砂礫層上で遺構を検出した。

2　A地区の調査

A地区（平成10年度調査A地区および平成11年度調査A１地区）では、上層から順に、大きく近世、中世、古代の３時期の遺構が検出されている。但し集落として検出される遺構は中世の時期にほぼ限定される。これらの集落遺構は、A地区のほぼ全域で広く検出される。これに比べ近世の遺構は、A地区南側を中心に部分的に検出されたにすぎない。遺構の内容も中世集落廃絶後の耕作関連と考えられるものが主体となる。古代の遺構についてはA地区全域で検出されるものの、集落遺構は平成11年度調査地（旧A１地区）で掘立柱建物数棟が検出されている程度である。他は耕作に関連する溝や流路が検出遺構の主体となる。従って以下の遺構の記述についても、おのずと中世の時期が中心となる。

(1)　近世の遺構

近世の遺構面は主に調査区の南西側で検出した。近世の遺構はこの他の地域でも若干検出されているが、中世遺構と重複・混在する状況にある。これに対し、南西側部分においては上層であるⅡ層の残存状況が良好で、下層の中世遺構との分離が容易だったことによる。検出された遺構は、溝や土坑状の遺構が中心で、建物跡や井戸など近世集落における生活の痕跡を示す遺構は検出されていない。溝は、SD001～003のように連続してのび、耕作地の区画溝や水路と考えれれるものの他、これらの溝に沿うようにして延びる同方向の小溝群、土坑等がみられる。とくに調査地南西端付近では、これら耕作関連の小溝群が密集して多く検出されている。小溝群は幅0.2～0.3mでほぼ等間隔に並び、深さは約20cmを測る。覆土は灰黄褐色砂質土層を基調とし、少なくとも２時期以上の切り合いが認められる。柱穴や土坑には明確な建物の並びを持つものは確認できなかった。また遺物の出土も稀少であり、遺構に伴う遺物は溝出土のものを除き、ほとんど認められなかった。当調査地周辺は中世集落が廃絶して以後、再度耕地化され、現況に至ると考えられる。従ってこれらの近世遺構も営農活動に関連する遺構と考えることができよう。以下主要な遺構について簡単に記述しておく。

溝

SD001（図面004・005・157）：平面形態は不整形で、北東から南西にのびる溝。西端は調査区外となる。長さ48.0m、最大幅0.8m、最大深0.05mを測る。断面形態はU字型で、覆土は西側ａセクション付近では灰黄褐色砂粘質土層、東側ｂセクション付近では褐灰色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

SD002（図面004・005・157）：平面形態は不整形で、北東から南西にのびる溝。東端は消失、西端は調査地区外へのびる。長さ24.0m、最大幅2.3m、最大深0.11mを測る。断面形態は逆台形。覆土は西側ａセクション付近で第Ⅰ層：にぶい黄褐色砂質土層、第Ⅱ層：灰黄褐色砂質土層、東側ｂセクション付近では暗褐色砂粘質土層の堆積がみられる。出土遺物には瀬戸美濃、八尾などがある。

SD003（図面004・005・157）：平面形態は不整形で南北にのびる溝。南端、北端ともに先端が消失す

る。長さ14.0m、最大幅1.5m、最大深0.14mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は北側がにぶい黄色砂粘質土層、南側では第Ⅰ層：灰黄褐色砂質土層、第Ⅱ層：灰黄褐色粘質土層の堆積となる。出土遺物には瓦質土器がみられる。

SD004（図面004・005・157）：平面形態は直線状で、北西から南東にのびる溝で、東端は浅く消失する。長さ29.5m、最大幅1.7m、最大深0.9mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は北側ａセクション付近で暗灰黄色砂粘質土層、南側ｂセクション付近で灰黄褐色粘質土層の堆積がみられる。出土遺物には土師器の皿がある。

SD005（図面004・005・157）：平面形態は幅の広い不整形で、東西にのびるが、西端は浅く消失する。長さ10m、最大幅1.2m、最大深0.11mを測る。断面形態は浅いＵ字状で、覆土は灰褐色粘質土層を基調とする。出土遺物には珠洲、滑石製石鍋などがみられる。

SD006（図面004・005・157）：平面形態は直線で、北東から南西にのびる溝。西端はSD004に切られ、東端は消失。長さ4.5m、最大幅0.65m、最大深0.11mを測る。断面形態は逆台形で、覆土はにぶい黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない

SD097（図面004・005・159）：平面形態は不整形で、北東から南西に短くのびる溝。西端は浅く消失する。長さ10.0m、最大幅8.0m、最大深0.31mを測る。断面形態は不整形で、覆土は第Ⅰ層：褐灰色粘土層、第Ⅱ層：褐灰色砂質土層の堆積となる。出土遺物には土師器の皿、山茶椀、白磁、珠洲、金属製品の板状製品および鉄滓などがみられる。

土坑

SK001（図面004・005・153）：平面形態は円形で、径0.61～0.55m、深さ0.16mの規模を測る。土抗内に礫が混入している。覆土はにぶい黄褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK002（図面004・005・153）：平面形態は楕円形で、長径1.3m、短径0.69m、深さ0.27mの規模を測る。土抗内に人頭大の礫が混入している。覆土は第１層：褐灰色砂粘質土層、第２層：褐灰色砂粘質土層、第３層：暗灰黄色砂粘質土層に分層される。出土遺物なし。

SK003（図面004・005・153）：平面形態は円形で、規模は径1.24～1.06m、深さ0.27mを測る。土抗内に小礫が混入している。覆土は第１層：黄灰色砂粘質土層、第２層：黒褐色砂粘質土層、第３層：黄灰色砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

(2) 中世の遺構

今回のＡ地区の調査で主体をなすのが中世の集落遺構である。遺構の広がりはほぼＡ地区の調査区全面に及び、関連遺構はさらにＡ３・Ａ５地区にまで広がりをみせる。検出された遺構についても、大小の掘立柱建物100棟や半地下式の石組建物、木枠組・石組の井戸100基以上、集石遺構や様々な形態の土坑群、大小の区画溝や柵列、柱穴、集落の東限を示す大規模な旧河道など、多岐な内容のものとなっている。また遺構相互にはかなりの重複・切り合い関係がみられ、数時期に及ぶ遺構群の変遷が想定される。これらの集落遺構は、基本的に基盤土層が砂質地でも礫原地でも関係なく構築されており、自然の立地条件よりも遺構相互の計画的配置を優先させた様相、言い換えればかなりの計画的な配置のうえに各種の遺構が構築されている様相が看取できる。とくに本中世集落の最終段階においては、大小の溝に区画された屋敷地が、集落の東限となる南北方向の旧河道に沿って、整然と配置される様相がみられる。以下にこれらの遺構について外述していく。

掘立柱建物

SB001（図面026）：小規模な方形プランの平面形態である。建物の規模は、梁行１間（3.3m）、桁行２間(4.0m)、床面積13.2㎡を数える。建物の棟方向はN70°E。柱穴形態は円～楕円形で径0.84～0.48m、深さ0.32m～0.15m。柱穴内覆土は黒褐色粘質土層～暗オリーブ褐色粘質土層を基調とする。遺物はSK213で土師器（0045・0132）が出土。

SB002（図面026）：小規模な長方形のプランを有す。建物の規模は、梁行１間（2.64m）、桁行２間（4.65m）、床面積12.3㎡を数える。建物の棟方向はN58°Eである。柱穴形態は円～楕円形で径0.87m～0.42m、深さ0.43m～0.22m。柱穴内覆土は黄灰色粘質土層～黒褐色粘質土層を基調とする。遺物はSK173から土師器（0324）が出土している。

SB003（図面026）：建物は小規模な梁行１間（3.3m）、桁行１間（3.34m）の方形プランを有し、床面積11.1㎡を数える。棟方向はN75°E。柱穴形態は円～楕円形で径0.92m～0.47m、深さ0.22m～0.14m。柱穴内覆土は黒褐色粘質土層を基調とする。近接して柵列を伴う。柱穴内からの出土遺物は認められない。

SB004（図面026）：SB005と重複し、ほぼ同規模の建て替えと考えられる。柱穴相互の切り合いから、SB005に先行する可能性が高い。建物の規模は、梁行１間（3.8m）、桁行２間（6.6m）、床面積25.1㎡で長方形プランを有する。建物の棟方向はN33°W。柱穴形態は円～楕円形で径0.6m～0.38m、深さ0.22m～0.11mを数える。柱穴内覆土は黒褐色砂質土層～灰黄褐色土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB005（図面026）：建物の規模は、梁行１間（3.9m）、桁行２間（5.0m）の長方形プランで、床面積19.5㎡を数える。建物の棟方向はN42°Wである。切り合いからSB004に後出する。柱穴形態は円～楕円形で径0.98m～0.5m、深さ0.22m～0.11m。柱穴内覆土は黒褐色砂質土層～黄灰色土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB006（図面027）：建物の規模は、梁行１間（3.5m）、桁行４間（9.1m）の長方形プランで、床面積31.9㎡を数える。SB007と重複する位置にあるが、切り合いによる先後関係は不明。棟方向はN35°Wで、柱穴形態は楕円形で径1.25m～0.5m、深さ0.43m～0.18m。柱穴内覆土は暗オリーブ褐色粘質土層を基調とする。遺物はSK175から柱根（683）、SK207から土師器（0144）、SK361から鉄滓が出土している。

SB007（図面027）：建物の規模は、梁行１間（4.0m）、桁行３間（7.06m）の長方形プランで、床面積28.2㎡を有す。SB006と位置が重複するが、先後関係は不明。建物の棟方向はN41°Wである。柱穴形態は円形で径0.78m～0.39m、深さ0.43m～0.18mを数える。柱穴内覆土は暗オリーブ褐色土層～黒褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

SB008（図面027）：建物の規模は、梁行１間（4.03m）、桁行３間（9.3m）の長方形プランで、床面積37.5㎡を数える。建物の棟方向はN48°Eである。柱穴形態は円～楕円形で径0.85m～0.57m、深さ0.46m～0.19m。柱穴内覆土は黄灰色粘質土層～暗灰黄色砂粘質土層を基調とする。遺物はSK175から柱根（683）が出土している。

SB009（図面028）：建物の規模は、梁行１間（5.0m）、桁行４間（11.34m）の長方形プランで、床面積56.7㎡を数える。建物の棟方向はN56°Wである。柱穴形態は円～楕円形で径1.2m～0.5m、深さ0.42m～0.02m。柱穴内覆土は黄灰色砂質土層～黒褐色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB010（図面028）：建物の規模は、梁行１間（3.45m）、桁行２間（6.4m）の小規模な方形プランで、床面積22.1㎡を数える。SB011と位置が重複し、相互に建て替えの可能性が高いが、切り合いによる先後関係は不明。建物の棟方向はN64°Eである。柱穴形態は円～楕円形で径0.68m～0.47m、深さ0.46m～0.19m。柱穴内覆土は暗灰黄色粘質土層～黄灰色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB011（図面028）：建物の規模は、梁行１間（4.24m）、桁行１間（4.76m）の方形に近い長方形プランで、床面積20.2㎡を数える。建物の棟方向はN58°Eである。SB010と位置が重複し、建て替えの関係にあるものと推定できる。柱穴形態は円～楕円形で1.35m～0.47m、深さ0.27m～0.21m。柱穴内覆土は暗灰黄色砂粘質土層～黄灰色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB012（図面029）：建物の規模は、梁行１間（2.9m）、桁行２間（6.55m）の長方形プランで、床面積19.0㎡を数える。建物の棟方向はN70°Eである。柱穴形態は円～楕円形で、径0.95m～0.47m、深さ0.42m～0.16m。柱穴内覆土は黄灰色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB013（図面029）：建物の規模は、梁行１間（3.0m）、桁行３間（7.0m）の長方形プランで、床面積21.0㎡。建物の棟方向N30°W、柱穴形態は円形で径0.56m～0.38m、深さ0.39m～0.14mを数える。柱穴内覆土は黄灰色粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

SB014（図面029）：建物の規模は、梁行１間（3.58m）、桁行２間（5.2m）の長方形プランで、床面積18.6㎡を数える。建物の棟方向はN26°Wである。SB014と重複する位置にあるが、棟方向は直交する。切り合いによる先後関係も明確でない。建物の柱穴形態は円形で径0.5m～0.44m、深さ0.25m～0.15m。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB015（図面029）：建物の規模は、梁行１間（3.9m）、桁行２間（5.75m）の長方形プランで、床面積22.4㎡を有す。建物の棟方向はN74°Eである。SB014と重複する位置にあるが、先後関係は不明。柱穴形態は円形で径0.68m～0.38m、深さ0.23m～0.15mを数える。柱穴内覆土は黄灰色層～暗灰黄色層を基調とする。出土遺物なし。

SB016（図面030）：３棟の建物（SB016～018）が重複して所在する。このうちSB016・017は棟方向・規模等が近似し、建て替えの関係にある可能性が高いが、切り合いによる先後関係は不明。SB018については棟方向がSB016・017に直交する。このうちSB016の建物の規模は、梁行２間（4.4m）、桁行２間（5.45m）の長方形プランで、床面積24.0㎡を数える。建物の棟方向はN65°Eである。柱穴形態は円形で径0.9m～0.37m、深さ0.31m～0.16m。柱穴内覆土は暗褐色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB017（図面030）：建物の規模は、梁行２間（4.43m）、桁行２間（5.13m）の長方形プランで、床面積22.7㎡を数える。中央に束柱有り。建物の棟方向はN62°Eである。柱穴形態は円～楕円形で径0.91m～0.37m、深さ0.34m～0.03m。柱穴内覆土は暗褐色粘質土層～黄灰色砂粘質土層を基調とする。遺物はSK356から土師器（0475）が出土。

SB018（図面030）：建物の規模は、梁行１間（3.2m）、桁行３間（5.14m）の長方形プランで、床面積16.4㎡を数える。建物の棟方向はN23°Wである。柱穴形態は円～楕円形で、径0.95m～0.33m、深さ0.31m～0.09m。柱穴内覆土は黒褐色粘質土層～灰黄褐色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB019（図面030）：建物の規模は、梁行１間（2.54m）、桁行２間（3.75m）の小規模な長方形プランで、床面積9.5㎡を数える。建物の棟方向はN29°Wである。柱穴形態は円形で径0.47m～0.18m、

深さ0.2m～0.02m。柱穴内覆土はにぶい黄褐色砂粘質土層～褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB020（図面031）：建物の規模は、梁行１間（2.8m）、桁行２間（7.6m）の細長い長方形プランを有す。床面積は21.3㎡を数える。SB021と重複する位置にあるが、切り合いによる先後関係は不明。建物の棟方向はN64°Ｅで、SB021の棟方向とは斜交する。柱穴形態は円～楕円形で、径1.0m～0.46m、深さ0.29m～0.05m。柱穴内覆土は黒褐色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB021（図面031）：建物の規模は、梁行１間（2.75m）、桁行２間（6.27m）の細長い長方形プランで、床面積17.2㎡を有す。建物の棟方向はＮ８°Ｗである。柱穴形態は円～楕円形で径0.82m～0.5m、深さ0.27m～0.08mを数える。柱穴内覆土は褐灰色粘質土層～黒褐色土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB022（図面031）：建物の規模は、梁行１間（1.2m）、桁行４間（3.12m）の小規模な長方形プランで、床面積3.7㎡を数える。建物の棟方向はN40°Ｗである。柱穴形態は円形で径0.53m～0.34m、深さ0.26m～0.08m。柱穴内覆土は暗灰黄色粘質土層～褐灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。建物規模がきわめて小さく、住居棟とは考え難い。SA02と共に、後述のSB024の付属屋ないしは付随施設と考えられる。

SB023（図面031）：建物の規模は、梁行１間（2.1m）、桁行３間（5.4m）の細長い長方形プランを有す。床面積は11.3㎡、建物の棟方向はN55°Ｅである。柱穴形態は円形で径0.69m～0.33m、深さ0.25m～0.08mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層～オリーブ褐色砂層を基調とする。出土遺物は認められない。SB023についてもSB24に近接して位置しており、同様にSB024の何らかの付属屋とも考えられる。

SB024（図面031・032）：今回の調査で検出された建物では最大級の規模を有する。占地的にも他の建物群とは隔絶しており、溝囲いの方形区画で最も大きな区画の、東辺溝中央付近に位置する。大規模な総柱建物として復元したが、付近は遺構重複の最も激しい地域でもあり、欠落する柱穴が多い。但し北東側梁行き柱列に沿ってさらに１間分外側に庇の束柱を支えたとみられる礎石10個が一列に残存しており、また周辺景観からも、こちら側を正面とする建物を想定する根拠とした。同時に北角の柱穴位置については、SB022・023、SA002でＬ字状に配置される付属屋との位置関係も一つの根拠とした。また桁行きの全長については、柱穴の残存状況のよい南西側梁行きまでの５間分をその長さと推定した。これによる建物の規模は、梁行５間（10.54m）、桁行５間（12.6m）、床面積132.8㎡となる。建物の棟方向はN38°Ｗである。柱穴形態は円～楕円形で、径1.02m～0.34m、深さ0.29m～0.06mを数える。柱穴内覆土は黄灰色砂質土層～褐灰色粘質土層を基調とする。柱穴内からの出土遺物は残念ながら認められない。

SB025（図面033）：SB024とは部分的に重複する位置にあるが、両者の相関関係は不明。建物の規模は、一応梁行２間（9.37m）、桁行２間（10.2m）とするが、柱間距離が長く規模は大きい。床面積は95.6㎡を数える。建物の棟方向はN26°Ｗである。柱穴形態は楕円形で、径1.37m～0.61m、深さ0.3m～0.09m。柱穴内覆土は褐灰色粘質土層～黄灰色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB026（図面034）：建物の規模は、梁行３間（6.97m）、桁行３間（8.61m）の長方形プランで、床面積60.0㎡を数える。建物の棟方向はN16°Ｗである。柱穴形態は円～楕円形で径1.02m～0.39m、深さ0.29m～0.12m。柱穴内覆土は黄灰色粘質土層、黄灰色砂質土層、黒褐色粘質土層などを基調とす

る。出土遺物は認められない。

SB027（図面034）：建物の規模は、梁行１間（3.3m）、桁行４間（11.83m）の細長い長方形プランの建物である。床面積は39.0㎡を数え、建物の棟方向はN74°Eである。柱穴形態は円～楕円形で径1.05m～0.37m、深さ0.3m～0.2m。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層～黒褐色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB028（図面033）：建物の規模は、梁行１間（3.14m）、桁行２間（3.78m）の長方形プランで、床面積は11.9㎡を数える。建物の棟方向はN69°Eである。柱穴形態は円形で径0.9m～0.42m、深さ0.31m～0.14m。柱穴内覆土は褐灰色砂粘質土層～暗オリーブ褐色砂粘質土層を基調とする。遺物はSK330から珠洲（1435）、SK331から土師器（0239）が出土している。

SB029（図面033）：建物の規模は、梁行１間（4.77m）、桁行４間（6.86m）の長方形プランで、床面積32.7㎡を数える。建物の棟方向はN62°Eである。柱穴形態は円～楕円形で径1.0m～0.36m、深さ0.29m～0.1m。柱穴内覆土は黄灰色砂質土層～黒褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB030（図面034）：建物の規模は、梁行１間（5.93m）、桁行４間（11.38m）の長方形プランで、床面積67.5㎡を数える。建物の棟方向はN60°Eである。柱穴形態は円形で径1.0m～0.38m、深さ0.65m～0.1mを数える。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層～黒褐色粘質土層を基調とする。遺物はSK017から土師器（0381・0448）、鉄滓が出土している。

SB031（図面035）：建物の規模は、梁行１間（3.84m）、桁行１間（4.68m）の小規模な方形プランを有す。床面積は18.0㎡。建物の棟方向は一応N30°Wと考えておく。柱穴形態は円形で径0.56m～0.4m、深さ0.11m～0.09mを数える。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層～褐灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。位置的に重複する大型土坑SK028は規模・プランともほぼSB031と同じであり、半地下式竪穴建物となる可能性もある。

SB032（図面035）：SB031の南西側に近接し一部重複する位置にあるが、先後関係は明確でない。建物の規模は、梁行１間（3.86m）、桁行２間（5.75m）の長方形プランで、床面積は22.2㎡を数える。建物の棟方向はN58°Eである。柱穴形態は円～楕円形で、径0.7m～0.37m、深さ0.11m～0.06m。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層～褐灰色砂粘質土層を基調とする。遺物はSK013から唐津（1659）が出土しているが、混入か。

SB033（図面035）：建物の規模は、梁行１間（4.3m）、桁行１間（6.0m）の長方形プランで、床面積は25.8㎡と小規模である。建物の棟方向はN78°E。柱穴形態は円形で径0.8m～0.4m、深さ0.26m～0.08mを数える。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層～黄褐色砂粘質土層を基調とする。遺物はSK008から珠洲（1317）が出土している。

SB034（図面035）：建物の規模は、梁行１間（3.42m）、桁行２間（8.24m）の細長い長方形プランで、床面積は28.2㎡を数える。建物の棟方向はN31°Wである。柱穴形態は円～楕円形で径0.8m～0.57m、深さ0.46m～0.06m。柱穴内覆土は黄灰色粘質土層～褐灰色砂粘質土層を基調とする。遺物はSK016から青磁（0680）、石臼（48）が出土している。

SB035（図面036）：建物の規模は、梁行２間（6.58m）、桁行３間（8.45m）の長方形プランで、床面積55.6㎡を数える。建物の棟方向はN35°Wである。SB036と一部配置が重複するが、棟方向は斜交する。切り合いはみられず、先後関係は不明である。柱穴形態は円～楕円形で、径1.02m～0.38m、深さ0.20m～0.11m。柱穴内覆土は暗褐色粘質土層～暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認

められない。

SB036（図面036）：建物の規模は、梁行２間（5.34m）、桁行２間（6.26m）の長方形プランで、床面積33.4㎡を数える。前述のSB035と一部重複する位置にある。建物の棟方向はN80°Eである。柱穴形態は円～楕円形で径0.98m～0.35m、深さ0.26m～0.09m。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB037（図面036）：建物の規模は、梁行２間（4.7m）、桁行４間（8.65m）の長方形プランで、床面積40.7㎡を数える。建物の棟方向はN55°Wである。柱穴形態は円～楕円形で径0.64m～0.35m、深さ0.32m～0.11m。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB038（図面037）：建物の規模は、梁行１間（6.9m）、桁行５間（13.8m）の長方形プランで、床面積も95.2㎡と比較的大きい。建物の棟方向はN81°Eである。柱穴形態は円～楕円形で径1.16m～0.4m、深さ0.2m～0.08mを数える。柱穴内覆土は褐灰色粘質土層～暗オリーブ褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB039（図面037）：建物の規模は、梁行１間（5.04m）、桁行３間（10.0m）の長方形プランで、床面積50.4㎡を数える。建物の棟方向はN70°Eである。やや規模は異なるが、SB040と建物配置や棟方向がほぼ重複し、両者は建て替えの関係にあるものと推定される。但し切り合いによる先後関係は確認できなかった。柱穴形態は円形で、径0.96m～0.35m、深さ0.2m～0.04m。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層～黒褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB040（図面037）：建物の規模は、梁行２間（6.45m）、桁行４間（12.3m）の長方形プランで、床面積79.3㎡を数える。建物の棟方向はN68°Eである。前述のSB039とほぼ重複する位置に占地するが、建物規模はこちらの方がやや大きい。柱穴形態は円形で、径0.78m～0.37m、深さ0.27m～0.08m。柱穴内覆土は灰黄褐色砂粘質土層～暗褐色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB041（図面038）：建物の規模は、梁行２間（4.43m）、桁行４間（9.34m）の長方形プランで、床面積は41.4㎡を数える。建物の棟方向はN89°Eである。柱穴形態は円形で径0.67m～0.4m、深さ0.29m～0.07m。柱穴内覆土は褐灰色砂粘質土層～黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB042（図面038）：建物の規模は、梁行３間（6.54m）、桁行３間（9.34m）の長方形プランで、床面積は61.1㎡を数える。建物の棟方向はN82°Wである。柱穴形態は円形で、径0.6m～0.3m、深さ0.29m～0.04m。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層～褐灰色砂粘質土層を基調とする。遺物はSK034から珠洲（1153）が出土している。

SB043（図面038）：建物の規模は、梁行１間（4.99m）、桁行４間（10.83m）の長方形プランで、床面積54.0㎡を数える。建物の棟方向はN50°Eである。柱穴形態は円形で、径1.08m～0.45m、深さ0.19m～0.05m。柱穴内覆土は灰黄褐色砂粘質土層～黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB044（図面039）：建物の規模は、梁行１間（5.0m）、桁行２間（9.14m）の長方形プランで、床面積は45.7㎡を数える。建物の棟方向はN35°Wである。柱穴形態は円～楕円形で径0.87m～0.47m、深さ0.29m～0.07m。柱穴内覆土は褐灰色砂粘質土層～黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB045（図面039）：建物の規模は、梁行１間（3.8m）、桁行２間（4.87m）の長方形プランで、床面積は18.5㎡。建物の棟方向はN74°E。柱穴形態は円形で、径0.54m～0.47m、深さ0.22m～0.11m。

柱穴内覆土は灰黄褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

SB046（図面039）：建物の規模は、梁行１間（3.0m）、桁行２間（5.56m）の長方形プランで、床面積16.7㎡と小規模である。建物の棟方向はN61°　W。SB047と重複する配置であるが、棟方向は斜交する。柱穴形態は円～楕円形で径0.68m～0.48m、深さ0.28m～0.11mを数える。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。SK038から土師器（0082）が出土。

SB047（図面039）：建物の規模は、梁行１間（3.5m）、桁行２間（4.76m）の長方形プランで、床面積16.7㎡を数える。建物の棟方向はN32°　Wである。前述のSB046と重複する配置である。柱穴形態は円～楕円形で径0.7m～0.38m、深さ0.24m～0.05m。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB048（図面039）：建物の規模は、梁行１間（4.2m）、桁行２間（6.98m）の長方形プランで、床面積は29.3㎡を数える。建物の棟方向はN60°　Eである。柱穴形態は円～楕円形で、径1.38m～0.39m、深さ0.49m～0.1m。柱穴内覆土は褐灰色砂粘質土層～黄灰色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB049（図面040）：建物の規模は、梁行１間（3.08m）、桁行２間（7.45m）の長方形プランで、床面積22.9㎡を数える。建物の棟方向はN44°　Eである。SB050と重複関係にあり、棟方向もほぼ同じである。但し規模はやや小さい。両者は建て替えの関係にあると思われるが、先後関係は不明。柱穴形態は円形で、径0.52m～0.35m、深さ0.11m～0.02m。柱穴内覆土は灰色砂粘質土層～黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

SB050（図面040）：建物の規模は、梁行２間（5.07m）、桁行２間（7.6m）の長方形プランで、床面積38.5㎡を数える。建物の棟方向はN44°　Eである。前述のSB049と配置が重複するが、規模はやや大きい。柱穴形態は円形で0.74m～0.2m、深さ0.28m～0.04m。柱穴内覆土は灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB051（図面040）：建物の規模は、梁行１間（3.52m）、桁行３間（4.65m）の長方形プランで、床面積は16.4㎡と小さい。建物の棟方向はN37°　Eである。柱穴形態は円形で、径0.52m～0.33m、深さ0.23m～0.1mを数える。柱穴内覆土は黄灰色粘質土層～暗オリーブ褐色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB052（図面040）：建物の規模は、梁行１間（4.64m）、桁行３間（6.62m）の長方形プランで、これに１×１間（1.8×2.75m）の張出部分が桁行き東側柱列中央付近に付く。床面積は、この張出部を含めて30.7㎡である。建物の棟方向はN32°　W。柱穴形態は円～楕円形で、径0.85m～0.34m、深さ0.32m～0.12mを数える。柱穴内覆土は黄灰色砂質土層～暗オリーブ褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB053（図面041）：建物の規模は、梁行１間（4.4m）、桁行２間（9.4m）の長方形プランに、張出し１×２間（3.34×3.74m）分が付く。この張出部は桁行き北柱列の１間分の柱間に付設されている。床面積はこの張出部を含めて41.4㎡を数える。建物の棟方向はN61°　E。柱穴形態は円～楕円形で、1.35m～0.44m、深さ0.39m～0.04mである。柱穴内覆土は褐灰色砂粘質土層～灰黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB054（図面041）：建物の規模は、梁行１間（6.2m）、桁行３間（8.7m）の長方形プランで、床面積は53.9㎡を数える。建物の棟方向はN30°　Wである。柱穴形態は円～楕円形で、径0.65m～0.37m、深さ0.28m～0.07m。柱穴内覆土はオリーブ褐色砂質土層を基調とする。遺物はSK082から土師器

（0039）が出土している。

SB055（図面042）：建物の規模は、梁行１間（4.8m）、桁行２間（8.5m）の長方形プランで、これに張出し１×１間分(1.5×4.1m)が桁行き東側柱列に付設される。床面積はこの張出部分を含めて40.8㎡を数える。建物の棟方向はN26°Wである。柱穴形態は円形で径0.89m～0.46m、深さ0.35m～0.11m。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層～灰黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB056（図面042）：建物の規模は、梁行２間（5.8m）、桁行２間（9.3m）の長方形プランで、床面積53.9㎡を数える。建物の棟方向はN30°Wである。柱穴形態は円形で、径0.58m～0.3m、深さ0.23m～0.07m。柱穴内覆土は黄灰色粘質土層～黄褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB057（図面042）：建物は、梁行１間（3.5m）、桁行３間（9.6m）の、細長い長方形プランのもので、床面積33.6㎡を数える。建物の棟方向はN48°Eである。柱穴形態は円～楕円形で、径1.58m～0.39m、深さ0.24m～0.08m。柱穴内覆土は褐灰色砂粘質土層～黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB058（図面043）：建物の規模は、梁行１間（3.6m）、桁行２間（6.0m）の長方形プランで、これに張出し１×２間（0.8×3.7m）が桁行き北西側柱列に付設される。床面積はこの部分を含めて21.6㎡を数える。建物の棟方向はN41°Eである。柱穴形態は円～楕円形で、径0.7m～0.3m、深さ0.15m～0.08m。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層～褐灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB059（図面043）：建物の規模は、梁行１間（3.52m）、桁行２間（7.78m）の長方形プランで、床面積は27.4㎡を数える。建物の棟方向はN33°Eである。柱穴形態は円～楕円形で、径1.05m～0.42m、深さ0.23m～0.02m。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層～褐灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB060（図面043）：建物の規模は、梁行１間（2.86m）、桁行１間以上の部分検出に留まるが、小規模な建物と推定される。建物の棟方向はN48°Eである。柱穴形態は円～楕円形で、径0.58m～0.36m、深さ0.16m～0.1mを数える。柱穴内覆土はオリーブ褐色砂質土層～暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB061（図面044）：建物の規模は、梁行１間（3.6m）、桁行２間（7.55m）の長方形プランで、床面積は27.2㎡。建物の棟方向はN53°E。柱穴形態は楕円形で、径1.1m～0.45m、深さ0.2m～0.09mとなる。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

SB062（図面044）：建物の規模は、梁行１間（4.76m）、桁行２間（8.0m）の長方形プランで、床面積は38.1㎡を数える。建物の棟方向はN55°Eである。柱穴形態は円～楕円形で、径0.85m～0.44m、深さ0.31m～0.21m。柱穴内覆土は褐灰色砂粘質土層～黄灰色砂粘質土層を基調とする。遺物はSK452から金属製品の鍋（111）が出土している。

SB063（図面044）：建物の規模は梁行１間（3.6m）、桁行２間程度と推定される。建物の棟方向はN28°Wである。柱穴形態は円形で、径0.66m～0.48m、深0.25m～0.1mを数える。柱穴内覆土は黒褐色砂粘質土層～黄灰色砂質土層を基調とする。出土遺物なし。

SB064（図面045）：建物の規模は、梁行１間（3.2m）、桁行２間（5.36m）の長方形プランで、床面積は17.2㎡を数える。建物の棟方向はN33°Eである。SB065と配置が半分ほど重複する。棟方向もほぼ同じであり、両者は建て替えの関係にあるものと推定される。柱穴の切り合い関係から、一応

SB064がSB065に後出する時期と考えられる。柱穴形態は円～楕円形で、径0.77m～0.46m、深さ0.22m～0.07m。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB065（図面045）：建物の規模は、梁行２間（4.15m）、桁行２間（5.2m）の長方形プランで、床面積は21.6㎡と、SB064よりもやや大きい。建物の棟方向はN30°Wである。柱穴形態は円～楕円形で、径0.74m～0.32m、深さ0.22m～0.09mを数える。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB066（図面045）：建物の規模は、梁行１間（3.94m）、桁行２間（7.65m）の長方形プランで、床面積は30.1㎡。建物の棟方向はN39°E。柱穴形態は円形で、径0.55m～0.44m、深さ0.18m～0.06m。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

SB067（図面046）：建物の規模は、梁行１間（3.4m）、桁行２間（7.35m）の長方形プランで、床面積は25.0㎡を数える。建物の棟方向はN60°Eである。後述のSB068とほぼ同位置・同規模で重複することから、両者は建て替えの関係にあるものと推定される。但し両者の柱穴に切り合い関係はみられず、先後関係は不明である。柱穴形態は円～楕円形で、径1.25m～0.33m、深さ0.19m～0.13m。柱穴内覆土は灰黄色砂粘質土層～黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB068（図面046）：建物の規模は、梁行１間（3.6m）、桁行２間（7.34m）の長方形プランで、床面積は26.4㎡を数える。前述のように、SB067と建て替えの関係にあるものと推定される。建物の棟方向はN62°Eである。柱穴形態は円形で径0.52m～0.38m、深さ0.23m～0.14m。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

SB069（図面045）：建物の規模は、梁行１間（3.6m）、桁行２間（7.6m）の長方形プランで、床面積は27.4㎡を数える。建物の棟方向はN29°Wである。柱穴形態は楕円形で、径11.5m～0.43m、深さ0.13m～0.04m。 柱穴内覆土は黄褐色砂粘質土層～黒褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB070（図面046）：建物の規模は、梁行１間（3.55m）、桁行２間（8.8m）の長方形プランで、これに張出し１×３間（1.3×4.3が桁行き北側柱列中央付近に付設される。）床面積は張出部分を含めて31.2㎡を数える。建物の棟方向はN52°Eである。柱穴形態は円～楕円形で、径0.87m～0.42m、深さ0.16m～0.04m。柱穴内覆土は暗灰黄色砂粘質土層～黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB071（図面047）：建物の規模は、梁行１間（5.2m）、桁行２間（10.0m）の長方形プランで、床面積は52.0㎡を数える。建物の棟方向はN28°Wである。柱穴形態は円～楕円形で、径0.88m～0.46m、深さ0.28m～0.06m。柱穴内覆土はオリーブ褐色砂質土層～黒褐色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB072（図面047）：建物の規模は梁行２間（5.75m）、桁行２間（7.22m）の方形プランで、床面積は41.5㎡を数える。建物の棟方向はN63°Eである。柱穴形態は円形で、径0.75m～0.44m、深さ0.13m～0.06m。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層～にぶい黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB073（図面047）：建物の規模は、梁行１間（3.15m）、桁行２間（7.12m）の長方形プランで、床面積は22.4㎡。建物の棟方向はN59°E。柱穴形態は円形で、径0.6m～0.24m、深さ0.16m～0.05m。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

SB074（図面048）：建物の規模は、梁行１間（7.78m）、桁行２間（11.45m）の長方形プランで、床

面積89.1㎡を数える。建物の棟方向はN33°Wである。柱穴形態は円～楕円形で、径0.6m～0.35m、深さ0.16m～0.09m。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層～黒褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB075（図面049）：建物の規模は、梁行1間（5.5m）、桁行3間（9.1m）の長方形プランで、床面積は50.1㎡。建物の棟方向はN53°Eである。SB076と位置が大きく重複するが、建物格差が顕著で、建て替えとは考え難い。柱穴形態は円～楕円形で、径0.8m～0.36m、深さ0.37m～0.11m。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物なし。

SB076（図面049）：建物の規模は、梁行1間（7.55m）、桁行3間（16.7m）の細長い長方形プランで、床面積は126.1㎡と大型の建物である。建物の棟方向はN32°W。柱穴形態は円形で、径0.88m～0.42m、深さ0.29m～0.08mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層～黒褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB077（図面048）：建物の規模は、梁行1間（3.72m）、桁行1間（4.1m）の小規模な方形プランで、床面積は15.3㎡を数える。SB078・079の南側梁行きに近接して位置する。建物の棟方向はN50°Eである。柱穴形態は楕円形で径0.84m～0.4m、深さ0.29m～0.08mを数える。柱穴内覆土は黒褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB078（図面048）：建物の規模は、梁行2間（7.5m）、桁行2間以上で、北西側は調査地区外となる。SB079とほぼ同じ位置で重複しており、両者は建て替えの関係にあるものと推定される。但し柱穴間に切り合いは認められず、先後関係は不明である。建物の棟方向はN55°Eである。柱穴形態は円～楕円形で、0.85m～0.4m、深さ0.36m～0.09mを数える。柱穴内覆土は黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB079（図面048）：建物の規模は、梁行2間（8.0m）、桁行2間以上で、北西側は調査地区外となる。建物の棟方向はN54°Eである。柱穴形態は円～楕円形で、径0.74m～0.5m、深さ0.29m～0.1mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。前述のSB078とは建て替えの関係にあるものと推定される。

SB080（図面050）：建物の規模は、梁行1間（4.65m）、桁行2間（6.46m）の長方形プランで、床面積30.0㎡は。建物の棟方向はN37°E。柱穴形態は楕円形で、径1.24m～0.33m、深さ0.37m～0.06m。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物なし。

SB081（図面050）：建物の規模は、梁行1間（3.4m）、桁行2間（8.75m）の細長い長方形プランで、床面積は29.8㎡を数える。建物の棟方向はN35°Wである。柱穴形態は楕円形で、径0.98m～0.36m、深さ0.22m～0.04m。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層～黒褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB082（図面050）：建物の規模は、梁行1間（5.2m）、桁行1間（8.8m）の長方形プランで、床面積は45.8㎡を数える。建物の棟方向はN58°Eである。柱穴形態は円～楕円形で、径0.88m～0.36m、深さ0.2m～0.04m。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB083（図面051）：建物の規模は、梁行1間（3.02m）、桁行2間（6.15m）の長方形プランで、床面積は18.6㎡を数える。建物の棟方向はN71°Eである。建物配置が一部SB084と重複するが、棟方向は斜交する。相互に柱穴の切り合いは認められず、建物の先後暗径は不明である。柱穴形態は円形で径0.45m～0.35m、深さ0.23m～0.01m。柱穴内覆土は黒褐色砂質土層～暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB084（図面051）：建物の規模は、梁行１間（2.35m）、桁行２間（5.5m）の長方形プランで、床面積は12.9㎡を数える。建物の棟方向はN12°Eである。前述のように、SB083と建物配置が一部重複する。柱穴形態は円～楕円形で、径0.6m～0.38m、深さ0.18m～0.09m。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB085（図面051）：建物の規模は、梁行１間（3.8m）、桁行１間（3.85m）の方形プランで、床面積は14.6㎡と小規模である。建物の棟方向はN45°W。柱穴形態は円～楕円形で、径1.05m～0.35m、深さ0.27m～0.12mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB086（図面051）：建物の規模は梁行１間（3.38m）、桁行１間以上。建物の棟方向はN31°Wである。柱穴形態は円形で、径0.4m～0.38m、深さ0.18m～0.17mを数える。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB087（図面052）：建物の規模は、梁行１間（4.5m）、桁行１間（5.0m）の方形プランで、床面積は22.5㎡を数える。建物の棟方向はN23°Wである。後述のSB088に連接して位置する。両者は規模・柱筋等共通する部分が多くみられる。また同じ位置に重複して緒方方形土坑SK505がみられ、半地下構造を有する建物の可能性もある。柱穴形態は円～楕円形で、径1.05m～0.69m、深さ0.21m～0.14m。柱穴内覆土は灰黄色砂粘質土層～灰オリーブ色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB088（図面052）：建物の規模は梁行１間（4.5m）、桁行１間（5.4m）の方形プランで、床面積は24.3㎡を数える。建物の棟方向はN24°Wである。柱穴形態は円形で径1.24m～0.55m、深さ0.56m～0.07m。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層～黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。前述のようにSB087と建物規模・配置等が近似するが、方形大型土坑の位置的重複はみられない。

SB089（図面052）：建物の規模は梁行２間（5.2m）、桁行３間（9.2m）の長方形プランで、床面積は47.8㎡を数える。総柱構造の掘立柱建物である。建物の棟方向はN20°Wをとる。柱穴形態は円～楕円形で、径0.72m～035m、深さ0.26m～0.14m。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層～暗灰黄色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB090（図面053）：建物の規模は、梁行２間（5.8m）、桁行３間（7.1m）の長方形プランで、床面積は41.2㎡を数える。本調査地では珍しく、総柱構造が明確な掘立柱建物である。建物の棟方向はN40°Wをとる。建物配置では後述のSB091とほぼ重なり合うように検出されており、両者は建て替えの関係にあるものと推定される。但し建物の先後関係は不明である。柱穴形態は円～楕円形で、径0.7m～0.29m、深さ0.22m～0.09m。柱穴内覆土は黒褐色砂質土層～暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物なし。

SB091（図面053）：建物の規模は、梁行２間（4.75m）、桁行３間（7.0m）の長方形プランで、床面積は33.3㎡を数える。SB090と同様の総柱構造の建物と考えられる。またSB090とは建て替えの関係にあるものと推定される。建物の棟方向はN37°Wである。柱穴形態は円形で、径0.48m～0.27m、深さ0.19m～0.09m。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層～黒褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB092（図面053）：建物の規模は梁行１間（2.24m）、桁行２間（3.9m）、床面積（8.7㎡）。建物の棟方向はN17°Wである。柱穴形態は円～楕円形で径0.57m～0.3m、深さ0.23m～0.1mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物なし。

SB093（図面053）:建物の規模は、梁行１間（4.0m）、桁行３間（8.4m）の長方形プランで、床面積は33.6㎡と小規模である。建物の棟方向はN57°E。柵列SA04と配置が重複するが、先後関係は不明である。柱穴形態は円形で、径0.48m～0.28m、深さ0.2m～0.1mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB094（図面054）:建物の規模は、梁行１間（3.56m）、桁行２間（7.65m）の長方形プランで、床面積は27.2㎡を数える。建物の棟方向はN37°Wである。柱穴形態は円形で、径0.74m～0.25m、深さ0.29m～0.08m。柱穴内覆土は暗オリーブ褐色砂質土層～黒褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB095（図面054）:建物の規模は、梁行１間（7.5m）、桁行３間（10.95m）の長方形プランで、これに張出し１×１間分（2.87×3.1･0.5×5.1）が、桁行き南西側柱列の中央に付設される。床面積は張出部分を含めて82.1㎡を数える。建物の棟方向はN34°Wである。柱穴形態は円形で径1.04m～0.3m、深さ0.33m～0.08m。柱穴内覆土は黒褐色砂質土層～灰黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB096（図面055）：建物の規模は梁行１間（2.65m）、桁行２間（3.7m）の長方形プランで、床面積は6.1㎡と小規模である。建物の棟方向はN68°E。後述のSB097と配置が大きく重複するが、棟方向は斜交する。柱穴形態は円形で、径0.78m～0.48m、深さ0.32m～0.15mを数える。柱穴内覆土は灰黄色砂質土層～褐灰色砂質土層を基調とする。出土遺物なし。

SB097（図面055）：建物の規模は梁行１間（3.3m）、桁行２間（5.05m）の長方形プランで、床面積は16.7㎡を数える。建物の棟方向はN35°W。前述のように配置がSB096と重複する。柱穴形態は円形で、径0.6m～0.35m、深さ0.26m～0.05m。柱穴内覆土は黒褐色砂質土層～暗褐色砂質土層を基調とする。SK613から八尾（0938）が出土している。

SB098（図面055）：建物の規模は、梁行２間（4.6m）、桁行２間（8.52m）の長方形プランで、床面積は39.2㎡を数える。梁行き北東側柱列に約１間分（1.57m×1.8m）の張出が付設される。これを含めた床面積は41.9㎡となる。建物配置ではSB099と大きく重複する。棟方向はほぼ同一だが、建物規模にやや較差がある。切り合いによる先後関係は不明。

建物の棟方向はN63°Eである。柱穴形態は円～楕円形で径1.3m～0.44m、深さ0.18m～0.09mを数える。柱穴内覆土は灰黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物なし。

SB099（図面055）:建物の規模は、梁行１間（3.15m）、桁行２間（6.62m）の長方形プランで、床面積は20.9㎡を数える。建物の棟方向はN62°Eである。前述のようにSB098と建物配置が大きく重複する。柱穴形態は円～楕円形で径1.45m～0.88m、深さ0.35m～0.1mを数える。柱穴内覆土は灰黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SB100（図面056）：建物の規模は、梁行１間（4.35m）、桁行１間（5.3m）の長方形プランで、これに張出し１×１間（1.55×1.6）が付設される。床面積は張出を含めて23.1㎡。建物の棟方向はN56°E。柱穴形態は円～楕円形で、径1.17m～0.36m、深さ0.3m～0.1mを数える。柱穴内覆土は黒褐色砂質土層～暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物なし。

SB101（図面056）：建物の規模は、梁行２間（5.14m）、桁行２間（5.8m）の長方形プランで、床面積は29.8㎡を数える。建物の棟方向はN53°Eである。SB102と建物配置が大きく重複するが、棟方向は斜交する。柱穴相互に切り合いはなく、両者の先後関係は不明である。柱穴形態は円形で径0.86m～0.28m、深さ0.21m～0.1m。柱穴内覆土は褐灰色砂質土層～黒褐色砂質層を基調とする。出土遺

物は認められない。

SB102（図面056）：建物の規模は、梁行１間（3.45m）、桁行２間（5.2m）の長方形プランで、床面積は17.9㎡を数える。建物の棟方向はN16°Wである。建物配置はSB101と大きく重複する。柱穴形態は円～楕円形で、径0.76m～0.35m、深さ0.34m～0.1m。柱穴内覆土は灰黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

半地下式建物

上屋構造は基本的に掘立柱建物の形態だが、床面を掘立柱建物と同一平面プランで方形ないしは長方形に堀くぼめ、その四壁ないしは一部を石積みで補強するもので、床面が竪穴状の半地下式になる建物をこのように仮称しておく。県内外に類例がみられるが、本調査地においてはSB201、SB202、SB203の３棟がこれに該当する。建物の床面にはさらに石積みによる間仕切りがみられ、複室構造が推定される。但しこの間仕切りは調査時点の最初から明確に意識していたわけではなく、とくに数棟の建物が重複するSB201などの場合においては、間仕切りの一単位（単室）を一つの建物として捉えている。このため当初名付けた遺構番号はこの間仕切り単位の番号（この場合大型土坑SXの番号）となっている。出土遺物もこのSXの単位で取り上げている。従ってこのSX番号はそのまま生かしたままで、各建物単位でこれを構成する複数（複室）のSX番号を並記することとする。

SB201（図面057～059）：今回の調査で検出された半地下式建物では最大規模のもので、調査地の中央南側に位置する。もう１棟の半地下式建物SB202は、このSB201の南東側に隣接する。SB201は前述のようにいくつかの大型土坑による区画がみられるが、これらは切り合い関係から大きく二つに分離される。一つは切り合いで先行し、SX08・09・11の３区画からなる一単位、今ひとつは切り合いで後出し、平面形態が凸型となる一単位である。ここでは前者をSB201A、後者をSB201Bとする。

SB201A：平面形態は長方形プランで、内部は石組を利用してSX08・09・11からなる３区画に間仕切りされる。また壁も同様に石組による補強がみられる。最終完掘時に床面を精査したところ、南壁と北壁に沿って、床面上から柱列を検出した。柱穴の形態は円形で径0.3～0.5m、深さ0.2～0.4mのものが多い。南壁側の柱穴は３間分４個が、北壁側では４間分５個が検出された。これらの柱穴は、積極的な根拠はないものの、主柱穴というよりは、上屋構造ないしは高床等を補強・保持するための二次的な柱穴のように思える。ただし主柱穴と考えらる大型の柱穴は、現状では掘り込み部周辺からみつかっていない。

なおSB201Aの規模は、南北6.1m、東西12.5m、最大深0.72m、床面積76.3㎡を数える。建物の主軸方位はN68°Eをとる。間仕切りによる区画のうち西側に位置するのがSX08区画である。平面形態は方形に近く、西側の肩をSB201B（SX07）に切り込まれている。また中央のSX11区画との間仕切りには石積みが施される。さらに北壁は貼り石により強化されており、南壁にも貼り石の一部が残存する。規模は南北5.95m、東西4.4m、深さ0.7mを数える。覆土は第１層：褐色砂質土層、第２層：黄灰色粘質土層、第３層：褐灰色粘質土層に分層される。出土遺物には八尾、珠洲がある。中央に位置するSX11区画は長方形のプランで、東西両壁が石組によってそれぞれSX08・09区画と間仕切りされる。南・北壁についても石組による補強がみられる。さらに床面の東半部部には、礫敷きがみられる。規模は、南北6.1m、東西5.6m、深さ0.57mを数える。覆土は暗灰黄色粘質土層のみの単層である。出土遺物には青磁、珠洲、土師器の皿、釘状、棒状の金属製品、鉄滓がある。東端のSX09区画は東西に短い長方形プランで、西壁が石組によるSX11区画との間仕切りとなる。東・南・北壁についても石組補強されるが、とくにSX09の石組は良好に残存している。規模は南北5.9m、2.5m、深

さ0.46mを数える。床面には炭化物の堆積がみられ、さらに焼き割れた礫なども多く出土した。覆土は黄灰色粘質土層を基調とする。出土遺物には土師器がある。

SB201B：SB201A の西側に近接して位置し、これを切り込む。平面形態は凸型で、規模は南北8.1m、東西6.9m、深さ0.24mを数える。建物の方位はSB201の主軸方位と直交するN17° Wとなる。半地下土坑部の内部には全面に礫が充填されるが、これを除去すると中央やや南側で東西に石列が積まれており、安置か部分が間仕切りによる2室構造であることが判明した。また北側の区画ではさらに細かい単位で石列がみられ、区画が細分される可能性もあり、3室以上の区画を有する可能性もある。壁面の石組補強についても、南西角や、西・北壁で一部良好に残存しており、やや規模は小さいながらも、SB201A と同様の構造が看取できる。ただし床面上での柱穴痕は確認できず、半地下部周辺での柱穴も未確認のままに終わった。出土遺物には土師器、青白磁、珠洲、須恵器、銭がある。

SB202（図面060）：SB201の南東側に接して位置する。重複はないものの、かなり接近しており、両者の同時期併存は考え難い。少なくとも SB201A との併存はないものと考える。建物規模は SB201よりやや小さい。南北5.42m、東西8.83m、掘り込み部の最大深0.44m、床面積47.9㎡を数える。建物の主軸方位は N59° Eをとる。中央やや東よりに間仕切りの石組がみられ、床面は大きく2つに区画される。西側の区画を SX01、東側の区画を SX10とする。SX01の平面形態は方形で、規模は南北5.11m、東西5.50m、深さ0.44mを測る。北壁および西壁は石組みの補強が施されている。覆土は褐灰色粘質土層を基調とする。この区画からの出土遺物には、八尾、珠洲、棒状金属製品がある。SX10の平面形態は長方形で、規模は南北5.42m、東西3.72m、深さ0.4mを測る。覆土は第1層:灰黄褐色砂粘質土層、第2層：褐灰色粘土層、第3層：黒褐色粘土層に分層される。北壁は石組による補強がみられる。区画内からの出土遺物には土師器、八尾、珠洲、鉄滓がある。床面の南壁際の中央付近に一カ所柱穴状の落ち込みががみられるものの、柱列は検出されていない。掘り込み部周辺においても同様に、柱列は未検出に終わっている。

SB203（図面061）：A 地区の中央部付近に位置する。掘り込み部（SX03）の平面形態は長方形で、南北5.7m、東西4.1m、深さ0.28m、床面積23.4㎡を数える。掘り込み部の床面は、中央部より北寄りで石組みによる間仕切りを施し、2区画構成とする。区画は北側が狭く南北1.5m、東西4.03mの規模、南側区画は南北4.2m、東西4.1mの規模。石組による壁面補強は、先行して構築された SX02を切り込んでいる南壁および東壁南側角付近のみ施されている。床面には石敷きの貼り床部が、中央付近を中心に残存する。ただし床面では柱穴は検出されていない。掘り込み内の覆土は、第1層：暗オリーブ褐色砂質土層、第2層：黄灰色砂質土層に分層される。掘り込み内からの出土遺物には土師器・瓦質土器・柱根・釘がある。この掘り込み部の周囲を巡るように柱列が検出されている。基本は1間×2間の掘立柱建物だが、さらに掘り込み部内の間仕切り石列の外側に接して、2個の柱穴がみられる。掘立部の規模は梁行き4.7m、桁行き7.1m、占有面積33.4㎡を数える。建物の主軸方位は N38° Wとなる。

井戸

SE001（図面063）：木枠組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径4.32m、短径4.0m、深さ3.01mの規模を測る。掘り方の横断面は底面が平坦な鍋底状を程する。木枠の痕跡は検出面付近まで残るが、井戸枠自体は下段のみが残存する。おそらく上半部は抜き取られて再転用されたのであろう。遺物としては瀬戸美濃施釉陶器、八尾、土師器皿、珠洲、棒状の金属製品などが出土している。

SE002（図面063）：石組井戸と推定されるが、定かではない。石組の痕跡は最下部に数段分がかろう

じて残る。この石組みは、木枠組井戸の最下段を支えたものとも解釈できる。掘り方の平面形態は不整形で、長径6.1m、短径5.08m、深さ3.5mの規模を測る。堀り方の横断面は底面が平坦な鍋底状を程する。出土遺物には曲物、棒状の金属製品がある。

SE003（図面063）：素堀り状態で検出されたが、木枠組か石組の井戸と考えられる。堀り方のみが残存している。掘り方の平面形態は不整形で、長径6.94m、短径6.54m、深さ1.16mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。瀬戸美濃施釉陶器、中国製青磁、八尾、珠洲、土師器皿、棒状の金属製品、鉄滓、釘などの遺物が出土している。

SE004（図面064）：木枠組か石組かは不明で、掘り方のみ残存している井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.85m、短径2.5m、深さ1.8mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。井戸内からは、土師器皿、曲物が出土している。

SE005（図面064）：木枠組か石組かは不明で、掘り方のみ残存している井戸である。掘り方の平面形態は不整形で、長径3.3m、短径2.97m、深さ1.61mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。遺物としては、珠洲、土師器、鉄滓などが出土している。

SE006（図面064）：木枠組井戸である。木枠の最下段の横桟部分のみがわずかに痕跡を残す。掘り方の平面形態は円形で、径3.42～3.26m、深さ1.47mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。遺物としては珠洲が出土している。

SE007（図面065）:石組井戸である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は0.7m、ほぼ垂直に石組みされる。掘り方の平面形態は円形で、径2.6～2.44m、深さ1.75mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。出土遺物は認められない。

SE008（図面065）:石組井戸である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は0.9m、ほぼ垂直に石組みされる。掘り方の平面形態は不整楕円形で、長径2.85m、短径2.35m、深さ1.53mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。瀬戸美濃施釉陶器、土師器皿、板状の木製品などの遺物が出土している。

SE009（図面065）:石組井戸である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は0.8m、ほぼ垂直に石組みされる。。掘り方の平面形態は長楕円形で、長径3.1m、短径2.5m、深さ1.93mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型。井戸内から土師器皿板状金属製品が出土している。

SE010（図面066）：木枠組井戸である。最下段の横桟のみが残存する。掘り方の平面形態は不整形で、長径3.17m、短径2.45m、深さ1.35mの規模を測る。井筒本体の平面形態は方形で、一辺0.75～0.73m、深さ0.21mを測る。横断面の形態は、底が平坦な鍋底型である。遺物としては珠洲の出土がみられる。

SE011（図面066）：現状で素堀状態の井戸である。掘り方の平面形態は不整形で、長径1.95m、短径1.66m、深さ（0.75）mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型。出土遺物なし。

SE012（図面066）:石組井戸である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面で1.5m、底面で0.9mと、やや角度を付けて石組みされる。掘り方の平面形態は長楕円形で、長径2.88m、短径2.22m、深さ2.01mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。遺物としては珠洲、曲物、板状の木製品が出土している。

SE013（図面066）：現状で素堀状態の井戸。掘り方の平面形態は不整円形で、長径1.65m、短径1.62m、深さ0.86m。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。出土遺物なし。

SE014（図面067）：石組井戸である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面1.1m、底面0.6

mで、やや角度を付けて石組される。掘り方の平面形態は不整楕円形で、長径2.8m、短径2.47m、深さ1.72mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。遺物としては珠洲、土師器皿、木製品の底板、金属の釘などが出土している。

SE015（図面067）：石組井戸である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は0.85m、ほぼ垂直に石組みされる。掘り方の平面形態は不整円形で、長径3.52m、短径2.82m、深さ1.8mの規模。横断面の形態は漏斗型。遺物は土師器皿、曲物が出土している。

SE016（図面067）：石組井戸である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面１m、底面0.6mで、やや角度を付けて石組される。掘り方の平面形態は隅丸方形で、一辺３m前後、深さ1.97mの規模。横断面の形態は漏斗型。遺物には珠洲、曲物、打製石斧がある。

SE017（図面068）：石組井戸である。SE018と肩が一部重複し、これを切り込む。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面0.5m、底面0.4mで、やや角度を付けて石組される。掘り方の平面形態は円形で、径1.95～1.92m、深さ1.31mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。遺物としては曲物が出土している。

SE018（図面068）：素堀状態の検出であるが、木枠組井戸と推定される。SE017と肩が一部重複し、これに切り込まれる。木枠組部はまったく残存しないが、堀方底面に方形の窪みの痕跡が残存する。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.75m、短径2.49m、深さ1.25mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。出土遺物は認められない。

SE019（図面068）：木枠組か石組かは不明で掘り方のみが残存する。SE020と肩が一部重複し、これを切り込む。掘り方の平面形態は不整形で、径2.2m、深さ1.15mの規模を測る。横断面の形態は、底が平坦な鍋底型である。八尾、珠洲、曲物、箸が出土している。

SE020（図面068）：木枠組井戸である。堀方の一部がSE019と重複し、これに切り込まれる。木枠部は下段のみが約0.9m分残存する。横桟が二段残り、桟の外側に薄い縦板を重ねて木枠とする。さらに木枠の内部には曲物桶の底板を抜いたものを設置する。掘り方の平面形態は不整円形で、径2.35m、深さ1.35mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。八尾、珠洲、曲物、箸などの遺物が出土している。

SE021（図面069）：石組井戸であるが、下段のみが残存する。井筒部は堀方の中心に位置する。底面の内径は0.7m。掘り方の平面形態は円形で、径1.72～1.68m、深さ0.9mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。出土遺物は認められない。

SE022（図面069）：木枠組か石組みかは不明で、掘り方のみが残存している井戸である。掘り方の平面形態は不整形で、長径2.1m、短径1.87m、深さ1.07mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。遺物としては土師器皿が出土している。

SE023（図面069）：石組井戸である。井筒部は堀方の中心に設置されるが、内側の一部が肩崩れしている。内径は0.7m前後と推定される。ほぼ垂直に石組みされている。掘り方の平面形態は円形で、径2.37～2.25m、深さ1.6mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。遺物としては土師器皿が出土している。

SE024（図面069）：木枠組井戸である。木枠は底面から0.5mほど浮いた状態で横桟のみが残存する。おそらく縦板は抜き取られたのであろう。縦板は無いものの、下段は四壁を石積みして側面の補強としている。掘り方の平面形態は長楕円形で、長径2.96m、短径2.42m、深さ1.29mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。遺物としては、中国製青磁、八尾、珠洲、土師器皿、漆器片、

曲物鉄滓などの出土がみられる。

SE025（図面070）：石組井戸である。SE026と近接所在するが、重複はみられない。
井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面0.9m、底面0.4mで、やや角度を付けて石組される。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.01、短径1.84m、深さ1.03mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。出土遺物は認められない。

SE026（図面070）：石組井戸である。SE025と近接所在するが、重複はみられない。井筒部は堀方のほぼ中心に設置される。内径は上面１m、底面0.8mで、ほぼ垂直に石組みされる。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.2m、短径1.88m、深さ1.08mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。遺物としては珠洲、土師器皿の出土がみられる。

SE027（図面070）：石組井戸である。井筒部は堀方のほぼ中心に設置される。内径は上面0.8m、底面0.4mで、やや角度を付けて石組される。底面には底板を抜いた転用曲物桶が残る。掘り方の平面形態は円形で、径1.77～1.67m、深さ1.32mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。遺物としては漆器の蓋、底板が出土している。

SE028（図面070）：石組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径1.79m、短径1.5m、深さ0.97mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。出土遺物は確認されない。

SE029（図面070）：石組井戸である。井筒部は堀方の中心に設置されるが、肩崩れしており、石組は一部のみが残存する。上面の内径は0.7m、底面は0.5m前後と推定される。掘り方の平面形態は円形で、径2.53～2.36m、深さ1.39mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。遺物としては珠洲の出土が認められる。

SE030（図面071）：石組井戸である。井筒部は堀方のほぼ中心に設置される。内径は0.7m、ほぼ垂直に石組みされる。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.46m、短径2.1m、深さ1.05mの規模。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。遺物は珠洲が出土している。

SE031（図面071）：石組井戸である。肩の一部が調査地区外となる。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面1.1m、底面0.6mで、やや角度を付けて石組される。掘り方の平面形態は不整形で、径2.1m、深さ1.14mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。出土遺物は認められない。

SE032（図面071）：石組井戸である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面0.6m、底面0.4mで、やや角度を付けて石組される。掘り方の平面形態は円形で、径1.35m、深さ0.68mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。出土遺物なし。

SE033（図面071）：石組井戸である。SE034と近接するが、重複はみられない。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面0.9m、底面0.45mで、やや角度を付けて石組される。底面には底板を抜いた曲物桶一段分が設置される。掘り方の平面形態は楕円形で、長径1.7m、短径1.58m、深さ1.1mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。遺物としては珠洲、土師器皿、曲物などが出土している。

SE034（図面071）：石組井戸である。SE033と近接するが、重複はない。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面0.9m、底面0.5mで、やや角度を付けて石組される。底面には底板を抜いた曲物桶一段分が設置される。規模・構造ともSE033にきわめて近似する。掘り方の平面形態は円形で、径1.65m、深さ1.1mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。遺物としては珠洲、土師器皿、曲物、烏帽子などが出土している。

SE035（図面072）：石組井戸である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面0.8m、底面0.7

mで、ほぼ垂直に石組される。底面には横桟が一段分残存し、内部には底板を抜いた曲物桶を設置している。掘り方の平面形態は長楕円形で、長径3.72m、短径2.88m、深さ1.57mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。井戸内からは曲物、板状の木製品、砥石などの遺物が出土している。

SE036（図面072）：石組井戸である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面0.9m、底面0.6mで、やや角度を付けて石組される。底面には横桟が一段分残存し、内部には底板を抜いた曲物桶を設置している。掘り方の平面形態は長楕円形で、長径2.82m、短径2.31m、深さ1.4mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。遺物としては八尾、土師器皿、曲物、棒状の金属製品などが出土している。

SE037（図面072）：石組井戸である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面0.8m、底面0.5mで、やや角度を付けて石組される。掘り方の平面形態は不整形で、長径2.11m、短径1.86m、深さ1.2mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。遺物としては珠洲、土師器皿などが出土している。

SE038（図面073）：石組井戸である。 井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面1.3～1.1m、底面0.4mで、角度を付けて石組される。掘り方の平面形態は円形で、径2.6～2.52m、深さ1.42mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型。中国製青磁、八尾が出土。

SE039（図面073）：石組井戸である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面0.9m、底面0.3mで、角度を付けて石組される。底面には底板を抜いた曲物桶を一段設置する。掘り方の平面形態は円形で、径1.93～1.88m、深さ1.25mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。遺物では瀬戸美濃施釉陶器、八尾、土師器皿、曲物が出土している。

SE040（図面073）：石組井戸である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は0.6mで、ほぼ垂直に石組みされる。掘り方の平面形態は円形で、径1.24～1.23m、深さ0.52mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。出土遺物は認められない。

SE041（図面073）：石組井戸である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面0.6m、底面0.5mで、わずかに角度を付けて石組される。掘り方の平面形態は円形で径1.8～1.75m、深さ0.89mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。遺物としては八尾、珠洲、土師器皿などが出土している。

SE042（図面073）：木枠組か石組かは不明で、掘り方のみが残存している井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.09m、短径1.6m、深さ0.94mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。出土遺物は確認されない。

SE043（図面074）：木枠組井戸である。掘り方の平面形態は不整形で、長径2.7m、短径2.17m、深さ1.37mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。井筒本体の平面形態は方形で、堀方の北側に片寄せして木枠を組む。木枠部は一辺0.92～0.9m、下段のみ0.49mが残存する。さらに木枠の内部に底板を抜いた曲物桶を一段分設置している。遺物としては、土師器皿、曲物、斉串状木製品など出土している。

SE044（図面074）：木枠組井戸である。掘り方の平面形態は隅丸方形で、長辺1.91m、短辺0.5m、深さ0.95mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型。井筒本体の平面形態は方形で、堀方の北側に片寄せして木枠を組んでいる。一辺0.8～0.77m、下段部のみ約0.6m分が残存する。遺物は珠洲、呪符、漆器の皿、箸、へら、下駄が出土する。

SE045（図面074）：石組井戸である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は0.8mで、最下段一段分の石組のみが残されている。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.35m、短径2.2m、深さ0.94mの規模。横断面の形態は底が平坦な鍋底型。土師器皿が出土。

SE046（図面075）：木枠組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.77m、短径2.65m、深さ1.5mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。堀方の中央部の底面に、木枠一段分が残存する。一辺0.65m、底面から0.6m分が残存する。木枠の周囲は石を組んで固定する。木枠の内部には、底板を抜いた曲物桶が一段分設置されている。遺物としては前述の曲物の他、釘が出土している。

SE047（図面075）：木枠組井戸である。掘り方の平面形態は不整形で、長径3.28m、短径2.12m、深さ1.62mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。井筒本体の平面形態は方形で、一辺0.87～0.82m、残存高0.72mを測る。横桟および、縦板部が比較的良好に残存する。井筒内には、底板を抜いた曲物一段分を設置する。遺物としては、土師器皿、曲物、漆器の皿、砥石などが出土している。

SE048（図面075）：木枠組か石組かは不明で掘り方のみ残存している井戸である。掘り方の平面形態は不整形で、長径2.65m、短径2.03m、深さ1.23mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。遺物では、珠洲、土師器皿、棒状木製品が出土している。

SE049（図面075）：木枠組か石組かは不明で掘り方のみ残存している井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.22m、短径1.74m、深さ1.07mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。出土遺物は認められない。

SE050（図面076）：石組井戸である。掘り方の平面形態は不整形で、長径2.95m、短径2.4m、深さ1.59mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は0.6mで、ほぼ垂直に石組みされる。底面から曲物が一段分出土している。

SE051（図面076）：石組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.27m、短径1.77m、深さ1.49mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面1.1m、底面0.5mで、かなりの角度を付けて石組される。底面には底を抜いた曲物一段分を据える。遺物では、土師器皿などが出土している。

SE052（図面076）：石組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.96m、短径2.72m、深さ1.57mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面1.0m、底面0.7mで、やや角度を付けて石組される。遺物としては珠洲、土師器皿、匙、漆器の皿、椀、砥石、釘などが出土している。

SE053（図面077）：石組井戸である。掘り方の平面形態は不整形で、長径2.52m、短径2.09m、深さ1.53mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は0.9mで、ほぼ垂直に石組みされる。遺物では珠洲が出土している。

SE054（図面077）：石組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.22m、短径2.02m、深さ1.26mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面0.95m、底面0.5mで、角度を付けて石組される。底面に底抜きの曲物一段を据える。遺物としては八尾、珠洲、土師器皿などが出土している。

SE055（図面077）：石組井戸である。掘り方の平面形態は不整形で、長径2.3m、短径2.02m、深さ1.67mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は0.9mで、ほぼ垂直に石組みされる。底面に底を抜いた曲物一段分を設置する。遺物としては箸、

漆器椀などが出土している。

SE056（図面078）：石組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.17m、短径1.26m、深さ1.21mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型。井筒部は堀方の一方に片寄せして設置する。内径は0.65mでほぼ垂直に石組みする。珠洲、土師器皿が出土。

SE057（図面078）：堀方のみが残存する井戸で、木枠組か石組かは不明。下半部の一見石組に見える部分は、基盤礫層を堀抜いて井戸を構築しているため、この部分の礫が露出していることによる。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.15m、短径1.93m、深さ1.44mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。遺物としては中国製青磁が出土している。

SE058（図面078）：石組井戸である。掘り方の平面形態は長楕円形で、長径3.06m、短径2.26m、深さ1.62mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は0.95mで、ほぼ垂直に石組みする。曲物、鉄滓が出土。

SE059（図面079）：石組井戸である。掘り方の平面形態は円形で、径2.15～2.02m、深さ1.32mの規模。横断面の形態は擂鉢型。井筒部は堀方の一方に片寄せして設置される。内径は0.8mで、ほぼ垂直に石組する。中国製青磁・白磁、八尾、珠洲、土師器皿、鉄滓が出土。

SE060（図面079）：石組井戸である。調査区の壁にかかるため半裁状態で検出された。掘り方の平面形態は不整形で、径2.67m、深さ1.14mと推定される。横断面の形態は擂鉢型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面1.0m、底面0.65mで、角度を付けて石組される。遺物としては土師器皿の出土が認められる。

SE061（図面079）：石組井戸である。掘り方の平面形態は不整形で、長径2.64m、短径2.6m、深さ1.55mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面1.05m、底面0.65mで、角度を付けて石組される。遺物としては土師器皿の他に、箸、曲物、板状、杭状などの木製品が出土している。

SE062（図面079）：石組井戸である。掘り方の平面形態は長楕円形で、長径2.8m、短径2.24m、深さ1.28mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は0.9mで、ほぼ垂直に石組みされる。珠洲、土師器皿が出土。

SE063（図面080）：石組井戸である。約３分の２ほどの部分検出。掘り方の平面形態は不整形で、径2.03m、深さ0.89mの規模と推定。横断面の形態は底が平坦な鍋底型。井筒部は堀方の中心に設置する。内径は0.7mで、底面から３段分が残存する。出土遺物なし。

SE064（図面080）：石組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.36m、短径2.05m、深さ1.15mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は0.7mで、下段２～３段分のみが残存。箸、曲物が出土。

SE065（図面080）：石組井戸である。掘り方の平面形態は不整形で、長径2.25m、短径1.9m、深さ1.33mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面0.95m、底面0.6mで、角度を付けて石組される。底面に底抜きの曲物一段を設置している。遺物では山茶椀、土師器皿などが出土している。

SE066（図面080）：石組井戸である。掘り方の平面形態は円形で、径2.06～1.95m、深さ1.34mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面0.9m、底面0.6mで、角度を付けて石組する。底面に曲物一段を据える。

SE067（図面081）：SE067～069は３基が近接して検出された。切り合いからSE067→SE068→SE069

の順で変遷する。このうちSE067は最先行と考えられる石組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.66m、短径1.83m、深さ0.99mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は0.65mで、下段数段分のみが部分残存する。底面に底抜きの曲物一段を設置する。他に出土遺物なし。

SE068（図面081）：SE067に後出する石組井戸である。掘り方の平面形態は不整形で、長径3.84m、短径2.75m、深さ1.5mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面1.0m、底面0.5mで、角度を付けて石組される。最下段には上段に比べ、かなり大型の礫を据えている。出土遺物は認められない。

SE069（図面081）：３基のなかで最後出する石組井戸。掘り方の平面形態は不整形で、長径2.98m、短径2.6m、深さ1.5mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型。井筒部は堀方の中心に設置される。石組みは部分的にしか残存ていない。遺物では箸が出土している。

SE070（図面082）：石組井戸である。掘り方の平面形態は円形で、径2.47～2.41m、深さ1.29mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面0.8m、底面0.4mで、角度を付けて石組される。底面に底抜きの曲げ物一段分を設置する。遺物では、前述の曲物以外に石臼が出土している。

SE071（図面082）：石組井戸である。掘り方の平面形態は不整形で、長径2.39m、短径2.04m、深さ1.37mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面1.0m、底面0.6mで、角度を付けて石組される。底面に底抜きの曲物桶を一段分設置している。曲物以外の出土遺物は認められない。

SE072（図面082）：木枠組井戸である。掘り方の平面形態は隅丸方形で、長辺2.5m、短辺2.13m、深さ0.98mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。井筒本体の平面形態は方形で、堀方の中央に据えられる。一辺0.95～0.86m、底面からの残存高0.8mを測る。横桟を方形に組み継ぎ、その外側に縦板を配す。井筒の底面には底抜きの曲物を据える。遺物では、珠洲、土師器皿、曲物、棒状と板状の木製品、鉄滓が出土。

SE073（図面083）：石組井戸である。掘り方の平面形態は円形で、径2.27～2.22m、深さ1.24mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面0.75m、底面0.45mで、堀方の中位以下にしか石組は残存しない。底面には曲物を設置する。遺物としては八尾、珠洲、曲物、砥石が出土している。

SE074（図面083）：石組井戸である。掘り方の平面形態は長楕円形で、長径3.3m、短径2.33m、深さ1.5mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面1.0m、底面0.75mで、角度を付けて石組される。底面に底抜きの曲物一段分が設置される。遺物としては土師器皿が出土している。

SE075（図面083）：石組井戸である。堀方の一部が調査地区外となる。掘り方の平面形態は円形で、径2.1m、深さ1.19mの規模。横断面の形態は擂鉢型。井筒部は堀方の中心に設置する。内径は上面1.0m、底面0.5mで、角度を付けて石組する。中国製青磁が出土。

SE076（図面083）：石組井戸である。掘り方の平面形態は円形で、径2.3～2.25m、深さ1.67mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は1.0mで、ほぼ垂直に石組みされる。底面に曲物一段を設置。遺物は曲物、箸、匙が出土。

SE077（図面084）：石組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.48m、短径2.05m、深さ

1.49mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。井筒部は堀方の一方に片寄せして設置される。内径は0.9mで、ほぼ垂直に石組みされる。底面には底抜きの曲物桶一段分を設置する。遺物としては珠洲、漆器椀、箸、曲物が出土している。

SE078（図面084）：木枠組井戸と石組井戸の両者の特徴を有する、やや特異な井戸である。掘り方の一部は切り込まれて消失する。平面形態は不整形で、径2.48m、深さ1.4mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は0.7mで、ほぼ垂直に石組みされる。石組みは中位から上半部にのみ施される。下半部の中央には底抜きの曲物桶一段を設置する。その周辺からは木枠組みの残欠が出土している。このことから当初木枠組井戸として作られたものが、修復・改修等の作業時には下半はそのままに、上半部分のみ石組みとした可能性が高い。木枠組から石組に移行する時期の、両者の折衷形式の井戸と考えられる。遺物では八尾、珠洲、土師器皿、曲物が出土している。

SE079（図面084）：木枠組か石組かは不明で、掘り方のみ残存している井戸である。掘り方の平面形態は不整形で、長径3.41m、短径2.44m、深さ0.64mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。遺物は土師器皿、板状の木製品が出土している。

SE080（図面085）：石組井戸である。掘り方の平面形態は円形で、径2.45～2.22m、深さ1.4mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面0.85m、底面0.5mで、角度を付けて石組される。遺物では珠洲が出土する。

SE081（図面085）：石組井戸である。掘り方の平面形態は円形で、径2.59～2.34m、深さ1.3mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面1.0m、底面0.7mで、角度を付けて石組される。底面に底抜けの曲物桶一段を設置する。遺物では八尾、珠洲、土師器皿、箸、板状の木製品などが出土している。

SE082（図面085）：石組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.2m、短径1.89m、深さ1.51mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面0.9m、底面0.5mで、角度を付けて石組される。中国製青磁が出土している。

SE083（図面085）：石組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径1.98m、短径1.78m、深さ1.5mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面1.0m、底面0.6mで、角度を付けて石組される。漆器、底板が出土している。

SE084（図面086）：石組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.31m、短径1.94m、深さ1.07mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面0.8m、底面0.55mで、角度を付けて石組される。底面には曲物が一段設置される。遺物としては珠洲、土師器皿、箸などが出土している。

SE085（図面086）：石組井戸である。掘り方の平面形態は長楕円形で、長径2.87m、短径2.22m、深さ1.34mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。井筒部は堀方の一方に片寄せして設置される。内径は上面1.0m、底面0.6mで、中位までは垂直に、以下は丸底風に石組される。遺物としては八尾、珠洲などが出土している。

SE086（図面086）：石組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.67m、短径2.26m、深さ1.42mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面1.0m、底面0.6mで、角度を付けて石組される。底面からは曲物の残欠が出土する。他の出土遺物としては八尾、珠洲、曲物がある。

SE087（図面086）：石組井戸である。SE087については、井戸の破棄時に井筒内を礫で充填している。また上面は堀方部分を含めて広く礫を敷き詰めている。掘り方の平面形態は隅丸方形で、一辺2.29～2.15m、深さ1.14mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。井筒部は堀方の中心よりやや偏って設置される。内径は上面0.9m、底面0.4mで、角度を付けて石組される。遺物としては珠洲、土師器皿、漆器が出土している。

SE088（図面087）：石組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.17m、短径2.05m、深さ1.14mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は0.6mで、ほぼ垂直に石組みされる。石組は上段が一段分ほど欠落する。底面には底抜きの曲物一段分を据える。遺物としては八尾が出土している。

SE089（図面087）：石組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径1.82m、短径1.59m、深さ0.64mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。石組は部分的にしか残存しない。上部を削平されたか、浅い井戸である。出土遺物は認められない。

SE090（図面087）：石組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.28m、短径2.38m、深さ1.3mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は0.8mで、ほぼ垂直に石組みされる。遺物としては珠洲が出土している。

SE091（図面087）：石組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.25m、短径2.21m、深さ1.16mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は0.7mで、ほぼ垂直に石組みされる。遺物は曲物の底板、石製品の板碑が出土。

SE092（図面088）：SE092～095は、4基が近接して検出されている。切り合い関係からSE095→SE094→SE092・093と変遷する様相が窺える。SE092とSE093は切り合いが無く、先後関係は不明。SE092はSE094・095を切り込む石組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.65m、短径2.27m、深さ1.6mの規模。横断面の形態は漏斗型。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面0.9m、底面0.55mで、角度を付けて石組される。底面からは曲物の残欠が出土する。他には瀬戸美濃、珠洲、土師器皿が出土する。

SE093（図面088）：SE094を切り込む石組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.06m、短径1.87m、深さ1.3mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面0.9m、底面0.65mで、角度を付けて石組される。底面には底抜きにした曲物桶を一段設置する。珠洲、箸、漆器、曲物が出土している。

SE094（図面088）：SE092・093に切り込まれ、SE095を切り込む石組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径1.86m、短径1.7m、深さ1.07mの規模。横断面の形態は漏斗型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面0.7m、底面0.4mで、角度を付けて石組される。出土遺物なし。

SE095（図面088）：木枠組か石組みかは不明で掘り方のみ残存している井戸である。掘り方の平面形態は不整形で、径1.85～m、深さ1.52mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。底面中央に底抜けの曲物桶一段分が設置される。出土遺物なし。

SE096（図面089）：石組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.38m、短径2.21m、深さ1.5mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。石組は上段部には残存せず、下段に数段分が残される。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は0.7m。底面に底抜きの曲物桶一段を設置する。遺物としては瀬戸美濃の出土がみられる。

SE097（図面089）：木枠組井戸である。掘り方の平面形態は隅丸方形で、一辺2.35～2.27m、深さ1.26

mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。井筒本体の平面形態は方形で一辺0.72～0.76mを測る。横桟を方形に組み、外側に縦板を配す。木枠内の中央に底抜きの曲物一段分を設置する。出土遺物は認められない。

SE098（図面089）：石組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.35m、短径2.22m、深さ1.17mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。井筒部は堀方の中心よりやや片寄って設置される。内径は上面0.8m、底面0.6mで、それほど角度を付けていない。底面より曲物の残欠が出土する。他の遺物としては瀬戸美濃の出土が認められる。

SE099（図面090）：石組井戸である。掘り方の平面形態は円形で、径2.25～2.12m、深さ1.28mの規模。横断面の形態は擂鉢型。井筒部は堀方の中心よりやや片寄せて設置する。内径は上面0.7mでほぼ垂直に石組する。出土遺物なし。

SE100（図面090）：木枠組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径2.35m、短径2.25m、深さ1.26mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。井筒本体は底面の中央に設置される。木枠部の平面形態は方形で、一辺0.72mを測る。横桟・縦板ともわずかに残存する。底面中央には曲物を設置する。他の出土遺物は認められない。

SE101（図面090）：石組井戸である。掘り方の平面形態は隅丸方形で、一辺2.05m、深さ1.14mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面0.8m、底面0.4mで、角度を付けて石組される。土師器皿が出土した。

SE102（図面091）：木枠組井戸である。掘り方の平面形態は長楕円形で、長径1.83m、短径1.33m、深さ1.16mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。木枠部は中央よりやや片寄せて設置する。井筒本体の平面形態は方形で、一辺0.86m、底面からの残存高0.58mを測る。横桟・縦板とも三方が残存するが、曲物は残欠として出土しているのみである。遺物としては箸、曲物、結桶側板、板状の木製品などが出土している。

SE103（図面091）：木枠組か石組かは不明で掘り方のみ残存している井戸である。掘り方の平面形態は不整形で、長径3.15m、短径1.66m、深さ1.08mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。板状残欠以外の出土遺物は認められない。

SE104（図面091）：木枠組か石組かは不明で掘り方のみ残存している井戸である。掘り方の平面形態は不整形で、長径2.25m、短径1.82m、深さ1.09mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。板状残欠以外の出土遺物は認められない。

SE105（図面091）：木枠組井戸である。掘り方の平面形態は楕円形で、長径1.98m、短径1.82m、深さ1.16mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。井筒本体の平面形態は方形で、一辺0.7～0.76mを測る。底面からの残存高0.96mを測る。縦桟4カ所を渡すように横桟を組み、その外側に縦板を重ねるように配す。木枠内部の上面には板状残欠が積み重なるが、これをどけると下面に曲物が姿を現す。曲物は底抜きのもの一段を中央に設置する。出土遺物には木札、板状の木製品などがみられる。

SE106（図面091）：石組井戸である。堀り方の平面形態は円形で、一辺1.86～1.54m、深さ1.81mを測る。横断面の形態は筒形。井筒部は堀方の中心に設置される。内径は上面1.0m、底面0.4mで、角度を付けて石組される。出土遺物では瀬戸美濃、石製板碑がある。

SE107（図面017）：SE051と大きく重複してこれに切り込まれれている。当初浅い土坑としか認識しておらず、後にSE051の断ち割り時に周辺を深掘りした結果、井戸枠などがバラバラとなって出土し、改めて井戸跡であることが判明した。このため木枠組井戸と推定されるが、詳細は不明である。堀方

の平面形態は不整形で、長径3.2m、短径2.52mを測る。出土遺物としては、前述のように井戸枠と考えられる板などが出土している。

土坑

SK004（図面096）：平面形態は楕円形で、長径2.04m、短径1.01m、深さ0.12mを測る。覆土は第1層：黄灰色砂粘質土層、第2層：オリーブ褐色砂質土層。出土遺物は認めず。

SK005（図面096）：平面形態は楕円形で、長径1.44m、短径1.3m、深さ0.25mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物はない。

SK006（図面008・153）：平面形態は不整形で、規模は長径2.75m、短径1.15m、深さ0.23mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は第1層：暗灰黄色砂粘質土層、第2層：黄灰色粘質土層に分層される。出土遺物は八尾、珠洲、土師器皿がある。

SK007（図面008・153）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.75m、短径0.65m以上、深さ0.17mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器皿がある。

SK008（図面008・153）：平面形態は円形で、規模は径0.77～0.5m、深さ0.15mを測る。土抗内は礫が混入している。覆土は第1層：黄灰色砂粘質土層、第2層：暗灰黄色砂粘質土層に分層される。出土遺物には珠洲がある。

SK009（図面094）：平面形態は長楕円形で、規模は、長径3.3m、短径1.93m、深さ0.52mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土は黒褐色粘質土層の単層となる。出土遺物には八尾、土師器皿、砥石、棒状の金属製品がある。

SK010（図面096）：平面形態は長楕円形で、規模は長径2.14m、短径1.15m、深さ0.24mを測る。土抗内は小礫が散在している。覆土は第1層：黄灰色砂粘質土層、第2層：暗灰黄色砂粘質土層、第3層：暗灰黄色砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK011（図面008・153）：平面形態は不整形で、長径1.12m、短径0.81m以上、深さ0.16mを測る。土抗内は礫が散在する。覆土は灰黄褐色砂粘質土層の単層。珠洲、八尾が出土。

SK012（図面096）：平面形態は楕円形で、長径1.27m、短径0.95m、深さ0.18mを測る。覆土は第1層：褐灰色砂粘質土層、第2層：灰黄褐色砂粘質土層となる。出土遺物なし。

SK013（図面012・164）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.67m、短径0.4m、深さ0.12mを測る。覆土は第1層：黄灰色（2.5Y 4／1）砂粘質土層、第2層：黄灰色（2.5Y 5／1）砂粘質土層に分層される。出土遺物には唐津がある。

SK014（図面012・153）：平面形態は不整形で、規模は長径3.1m以上、短径2.8m、深さ0.39mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は八尾がある。

SK015（図面012・153）：平面形態は円形で、規模は径1.36～1.08m、深さ0.47mを測る。土抗内は小礫が混入。覆土は第1層：（2.5Y 5／2）暗灰黄色砂粘質土層、第2層：（2.5Y 4／2）暗灰黄色砂粘質土層、第3層：黄褐色砂質土層に分層される。遺物は土師器皿がある。

SK016（図面012・164）：平面形態は円形で、規模は径0.76～0.55m、深さ0.29mを測る。覆土は第1層：にぶい黄褐色砂質土層、第2層：灰黄褐色砂質土層に分層される。出土遺物には中国製青磁、石臼がある。

SK017（図面012・153）：平面形態は円形で、規模は径0.97～0.93m、深さ0.49mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器皿、鉄滓がある。

SK018（図面096）：平面形態は楕円形で、規模は長径2.02m、短径1.23m、深さ0.29mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK019（図面094）：平面形態は楕円形で、規模は長径2.26m、短径1.54m、深さ0.12mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SK020（図面013・153）：平面形態は隅丸方形で、規模は一辺0.36～0.33m、深さ0.12mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物には中国製青磁がある。

SK021（図面096）：平面形態は楕円形で、長径1.19m、短径0.77m、深さ0.12mを測る。覆土は第１層：黄灰色砂粘質土層、第２層：暗灰黄色砂粘質土層となる。出土遺物なし。

SK022（図面096）：平面形態は楕円形で、長径1.55m、短径0.95m、深さ0.18mを測る。覆土は第１層：暗灰黄色砂粘質土層、第２層：黄灰色砂粘質土層となる。珠洲が出土した。

SK023（図面096）：平面形態は円形で、規模は径　1.3～1.12m、深さ0.31mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は第１層：黄灰色砂粘質土層、第２層：黄灰色砂質土層、第３層：にぶい黄褐色砂粘質土層に分層される。出土遺物には土師器皿がある。

SK024（図面094）：平面形態は楕円形で、SK573を切り込む。規模は、長径1.14m、短径0.97m、深さ0.32mを測る。覆土は第１層：黄灰色砂粘質土層、第２層：黒褐色砂粘質土層、第３層：暗灰黄色砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK025（図面100）：平面形態は円形で、規模は長径2.24m、短径2.2m、深さ0.37mを測る。覆土は第１層：灰黄褐色砂質土層、第２層：にぶい黄褐色砂質土層、第３層：黒褐色粘質土層に分層される。出土遺物には青磁、鉄滓がある。

SK026（図面094）：平面形態は楕円形で、規模は長径2.16m、短径0.92m、深さ0.06mを測る。土抗内には小礫が混入する。覆土は黄灰色砂粘質土層の単層。出土遺物なし。

SK027（図面012・153）：平面形態は円形で、規模は径0.6～0.35m、深さ0.18mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物には土師器皿がある。

SK028（図面013・167）：平面形態は隅丸長方形で、規模は長辺4.09m、短辺3.25m、深さ0.75mを測る。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中国製青磁、八尾、珠洲、土師器皿などがある。

SK029（図面012・164）：平面形態は円形で、規模は径0.23～0.22m、深さ0.19mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK030（図面012・164）：平面形態は円形で、規模は径0.3～0.25m、深さ0.29mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物なし。

SK031（図面094）：平面形態は円形で、径2.12～1.75m、深さ0.1mを測る。土抗内には大小の礫が散在している。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：黄灰色砂粘質土層、第３層：黄褐色粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK032（図面097）：平面形態は楕円形で、規模は長径2.45m、短径1.98m、深さ0.15mを測る。土抗内には小礫が散在している。覆土は第１層：灰黄褐色砂粘質土層、第２層：褐灰色砂粘質土層、第３層：暗灰黄色砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK033（図面095）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.2m、短径1.16m、深さ0.39mを測る。土抗内は大小の礫が散在している。覆土は黄灰色砂礫層の単層。出土遺物なし。

SK034（図面012・164）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.55m、短径0.31m、深さ0.16mを測る。

覆土は第１層：黄灰色（2.5Y ５／１）砂粘質土層、第２層：黄褐色砂粘質土層、第３層：黄灰色（2.5Y ４／１）砂粘質土層に分層される。出土遺物には珠洲がある。

SK035（図面100）：平面形態は円形で、長径1.57m、短径1.53m、深さ0.09mを測る。覆土は第１層：黄灰色砂粘質土層、第２層：黄褐色砂粘質土層となる。出土遺物なし。

SK036（図面095）：平面形態は楕円形で、規模は長径3.8m、短径2.65m、深さ0.13mを測る。中央が二段堀状になる。覆土は黄灰色砂粘質土層の単層。出土遺物は認められない。

SK037（図面097）：平面形態は楕円形で、SD027に切り込まれる。規模は長径1.3m、短径0.61m、深さ0.24mを測る。土抗内には礫が散在している。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK038（図面150・164）：平面形態は円形で、規模は径0.46～0.41m、深さ0.15mを測る。覆土は央軌色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器皿がある。

SK039（図面150・164）：平面形態は円形で、径0.23～0.22m、深さ0.16mを測る。土抗内には人頭大の礫が混入する。覆土は黄灰色砂粘質土層。釘状の金属製品が出土。

SK040（図面098）：平面形態は円形で、規模は径1.6～1.59m、深さ0.29mを測る。土抗内には礫が散在している。覆土は第１層：灰黄褐色砂質土層、第２層：暗褐色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK041（図面097）：平面形態は不整形で、SK042に切り込まれる。規模は長径5.4m、短径5.15m、深さ0.46mを測る。土抗内は大小の礫が散在している。覆土は暗褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物には砥石、硯、釘、棒状の金属製品がある。

SK042（図面097）：平面形態は楕円形で、SK041を切り込む。長径1.36m、短径1.27m、深さ0.12mを測る。土抗内には小礫が混入する。覆土は黄灰色砂粘質土層。出土遺物なし。

SK043（図面097・153）：平面形態は円形で、半分を溝で切られる。径1.75m、深さ0.27mを測る。覆土は第１層：黄灰色砂粘質土層、第２層：灰黄褐色砂粘質土層となる。土師器皿、棒状金属製品が出土している。

SK044（図面098）：平面形態は隅丸方形で、規模は長辺3.0m、短辺2.26m、深さ0.14mを測る。土抗内には小礫が混入している。覆土は第１層：暗灰黄色砂粘質土層、第２層：黄灰色砂粘質土層に分層される。出土遺物には土師器皿、釘がある。

SK045（図面098）：平面形態は長楕円形で、長径4.65m、短径1.37m、深さ0.27mを測る。土抗内には礫が散在する。覆土はにぶい黄褐色砂質土層を基調とする。遺物は土師器皿、珠洲、棒状の金属製品が出土。

SK046（図面098）：平面形態は楕円形で、SK047を切る。長径1.59m、短径1.22m、深さ0.19m。土抗内には小礫が散在。覆土は第１層：灰黄褐色砂粘質土層、第２層：暗褐色砂質土層。土師器皿、瀬戸美濃施釉陶器、八尾、珠洲、棒状の金属製品が出土した。

SK047（図面098）：平面形態は長楕円形で、SK046に切られる。規模は長径3.57m、短径1.2m、深さ0.32mを測る。土抗内には礫が散在している。覆土は、にぶい黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物には土師器の皿、棒状の金属製品がある。

SK048（図面099）：平面形態はそらまめ形で、規模は長径3.05m、短径1.56m、深さ0.25mを測る。土抗内には礫が混入している。覆土は灰黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物には鈎形がある。

SK049（図面099）：平面形態は楕円形で、SK048を切り込み、SK059に切られる。規模は長径1.48m以

上、短径1.08m、深さ0.2mを測る。覆土は第１層：黒褐色砂質土層、第２層：灰黄褐色砂質土層となる。土師器皿、釘状の金属製品、棒状の金属製品が出土している。

SK050（図面099）：平面形態は楕円形でSK052に切られる。規模は長径2.49m以上、短径1.14m、深さ0.29mを測る。覆土は第１層：黒褐色砂質土層、第２層：暗褐色砂質土層に分層される。出土遺物には白磁、珠洲、土師器皿がある。

SK051（図面150・153）：平面形態は不整形で、SE009に切られる。長径2.9m、短径1.2m、深さ0.28m。土抗内に礫が混入する。覆土は黒褐色砂質土層なる。土師器皿が出土。

SK052（図面150・153）：平面形態は不整形で、規模は長径4.37m、短径は不明、深さ0.2mを測る。土抗内に礫が混入している。覆土は　黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は青磁、瀬戸美濃、珠洲、土師器皿、瓦質土器、釘、棒状と釘状の金属製品がある。

SK053（図面100）：平面形態は楕円形で、規模は長径2.25m、短径0.86m、深さ0.43mを測る。土抗内には小礫が混入している。覆土は第１層：黄灰色（2.5Y ５／１）砂粘質土層、第２層：黄灰色（2.5Y ４／１）砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK054（図面100）：平面形態は楕円形で、SK055に切り込まれる。長径1.6m、短径0.98m、深さ0.11mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層。出土遺物には土師器皿がある。

SK055（図面100）：平面形態は楕円形で、SK054を切り込む。規模は長径2.0m、短径1.17m、深さ0.22mを測る。覆土は第１層：黄灰色砂粘質土層、第２層：褐灰色砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK056（図面012・153）：平面形態は楕円形で、長径0.38m、短径0.23m、深さ0.11mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層の単層。出土遺物には八尾がある。

SK057（図面150・164）：平面形態は円形で、規模は径0.23～0.20m、深さ0.12mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器皿がある。

SK058（図面101）：平面形態は隅丸長方形で、規模は長辺4.82m、短辺4.16m、深さ0.23mと大型の土坑である。土抗内は小礫が混入している。覆土は黄灰色砂質土のみの単層となる。出土遺物には瀬戸美濃、珠洲、土師器皿がある。

SK059（図面099）：平面形態は楕円形で、SK049・SK398・SK399を切り込む。規模は長径3.45m以上、短径2.82m、深さ0.31mを測る。土抗内には大小の礫が散在している。覆土は第１層：黄灰色砂質層土層、第２層：黒褐色粘質土層に分層される。出土遺物には八尾、瓦質土器、棒状の金属製品などがある。

SK060（図面099）：平面形態は楕円形で、SK398に切り込まれる。長径2.0m以上、短径1.23m、深さ0.26mを測る。土抗内には小礫が見られる。覆土は第１層：黄灰色粘質土層、第２層：黒褐色粘質土層に分層される。出土遺物には瀬戸美濃、棒状の金属製品がある。

SK061（図面150・153）：平面形態は円形で、径1.0～0.98m、深さ0.28mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は褐灰色砂質土層となる。瀬戸美濃、土師器皿が出土する。

SK062（図面150・153）：平面形態は楕円形で、長径1.1m、短径0.94m、深さ0.21mを測る。土抗内は礫が混入する。覆土は褐灰色砂質土層の単層となる。中国製青磁が出土した。

SK063（図面100）：平面形態は楕円形で、SD111に切り込まれる。長径1.7m、短径1.35m以上、深さ0.26mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK064（図面095）：平面形態は不整形で、規模は長径3.46m、短径3.02m、深さ0.21mを測る。覆土

はにぶい黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK065（図面102）：平面形態は不整形で、規模は長径2.1m、短径1.88m、深さ0.45mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土は灰黄褐色砂質土層のみの単層である。出土遺物には瀬戸美濃施釉陶器、土師器皿がある。

SK066（図面101）：平面形態は不整形で、SK067・068に切り込まれる。長径2.83m以上、短径2.35m、深さ0.25mを測る。覆土は灰黄褐色砂質土層のみの単層。土師器皿が出土。

SK067（図面101）：平面形態は楕円形でSK066を切り、SK069に切られる。規模は長径2.9m、短径1.27m、深さ0.25mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は第1層：灰黄褐色砂質土層、第2層：暗褐色砂質土層に分層される。出土遺物には土師器皿がある。

SK068（図面101）：平面形態は楕円形で、SK066・SK069を切り込む。規模は、長径1.62m、短径1.27m、深さ0.17mを測る。土抗内は大小の礫が散在している。覆土は灰黄褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物には石製品の火輪がある。

SK069（図面101）：平面形態は楕円形で、SK067を切りSK068に切られる。規模は長径2.3m、短径1.77m、深さ0.42mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は灰黄褐色砂質土を基調とする。出土遺物には珠洲がある。

SK070（図面102）：平面形態は楕円形で、SE013に切られる。規模は、長径2.95m以上、短径2.0m、深さ0.38mを測る。土抗内には人頭大の礫が混入している。覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：黒褐色粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK071（図面102）：平面形態は楕円形で、SE013を切り込む。長径3.3m、短径2.35m、深さ0.34mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は第1層：灰黄褐色砂質土層、第2層：にぶい黄褐色砂質土層、第3層：暗褐色砂質土層に分層される。土師器皿が出土している。

SK072（図面102）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.8m、短径1.56m以上、深さ0.23mを測る。土坑内の覆土は灰黄褐色砂質土層のみの単層である。土抗内は小礫が散在している。土坑中央の底面に、石製品の板碑が倒れたような状態で出土している。

SK073（図面103）：平面形態は隅丸長方形。規模は、長辺3.14m、短辺2.22m、深さ0.51mを測る。土抗内には小礫が混入する。覆土は黒褐色砂質土層を基調とする。出土遺物には土師器皿、古銭がある。

SK074（図面102）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.7m、短径1.45m、深さ0.27mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は第1層：灰黄褐色砂質土層、第2層：黒褐色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK075（図面016・158）：平面形態は円形で、径0.37～0.22m、深さ0.13mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK076（図面012・164）：平面形態は隅丸方形で、一辺0.2～0.19m、深さ0.37mを測る。覆土は第1層：灰黄褐色砂質土層、第2層：黒褐色砂質土層となる。珠洲が出土する。

SK077（図面103）：平面形態は楕円形で、SE016を切り込む。規模は、長径3.36m、短径2.63m、深さ0.46mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は灰黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物には中国製青磁、珠洲、土師器皿、金属製品の釘がある。

SK078（図面104）：平面形態は円形で、規模は径1.07～1.03m、深さ0.42mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土はオリーブ褐色砂質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK079（図面104）：平面形態は長楕円形で、SK080・SD050を切り込む。規模は、長径2.5m、短径1.54m、深さ0.55mを測る。土抗内は大小の礫が散在している。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器皿、棒状の金属製品がある。

SK080（図面104）：平面形態は楕円形でSK079・SD050に切られる。長径2.24m、短径1.6m以上、深さ0.04mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK081（図面103）：平面形態は隅丸長方形で、大小の礫が散在している。土抗内は石組みで壁面補強しており、重複して何回か作り直している。、規模は長辺3.34m、短辺2.87m、深さ0.33mを測る。覆土は第１層：灰黄褐色砂質土層、第２層：暗褐色粘質土層に分層される。出土遺物には瀬戸美濃施釉陶器、珠洲、土師器皿、金属製品の釘などがある。

SK082（図面011・153）：平面形態は円形で、規模は径0.51～0.45m、深さ0.15mを測る。覆土はオリーブ褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器皿がある。

SK083（図面104）：平面形態は楕円形で、長径1.0m、短径0.7m、深さ0.34mを測る。土抗内は礫詰めの状態。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK084（図面104）：平面形態は隅丸方形で、規模は長辺5.1m、短辺4.74m、深さ0.37mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は灰黄褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物には瀬戸美濃施釉陶器、珠洲、土師器皿などがある。

SK085（図面105）：平面形態は隅丸方形で、SK086を切り込む。規模は、一辺1.33～1.18m、深さ0.31mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物には土師器皿がある。

SK086（図面105）：平面形態は楕円形で、SK085に切られる。長径1.6m、短径1.11m、深さ0.22mを測る。覆土は灰黄褐色砂粘質土層のみの単層。出土遺物には土師器皿がある。

SK087（図面105）：平面形態は隅丸方形で、SK116に切られる。一辺1.25～1.2m、深さ0.21mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物には釘がある。

SK088（図面105）：平面形態は隅丸長方形で、SK089を切り込み、SK086に切られる。規模は長辺1.9m、短辺1.67m、深さ0.1mを測る。覆土は灰黄褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK089（図面105）：平面形態は隅丸方形で、SK086・088に切られる。一辺1.46m以上、深さ0.08mを測る。覆土は灰黄褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK091（図面105）：平面形態は楕円形で、SK451に切られる。規模は、長径1.51m以上、短径1.02m、深さ0.29mを測る。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層黄灰色砂質土層、第３層：暗灰黄色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK092（図面106・125）：平面形態は隅丸長方形で、SK408に切られる。規模は長辺1.95m、短辺1.45m、深さ0.13mを測る。土抗内は大小の礫が散在している。覆土は第１層：黄褐色砂質土層、第２層：暗灰黄色砂質土層、第３層：オリーブ褐色砂質土層に分層される。出土遺物には八尾、土師器皿がある。

SK093（図面007・159）：平面形態は楕円形で、規模は長径2.03m、短径0.5m、深さ0.22mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK094（図面106）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.9m、短径0.55m、深さ0.26mを測る。土抗内は人頭大の礫が散在している。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：暗褐色砂質土層に分層さ

れる。出土遺物は認められない。

SK095（図面149・153）：平面形態は隅丸長方形で、規模は長辺2.14m、短辺0.76m、深さ0.18mを測る。覆土は暗灰黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK096（図面149・153）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.08m、短径0.8m、深さ0.15mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK097（図面149・153）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.0m、短径0.72m、深さ0.16mを測る。覆土は暗褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK098（図面149・153）：平面形態は長楕円形で、規模は長径2.1m、短径0.6m、深さ0.11mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK099（図面149・153）：平面形態は不整形で、規模は長径3.18m、短径1.6m、深さ0.13mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK100（図面149・153）：平面形態は隅丸方形で、一部が調査地区外となる。長辺2.62m以上、短辺2.18m、深さ0.11m。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK101（図面008・164）：平面形態は楕円形で、長径0.97m、短径0.57m、深さ0.19mを測る。土抗内は小礫が散在する。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層。土師器皿が出土。

SK102（図面008・153）：平面形態は楕円形で、長径0.75m、短径0.58m、深さ0.27mを測る。土抗内は大小の礫が混入する。覆土は黄灰色粘質土層の単層。珠洲が出土する。

SK103（図面008・164）：平面形態は円形で、SK104に切られる。規模は、径0.87～0.76m、深さ0.12mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物には土師器皿がある。

SK104（図面008・164）：平面形態は円形で、SK103を切り込む。径0.73～0.65m、深さ0.12mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は黄灰色粘質土層の単層。出土遺物なし。

SK105（図面149・153）：平面形態は不整形で、長径1.26m、短径0.8m、深さ0.17mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は暗褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物なし。

SK106（図面016・159）：平面形態は楕円形で、長径1.3m、短径0.37m、深さ0.1mを測る。覆土は第１層：灰黄褐色砂質土層、第２層：黄褐色砂質土層となる。出土遺物なし。

SK107（図面106）：平面形態は長楕円形で、規模は長径1.26m、短径0.6m、深さ0.25mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：灰黄褐色砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK108（図面106）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.75m、短径0.36m、深さ0.11mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土は暗灰黄色砂質土層。出土遺物は認められない。

SK109（図面107）：平面形態は楕円形で、SK496に切られる。規模は長径1.84m、短径1.22m、深さ0.12mを測る。土抗内は小礫が散在している。覆土はオリーブ褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK110（図面105）：平面形態は長方形で、SK117を切り込む。規模は長辺1.96m、短辺1.65m、深さ0.1mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物なし。

SK111（図面106）：平面形態は楕円形で、SK112を切り込む。規模は長径2.5m、短径1.73m、深さ0.34mを測る。土抗内は人頭大の礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK112（図面106）：平面形態は長楕円形でSK114を切り込み、SK111に切られる。長径2.8m、短径1.42m以上、深さ0.26mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は第１層：にぶい褐色砂粘質土層、第２層：暗灰黄色砂粘質土層、第３層：黄褐色砂粘質土層に分層される。出土遺物は土師器皿がある。

SK113（図面106）：平面形態は不整形でSK112に切られ、規模は長径1.46m、短径1.2m以上、深さ0.8mを測る。覆土は黄褐色砂粘質土層のいの単層となる。出土遺物は認められない。

SK114（図面106）：平面形態は不整形で、SK0827に切られる。規模は長径3.13m、短径2.45m、深さ0.05mを測る。土抗内は大小の礫が散在している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK115（図面108）：平面形態は不整形で、SK593を切り込む。規模は長径4.16m、短径2.45m、深さ0.45mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：黒褐色粘質土層に分層される。出土遺物には珠洲、土師器皿がある。

SK116（図面105）：平面形態は長方形でSK087・SD061を切り込み、SK117に切られる。規模は、長辺1.83m以上、短辺1.54m、深さ0.13mを測る。覆土はオリーブ褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK117（図面105）：平面形態は隅丸方形で、SK116を切り込み、SK110に切られる。規模は長辺1.84m、短辺1.65m、深さ0.24mを測る。覆土は灰黄褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK118（図面095）：平面形態は長楕円形で、規模は長径1.45m、短径0.7m、深さ0.13mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土はオリーブ褐色砂質土層の単層。出土遺物なし。

SK119（図面109）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.0m、短径0.7m、深さ0.14mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：黄褐色砂層に分層される。出土遺物は認められない。

SK120（図面095）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.09m、短径0.88m、深さ0.13mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SK121（図面107）：平面形態は不整形で、SK496に切られる。規模は、長径0.84m以上、短径1.44m、深さ0.1mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層である。出土遺物は認められない。

SK122（図面107）：平面形態は楕円形で、SK496を切り込む。規模は長径0.92m以上、短径0.73m、深さ0.43mを測る。土抗内は小礫が散在している。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：黒褐色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK123（図面095）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.55m、短径1.1m、深さ0.43mを測る。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：黒褐色砂質土層となる。出土遺物なし。

SK124（図面108）：平面形態は長楕円形で、SK125に切られる。規模は長径2.25m、短径0.84m、深さ0.08mを測る。土抗内は小礫が散在している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK125（図面108）：平面形態は楕円形で、SK124を切り込む。規模は長径1.77m、短径1.25m、深さ0.13mを測る。土抗内は大小の礫が散在している。覆土はオリーブ褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK126（図面108）：平面形態は不整形で、規模は長径1.87m、短径1.3m、深さ0.06mを測る。土抗内

は小礫が散在している。覆土は第１層：にぶい黄褐色砂質土層、第２層：オリーブ褐色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK127（図面110）：平面形態は隅丸方形で、東側を切り込まれる。規模は一辺1.12m前後、深さ0.41mを測る。土抗内に小礫が混入している。覆土は第１層：暗灰黄色砂粘質土層、第２層：黄灰色粘質土層に分層される。出土遺物には土師器皿がある。

SK128（図面109）：平面形態は長楕円形で、SK129を切り込む。規模は長径2.88m、短径1.21m、深さ0.36mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は第１層：にぶい黄色砂粘質土層、第２層：暗灰黄色（2.5Y ５／２）粘質土層、第３層：暗灰黄色（2.5Y ４／２）粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK129（図面109）：平面形態は楕円形で、SK128に切られる。長径3.12m以上、短径2.62m、深さ0.38mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は　第１層：灰黄褐色砂粘質土層、第２層：褐灰色粘質土層に分層される。出土遺物には珠洲、土師器皿がある。

SK130（図面017・164）：平面形態は円形で、規模は径0.4～0.29m、深さ0.13mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器皿がある。

SK131（図面095）：平面形態は楕円形で、SK132に切り込まれる。規模は長径1.1m以上、短径0.84m、深さ0.13mを測る。覆土は灰黄褐色砂粘質土層の単層。出土遺物なし。

SK132（図面095）：平面形態は長楕円形で、SK131を切り込む。規模は長径3.77m、短径1.2m、深さ0.02mを測る。覆土は黄灰砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SK133（図面109）：平面形態は長楕円形で、SK136、SD169に切られる。長径1.55m、短径0.92m以上、深さ0.15mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

SK134（図面109）：平面形態は円形で、SK135に切られSK133、SD155・169を切り込む。規模は、径0.91～0.85m、深さ0.15mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK135（図面109）：平面形態は楕円形で、SK133・134、SD155・169を切り込む。規模は長径1.7m、短径1.3m、深さ0.15mを測る。土抗内に人頭大の礫が混入している。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層である。出土遺物は認められない。

SK136（図面110）：南側３分の１は調査区外であるが、平面形態は円形と思われる。SK137を切り込む。規模は、径1.79m、深さ0.32mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物には瓦質土器がある。

SK137（図面110）：南側２分の１は調査区外であるため規模は不明。平面形態は隅丸方形と思われ、SK136に切られる。深さ0.1mを測る。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK138（図面110）：南側３分の１は調査区外となる。平面形態は不整形で、規模は長径は0.56m以上、短径0.7m、深さ0.17mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は褐灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK139（図面110）：南側４分の１は調査区外となる。平面形態は楕円形で、規模は長径は1.23m以上、短径1.07m、深さ0.25mを測る。土抗内は礫が混入している。覆土は褐灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK140（図面110）：平面形態は楕円形で、SK141を切り込む。規模は、長径1.32m、短径0.87m、深

さ0.26mを測る。覆土は第1層：褐灰色砂粘質土層、第2層褐灰色砂質土層に分層される。出土遺物には土師器皿がある。

SK141（図面110）：平面形態は楕円形で、SK140に切り込まれる。長径1.0m、短径0.7m、深さ0.1mを測る。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層。出土遺物には砥石がある。

SK142（図面110）：平面形態は楕円形で、西側が切り込まれる。長径0.9m以上、短径1.15m、深さ0.12mを測る。覆土は褐灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

SK143（図面111）：平面形態は楕円形で、長径0.99m、短径0.86m、深さ0.47mを測る。覆土は第1層暗褐色砂粘質土層、第2層：暗褐色粘質土層となる。出土遺物なし。

SK144（図面111）：平面形態は円形で、規模は径0.45m以上、深さ0.1mを測る。覆土は暗褐色砂粘質土層のみの単層になる。出土遺物は認められない。

SK145（図面112）：平面形態は不整形で、長径1.07m、短径0.85m、深さ0.28mを測る。覆土は第1層：褐灰色砂粘質土層、第2層：黒褐色砂質土層となる。出土遺物なし。

SK146（図面112）：平面形態は円形で、径0.75m、深さ0.21mを測る。覆土は第1層：褐灰色砂粘質土層、第2層：褐灰色粘質土層、第3層：暗褐色粘質土層。出土遺物なし。

SK147（図面111）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.02m、短径0.69m、深さ0.25mを測る。土抗内に礫が混入している。覆土は第1層：暗褐色砂質土層、第2層：にぶい黄褐色砂粘質土層、第3層：褐灰色粘質土層に分層される。出土遺物には釘がある。

SK148（図面112）：平面形態は楕円形で、SK150を切り込む。規模は長径0.94m、短径0.7m、深さ0.18mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は暗褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK149（図面008・153）：平面形態は円形で、径1.07～0.85m、深さ0.36mを測る。覆土は第1層：暗褐色砂粘質土層、第2層：暗褐色砂質土層となる。土師器皿が出土。

SK150（図面112）：平面形態は楕円形でSK148に切られる。長径1.06m以上、短径0.62m、深さ0.18mを測る。覆土は暗褐色砂質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK151（図面008・153）：平面形態は楕円形で、SK152を切り込む。長径1.02m、短径0.65m、深さ0.14mを測る。覆土は褐灰色砂質土層の単層となる。出土遺物は土師器皿がある。

SK152（図面008・153）：平面形態は不整形で、SK151に切られる。長径1.36m、短径0.92m、深さ0.21mを測る。土抗内に礫が混入する。覆土は暗褐色粘質土層。珠洲が出土する。

SK153（図面111）：平面形態は長楕円形で、SK165を切り込む。規模は長径2.76m、短径1.7m、深さ0.31mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は暗褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は瀬戸美濃施釉陶器、珠洲がある。

SK154（図面112）：平面形態は不整形で、規模は長径1.12m、短径0.99m、深さ0.28mを測る。土抗内は礫が混入している。覆土は第1層：褐灰色砂質土層、第2層：暗褐色粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK155（図面112）：平面形態は不整形で、規模は長径2.3m、短径2.17m、深さ0.46mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は第1層：黒褐色粘質土層、第2層：褐色粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK156（図面110）：平面形態は長楕円形で、南側を切り込まれる。規模は長径1.14m以上、短径0.95m、深さ0.23mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は第1層：褐灰色粘質土層、第2層：暗

褐色粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK157（図面112）：平面形態は不整形で、規模は長径1.59m、短径1.1m、深さ0.02mを測る。覆土は暗褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK158（図面112）：平面形態は不整形で、規模は長径1.32m、短径1.02m、深さ0.41mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は第１層：暗褐色砂粘質土層、第２層：にぶい黄褐色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK159（図面008・153）：平面形態は楕円形で、SK161に切られる。長径0.82m、短径0.62m、深さ0.21mを測る。覆土は褐灰色粘土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK160（図面008・153）：平面形態は不整形で、SK161を切り込む。長径0.91m、短径0.64m、深さ0.2mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は褐灰色土層粘土層のみの単層となる。出土遺物は八尾、珠洲、土師器皿、釘がある。

SK161（図面008・153）：平面形態は不整形で、SK160に切られる。規模は長径0.91m、短径0.68m、深さ0.08mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は褐灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK162（図面110）：平面形態は長楕円形で、規模は長径2.45m、短径1.29m、深さ0.23mを測る。覆土は褐灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器皿、鉄滓がある。

SK163（図面110）：平面形態は楕円形で、長径0.95m、短径0.65m、深さ0.19mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は褐灰色粘質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK164（図面113）：平面形態は不整形で、SK170を切る。長径2.62m、短径2.48m、深さ0.25mを測る。土抗内は大小の礫が混入する。覆土は黒褐色粘質土層のみの単層。珠洲が出土。

SK165（図面111）：平面形態は不整形で、SK153に切り込まれる。長径1.7m以上、短径1.42m、深さ0.3mを測る。覆土は暗灰黄色粘質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK166（図面008・153）：平面形態は円形で、規模は径0.35～0.3m、深さ0.36mを測る。覆土は褐灰色粘土層のみの単層となる。出土遺物には鉄滓がある。

SK167（図面009・153）：平面形態は円形で、規模は径0.45～0.4m、深さ0.2mを測る。覆土は暗褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物には鉄滓がある。

SK168（図面109・165）：平面形態は長楕円形で、長径5.4m、短径4.05m、深さ0.08mを測る。土抗内は大小の礫が散在する。覆土は第１層：黄灰色砂質土層、第２層：暗オリーブ褐色砂質土層、第３層：黄褐色砂質土層となる。出土遺物には珠洲、土師器皿がある。

SK169（図面114・166）：平面形態は不整形で、SK328・349を切り込む。規模は長径4.13m、短径2.74m、深さ0.33mを測る。土抗内は大小の礫が散在している。覆土は灰黄褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は珠洲、土師器皿がある。

SK170（図面113）：平面形態は不整形で、SK164・SK340に切られる。規模は長径4.28m、短径3.55m、深さ0.52mを測る。土抗内は大小の礫が散在している。中央付近に土坑を二分割する石列が南北方向に組まれる。覆土は第１層：黒褐色粘質土層、第２層：褐灰色粘土層に分層される。出土遺物には八尾、珠洲、須恵器、土師器皿がある。

SK171（図面115・166）：平面形態は楕円形で、規模は長径3.34m、短径2.23m、深さ0.31mを測る。土抗内は大小の礫が散在している。覆土は第１層：褐灰色砂粘質土層、第２層：褐灰色粘質土層に分層される。出土遺物には珠洲、土師器皿、硯がある。

SK172（図面110）：平面形態は楕円形で、長径1.59m、短径1.01m、深さ0.29mを測る。覆土は第１層：黄灰色砂粘質土層、第２層：黄灰色砂質土層となる。出土遺物なし。

SK173（図面009・153）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.66m、短径0.39m、深さ0.16mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器皿がある。

SK174（図面008・153）：平面形態は円形で、径1.35～0.77m、深さ0.13mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は暗褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は八尾がある。

SK175（図面152・153）：平面形態は円形で、径0.72～0.62m、深さ0.44mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は黄灰色粘土層のみの単層となる。出土遺物は柱根がある。

SK176（図面152・153）：平面形態は円形で、径0.52m、深さ0.17mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK178（図面149・153）：平面形態は不整形で、SK179に切られる。長径1.04m、短径0.62m、深さ0.41mを測る。覆土は暗オリーブ褐色粘質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK179（図面149・153）：平面形態は楕円形で、SK178を切る。長径0.52m、短径0.5m以上、深さ0.22mを測る。覆土は暗オリーブ褐色粘土層である。出土遺物は認められない。

SK180（図面152・153）：平面形態は楕円形でSK181と重複して検出される。規模は長径0.68m、短径0.64m、深さ0.46mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は黒褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK181（図面152・153）：平面形態は楕円形で、SK180に切られる。長径1.0m、短径0.98m、深さ0.15mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は黒褐色砂粘質土層。出土遺物なし。

SK182（図面116）：平面形態は不整形で、長径1.72m、短径1.42m、深さ0.22mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は暗オリーブ褐色砂粘質土層となる。出土遺物なし。

SK183（図面152・153）：平面形態は楕円形で、長径0.36m、短径0.29m、深さ0.17mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は暗灰黄色粘質土層のみの単層。中国製青磁が出土。

SK184（図面152・153）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.6m、短径0.4m、深さ0.34mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は第１層：黒褐色（2.5Y ３／２）砂粘質土層、第２層：黒褐色（2.5Y ３／１）砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK185（図面116）：平面形態は楕円形で、SK186を切り込む。規模は長径1.96m、短径1.7m、深さ0.25mを測る。土抗内は大小の礫が混入している。覆土は第１層暗オリーブ褐色砂粘質土層、第２層：黒褐色砂粘質土層に分層される。出土遺物は土師器皿がある。

SK186（図面116）：平面形態は不整形でSK185に切られ、SK190を切り込む。規模は長径1.5m以上、短径2.02m、深さ0.08mを測る。土抗内は小礫が散在している。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK187（図面116）：平面形態は不整形で、SK190を切り込み、SK188に切られる。長径2.14m、短径1.81m、深さ0.2mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は第１層：オリーブ褐色砂質土層、第２層：黒褐色砂質土層に分層される。出土遺物は珠洲がある。

SK188（図面116）：平面形態は不整形で、SK187・SK190を切り込む。規模は長径1.95m、短径1.9m、深さ0.16mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は暗オリーブ褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK189（図面152・153）：平面形態は楕円形で、長径0.6m、短径0.47m、深さ0.16mを測る。土抗内

は小礫が混入する。覆土は暗灰黄色砂質土層の単層。土師器皿が出土した。

SK190（図面116）：平面形態は不整形で、SK186～188に切られる。規模は長径1.2m以上、短径1.15m、深さ0.25mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土はオリーブ褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK191（図面152・153）：平面形態は円形で、径1.01m以上、深さ0.46mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は黒褐色砂粘質土層の単層。鉄滓、棒状の金属製品が出土する。

SK192（図面009・153）：平面形態は不整形で、溝に大きく切られる。規模は、長径2.62m以上、短径0.4m以上、深さ0.2mを測る。土抗内に大きな礫が混入している。覆土は黒褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は八尾がある。

SK193（図面152・154）：平面形態は不整形で、長径1.98m、短径1.37m、深さ0.27mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は黒褐色粘質土層の単層。出土遺物は認められない。

SK194（図面152・154）：平面形態は楕円形で、長径0.46m、短径0.42m、深さ0.16mを測る。覆土は暗オリーブ褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物には土師器皿がある。

SK195（図面152・154）：平面形態は楕円形で、長径1.1m、短径0.76m、深さ0.15mを測る。土抗内は大小の礫が散在する。覆土は黒褐色砂粘質土層。出土遺物は認められない。

SK196（図面152・154）：平面形態は不整形で、長径1.04m、短径0.48m、深さ0.2mを測る。土抗内は大小の礫が散在する。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK197（図面152・154）：平面形態は楕円形で、長径1.21m、短径0.85m、深さ0.36mを測る。土抗内は小礫が散在する。覆土は黄灰色砂質土層。出土遺物は認められない。

SK198（図面152・154）：平面形態は楕円形で、長径0.4m、短径0.28m、深さ0.08mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は黄灰色砂粘質土層の単層。土師器皿が出土している。

SK199（図面152・154）：平面形態は不整形で、長径1.32m、短径1.2m、深さ0.15mを測る。土抗内は大小の礫が混入する。覆土は黒褐色粘質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK200（図面152・154）：平面形態は楕円形で、長径1.3m、短径1.0m、深さ0.25mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物なし。

SK201（図面152・154）：平面形態は不整形で、溝に切られる。長径1.75m、短径1.62m、深さ0.19mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は黒褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物には土師器皿がある。

SK202（図面152・154）：平面形態は楕円形で、長径1.16m、短径1.02m、深さ0.2mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は黒褐色粘質土層の単層。出土遺物は認められない。

SK203（図面152・154）：平面形態は長楕円形で、規模は長径1.53m以上、短径1.7m、深さ0.41mを測る。土抗内に小礫が混入する。覆土は黒褐色砂粘質土層。出土遺物なし。

SK204（図面152・154）：平面形態は楕円形で、長径1.16m、短径0.75m、深さ0.21mを測る。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK205（図面149・154）：平面形態は隅丸長方形で、規模は、長辺3.6m、短辺2.34m、深さ0.29mを測る。土抗内は大小の礫が混入している。覆土はオリーブ褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK206（図面149・154）：平面形態は楕円形で、長径1.04m、短径0.86m、深さ0.19mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は黒褐色粘質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK207（図面149・154）：平面形態は不整形で、長径1.1m、短径1.04m、深さ0.22mを測る。土抗内は礫が散在する。覆土は黒褐色粘質土層の単層。出土遺物は土師器皿がある。

SK208（図面149・154）：平面形態は不整形で、規模は長径3.2m、短径3.14m、深さ0.23mを測る。土抗内は大小乗れ器が散在している。覆土は第１層：オリーブ褐色粘質土層、第２層：暗灰黄色砂粘質土層に分層される。出土遺物には珠洲、土師器皿がある。

SK209（図面111・115）：平面形態は隅丸長方形で、SK210を切り込む。規模は、長径2.54m、短径1.61m、深さ0.27mを測る。土抗内は礫が混入している。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK210（図面111・115）：平面形態は不整形で、SK209に切られる。規模は長径0.34m以上、短径0.71m、深さ0.18mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は黒褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物には土師器皿、鉄滓がある。

SK211（図面009・154）：平面形態は隅丸方形で、規模は一辺0.79～0.62m、深さ0.24mを測る。土坑内に人頭大の礫が混入している。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は山茶碗、土師器皿がある。

SK212（図面110）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.5m、短径1.17m、深さ0.47mを測る。覆土は黒褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK213（図面009・154）：平面形態は楕円形で、長径0.85m、短径0.45m、深さ0.29mを測る。覆土は第１層黄灰色粘質土層、第２層：黄灰色砂質土層。土師器皿が出土。

SK214（図面009・154）：平面形態は楕円形で、規模は長径2.88m以上、短径は不明、深さ0.26mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器皿、砥石がある。

SK215（図面152・154）：平面形態は長楕円形で、長径1.78m、短径1.4m、深さ0.27mを測る。土抗内は大小の礫が混入する。覆土は黒褐色砂粘質土層。土師器皿が出土。

SK216（図面115）：平面形態は円形で、径1.29～1.26m、深さ0.2mを測る。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：灰色粘質土層となる。出土遺物は鉄滓がある。

SK217（図面009・154）：平面形態は円形で、径1.29～1.2m、深さ0.33mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土は黄灰色砂礫層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK218（図面010・154）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.75m、短径0.45m、深さ0.14mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は黒褐色砂質土層の単層。珠洲が出土している。

SK219（図面115）：平面形態は隅丸方形で、規模は一辺1.12～1.1m、深さ0.19mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK220（図面110）：平面形態は円形で、径1.5～1.34m、深さ0.18mを測る。土抗内は小礫が散在している。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層。出土遺物は土師器皿がある。

SK221（図面111）：平面形態は不整形で、SK222に切られる。規模は径1.04m、深さ0.15mを測る。覆土は暗灰黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK222（図面111）：平面形態は長楕円形でSK221を切り込む。規模は、長径2.25m、短径1.04m、深さ0.16mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は第１層：暗灰黄色砂粘質土層、第２層：黒褐色砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK223（図面152・154）：平面形態は長楕形で、規模は長径1.1m、短径0.78m、深さ0.15mを測る。覆土は黒褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は棒状の金属製品がある。

SK224（図面152・154）：平面形態は不整形で、規模は長径1.86m、短径0.8m、深さ0.12mを測る。覆土は黒褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK225（図面152・154）：平面形態は楕円形で、SK227に切られ、SK226を切る。長径0.82m以上、短径0.9m、深さ0.17mを測る。覆土は黒褐色粘質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK226（図面152・154）：平面形態は楕円形でSK225に切られる。長径0.6m以上、短径0.55m、深さ0.21mを測る。覆土は第1層：黒褐色粘質土層、第2層：黄灰色粘土層に分層される。出土遺物なし。

SK227（図面152・154）：平面形態は楕円形で、SK225を切る。長径0.9m、短径0.86m、深さ0.35m。覆土は第1層：暗灰黄色粘土層、第2層：灰色粘土層の堆積。出土遺物なし。

SK228（図面111）：平面形態は円形で、径1.0～0.95m、深さ0.11mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層。出土遺物には土師器皿、鉄滓がある。

SK229（図面152・154）：平面形態は長楕円形で、長径0.58m、短径0.34m、深さ0.21mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK230（図面152・154）：平面形態は隅丸方形で、長辺1.6m、短辺1.28m、深さ0.27mを測る。土抗内は大小の礫が散在する。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK231（図面152・155）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.89m、短径0.55m、深さ0.66mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK232（図面152・155）：平面形態は方形で、溝に肩を切られる。規模は一辺1.23m、深さ0.25mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK233（図面152・155）：平面形態は長方形で、SK234、溝に切られる。長辺1.51m、短辺0.77m、深さ0.5mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK234（図面152・155）：平面形態は楕円形で、SK235を切り、溝に切られる。規模は長径0.9m、短径は不明、深さ0.35mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物には土師器皿がある。

SK235（図面152・155）：平面形態は楕円形で、SK234に切られる。長径は不明、短径1.1m以上、深さ0.23mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層となる。出土遺物なし。

SK236（図面152・155）：平面形態は楕円形で、溝に肩を切られる。長径0.8m以上、短径0.82m、深さ0.32mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK237（図面152・155）：平面形態は楕円形で、SK238を切る。長径0.72m、短径0.43m、深さ0.5mを測る。覆土は第1層：灰色粘質土層、第2層：灰色粘土層。出土遺物なし。

SK238（図面152・155）：平面形態は楕円形でSK237に切られる。長径1.2m以上、短径0.83m、深さ0.25mを測る。土抗内は小礫が散在する。覆土は黄灰色粘土層。出土遺物なし。

SK239（図面152・155）：平面形態は隅丸方形で、溝に中央を切られる。長辺1.92m、短辺1.31m、深さ0.13mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK240（図面152・155）：平面形態は方形で、SK241に切られる。規模は一辺2.25～1.8m、深さ0.5mを測る。覆土は暗灰黄色粘質土層。出土遺物には中国製白磁、土師器皿がある。

SK241（図面152・155）：平面形態は楕円形で、SK240に切り込まれる。長径1.15m、短径0.72m以上、深さ0.07mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層。出土遺物は珠洲がある。

SK242（図面152・155）：平面形態は方形で、SD118に切られる。規模は一辺1.34m以上、深さ0.13mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲がある。

SK243（図面117）：平面形態は楕円形でSK244・247・249を切り込み、SK248に切られる。規模は長径2.5m、短径2.46m、深さ0.41mを測る。覆土は第1層黄灰色粘土層、第2層:灰色粘土層に分層される。出土遺物には珠洲、鉄滓がある。

SK244（図面117）：平面形態は楕円形で、SK243に切られる。規模は長径1.5m以上、短径2.16m、深さ0.22mを測る。覆土は第1層黄灰色粘質土層、第2層：黄灰色粘土層、第3層：黄灰色砂粘質土層に分層される。出土遺物には鉄滓がある。

SK245（図面152・155）：平面形態は方形でSK250に切られる。一辺1.11m前後、深さ0.45mを測る。覆土は第1層：黄灰色粘土層、第2層：黄灰色砂粘質土層。鉄滓が出土した。

SK246（図面117）：平面形態は楕円形で、SK247に切られる。長径1.3m以上、短径1.31m、深さ0.22mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は黄灰色粘質土層。出土遺物なし。

SK247（図面117）：平面形態は不整形で、SK246・249を切り込み、SK243に切られる。規模は、長径0.8m以上、短径1.6m、深さ0.13mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK248（図面117）：平面形態は円形で、SK243を切り込む。規模は径0.3～0.25m、深さ0.38mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK249（図面117）：平面形態は不整形で、SK247に切られる。長径1.1m、短径0.55m以上、深さ0.08mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK250（図面152・155）：平面形態は長楕円形で、規模は長径3.24m前後、短径1.28m前後、深さ0.54mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物には砥石がある。

SK251（図面117）：平面形態は長楕円形で、長径4.34m以上、短径1.9m、深さ0.2mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層。出土遺物には八尾、珠洲、土師器皿、鉄滓がある。

SK252（図面118）：平面形態は楕円形で、SK253を切り込む。長径1.25m、短径0.62m、深さ0.1mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は鉄滓がある。

SK253（図面118）：平面形態は楕円形でSK252に切られる。長径1.44m、短径0.87m、深さ0.15mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK254（図面118）：平面形態は隅丸方形で、SK255・259を切り込む。規模は長辺2.42m、短辺2.17m、深さ0.31mを測る。土抗内に礫が混入している。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物には釘、棒状の金属製品がある。

SK255（図面118）：平面形態は楕円形で、SK254に切られる。規模は長径1.64m、短径1.42m、深さ0.06mを測る。覆土は黄灰色粘質土層を基調とする。出土遺物には釘がある。

SK256（図面118）：平面形態は楕円形で、SK273を切り込む。長径1.01m、短径0.75m、深さ0.2mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は黄灰色砂粘質土層。出土遺物なし。

SK257（図面151・155）：平面形態は楕円形で、長径1.12m、短径0.67m、深さ0.26mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層の単層となる。出土遺物には珠洲、棒状の金属製品がある。

SK258（図面122）：平面形態は長方形で、規模は長辺4.55m、短辺2.57m、深さ0.35mを測る。覆土は第1層：黄灰色（2.5Y 5／1）砂粘質土層、第2層：黄灰色（2.5Y 6／1）砂粘質土層、第3層：黄灰色（2.5Y 4／1）砂粘質土層に分層される。出土遺物には中国製白磁がある。

SK259（図面118）：平面形態は不整形でSK260・261を切り込み、SK254・273に切られる。規模は長径1.62m、短径は不明、深さ0.27mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は

認められない。

SK260（図面118）：平面形態は楕円形で、SK259と大きく重複する。規模は長径1.57m、短径0.8m、深さ0.08mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物はに釘状と板状の金属製品がある。

SK261（図面118）：平面形態は不整形で、SK259・260に切られる。長径1.55m以上、短径は不明、深さ0.33mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層。出土遺物には棒状の金属製品がある。

SK262（図面118）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.14m、短径0.71m、深さ0.33mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は棒状の金属製品がある。

SK263（図面118）：平面形態は楕円形で、長径1.45m、短径0.89m、深さ0.22mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物なし。

SK264（図面118）：平面形態は楕円形で、SK254に切られる。規模は長径0.5m以上、短径0.75m、深さ0.14mを測る。覆土は第１層：黄灰色粘質土層、第２層：暗褐色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK265（図面151・155）：平面形態は楕円形で、長径1.38m、短径1.26m、深さ0.27mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層。石製硯が土坑内から出土している。

SK266（図面151・155）：平面形態は円形で、北側を溝に切られる。径1.06m、深さ0.16mを測る。覆土は第１層：黄灰色砂粘質土層、第２層：暗灰黄色砂粘質土層となる。出土遺物は認められない。

SK267（図面119）：平面形態は楕円形で、長径1.3m、短径1.05m、深さ0.42mを測る。覆土は第１層：褐灰色粘質土層、第２層：褐灰色砂粘質土層となる。出土遺物なし。

SK268（図面119）：平面形態は楕円形で、SK269を切り込む。規模は長径1.75m、短径1.44m、深さ0.22mを測る。覆土は第１層：褐灰色砂粘質土層、第２層：灰黄褐色砂粘質土層、第３層：黄灰色粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK269（図面119）：平面形態は楕円形でSK268に切られる。規模は長径1.7m、短径1.56m、深さ0.39mを測る。覆土は褐灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK270（図面119）：平面形態は不整形でSK273・275に切られる。規模は長径1.27m、短径1.06m、深さ0.26mを測る。覆土は第１層：灰黄褐色砂粘質土層、第２層：褐灰色砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK271（図面119）：平面形態は長楕円形で、規模は長径2.63m、短径1.44m、深さ0.38mを測る。土抗内の南東肩付近に短い石列が見られる。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物には八尾、土師器皿がある。

SK272（図面119）：平面形態は長方形で、規模は長辺2.4m、短辺2.02m、深さ0.27mを測る。土抗内に礫が散在している。覆土は第１層：褐灰色砂粘質土層、第２層：灰黄褐色砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK273（図面118）：平面形態は楕円形で、SK259を切り、SK256に切られる。規模は、長径1.4m、短径1.09m、深さ0.3mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK274（図面119）：平面形態は楕円形で、SK275に切られる。規模は長径1.43m、短径0.49以上m、深さ0.35mを測る。覆土は第１層：灰黄褐色砂粘質土層、第２層：暗灰黄色砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK275（図面119）：平面形態は楕円形で、SK274を切り込む。長径1.35m、短径0.85m、深さ0.34mを測る。覆土は褐灰色粘土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK276（図面121）：平面形態は円形で、規模は径1.22m、深さ0.25mを測る。土抗内は大小の礫が散在している。覆土は第１層：灰黄褐色粘質土層、第２層：黒褐色粘質土層、第３層：褐灰色粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK277（図面111）：平面形態は隅丸方形で、SK278を切り込む。規模は、一辺1.99～1.65m、深さ0.11mを測る。覆土は第１層：暗褐色砂粘質土層、第２層：灰黄褐色砂粘質土層、第３層：黒褐色砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK278（図面111）：平面形態は円形で、SK277に切られる。規模は径1.35m、深さ0.11mを測る。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK279（図面120）：平面形態は楕円形で、SK281を切り込む。規模は長径1.12m、短径0.9m、深さ0.13mを測る。覆土は褐灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK280（図面120）：平面形態は不整形で、SK281を切り、SK282に切られる。規模は長径3.7m、短径2.72m以上、深さ0.32mを測る。土抗内中央の段差に沿って石列が見られる。覆土は第１層：暗褐色砂粘質土層、第２層暗灰黄色砂層、第３層：灰黄色砂層に分層される。出土遺物には土師器皿、砥石青磁がある。

SK281（図面151・155）：平面形態は楕円形で、規模は長径2.56m、短径1.99m、深さ0.18mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲、土師器皿がある。

SK282（図面120）：平面形態は長方形で、SK280・281・304を切り込む。長辺1.48m、短辺0.9m、深さ0.3mを測る。土抗内に人頭大の礫が混入する。覆土は灰黄褐色粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

SK283（図面120）：平面形態は長方形で、SK284を切り込む。規模は、長辺1.54m、短辺1.1m、深さ0.19mを測る。覆土は第１層：褐灰色（10YR ４／１）砂粘質土層、第２層：褐灰色（10YR ５／１）砂粘質土層に分層される。出土遺物には瀬戸美濃施釉陶器、土師器皿がある。

SK284（図面120）：平面形態は楕円形で、SK283に切られる。規模は、長径0.88m、短径0.54m以上、深さ0.15mを測る。覆土は第１層：灰黄褐色砂粘質土層、第２層：褐灰色砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK285（図面120）：平面形態は楕円形で、SK286に切られる。長径0.64m、短径0.58m以上、深さ0.14mを測る。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK286（図面120）：平面形態は円形でSK285・SK287を切り込む。規模は径0.4～0.35m、深さ0.14mを測る。覆土は黒褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK287（図面120）：平面形態は楕円形でSK286に切られる。長径0.92m以上、短径0.69m以上、深さ0.12mを測る。覆土は灰黄褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK288（図面120）：平面形態は楕円形で、SK289を切り込む。規模は長径1.66m、短径1.02m、深さ0.34mを測る。覆土は第１層：褐灰色砂粘質土層、第２層：灰黄褐色粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK289（図面120）：平面形態は楕円形で、SK288に切られる。長径0.9m以上、短径0.62m、深さ0.21mを測る。覆土は褐灰色粘質土層のみの単層。出土遺物には土師器皿がある。

SK290（図面120）：平面形態は楕円形で、SK291を切り、SK287に切られる。長径0.7m、短径0.44m、

深さ0.4mを測る。覆土は黒褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

SK291（図面120）：平面形態は楕円形で、SK290に切られる。長径0.58m、短径0.5m、深さ0.1mを測る。覆土は褐灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK292（図面120・121）：平面形態は楕円形で、SK291・293・294・304に切り込まれる。規模は、長径1.41m以上、短径1.1m、深さ0.24mを測る。覆土は　第1層：褐灰色粘質土層、第2層：褐灰色砂粘質土層に分層される。出土遺物は古銭がある。

SK293（図面120・121）：平面形態は楕円形で、SK292を切り込み、SK293に切り込まれる。規模は長径0.82m、短径0.5m以上、深さ0.18mを測る。覆土は第1層：黒褐色砂粘質土層、第2層：暗褐色砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK294（図面120・121）：平面形態は隅丸長方形で、SK295を切り込む。長辺1.42m、短辺1.06m、深さ0.18mを測る。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物なし。

SK295（図面120・121）：平面形態は楕円形で、SK294に切り込まれる。規模は長径1.78m、短径1.18m、深さ0.25mを測る。覆土は第1層：黒褐色粘質土層、第2層：暗褐色砂質土層、第3層：暗オリーブ褐色砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK296（図面120・121）：平面形態は楕円形で、SK297を切り込む。規模は長径0.74m、短径0.6m、深さ0.44mを測る。覆土は第1層：暗褐色粘質土層、第2層：暗褐色砂質土層に分層される。出土遺物は珠洲、砥石がある。

SK297（図面120・121）：平面形態は不整形で、SK296に切り込まれる。長径3.6m以上、短径0.48m、深さ0.26mを測る。覆土は暗褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物なし。

SK298（図面120・121）：平面形態は楕円形で、SK300に切られ、SK299・306を切り込む。規模は長径1.12以上m、短径0.88m、深さ0.26mを測る。覆土は第1層：褐灰色砂粘質土層、第2層：褐灰色粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK299（図面120・121）：平面形態は楕円形で、SK298・306に切り込まれる。規模は長径2.0m、短径1.2m以上、深さ0.23mを測る。覆土は第1層：黒褐色砂粘質土層、第2層：褐灰色粘質土層に分層される。出土遺物は棒状の金属製品がある。

SK300（図面120・121）：平面形態は長楕円形で、SK298を切り込み、SK301に切り込まれる。規模は長径2.66m、短径1.6m、深さ0.18mを測る。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層とする。出土遺物は認められない。

SK301（図面120・121）：平面形態は楕円形で、SK300を切り込む。長径0.9m、短径0.66m、深さ0.16mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂粘質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK302（図面151・155）：平面形態は円形で、径1.35～1.22m、深さ0.11mを測る。土抗内は礫が充填される。覆土は褐灰色粘質土層のみの単層。出土遺物には青磁、砥石がある。

SK303（図面120・121）：平面形態は楕円形で、SK304を切り込む。長径1.2m、短径0.76m、深さ0.2mを測る。覆土は第1層：暗オリーブ褐色砂粘質土層、第2層：暗褐色粘質土層、第3層：黒褐色粘質土層に分層される。出土遺物は八尾、土師器皿がある。

SK304（図面120・121）：平面形態は隅丸長方形で、SK292・293を切り、SK282・303に切り込まれる。規模は長辺0.8m以上、短辺1.44m、深さ0.35mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK305（図面120・121）：平面形態は楕円形で、SK299を切る。規模は長径0.74m、短径0.48m、深さ

0.1mを測る。覆土は第1層：黒褐色砂粘質土層、第2層：褐灰色粘質土層に分層される。出土遺物としては瀬戸美濃施釉陶器がある。

SK306（図面120・121）：平面形態は不整形で、SK298・307に切り込まれる。長径2.72以上m、短径1.55m以上、深さ0.32mを測る。覆土は第1層：暗褐色粘質土層、第2層：褐灰色粘質土層、第3層：黒褐色粘質土層に分層される。出土遺物は土師器皿がある。

SK307（図面120・121）：平面形態は方形で、SK306・308を切り込む。規模は一辺2.28m以上、深さ0.42mを測る。覆土は第1層褐灰色粘質土層、第2層：褐灰色砂粘質土層に分層される。出土遺物には珠洲、土師器皿、砥石、釘、鉄滓がある。

SK308（図面120・121）：平面形態は不整形で、SK307に切り込まれる。長径2.74m以上、短径2.64m、深さ0.31mを測る。覆土は第1層：暗褐色粘質土層、第2層：褐灰色砂粘質土層、第3層：褐灰色粘質土層に分層される。出土遺物は珠洲、土師器皿がある。

SK309（図面120・121）：平面形態は不整形で、規模は長径0.4m以上、短径2.44m、深さ0.28mを測る。覆土は第1層：暗オリーブ褐色砂粘質土層、第2層：暗灰黄色粘質土層に分層される。出土遺物には珠洲、土師器皿、鉄滓、棒状の金属製品がある。

SK310（図面151・155）：平面形態は円形で、径0.52～0.3m、深さ0.16mを測る。土抗内は礫が散在する。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲がある。

SK311（図面151・155）：平面形態は楕円形で、長径0.55m、短径0.5m、深さ0.12mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は褐灰色砂粘質土層。出土遺物には土師器皿がある。

SK312（図面111）：平面形態は楕円形で、SK313に切られる。規模は長径2.06m、短径1.36m以上、深さ0.16mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は第1層：褐灰色砂粘質土層、第2層：灰黄褐色砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK313（図面013・160）：平面形態は円形で、径0.64m～0.55m、深さ0.09mを測る。覆土は灰黄褐色砂粘質土層の単層構成。出土遺物は認められない。

SK314（図面121）：平面形態は楕円形で、長径2.25m、短径1.61m、深さ0.26mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土は黒褐色粘質土層のみの単層。出土遺物には珠洲がある。

SK315（図面112）：平面形態は楕円形で、長径1.8m、短径1.35m、深さ0.25mを測る。土抗内に礫が混入している。覆土は褐灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物なし。

SK316（図面112）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.3m、短径0.79m、深さ0.16mを測る。覆土は灰黄褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK317（図面121）：平面形態は楕円形で、規模は長径2.67m、短径2.39m、深さ0.29mを測る。土抗内は礫が散在する。覆土は褐灰色砂粘質土層を基調とする。八尾が出土した。

SK318（図面121）：平面形態は不整形で、規模は長径4.5m、短径2.64m、深さ0.4mを測る。覆土は褐灰色粘質土層を基調とする。出土遺物は八尾、珠洲、土師器皿がある。

SK319（図面013・155）：平面形態は不整形で、規模は長径0.41m、短径0.29m、深さ0.12mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器皿がある。

SK320（図面060）：SB202内に位置する土坑で、平面形態は楕円形を呈する。長径0.85m、短径0.56m、深さ0.21mを測る。覆土は褐灰色粘質土層の単層。出土遺物なし。

SK321（図面112）：平面形態は円形で、規模は径0.3～0.25m、深さ0.14mを測る。覆土は褐灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK322（図面112）：平面形態は円形で、SK323・324を切る。規模は径0.9m、深さ0.32mを測る。土抗内に礫が混入している。覆土は第１層褐灰色粘質土層、第２層：灰黄褐色粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK323（図面112）：平面形態は楕円形で、SK324･325を切り込み、SK322に切られる。規模は長径1.18以上m、短径0.82m、深さ0.3mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は灰黄褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK324（図面112）：平面形態は円形で、SK325・326を切り込み、SK322・323に切られる。規模は径0.9m、深さ0.08mを測る。覆土は灰黄褐色砂粘質土層。出土遺物なし。

SK325（図面112）：平面形態は楕円形で、SK326を切り込み、SK323･324に切られる。規模は長径1.03m、短径0.86以上m、深さ0.35mを測る。覆土は暗褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK326（図面112）：平面形態は不整形で、SK324・325・337に切られる。規模は長径0.9m以上、短径1.45m、深さ0.34mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は第１層：黒褐色砂粘質土層、第２層：黒褐色粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK327（図面114・166）：平面形態は不整形で、SK349に切られる。長径1.83m、短径1.0m以上、深さ0.13mを測る。覆土は灰黄褐色粘質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK328（図面114）：平面形態は楕円形でSK349を切り込み、SK169に切られる。規模は長径1.4m以上、短径0.8m、深さ0.28mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物には八尾、珠洲、土師器皿がある。

SK329（図面008・155）：平面形態は円形で、規模は径0.35～0.31m、深さ0.17mを測る。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK330（図面008・155）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.54m、短径0.46m、深さ0.2mを測る。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲がある。

SK331（図面008・155）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.45m、短径0.3m、深さ0.13mを測る。覆土は灰白色砂層のみの単層となる。出土遺物には土師器皿がある。

SK332（図面114）：平面形態は楕円形で、SK349を切り込み、SK333に切られる。規模は長径2.6m、短径1.94m、深さ0.39mを測る。覆土は灰黄褐色粘質土層を基調とする。出土遺物には中国製白磁、八尾、土師器皿、刀形、棒状の金属製品がある。

SK333（図面114・166）：平面形態は楕円形で、SK332・349を切り込む。規模は長径2.7m、短径1.78m以上、深さ0.37mを測る。覆土は褐灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物には珠洲、土師器皿、砥石、金属製の刀形がある。

SK334（図面009・166）：平面形態は円形で、径0.42～0.35m、深さ0.17mを測る。覆土は第１層：にぶい黄褐色砂粘質土層、第２層：灰黄褐色粘質土層となる。出土遺物なし。

SK335（図面009・166）：平面形態は不整形で、径0.25～0.24m、深さ0.15mを測る。覆土は灰黄褐色粘質土層の単層構成である。出土遺物は認められない。

SK336（図面009・166）：平面形態は不整形で、長径0.26m、短径0.25m、深さ0.11mを測る。覆土は暗オリーブ褐色砂粘質土層のみの単層。出土遺物には珠洲、土師器皿がある。

SK337（図面112）：平面形態は円形で、SK326を切り込む。規模は径0.65～0.6m、深さ0.2mを測る。覆土は灰黄褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK338（図面114・166）：平面形態は楕円形でSK349を切り込む。規模は長径2.35m以上、短径1.29m、深さ0.22mを測る。覆土は第１層：灰黄褐色砂粘質土層、第２層：灰黄褐色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK339（図面008・155）：平面形態は楕円形で、長径3.01m、短径2.89m、深さ0.3mを測る。土抗内は大小の礫が散在している。覆土は第１層：褐灰色粘質土層、第２層：褐灰色粘土層に分層される。出土遺物には中国製白磁、八尾、珠洲、土師器皿などがある。

SK340（図面113）：平面形態は長楕円形で、SK170を切り込む。規模は長径2.95m、短径2.26m、深さ0.17mを測る。土抗内は大小の礫が混入している。覆土は褐灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物には八尾、土師器皿がある。

SK341（図面152・155）：平面形態は楕円形でSK342に切られ、規模は長径1.8m、短径1.7m以上、深さ0.22mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は瀬戸美濃施釉陶器、土師器皿がある。

SK342（図面152・155）：平面形態は楕円形で、SK341を切り込む。規模は長径1.16以上m、短径0.92m以上、深さ0.34mを測る。覆土は第１層：褐灰色粘質土層、第２層：灰色粘土層に分層される。出土遺物には瀬戸美濃施釉陶器、八尾、土師器皿がある。

SK343（図面009・166）：平面形態は不整形で、長径5.34m、短径2.70m以上、深さ0.27mを測る。覆土は黒褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK344（図面009・166）：平面形態は不整形で、規模は不明。深さ0.17mを測る。覆土は灰色砂粘質土層の単層構成。出土遺物は認められない。

SK345（図面009・166）：平面形態は不整形で、径3.28m前後だが重複が激しい。深さ0.16mを測る。覆土は暗オリーブ褐色砂粘質土層の単層構成。出土遺物は認められない。

SK346（図面114・166）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.57m、短径0.44m、深さ0.23mを測る。覆土は灰黄褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK347（図面114・166）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.5m、短径0.41m、深さ0.4mを測る。覆土は灰黄褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK348（図面114・166）：平面形態は円形でSK349を切る。径0.46～0.45m、深さ0.28mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は灰黄褐色砂質土層の単層となる。出土遺物なし。

SK349（図面114・166）：平面形態は不整形でSK169・328・332・333・338・348に切られ、SK327を切り込む。規模は長径4.3m以上、短径2.47m、深さ0.38mを測る。土抗内にはSK338との境界に沿って石列がみられる。覆土は第１層：暗褐色粘質土層、第２層：黒褐色粘質土層、第３層：灰黄褐色砂粘質土層に分層される。出土遺物は土師器、入子がある。

SK350（図面008・155）：平面形態は楕円形で、長径0.35m、短径0.34m、深さ0.22mを測る。土抗内に礫が混入する。覆土は暗オリーブ褐色砂粘質土層。棒状の金属製品が出土。

SK351（図面009・155）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.47m、短径0.33m、深さ0.3mを測る。土抗内は大小の礫が混入している。覆土は第１層：灰黄褐色粘質土層、第２層：褐灰色粘質土層、第３層：灰黄褐色粘質土層に分層される。出土遺物は土師器皿がある。

SK352（図面124）：平面形態は不整形で、SK392を切り込む。規模は、長径4.23m以上、短径1.7m以上、深さ0.3mを測る。覆土は黄灰色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK353（図面122）：平面形態は長楕円形で、規模は長径3.21m以上、短径1.75m以上、深さ0.35mを

測る。土抗内は礫が散在する。覆土は暗褐色粘質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK354（図面122）：平面形態は楕円形で、規模は長径2.46m以上、短径1.72m以上、深さ0.25mを測る。土抗内は礫が散在している。覆土は第１層：暗灰黄色（2.5Y ５／２）粘質土層、第２層：暗灰黄色（2.5Y ４／２）粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK355（図面009・155）：平面形態は隅丸方形で、規模は一辺2.23m、深さ0.17mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層の単層。出土遺物には土師器皿、砥石、鉄滓、鍛造剥片がある。

SK356（図面013・155）：平面形態は円形で、径0.48～0.43m、深さ0.14mを測る。覆土は第１層：黄灰色粘質土層、第２層：黒褐色粘質土層となる。土師器皿が出土している。

SK357（図面014・155）：平面形態は円形で、規模は径0.34～0.25m、深さ0.19mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器皿がある。

SK358（図面013・155）：平面形態は隅丸方形で、一辺0.65～0.55m、深さ0.25mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物には珠洲がある。

SK359（図面123）：平面形態は楕円形で、長径2.62m、短径2.0m以上、深さ0.21mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物なし。

SK360（図面013・155）：平面形態は楕円形で、長径0.52m、短径は不明、深さ0.25mを測る。覆土は褐灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲がある。

SK361（図面009・155）：平面形態は円形で、規模は径0.57m、深さ0.11mを測る。土抗内に礫が混入している。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は鉄滓がある。

SK362（図面123）：平面形態は楕円形で、長径1.85m、短径1.17m、深さ0.22mを測る。土抗内に小礫が混入している。覆土は褐灰色粘土層のみの単層とする。出土遺物なし。

SK363（図面123）：平面形態は楕円形で、SK365を切る。長径0.61m、短径0.47m、深さ0.13mを測る。土抗内は小礫が散在する。覆土は暗褐色粘質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK364（図面123）：平面形態は楕円形で、SK365を切る。長径0.55m、短径0.43m、深さ0.16m。土抗内に人頭大の礫が混入する。覆土は暗褐色粘質土層の単層。出土遺物なし。

SK365（図面123）：平面形態は不整形で、SK363・364・366に切られる。規模は、長径2.35m、短径1.46m、深さ0.2mを測る。土抗内は小礫が散在している。覆土は第１層暗褐色粘質土層、第２層:黒褐色粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK366（図面123）：平面形態は円形で、SK365を切り込む。規模は、径0.39～0.37m、深さ0.08mを測る。覆土は暗褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK367（図面123）：平面形態は不整形で、規模は長径2.41m、短径1.95m、深さ0.23mを測る。土抗内は小礫が散在している。覆土は第１層褐色砂粘質土層、第２層:暗オリーブ褐色砂質土層、第３層:黄褐色砂層に分層される。出土遺物は認められない。

SK368（図面013・155）：平面形態は円形で、規模は径0.73～0.43m、深さ0.06mを測る。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器皿がある。

SK369（図面123）：平面形態は楕円形で、SK370・571を切り込む。長径1.79m、短径1.45m以上、深さ0.37mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土層のみの単層。土師器皿が出土。

SK370（図面123）：平面形態は長楕円形で、SK570を切り込み、SK369に切られる。規模は長径2.61m、短径約1.4m、深さ0.27mを測る。覆土はにぶい暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物には土師器皿がある。

SK371（図面009・166）：平面形態は不整形で、長径4.53m、短径2.30m、深さ0.36mを測る。覆土は灰黄褐色砂粘質土層を基調とする。土師器皿、瀬戸美濃施釉陶器が出土。

SK372（図面013・164）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.77m、短径0.74m、深さ0.36mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器皿がある。

SK373（図面129）：平面形態は楕円形で、SK375に切られる。長径0.95m以上、短径0.9m、深さ0.08mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物なし。

SK374（図面129）：平面形態は楕円形で、SK379を切り、SK375に切られる。長径1.27m、短径0.9m、深さ0.02m。覆土はにぶい黄褐色砂質土層の単層となる。出土遺物なし。

SK375（図面129）：平面形態は楕円形で、SK373・374を切り込む。長径1.25m、短径0.8m、深さ0.03mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK376（図面112）：平面形態は楕円形で、長径1.25m以上、短径0.74m、深さ0.13mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK377（図面129）：平面形態は楕円形で、SK378を切り込む。長径0.78m、短径0.52m、深さ0.13mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK378（図面129）：平面形態は不整形で、SK377に切られる。規模は長径0.75m以上、短径0.65m、深さ0.05mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK379（図面129）：平面形態は楕円形で、SK374・378に切られる。規模は、長径1.22m、短径0.8m、深さ0.12mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK380（図面129）：平面形態は楕円形で、SK381に切られる。規模は、長径0.5m以上、短径0.98m、深さ0.2mを測る。覆土は黄灰色砂質土層。出土遺物は認められない。

SK381（図面129）：平面形態は楕円形で、SK380を切り込む。長径1.99m以上、短径1.6m、深さ0.11mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK382（図面112）：平面形態は楕円形で、長径1.15m、短径1.0m、深さ0.11mを測る。土抗内は礫が混入している。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層。八尾が出土した。

SK383（図面013・155）：平面形態は円形で、径0.54～0.46m、深さ0.12mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物には土師器皿がある。

SK384（図面100・125）：平面形態は楕円形でSK598を切り、SD111を切り込む。規模は長径1.84m、短径1.6m、深さ0.62mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土は　第1層：黄灰色砂質土層、第2層：暗オリーブ褐色砂質土層に分層される。遺物は珠洲がある。

SK385（図面013・164）：平面形態は円形で、径0.37～0.33m、深さ0.12mを測る。覆土は明褐色砂層のみの単層となる。出土遺物は土師器皿がある。

SK386（図面129）：平面形態は不整形で、長径2.28m、短径1.47m、深さ0.18mを測る。覆土は第1層：黄灰色砂質土層、第2層：暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物なし。

SK387（図面129）：平面形態は不整形で、長径1.45m、短径1.29m、深さ0.61mを測る。覆土は第1層：黄灰色砂質土層、第2層：褐灰色砂質土層となる。出土遺物は珠洲がある。

SK388（図面013・155）：平面形態は円形で、径1.5～1.09m、深さ0.33mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層。出土遺物は珠洲がある。

SK389（図面013・155）：平面形態は楕円形で、長径0.97m、短径0.77m、深さ0.15mを測る。土抗内

は小礫が混入している。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物には中国製青磁、土師器皿がある。

SK390（図面013・166）：平面形態は長楕円形で、長径0.71m、短径0.54m、深さ0.10mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層の単層である。出土遺物には土師器皿がある。

SK391（図面125）：平面形態は楕円形で、SK393に切られる。長径2.15m、短径1.95m、深さ0.11mを測る。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK392（図面124）：平面形態は不整形で、SD143を切り、SK352・SD146に切られ、長径7.94m、短径2.65m以上、深さ0.49mを測る。土坑内は、多数の礫が混入している。覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物には珠洲、土師器皿、八尾、空風輪、鉄滓、棒状がある。

SK393（図面125）：平面形態は長楕円形でSK391を切り込む。規模は長径2.22m、短径1.1m、深さ0.26mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲がある。

SK394（図面013・155）：平面形態は楕円形で、長径0.48m、短径0.35m、深さ0.12mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物には砥石がある。

SK395（図面149・156）：平面形態は不整形で、SK396を切り込む。規模は長径2.32m、短径1.6m、深さ0.12mを測る。土抗内は礫が混入している。覆土は黄灰色砂質土層を基調とする。出土遺物は棒状の金属製品がある。

SK396（図面149・156）：平面形態は円形で、SK395に切られる。規模は径0.96m、深さ0.26mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK397（図面012・164）：平面形態は不整形で、規模は長径0.5m以上、短径0.59m、深さ0.12mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は八尾がある。

SK398（図面099）：平面形態は楕円形で、SK060を切り込み、SK049に切られる。規模は長径2.2m以上、短径1.27m、深さ0.31mを測る。覆土は黒褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物には瀬戸美濃施釉陶器、珠洲がある。

SK399（図面099）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.45m、短径1.05m、深さ0.66mを測る。覆土は暗オリーブ褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK400（図面096）：平面形態は楕円形で、南側を溝に切り込まれる。長径1.98m以上、短径1.63m、深さ0.2mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK401（図面017・156）：平面形態は円形で、径0.26～0.23m、深さ0.18mを測る。土抗内に礫が混入する。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層。出土遺物は土師器皿がある。

SK402（図面105）：平面形態は楕円形で、SK451を切り込み、SK403に切られる。規模は長径1.76m、短径1.4m、深さ0.5mを測る。覆土は黄灰色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK403（図面105）：平面形態は隅丸長方形でSK406を切り込む。長辺2.81m、短辺1.0m、深さ0.13mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層。出土遺物は土師器皿。

SK404（図面125・131）：平面形態は楕円形で、長径1.65m、短径1.44m、深さ0.24mを測る。覆土は第1層：褐灰色粘質土層、第2層：灰黄褐色砂質土層。出土遺物なし。

SK405（図面018・161）：平面形態は楕円形で、長径0.78m、短径0.45m、深さ0.24mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK406（図面131）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.2m、短径0.92m、深さ0.29mを測る。覆土は

黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK407（図面106）：平面形態は楕円形で、SK408に切られる。規模は長径1.26m、短径0.82m、深さ0.19mを測る。覆土は第１層：暗灰黄色（2.5Y ５／２）砂質土層、第２層：暗灰黄色（2.5Y ４／２）砂質土層に分層される。出土遺物には八尾がある。

SK408（図面106）：平面形態は隅丸長方形で、SK092・SK407を切り込む。規模は長辺1.27m、短辺0.97m、深さ0.11mを測る。覆土は第１層：黄灰色（2.5Y ５／１）砂質土層、第２層：黄灰色（2.5Y ６／１）砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK409（図面125）：平面形態は隅丸長方形で、長辺1.42m、短辺1.14m、深さ0.27mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土は灰黄色砂質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK410（図面127）：平面形態は楕円形で、SK423を切る。長径0.81m、短径0.45m、深さ0.09mを測る。土抗内に礫が混入する。覆土は黄灰色砂粘質土層の単層である。出土遺物なし。

SK411（図面127）：平面形態は不整形で、SK423・SK511に切られる。規模は長径1.35m以上、短径1.14以上m、深さ0.37mを測る。土抗内に礫が混入している。覆土は灰黄褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK412（図面127・128）：平面形態は不整形で、長径3.95m、短径3.4m、深さ0.6mを測る。土抗内から大小の礫が出土するが、このうち土坑北半部の東・南・西辺には「コ」字状の石組を施す。南半部は礫が散在する。覆土は灰黄褐色砂質土層の単層。出土遺物なし。

SK413（図面127）：平面形態は楕円形で、長径1.3m、短径1.25m、深さ0.22mを測る。覆土は第１層：暗灰黄色砂粘質土層、第２層：黄灰色砂粘質土層となる。出土遺物なし。

SK414（図面127）：平面形態は円形で、SD089に切られる。規模は、径0.45m以上、深さ0.31mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK415（図面127）：平面形態は円形でSD089に切られる。規模は、径0.5m、深さ0.22mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK416（図面127）：平面形態は円形で、SD162に切られる。規模は径1.78m、深さ0.3mを測る。土抗内は礫が混入している。覆土は第１層：灰オリーブ色（５Ｙ５／２）砂粘質土層、第２層：灰オリーブ色（５Ｙ４／２）砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK417（図面127）：平面形態は楕円形で、中央をSD162に切られる。規模は、長径1.12m、短径0.92m、深さ0.22mを測る。土抗内に礫が混入している。覆土は第１層：灰オリーブ色砂粘質土層、第２層：灰色粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK418（図面017・161）：平面形態は円形で、規模は径0.26～0.24m、深さ0.17mを測る。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK419（図面125）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.15m、短径0.95m、深さ0.15mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK420（図面125）：平面形態は楕円形で、長径1.03m、短径0.8m、深さ0.17mを測る。土抗内は人頭大の礫が散在する。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK421（図面125）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.05m、短径0.67m、深さ0.11mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK422（図面017・161）：平面形態は円形で、規模は径0.3～0.27m、深さ0.06mを測る。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK423（図面127）：平面形態は楕円形で、SK411を切り、SD089・SK410に切られる。規模は、長径2.43m、短径1.88m以上、深さ0.34mを測る。覆土は第１層：灰オリーブ色砂粘質土層、第２層：黄灰色砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK424（図面126）：平面形態は不整形で、SK512を切り込む。長径5.65m、短径3.57m、深さ0.6mを測る。きわめて規模の大きな土坑で、かつ土抗内は礫詰め状態で検出されている。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物には珠洲、土師器皿、釘、棒状の金属製品などがある。

SK425（図面131）：平面形態は楕円形でSK404を切り込む。長径0.68m、短径0.37m、深さ0.06mを測る。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK426（図面131）：平面形態は楕円形で、SK404・433に切られる。規模は長径1.9m、短径0.8m以上、深さ0.25mを測る。覆土は第１層：灰色砂粘質土層、第２層：オリーブ黄色砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK427（図面131）：平面形態は長楕円形で、規模は長径1.39m、短径0.86m、深さ0.1mを測る。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK428（図面131）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.11m、短径0.87m、深さ0.11mを測る。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK429（図面131）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.75m、短径0.56m、深さ0.1mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK430（図面018・161）：平面形態は楕円形で、規模は長径2.05m、短径0.69m、深さ0.3mを測る。覆土はオリーブ灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器皿がある

SK431（図面131）：平面形態は楕円形で、SK432に切られる。規模は長径0.6m以上、短径0.67m、深さ0.13mを測る。覆土は第１層：黄灰色（2.5Y ５／１）砂粘質土層、第２層：黄灰色（2.5Y ４／１）砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK432（図面131）：平面形態は長楕円形で、SK431を切り込む。長径1.17m以上、短径0.46m、深さ0.11mを測る。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK433（図面131）：平面形態は不整形で、規模は長径0.93m、短径0.72m、深さ0.14mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK434（図面131）：平面形態は楕円形でSK432を切り込む。長径1.2m、短径1.04m、深さ0.18mを測る。土抗内は礫詰めの状態。覆土は灰色砂粘質土層の単層。出土遺物なし。

SK435（図面133）：平面形態は長楕円形で、長径0.92m、短径0.48m、深さ0.21mを測る。土抗内は礫が散在する。覆土は灰褐色砂粘質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK436（図面017・156）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.82m、短径1.0m以上、深さ0.09mを測る。覆土は灰オリーブ色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK437（図面018・156）：平面形態は不整形で、規模は長径0.9m以上、短径0.22m以上、深さ0.25mを測る。覆土はオリーブ灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物には中国製青磁がある。

SK439（図面133）：平面形態は隅丸長方形で、規模は長辺2.0m、短辺1.08m、深さ0.21mを測る。覆土は第１層：灰色砂粘質土層、第２層：灰オリーブ色砂粘質土層に分層される。出土遺物には土師器皿がある。

SK440（図面016・166）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.35m、短径は不明、深さは0.36mを測る。覆土は第１層：オリーブ褐色砂質土層、第２層：褐色砂粘質土層に分層される。出土遺物は珠洲、土

師器皿、瓦質土器、板状の金属製品がある。

SK441（図面107・166）：平面形態は楕円形で、SK496を切り込む。規模は、長径1.1m、短径0.64m、深さ0.22mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土は黄褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK442（図面107）：平面形態は不整形で、SK496を切り込む。規模は長径4.5m、短径2.94m、深さ0.09mを測る。土抗内は小礫が散在している。覆土は第１層暗灰黄色砂質土層、第２層：暗褐色粘質土層、第３層：褐灰色粘質土層に分層される。出土遺物なし。

SK443（図面131）：平面形態は不整形でSK444～448に切られる。長径5.09m、短径3.09m以上、深さ0.14mを測る。覆土はオリーブ黒色砂質土層を基調とする。出土遺物なし。

SK444（図面131）：平面形態は楕円形で、SK443を切り込む。規模は長径1.05m、短径0.59m、深さ0.08mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物なし。

SK445（図面131）：平面形態は楕円形で、SK443を切り込む。規模は長径0.7m、短径0.55m、深さ0.19mを測る。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：オリーブ褐色砂質土層、第３層：黒褐色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK446（図面131）：平面形態は楕円形で、SK443を切り込む。規模は長径0.77m、短径0.47m、深さ0.28mを測る。覆土は黄灰色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK447（図面131）：平面形態は楕円形で、SK443を切り込む。規模は長径0.6m、短径0.37m、深さ0.28mを測る。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：黒褐色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK448（図面131）：平面形態は楕円形でSK443を切り込む。長径0.85m、短径0.65m、深さ0.15mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK449（図面012・156）：平面形態は楕円形で、長径3.0m、短径1.58m、深さ0.26mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器皿がある。

SK450（図面105）：平面形態は楕円形で、SK451に切られる。規模は長径1.25m、短径0.98m、深さ0.22mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物なし。

SK451（図面105）：平面形態は楕円形で、SK091・SK450を切り込み、SK402に切られる。規模は長径1.62m、短径1.26m、深さ0.3mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：黒褐色砂質土層、第３層：黒褐色粘質土層に分層される。出土遺物には土師器皿がある。

SK452（図面017・164）：平面形態は円形で、規模は径0.51～0.41m、深さ0.25mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は鍋がある。

SK453（図面127）：平面形態は楕円形で、長径1.32m、短径1.22m、深さ0.52mを測る。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：黄灰色砂質土層となる。出土遺物なし。

SK454（図面133）：平面形態は隅丸長方形で、規模は長辺2.58m、短辺1.42m、深さ0.2mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK455（図面129）：平面形態は楕円形で、SK473を切り込む。長径1.0m、短径0.82m、深さ0.11mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK456（図面129）：平面形態は隅丸方形で、規模は一辺1.15～1.05m、深さ0.18mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK457（図面129）：平面形態は隅丸方形で、規模は一辺1.35～1.09m、深さ0.21mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK458（図面130）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.86m、短径0.93m以上、深さ0.06mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK459（図面130）：平面形態は長楕円形で、SK460を切り込む。長径1.15m、短径0.63m、深さ0.2mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK460（図面130）：平面形態は楕円形で、SK459に切られる。長径1.72m、短径1.45m、深さ0.11mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土のみの単層。出土遺物は土師器皿がある。

SK461（図面130）：平面形態は不整形で、規模は長径1.24m、短径1.2m、深さ0.08mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK462（図面133）：平面形態は不整形で、SK463に切られる。長径1.59m以上、短径0.8m、深さ0.24mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK463（図面133）：平面形態は楕円形で、SK462を切り込む。長径1.38m、短径1.1m、深さ0.18m。土抗内は大小の礫が散在する。覆土は暗灰黄色粘質土層となる。珠洲が出土。

SK464（図面133）：平面形態は長楕円形で、規模は長径1.1m、短径0.45m、深さ0.1mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK465（図面017・156）：平面形態は長方形で、規模は長辺1.3m、短辺0.85m、深さ0.49mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物はバンドコがある。

SK466（図面128）：平面形態は不整形で、SK467を切り込む。長径1.19m、短径1.07m、深さ0.13mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層とする。出土遺物は認められない。

SK467（図面128）：平面形態は長楕円形で、SK466に切られる。規模は長径1.32m、短径0.58m、深さ0.26mを測る。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：黄灰色砂層に分層される。出土遺物は認められない。

SK468（図面017・156）：平面形態は円形で、規模は径0.5～0.47m、深さ0.12mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲。

SK469（図面017・156）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.85m、短径0.84m、深さ0.2mを測る。覆土は第１層：黄褐色砂質土層、第２層：暗灰黄色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK470（図面132）：平面形態は不整形でSK584を切り込む。規模は長径6.35m、短径4.56m、深さ0.55mを測る。土抗内は大小の礫が散在している。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は白磁、越中瀬戸、八尾、珠洲、土師器皿がある。

SK471（図面016・166）：平面形態は隅丸方形で、一辺1.96～1.6m、深さ0.28mを測る。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：黒褐色粘質土層の堆積となる。出土遺物には土師器皿、古銭がある。

SK472（図面129）：平面形態は方形でSK473に切られる。一辺2.35m、深さ0.43mを測る。覆土は第１層黄褐色砂質土層、第２層：暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物なし。

SK473（図面129）：平面形態は隅丸方形で、SK472を切り込む。規模は一辺2.89～2.37m、深さ0.33mを測る。覆土は第１層にぶい黄色砂質土層、第２層：黄褐色砂質土層、第３層：暗灰黄色砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK474（図面129）：平面形態は不整形で、SK472・SK473に切られ、長径1.48m、短径0.32m以上、深さ0.07mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK475（図面133）：平面形態は長楕円形で、長径1.13m、短径0.58m、深さ0.06mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK476（図面133）：平面形態は長楕円形で、規模は長径2.79m、短径0.65m、深さ0.1mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK477（図面130）：平面形態は長楕円形で、長径1.88m、短径1.23m、深さ0.09mを測る。土抗内に礫が混入する。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層。出土遺物は土師器皿がある。

SK478（図面130）：平面形態は不整形で、規模は長径1.08m、短径0.86m、深さ0.14mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK479（図面130）：平面形態は長楕円形で、規模は長径1.65m、短径0.95m、深さ0.17mを測る。土抗内に礫が混入している。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：黄灰色砂層に分層される。出土遺物は認められない。

SK480（図面128）：平面形態は円形で、径0.7～0.65m、深さ0.3mを測る。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：黄灰色砂質土層、第３層：黒褐色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK481（図面133）：平面形態は楕円形で、長径1.1m、短径0.9m、深さ0.1mを測る。土抗内は大小の礫が混在する。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK482（図面135）：平面形態は楕円形で、SK489を切り込む。規模は、長径1.25m、短径0.95m、深さ0.07mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK483（図面135）：平面形態は不整形で、SD188・189、SK482に切られる。規模は、長径2.73m以上、短径1.75m以上、深さ0.31mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土はオリーブ褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK484（図面134・167）：平面形態は不整形で、SK485、SD191を切り込み、SK488に切られる。長径4.17m以上、短径2.8m、深さ0.35mを測る。土抗内は小礫が散在する。覆土は第１層:灰オリーブ色粘土層、第２層：暗灰黄色粘質土層となる。珠洲が出土する。

SK485（図面134）：平面形態は不整形で、SK484・487・488、SD191に切られる。長径5.46m、短径4.68m、深さ0.38mを測る。土抗内は小礫が散在する。覆土は第１層：にぶい黄色砂層、第２層：にぶい黄褐色砂質土層となる。出土遺物は珠洲、須恵器がある。

SK486（図面135）：平面形態は不整形で、規模は、長径1.87m、短径1.62m、深さ0.18mを測る。土抗内は小礫が散在している。覆土は第１層：灰黄褐色砂質土層、第２層：黄灰色粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK487（図面134）：平面形態は楕円形で、SK486を切り込む。長径0.91m、短径0.85m、深さ0.12mを測る。土抗内は小礫が混入。覆土は黄褐色砂質土層となる。出土遺物なし。

SK488（図面134）：平面形態は不整形で、SK484・485・487を切り込む。規模は長径7.34m、短径6.46m以上、深さ0.18mを測る。覆土は第１層：暗褐色粘質土層、第２層：灰黄褐色粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK489（図面016・167）：平面形態は不整形で、長径は不明、短径2.95m、深さ0.33mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂粘質土を基調とする。出土遺物は土師器、瀬戸美濃施釉陶磁器、珠洲がある。

SK490（図面016・156）：平面形態は円形で、規模は径0.4～0.35m、深さ0.06mを測る。覆土はオリ

ーブ褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲がある。

SK491（図面133）：平面形態は長楕円形で、長径3.27m、短径0.59m、深さ0.08mを測る。土抗内は大小の礫が散在する。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK492（図面134）：平面形態は不整形で、長径1.31m、短径0.9m、深さ0.07mを測る。土抗内は小礫が散在する。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK493（図面134）：平面形態は長楕円形で、長径2.72m、短径1.05m、深さ0.09mを測る。土抗内は小礫が散在する。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK494（図面137）：平面形態は楕円形で、長径0.89m、短径0.45m、深さ0.09mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK495（図面016・166）：平面形態は円形と思われるが、正確な規模は不明である。深さ0.27mを測る。覆土は第１層：灰黄褐色砂質土層、第２層：灰黄褐色砂粘質土層、第３層：暗灰黄色粘質土層に分層される。出土遺物には瀬戸美濃、珠洲、土師器皿がある。

SK496（図面107・166）：平面形態は大型不整形で、SK109・121・122を切り込み、SK441・442に切られる。規模は、長径11.42m、短径5.78m、深さ0.2mを測る。覆土は暗灰黄色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK497（図面016・166）：平面形態は円形で、径0.48～0.44m、深さ0.14mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層の単層である。出土遺物は認められない。

SK498（図面016・166）：平面形態は不整形で、SK442と大きく重複するため規模等は不明。深さ0.37mを測る。覆土は第１層：にぶい黄褐色砂粘質土層、第２層：暗灰黄色砂層、第３層：黒褐色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

SK499（図面137）：平面形態は楕円形で、長径1.55m、短径1.01m、深さ0.15mを測る。土抗内は礫詰め状態で、覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK500（図面137）：平面形態はＬ字形で、長径　3.08m、短径2.72m、深さ　0.28mを測る。土抗内は礫詰め状態。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層。珠洲が出土する。

SK501（図面137）：平面形態は長楕円形で、長径2.46m、短径0.75m、深さ0.07mを測る。土抗内は小礫が散在する。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK502（図面138）：平面形態は楕円形で、長径1.51m、短径0.94m、深さ0.04mを測る。土抗内は礫詰めの状態。覆土はオリーブ褐色砂質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK503（図面138）：平面形態は楕円形で、長径1.45m、短径0.87m、深さ0.09mを測る。土抗内は小礫が散在する。覆土はオリーブ褐色砂質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK504（図面130）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.78m、短径1.42m、深さ0.14mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK505（図面137）：平面形態は不整形で、長径5.24m、短径4.94m、深さ0.44mを測る。土抗内は大小の礫が散在する。覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

SK506（図面130）：平面形態は楕円形で、長径1.17m、短径1.06m、深さ0.56mを測る。覆土は第１層：灰黄褐色砂粘質土層、第２層：灰黄色砂粘質土層、第３層：褐灰色粘質土層となる。出土遺物なし。

SK507（図面128）：平面形態は円形で、規模は径1.77～1.72m、深さ0.38mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は第１層：褐灰色砂粘質土層、第２層：にぶい黄色粘質土層、第３層：黄灰色砂

粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK508（図面128）：平面形態は楕円形で、長径1.65m、短径1.3m、深さ0.3mを測る。覆土は第１層：黄灰色砂質土層、第２層：灰色砂粘質土層に分層される。出土遺物なし。

SK509（図面127）：平面形態は円形で、規模は径1.47m、深さ0.54mを測る。土抗内は礫が混入している。覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK510（図面127）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.43m、短径1.35m、深さ0.44mを測る。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK511（図面127）：平面形態は長楕円形で、SK411を切り込む。規模は長径1.71m、短径0.94m、深さ0.12mを測る。覆土は第１層：オリーブ褐色砂質土層、第２層：暗灰黄色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK512（図面126）：平面形態は不整形で、SK424に切られる。長径3.02m、短径不明、深さ0.42mを測る。土抗内は大小の礫が散在する。覆土は褐灰色砂質土層。出土遺物なし。

SK513（図面094）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.82m、短径1.54m、深さ0.12mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SK514（図面016・166）：平面形態は楕円形で、長径0.73m、短径は不明、深さ0.31m。覆土は黄褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK515（図面107）：平面形態は円形で、SK496に切られる。規模は径0.56～0.54m、深さ0.21mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土は第１層：黄褐色砂質土層、第２層：灰黄褐色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK516（図面149・156）：平面形態は長楕円形で、長径0.8m、短径0.44m、深さ0.14mを測る。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：黄褐色砂質土層となる。出土遺物なし。

SK517（図面149・156）：平面形態は不整形で、規模は長径0.84m、短径0.5m、深さ0.3mを測る。覆土は第１層：黒褐色砂粘質土層、第２層：黄褐色砂質土層、第３層：黒褐色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK518（図面149・156）：平面形態は長楕円形で、長径1.04m、短径0.56m、深さ0.41mを測る。覆土は第１層：黄褐色砂質土層、第２層：黒褐色砂質土層となる。出土遺物なし。

SK519（図面149・156）：平面形態は長楕円形で、長径1.1m、短径0.72m、深さ0.42mを測る。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：暗灰黄色砂粘質土層。出土遺物なし。

SK520（図面149・156）：平面形態は隅丸方形で、規模は一辺0.8～0.76m、深さ0.14mを測る。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK521（図面149・156）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.36m、短径1.04m、深さ0.33mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK522（図面149・156）：平面形態は円形で、規模は径1.32～1.3m、深さ0.35mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK523（図面149・156）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.9m、短径1.64m、深さ0.1mを測る。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK524（図面138）：平面形態は円形で、SK525を切り込む。規模は、径0.62m、深さ0.22mを測る。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK525（図面138）：平面形態は不整形で、SK524に切られる。長径3.6m、短径2.32m、深さ0.15m。

土抗内は大小の礫が散在する。覆土は暗灰黄色砂質土層。出土遺物なし。

SK526（図面128）：平面形態は円形で、規模は径1.35～1.31m、深さ0.3mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK527（図面139）：平面形態は長楕円形で、長径1.55m、短径0.77m、深さ0.11mを測る。土抗内は小礫が散在する。覆土は暗灰黄色砂質土層の単層。八尾、珠洲が出土した。

SK528（図面130）：平面形態は不整形で、SK529を切り込む。長径1.1m、短径0.9m、深さ0.06mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK529（図面130）：平面形態は楕円形で、SK528に切られる。規模は長径2.49m、短径1.3m、深さ0.32mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK530（図面139）：平面形態は楕円形で、規模は長径2.4m、短径1.76m、深さ0.15mを測る。土抗内は大小の礫が散在している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物には瀬戸美濃施釉陶器、土師器皿などがある。

SK531（図面136）：平面形態は不整形で、長径1.35m、短径0.92m、深さ0.25mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK532（図面136）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.32m、短径1.09m、深さ0.59mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK533（図面130）：平面形態は長楕円形で、規模は長径1.37m、短径1.04m、深さ0.05mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK534（図面130）：平面形態は不整形で、規模は長径1.27m、短径1.1m、深さ0.07mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK535（図面141）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.64m、短径0.94m、深さ0.1mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層になる。出土遺物は認められない。

SK536（図面141）：平面形態は長方形で、規模は長辺1.64m、短辺1.17m、深さ0.19mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK537（図面139）：平面形態は円形で、径0.96～0.8m、深さ0.46mを測る。土抗内は大小の礫が散在する。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK538（図面136）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.47m、短径0.90m、深さ0.19mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK539（図面136）：平面形態は楕円形で、溝に切られる。長径1.04m、短径0.69m以上、深さ0.13mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK540（図面136）：平面形態は楕円形で、長径0.65m、短径0.62m、深さ0.1mを測る。土抗内は礫が散在している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層。出土遺物はなし。

SK541（図面136）：平面形態は不整形で、規模は長径4.0m、短径2.6m、深さ0.45mを測る。土抗内は北西側肩部に礫の集中がみられる。覆土は第１層：暗灰黄色砂粘質土層、第２層：暗灰黄色砂質土層に分層される。出土遺物には八尾、珠洲がある。

SK542（図面130）：平面形態は楕円形で、長径1.15m、短径0.81m、深さ0.48mを測る。土抗内は大小の礫が散在する。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層。出土遺物なし。

SK543（図面140）：平面形態は不整形で、長径3.08m、短径3.0m、深さ0.21mを測る。土坑内中央付近に人頭大の礫が混在する。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：黄褐色砂質土層、第３層：

暗灰黄色砂質土層に分層される。出土遺物は土師器皿がある。

SK544（図面140）：平面形態は楕円形で、長径1.6m、短径1.5m、深さ0.2mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK545（図面022・156）：平面形態は円形で、径0.49～0.4m、深さ0.21mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は八尾がある。

SK546（図面140）：平面形態は楕円形で、長径2.12m、短径1.98m、深さ0.11mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK547（図面139）：平面形態は楕円形で、SK548を切り込む。規模は長径1.3m、短径1.1m、深さ0.08mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK548（図面139）：平面形態は楕円形でSK547、SD232に切られる。長径4.8m、短径4.4m、深さ0.39mを測る。土抗内は大小の礫が散在する。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：黄褐色砂質土層、第３層：黄褐色砂粘質土層となる。出土遺物は中国製青磁、鉄滓がある。

SK549（図面141）：平面形態は円形で、規模は径1.05～1.03m、深さ0.26mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK550（図面141）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.91m、短径0.75m、深さ0.2mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK551（図面141）：平面形態は長方形で、SK552を切り込む。長辺2.94m、短辺1.72m、深さ0.25mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK552（図面141）：平面形態は不整形で、SK551に切り込まれる。長径1.0m以上、短径9.5m、深さ0.16mを測る。覆土は黄灰色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK553（図面141）：平面形態は不整形で、規模は長径1.3m、短径0.9m、深さ0.1mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK554（図面022・156）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.16m、短径1.03m、深さ0.44mを測る。土抗内に小礫が混入している。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：黄灰色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK555（図面140）：平面形態は不整形で、規模は長径2.34m、短径1.1m、深さ0.33mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は第１層：灰黄褐色砂質土層、第２層：暗灰黄色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK556（図面141）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.26m、短径0.76m、深さ0.1mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK557（図面141）：平面形態は長楕円形で、規模は長径1.98m、短径0.93m、深さ0.17mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK558（図面141）：平面形態は不整形で、規模は長径1.32m、短径0.97m、深さ0.48mを測る。覆土は第１層：暗灰黄色（2.5Y ５／２）砂質土層、第２層：暗灰黄色（2.5Y ４／２）砂粘質土層、第３層：暗灰黄色（2.5Y ４／２）砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK559（図面141）：平面形態は楕円形で、規模は長径2.64m、短径1.41m、深さ0.28mを測る。覆土は第１層：暗灰黄色（2.5Y ５／２）砂質土層、第２層暗灰黄色（2.5Y ４／２）砂質土層、第３層：暗灰黄色砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK560（図面141）：平面形態は楕円形で、SK561に切られる。長径1.65m以上、短径1.27m、深さ0.16

mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK561（図面141）：平面形態は長楕円形でSK560を切り込む。規模は長径2.7m、短径1.38m、深さ0.12mを測る。覆土は第１層：暗灰黄色粘質土層、第２層：暗灰黄色（2.5Y ４／２）砂質土層、第３層：暗灰黄色（2.5Y ５／２）砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK562（図面022・156）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.85m以上、短径0.92m、深さ0.54mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：暗灰黄色砂粘質土層に分層される。出土遺物には珠洲がある。

SK563（図面141）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.86m、短径0.5m、深さ0.04mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK564（図面136）：平面形態は長楕円形で、規模は長径2.1m、短径1.24m、深さ0.13mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土は第１層：黒褐色砂質土層、第２層：暗灰黄色砂質土層、第３層：黄灰色砂層に分層される。出土遺物には珠洲がある。

SK565（図面136）：平面形態は不整形で、長径0.7m、短径0.57m、深さ0.15mを測る。土抗内は礫詰め状態。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK566（図面136）：平面形態は不整形で、長径1.08m、短径0.9m、深さ0.25mを測る。土抗内は礫詰め状態。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK567（図面140）：平面形態は長楕円形で、長径1.52m、短径1.05m、深さ0.43mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土は灰黄褐色砂質土層のみの単層。出土遺物は八尾がある。

SK568（図面140）：平面形態は楕円形で、長径1.4m以上、短径1.2m、深さ0.13mを測る。土抗内は大小の礫が散在する。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層。出土遺物は珠洲がある。

SK569（図面023・156）：平面形態は円形で、径0.64～0.55m、深さ0.04mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土は暗灰黄色砂質土層の単層。出土遺物は石造物破片がある。

SK570（図面123）：平面形態は楕円形で、SK370に切られる。長径0.7m以上、短径0.91m、深さ0.06mを測る。覆土は暗灰黄色粘質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK571（図面123）：平面形態は不整形で、規模は長径0.6m以上、短径1.39m、深さ0.1mを測る。土抗内に礫が混入している。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：黄灰色砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK572（図面123）：平面形態は長楕円形で、規模は長径1.24m、短径0.61m、深さ0.1mを測る。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK573（図面094）：平面形態は楕円形でSK024に切られる。規模は長径2.61m、短径1.95m以上、深さ0.22mを測る。土抗内には小礫が散在している。覆土は第１層：にぶい黄褐色砂粘質土層、第２層：灰黄褐色砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK574（図面012・164）：平面形態は円形で、径0.4～0.32m、深さ0.07mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK575（図面142）：平面形態は不整形で、規模は長径3.46m、短径2.91m、深さ0.37mを測る。覆土は褐灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は瀬戸美濃施釉陶器、鉄滓がある。

SK576（図面142）：平面形態は円形で、規模は径0.76～0.74m、深さ0.12mを測る。覆土は灰黄褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK577（図面142）：平面形態は円形でSK585・SK586を切り込む。径0.35～0.33m、深さ0.1mを測る。

覆土は灰黄褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK578（図面142）：平面形態は楕円形で、SK586を切り込む。長径0.85m、短径0.59m、深さ0.08m。土抗内は小礫が混入する。覆土は暗灰黄色砂粘質土層の単層。出土遺物なし。

SK579（図面012・156）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.43m、短径0.71m、深さ0.33mを測る。土抗内は礫が散在している。覆土は第１層灰オリーブ色砂質礫混土層、第２層：褐灰色砂粘質土層に分層される。出土遺物には珠洲、土師器皿がある。

SK580（図面133）：平面形態は楕円形で、SK581に切られる。長径1.05m以上、短径1.2m、深さ0.34mを測る。覆土は灰オリーブ色砂粘質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK581（図面133）：平面形態は楕円形で、SK580を切り込む。規模は長径1.27m以上、短径0.92m、深さ0.42mを測る。覆土は灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物なし。

SK582（図面142）：平面形態は不整形で、長径2.61m、短径1.89m、深さ0.12mを測る。土抗内は大小の礫が散在する。覆土はにぶい黄褐色砂質礫混土層となる。出土遺物なし。

SK583（図面096）：平面形態は隅丸方形で、規模は一辺1.4～1.25m、深さ0.16mを測る。覆土は褐灰色砂粘質土層を基調とする出土遺物は認められない。

SK584（図面132）：平面形態は隅丸長方形で、SK470に切られる。規模は長辺4.35m、短辺2.4m以上、深さ0.26mを測る。土抗内は小礫が散在している。覆土は第１層：褐灰色（10YR ５／１）砂粘質土層、第２層：灰黄褐色砂粘質土層、第３層：褐灰色（10YR ４／１）砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK585（図面142）：平面形態は楕円形で、SK586を切り、SK577に切られる。規模は長径1.06m、短径0.79m、深さ0.24mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土は黄褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK586（図面142）：平面形態は不整形で、SK577・578・585に切られる。長径2.56m、短径1.72m、深さ0.02mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂粘質土層となる。出土遺物なし。

SK587（図面142）：平面形態は不整形で、長径1.92m、短径1.3m、深さ0.17mを測る。土抗内は礫が散在する。覆土は灰黄褐色砂粘質土層の単層。出土遺物は認められない。

SK588（図面142）：平面形態は楕円形で、長径2.13m、短径1.7m以上、深さ0.25mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK589（図面142）：平面形態は楕円形で、規模は長径2.05m、短径1.97m、深さ0.55mを測る。土抗内は礫詰め状態である。覆土は第１層：灰黄褐色砂粘質層土層、第２層：灰色砂粘質土層に分層される。出土遺物には瀬戸美濃施釉陶器、珠洲、土師器皿などがある。

SK590（図面110）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.34m、短径0.76m、深さ0.13mを測る。覆土は灰黄褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK591（図面108）：平面形態は楕円形で、規模は長径2.06m、短径1.38m、深さ0.28mを測る。覆土は灰黄褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物には土師器皿がある。

SK592（図面108）：平面形態は長楕円形で、規模は長径1.7m、短径0.9m、深さ0.27mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は第１層：灰オリーブ色砂粘質土層、第２層：灰色砂粘質土層、第３層：暗灰黄色砂粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK593（図面108）：平面形態は楕円形で、SK115に切られる。長径2.8m、短径2.2m、深さ0.04mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は灰色砂粘質土層を基調する。出土遺物は認められない。

SK594（図面110）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.42m、短径0.99m以上、深さ0.11mを測る。覆土は灰黄褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK595（図面099）：平面形態は長楕円形で、SK048に切られ、SK596を切り込む。規模は長径3.56m、短径1.2m、深さ0.42mを測る。土抗内には小礫が混入している。覆土は暗オリーブ灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK596（図面099）：平面形態は不整形で、SK595に切られる。SK597との切り合いは不明、規模は長径2.2m以上、短径1.47m、深さ0.26mを測る。土抗内には礫が混入している。覆土は灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物には土師器皿がある。

SK597（図面099）：平面形態は楕円形を呈す。規模は長径1.54m、短径1.25m以上、深さ0.16mを測る。覆土は灰オリーブ色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK598（図面125）：平面形態は不整形で、SK384に切られる。長径2.07m以上、短径1.5m、深さ0.09mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SK599（図面013・163）：平面形態は楕円形で、長径0.82m、短径は不明、深さ0.2mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は黄灰色粘質土層の単層。出土遺物は認められない。

SK600（図面097）：平面形態は円形で、SD027を切り込む。径1.75～1.48m、深さ0.27m。土抗内には小礫が混入する。覆土は黄灰色砂粘質土層の単層。出土遺物なし。

SK601（図面009・156）：平面形態は楕円形で、長径0.33m、短径0.32m、深さ0.15mを測る。土抗内は小礫が混入する。覆土は暗オリーブ褐色砂粘質土層。温石が出土した。

SK602（図面143）：平面形態は楕円形で、規模は長径2.89m、短径2.42m、深さ0.43mを測る。土抗内は大きな礫が散在している。覆土は第１層：黄褐色粘質土層、第２層：灰色粘土層、第３層：黒褐色粘土層に分層される。出土遺物は古銭がある。

SK603（図面007・156）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.48m、短径1.1m、深さ0.32mを測る。覆土は灰黄褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物には土師器皿がある。

SK604（図面013・166）：平面形態は不整形で、長径0.3m以上、短径7.40m、深さ0.53mを測る。覆土は黄灰色砂質土層である。出土遺物には珠洲、棒状鉄製品、鉄滓がある。

SK605（図面151・156）：平面形態は隅丸方形で、規模は一辺2.25m以上、深さ0.36mを測る。土抗内に大きな礫が混入する。覆土はにぶい黄褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物には山茶碗、八尾、珠洲、土師器皿、刀、鉄滓、棒状と板状の金属製品がある。

SK606（図面010・156）：平面形態は楕円形で、規模は長径2.32m前後、短径1.85m前後、深さ0.14mを測る。土抗内は小礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲、須恵器、土師器皿、砥石がある。

SK607（図面008・156）：平面形態は楕円形で、長径1.52m、短径0.95m、深さ0.18mを測る。覆土は褐灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は鉄滓、棒状の金属製品がある。

SK608（図面008・059）：平面形態は楕円形で、SX08内に位置する。長径0.49m、短径0.34m、深さ0.21mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土層の単層。出土遺物なし。

SK609（図面009・156）：平面形態は不整形で、長径2.18m、短径1.82m、深さ0.24mを測る。土抗内は礫が混入する。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層。鉄滓が出土する。

SK610（図面143）：平面形態は楕円形で、長径1.51m、短径0.55m、深さ0.33mを測る。土坑内には礫が混入する。覆土は灰黄褐色砂質土層の単層。出土遺物は認められない。

SK611（図面019・157）：平面形態は楕円形でSK612を切り、規模は長径0.53m、短径0.34m、深さ0.04mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物はなし。

SK612（図面019・157）：平面形態は円形で、SK611に切られる。径0.97～0.92m、深さ0.15mを測る。覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：黒褐色砂質土層に分層される。出土遺物は珠洲が出土している。

SK613（図面019・157）：平面形態は円形で、径0.56～0.54m、深さ0.11mを測る。覆土は第1層：黒褐色砂質土層、第2層：褐灰色砂質土層となる。八尾が出土した。

SK614（図面143）：平面形態は楕円形で、SK615に切られる。規模は長径1.95m以上、短径1.78m、深さ0.41mを測る。土坑内には礫が散在している。覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。遺物としては土師器皿出土がみられる。

SK615（図面143）：平面形態は楕円形で、SK614を切り込む。規模は長径0.85m、短径0.62m、深さ0.15mを測る。覆土は黒褐色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SK616（図面148）：平面形態は楕円形で、長径0.90m、短径0.80m、深さ0.13mを測る。土坑内には礫が混入している。覆土は灰黄褐色砂質土層の単層となる。出土遺物はなし。

SK617（図面148）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.10m、短径0.91m、深さ0.07mを測る。覆土は灰黄褐色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SK618（図面148）：平面形態は円形で、規模は径0.98～0.96m、深さ0.10を測る。覆土は灰黄褐色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SK619（図面019・157）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.03m、短径0.61m、深さ0.31mを測る。土坑内には礫が混入している。覆土は第1層：灰黄褐色砂質土層、第2層：黒褐色砂質土層、第3層：暗褐色砂質土層に分層される。遺物では砥石が出土している。

SK620（図面148）：平面形態は隅丸長方形で、SK621を切り込む。長辺1.35m、短辺1.06m、深さ0.07m。土坑内には礫が混入する。覆土は黒褐色砂質土層の単層。出土遺物なし。

SK621（図面148）：平面形態は楕円形で、SK620に切られる。規模は長径約1.32m、短径1.00m、深さ0.01mを測る。覆土は褐灰色砂質土層の単層となる。出土遺物はなし。

SK622（図面144）：平面形態は楕円形で、長径1.59m、短径1.30m、深さ0.12mを測る。土坑内には小礫が散在する。覆土は黒褐色砂質土層の単層となる。出土遺物はなし　。

SK623（図面148）：平面形態は楕円形で、長径1.21m、短径0.82m、深さ0.15mを測る。土坑内には礫が混入している。覆土は褐灰色砂質土層の単層となる。出土遺物はなし。

SK624（図面143）：平面形態は楕円形でSK625を切り込む。長径0.74m、短径0.45m、深さ0.12mを測る。土坑内には礫が混入。覆土は灰黄褐色砂質土層の単層。出土遺物なし。

SK625（図面143・148）：平面形態は楕円形でSK624に切られ、SK626を切る。長径1.45m以上、短径1.14m以上、深さ0.22mを測る。土坑内には礫が混入する。覆土は灰黄褐色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SK626（図面143・148）：平面形態は楕円形で、SK625を切る。規模は長径0.55m、短径0.34m、深さ0.09mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土層の単層となる。出土遺物なし。

SK627（図面143）：平面形態は隅丸長方形で、長辺2.92m、短辺1.79m、深さ0.47mを測る。土坑内には礫が散在する。覆土は第1層：褐灰色砂質土層、第2層：灰黄褐色砂質土層、第3層：黒褐色砂質土層に分層される。出土遺物は八尾、石臼、砥石が出土している。

SK628（図面144）：平面形態は隅丸方形で、SK629を切り込む。規模は一辺1.77～1.70m、深さ0.27mを測る。土坑内には小礫が散在している。覆土は第１層：黒褐色砂質土層、第２層：黄褐色砂質土層に分層される。出土遺物はなし。

SK629（図面144）：平面形態は楕円形で、SK628に切られる。規模は長径1.92m、短径1.74m以上、深さ0.21mを測る。土坑内には礫が混入している。覆土は第１層：黒褐色砂質土層、第２層：にぶい黄褐色砂質土層に分層される。出土遺物はなし。

SK630（図面144）：平面形態は隅丸方形で、肩を一部切り込まれる。一辺1.23～1.20m、深さ0.54mを測る。土坑内には礫が混入している。覆土は灰黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物はなし。

SK631（図面143）：平面形態は楕円形で、SD0039に切られる。長径1.60m以上、短径1.45m、深さ0.71mを測る。土坑内には礫が混入する。覆土は灰黄褐色砂質土層。珠洲が出土した。

SK632（図面014・157）：平面形態は円形で、径0.50～0.45m、深さ0.08mを測る。覆土は褐灰色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SK633（図面014・157）：平面形態は不整形で、長径1.12m、短径0.73m、深さ0.51mを測る。土坑内には礫が混入している。覆土は灰黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物には土師器皿がある。

SK634（図面014・157）：平面形態は不整形で、SD275に切られる。規模は、長径1.47m、短径1.23m、深さ0.15mを測る。覆土は第１層：褐灰色砂質土層、第２層：黒褐色砂質土層に分層される。遺物では八尾が出土している。

SK635（図面013・157）：平面形態は円形で、径0.76～0.68m、深さ0.24mを測る。土坑内には礫が混入している。覆土は第１層：灰黄褐色砂質土層、第２層：黒褐色砂質土層に分層される。出土遺物では土師器皿が出土している。

SK636（図面148）：平面形態は楕円形で、西側を切り込まれる。規模は、長径約2.25m、短径1.97m、深さ0.29mを測る。土坑内には礫が散在している。覆土は暗オリーブ褐色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SK637（図面146）：平面形態は楕円形で、SK638・639に切られる。規模は長径2.19m、短径1.58m、深さ0.14mを測る。覆土は第１層：灰黄褐色砂質土層、第２層：黒褐色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK638（図面146）：平面形態は楕円形で、SK637を切り込む。長径1.97m、短径1.65m、深さ0.25mを測る。土坑内には小礫が散在している。覆土は褐灰色砂質土層を基調とする。出土遺物はなし。

SK639（図面146）：平面形態は楕円形で、SK637を切り込む。規模は長径1.85m、短径1.22m、深さ0.11mを測る。土坑内には礫が混入している。覆土は第１層：灰黄褐色砂質土層、第２層：黒褐色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK640（図面148）：平面形態は円形で、SK644を切り込む。規模は、径1.05～0.97m、深さ0.11mを測る。覆土は黒褐色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SK641（図面018・157）：平面形態は円形で、規模は径0.31～0.27m、深さ0.15mを測る。覆土は褐灰色砂質土層の単層となる。出土遺物はなし。

SK642（図面018・157）：平面形態は円形で、規模は径0.22～0.20m、深さ0.06mを測る。覆土は褐灰色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SK643（図面146）：平面形態は隅丸長方形で、規模は長辺3.20m、短辺1.96m、深さ0.30mを測る。土坑内には礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は土師器皿がある。

SK644（図面145）：平面形態は円形で、SK653を切り込む。規模は径2.20～2.17m、深さ0.35mを測る。土坑内には小礫が散在。覆土は黒褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK645（図面144）：平面形態は円形で、SK647を切り込む。規模は径1.45m、深さ0.12mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SK646（図面144）：平面形態は楕円形で、SK648を切り込む。規模は長径0.39m、短径0.27m、深さ0.37mを測る。覆土は第１層：黒褐色砂質土層、第２層：オリーブ褐色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK647（図面144）：平面形態は楕円形でSK645に切られる。長径0.81m以上、短径0.65m、深さ0.07mを測る。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：黄灰色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK648（図面144）：平面形態は隅丸方形で、SK650を切り込む。規模は、一辺1.46m以上、深さ0.38mを測る。土坑内には礫が散在している。覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK649（図面144）：平面形態は楕円形で、SK648に切られ、SK650を切り込む。規模は長径0.95m以上、短径0.80m、深さ0.20mを測る。土坑内には小礫が混入している。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：黒褐色砂質土層に分層される。出土遺物はなし。

SK650（図面144）：平面形態は楕円形で、SK649・651に切られる。規模は長径2.60m、短径1.76m、深さ0.53mを測る。土坑内には小礫が散在している。覆土は灰黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK651（図面144）：平面形態は長楕円形で、SK650を切り込む。規模は長径1.40m、短径0.50m、深さ0.44mを測る。土坑内には小礫が混入している。覆土は第１層：黒褐色砂質土層、第２層：黒色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK652（図面147）：平面形態は不整形で、西側を切られる。長径1.65m、短径1.07m以上、深さ0.11m。土坑内には礫が混入する。覆土は暗灰黄色砂質土層の単層。出土遺物なし。

SK653（図面145）：平面形態は楕円形で、SK644に切られる。長径3.60m以上、短径3.27m、深さ0.42mを測る。土坑内には小礫が散在する。覆土は第１層：暗オリーブ褐色砂質土層、第２層：黄灰色砂質土層、第３層：黒褐色砂質土層となる。出土遺物は板啤がある。

SK654（図面147）：平面形態は不整形で、SK656を切り西側を切られる。長径1.61m、短径1.12m以上、深さ0.30mを測る。土坑内には礫が混入する。覆土は第１層：暗オリーブ褐色砂質土層、第２層：黄灰色砂質土層、第３層：黒褐色砂質土層となる。出土遺物なし。

SK655（図面147）：平面形態は楕円形で、SK656を切り込む。規模は長径1.86m、短径1.57m、深さ0.32mを測る。土坑内には礫が散在している。覆土は第１層：暗灰色砂質土層、第２層：黒褐色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK656（図面147）：平面形態は不整形でSK654・SK655に切られる。規模は長径2.07m、短径1.65m以上、深さ0.28mを測る。土坑内には礫が散在している。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：暗オリーブ灰色粘質土層に分層される。出土遺物は棒状の金属製品がある。

SK657（図面018・157）：平面形態は円形で、規模は径0.42～0.38m、深さ0.41mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層の単層となる。出土遺物は土師器皿が出土している。

SK658（図面018・157）：平面形態は円形で、規模は径0.37～0.32m、深さ0.13mを測る。覆土は暗灰

黄色砂質土層の単層となる。出土遺物は珠洲、土師器皿が出土している。

SK659（図面145）：平面形態は楕円形。SK660との切り合いは不明。長径2.21m以上、短径2.15m以上、深さ0.34mを測る。土坑内には小礫が混入。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：暗オリーブ褐色砂質土層となる。出土遺物なし。

SK660（図面145）：平面形態は楕円形。SK659との切り合いは不明。規模は長径1.70m、短径1.10m以上、深さ0.33mを測る。土坑内には礫が混入している。覆土は第１層：黒褐色砂質土層、第２層：オリーブ褐色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK661（図面148）：平面形態は円形で、径1.68～1.62m、深さ0.21m。土坑内には礫が混入。覆土は第１層：灰黄色砂質土層、第２層：黒褐色砂質土層。出土遺物なし。

SK662（図面018・157）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.69m、短径0.51m、深さ0.32mを測る。覆土は黒褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は土師器皿が出土している。

SK663（図面145）：平面形態は不整形で、西側が調査地区外となる。規模は、長径5.47m、短径2.90m以上、深さ0.49mを測る。土坑内には小礫の密集ヶ所が見られる。覆土は黒褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK664（図面148）：平面形態は楕円形で、SK640、SD294に切られる。規模は長径2.11m以上、短径2.02m、深さ0.22mを測る。覆土は第１層：黒褐色（2.5Y ３／２）砂質土層、第２層：暗オリーブ褐色砂質土層、第３層：黒褐色（2.5Y ３／１）砂質土層に分層される。出土遺物はなし。

SK665（図面148）：平面形態は楕円形で、長径1.32m、短径1.32m、深さ0.34m。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：暗オリーブ褐色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

SK666（図面146）：平面形態は楕円形で、SX05に大きく切り込まれる。規模は長径2.90m以上、短径約2.30m、深さ0.67mを測る。土坑内には小礫が散在している。覆土は暗オリーブ褐色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SK667（図面013・157）：平面形態は円形で、規模は径0.37～0.32m、深さ0.30mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土層の単層となる。出土遺物には柱根がある。

SK668（図面013・157）：平面形態は円形でSE085に切られる。径0.27m、深さ0.54mを測る。覆土は黒褐色砂質土層の単層となる。出土遺物には柱根がある。

SK669（図面016・166）：平面形態は隅丸方形で、一辺3.02～2.54m、深さ0.15mを測る。覆土は黄灰色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK670（図面016・166）：平面形態は楕円形で、SK496内でSK441・SK495・SK514に切られ、規模は不明、深さ0.34mを測る。覆土は第１層：暗灰黄色砂質土層、第２層：暗灰黄色砂層に分層される。出土遺物は認められない。

SK671（図面016・166）：平面形態は不整形で、規模は長径2.13m、短径は不明、深さ0.4mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物には板状の金属製品がある。

SK672（図面012・166）：平面形態は隅丸長方形で、長辺2.8m以上、短辺1.75m、深さ0.15mを測る。覆土は第１層：灰黄褐色砂質土層、第２層：にぶい黄褐色砂質土層。出土遺物なし。

SK673（図面012・166）：平面形態は隅丸方形で、長辺1.91m、短辺1.72m、深さ0.17mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SK674（図面012・166）：平面形態は楕円形で、長径0.71m、短径0.54m、深さ0.10mを測る。覆土は灰黄褐色砂質土層の単層。瀬戸美濃、珠洲、土師器皿が出土している。

SK675（図面022・163）：平面形態は円形で、径0.46～0.35m、深さ0.39mを測る。覆土は黒褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK676（図面016・162）：平面形態は隅丸長方形で、規模は長辺1.77m、短辺1.0m、深さ0.18mを測る。覆土は第１層：灰黄褐色砂質土層、第２層：褐灰色砂質土層に分層される。出土遺物には土師器皿がある。

SK677（図面008・009）：平面形態は方形で、一辺4.26～4.11m、深さ0.52mを測る。出土遺物は八尾と鉄属、釘がある。

SK688（図面144）：平面形態は円形で、SK645・647に切られる。径0.45m～0.42m、深さ0.24mを測る。覆土は黒褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK690（図面018・166）：平面形態は不整形で、長径2.7m以上、短径1.38m以上、深さ0.43mを数える。覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK691（図面018・166）：平面形態は円形で、径0.62m、深さ0.20mを測る。覆土は黒褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は珠洲がある。

SK694（図面018）：平面形態は不整形で、規模は不明。深さ0.1mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層。土師器皿、珠洲、釘状金属製品が出土している。

SK695（図面018・166）：平面形態は円形で、SK691を切り込む。規模は径0.28～0.27m、深さ0.19mを測る。覆土は第１層：暗オリーブ褐色砂粘質土層、第２層：黒褐色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK696（図面014・166）：平面形態は楕円形。規模は、長径0.38m、短径0.23m以上、深さ0.05mを測る。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

大型土坑

SX01・10（図面60）：半地下式建物SB202を構成する土坑のため、記述を省略する。

SX02・03（図面61・62）：半地下式建物SB203を構成する土坑のため、記述を省略する。

SX04（図面147）：平面形態は不整形で、長径4.52m、短径4.17m、深さ0.28mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物には土師器皿、八尾、珠洲、烏帽子がある。

SX05（図面146）：平面形態は楕円形で、規模は長径3.33m、短径2.8m、深さ0.42mを測る。覆土は第１層：黒褐色砂質土層、第２層：褐灰色砂質土層、第３層：灰黄褐色砂質土層に分層される。出土遺物には中国製白磁がある。

SX06（図面148）：平面形態は不整形で、規模は長径1.31m以上、短径0.66以上m、深さ0.39mを測る。覆土は第１層：黒褐色砂質土層、第２層：暗灰黄色砂質土層、第３層：オリーブ褐色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SX07～09・11（図面057～059）：半地下式建物SB201を構成する土坑。記述省略。

SX12（図面009・156）：平面形態は長楕円形で、長径2.4m、短径1.88m、深さ0.19mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層となる。出土遺物には瀬戸美濃施釉陶器、珠洲、釘などがある。

SX13（図面009・156）：平面形態は不整形。規模は、長径3.34m、短径3.24m、深さ0.22mを測る。覆土は暗オリーブ褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SX14（図面009・115）：平面形態は隅丸長方形で、長辺2.85m、短辺2.0m、深さ0.42mを測る。覆土は第１層：灰黄褐色砂粘質土層、第２層：黒褐色砂粘質土層となる。出土遺物なし。

SX15（図面010・122）：平面形態は楕円形。規模は、長径1.82m、短径1.35m、深さ0.42mを測る。

覆土は黄灰色粘土層のみの単層となる。出土遺物には珠洲、土師器皿がある。

SX16（図面014・122）：平面形態は円形。規模は、径1.25～1.04m、深さ0.44mを測る。覆土は褐灰色粘土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SX17（図面023・138）：平面形態は不整形。規模は、長径4.86m、短径3.35m、深さ0.38mを測る。覆土は黒褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SX18（図面123・156）：平面形態は不整形。規模は、長径4.6m、短径3.38m、深さ0.54mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SX19（図面014・151・168）：平面形態は不整形。規模は、長径11.20m、短径7.40m以上、深さ0.43mを測る。覆土は上層は褐灰色粘質土層、下層は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物としては、珠洲、土師器皿、刀状金属製品、古銭などがある。

溝

SD006（図面004・157）：直線状にのびる溝で、北東から南西にのびる溝。西端はSD004に切られ、東端は消失。長さ4.5m、最大幅0.65m、最大深0.11mを測る。断面形態は逆台形で、覆土はにぶい黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD007（図面008・013・157）：東西方向にのびる溝で、両端とも消失する。長さ1.0m、最大幅0.5m、最大深0.11mを測る。断面形態はU字型で、覆土は暗黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD015（図面011・012・157）：北西から南東にのびる不整形な溝。西端はSK045に接合、東端はSK470に接合する。途中SD020、トレンチ、SK328に切られ、途切れる。長さ20.0m、最大幅1.8m、最大深0.28mを測る。断面形態はU字型で、覆土は、北側aセクションでは第一層：灰褐色砂粘質土層、第二層：にぶい褐色砂粘質土層、南側bセクションでは第1層：黒褐色砂粘質土層　第2層：にぶい黄褐色砂粘質土層となる。出土遺物なし。

SD020（図面012・158）：平面形態は直線的で、北西から南東にのびる溝。東端、西端とも消失する。長さ22.3m、最大幅0.8m、最大深0.07mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD021（図面012・158）：平面形態は不整形で、南西から北東にのびる溝。東端は開放、西端は消失する。長さ12.0m、最大幅2.5m、最大深0.19mを測る。断面形態は不整形で、覆土は第一層：褐灰色砂粘質土層、第二層：黄灰色砂粘質土層、第三層：暗灰黄色砂粘質土層。出土遺物は土師器皿、青磁、珠洲、金属製品の釘がみられる。

SD024（図面012・158）：平面形態は直線で、南北にのびる小溝。南端は消失、北端は土抗に接合し切られる。長さ0.9m、最大幅0.4m、最大深0.25mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は第一層：黄灰色砂粘質土層、第二層：灰黄色砂粘質土層。出土遺物は認められない。

SD026（図面011・012・158）：平面形態は直線的で、北西から南東にのびる溝。両端とも土抗に接合し消失する。長さ6.0m、最大幅0.5m、最大深0.11mを測る。断面形態はU字型で、覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD027（図面011・012・158）：平面形態は不整形で、北西から南東にのびる溝。南東端はSK041に接合、北西端はSK045に接合。長さ8.5m、最大幅2.0m、最大深0.16mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層。金属製品棒状が出土。

SD028（図面011・012・158図）：平面形態は直線的で、南西から北東にのびる溝。南西端は土抗に接

合、北東端はSD015から分岐。途中SD027に切られ途切れる。長さ4.5m、最大幅0.7m、最大深0.14mを測る。断面形態はU字型で、覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物には珠洲がみられる。

SD029（図面011・158）：平面形態は直線的で、南西から北東にのびる溝。西端はSD032に切られ東端は消失。途中SD026に切られ、途切れる。長さ7.8m、最大幅1.0m、最大深0.29mを測る。断面形態は不整形で、覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層。出土遺物なし。

SD030（図面011・012・158）：平面形態は直線的で、南東から北西にのびる溝。南東端は開放、北西端はSK044に接合。長さ2.3m、最大幅0.9m、最大深0.16mを測る。断面形態は逆台形で、覆土はにぶい褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD031（図面011・158）：平面形態は直線的で、南西から北東にのびる溝。西端はSD032に切られ東端は消失。長さ2.3m、最大幅0.4m、最大深0.1mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD032（図面007・008・011・158）：平面形態はL字型で、北西から北東にのびる溝。北東端は開放、南西端は開放。途中SD099に切られ、途切れる。長さ115m、最大幅4.5m、最大深0.49mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は各セクション観察では、上層はオリーブ褐色粘質土層を基調とし、中層～下層はにぶい黄褐色粘土層を基調とする。土師器皿、瀬戸美濃、山茶椀、八尾、珠洲、鉄滓、金属製品の板状、釘、棒状、五輪塔の火輪が出土。

SD033（第011・012・158）：平面形態は直線的で、北東から南西にのびる溝。東端はSK579に接合、西端は消失。長さ20.0m、最大幅1.2m、最大深0.12mを測る。途中SE09に切られ途切れる。断面形態は逆台形で、覆土は、西側aセクションでは暗灰黄色粘質土層、東側bセクションではにぶい黄褐色砂粘質土層となる。土師器皿、越中瀬戸が出土。

SD038（図面011・158）：平面形態は不整形で、四方に広がる。南西端は土抗に接合する。長さ4.5m、最大幅2.0m、最大深0.20mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は第一層：黒褐色砂質土層、第二層：にぶい黄褐色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

SD039（図面012・013・158）：平面形態は直線で、南東から北西にのびる溝。東端は消失、西端は消失。長さ1.7m、最大幅0.5m、最大深0.06mを測る。断面形態はU字型で、覆土は灰黄色砂粘質土層。出土遺物は認められない。

SD040（図面012・158）：平面形態は直線的で、東西にのびる溝。東端はSE046に切られ、西端は消失。長さ1.2m、最大幅0.6m、最大深0.17mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は、黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD041（図面012・013・158）：平面形態は直線的で、東西にのびる溝。東端、西端とも消失する。長さ5.5m、最大幅0.5m、最大深0.06mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD042（図面012・158）：平面形態は直線的で、東西にのびる溝。西端、東端とも消失する。長さ8.4m、最大幅0.4m、最大深0.05mを測る。断面形態はU字型で、覆土は灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物には土師器皿がみられる。

SD050（図面017・158）：平面形態は直線的で、東西にのびる溝。西端はSE015に接合し、東端はSK079に接合。長さ1.0m、最大幅0.7m、最大深0.1mを測る。断面形態は逆台形で、覆土はオリーブ褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD057（図面017・158）：平面形態は直線的で、南北にのびる溝。南端、北端とも消失。長さ4.0m、最大幅0.7m、最大深0.17mを測る。断面形態はU字型で、覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD061（図面017・158）：平面形態は直線的で、南北にのびる溝。南端はSK088に接合、北端はSK116に接合。長さ2.8m、最大幅0.6m、最大深0.14mを測る。断面形態はU字型で、覆土は灰黄褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD062（図面012・017・018・158　図）：平面形態は直線的で、東西にのびる溝。東端は開放、西端は消失。長さ7.0m、最大幅0.5m、最大深0.12mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は灰黄褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD064（図面017・018・158）：平面形態は直線的で、南東から北西にのびる溝。東端、西端とも消失する。長さ2.6m、最大幅0.8m、最大深0.19mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD066（図面017・159）：平面形態は直線的で、南東から北西にのびる溝。南端はSD062に接合、北端はSD095に切られる。長さ18.0m、最大幅0.7m、最大深0.17mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層。第2層：黒褐色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

SD069（図面017・159）：平面形態は不整形で、南東から北西にのびる溝。南端はトレンチ、北端はSD066に切られる。長さ4.6m、最大幅0.7m、最大深0.11mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD070（図面007・159）：平面形態は直線的で、南西から北東にのびる溝。西端は消失、東端は消失。長さ3.2m、最大幅0.7m、最大深0.08mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD071（図面007・159）：平面形態は直線的で、南北にのびる溝。北端はトレンチに切られ、南端は消失。長さ2.5m、最大幅0.6m、最大深0.12mを測る。断面形態はU字型で、覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD072（図面008・159）：平面形態は直線的で、南北にのびる溝。北端はトレンチに切られ、南端は消失。長さ4.5m、最大幅1.0m、最大深0.06mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD073（図面008・159）：平面形態は不整形で、南北にのびる溝。北端はトレンチに切られ、南端は消失。長さ2.5m、最大幅0.8m、最大深0.17mを測る。断面形態はV字型で、覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：暗オリーブ褐色砂質土層。珠洲が出土する。

SD074（図面008・159）：平面形態は不整形で、東西にのびる溝。東端、西端とも消失する。長さ4.8m、最大幅0.6m、最大深0.1mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD075（図面008・159）：平面形態は不整形で、東西にのびる溝。東端は開放、西端は消失。長さ5.0m、最大幅0.65m、最大深0.14mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD076（図面007・159）：平面形態は直線で、南西から北東にのびる溝。西端は消失、東端は消失。長さ5.5m、最大幅0.9m、最大深0.07mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD077（図面007・159）：平面形態はＬ字型で、東西にのびる溝。東端は消失、西端は消失。長さ6.2m、最大幅1.3m、最大深0.1mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD078（図面017・159・161）：平面形態は直線的で、南北にのびる溝。南端はトレンチ、北端は消失。長さ9.7m、最大幅1.9m、最大深0.15mを測る。断面形態はＵ字型で、覆土はａセクションでは暗灰黄色砂粘質土層、ｂセクションではオリーブ褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD081（図面017・018・159）：平面形態は直線的で、南北にのびる溝。北端はSK115に接合、南端は土抗に接合して消失。長さ4.5m、最大幅0.5m、最大深0.08mを測る。断面形態はＵ字型で、覆土はオリーブ褐色砂質土層のみの単層。出土遺物は認められない。

SD083（図面016・017・159）：平面形態は直線的で、南西から北東にのびる溝。西端、東端とも消失。長さ1.8m、最大幅0.6m、最大深0.23mを測る。断面形態はＵ字型で、覆土は第１層：オリーブ褐色砂質土層、第２層：黄褐色砂質土層。出土遺物は認められない。

SD087（図面016・159）：平面形態は直線的で、南北にのびる溝。北端はSD174に切られ、南端は消失。長さ4.0m、最大幅0.3m、最大深0.11mを測る。断面形態はＵ字型で、覆土は灰黄褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD088（図面016・017・159）：平面形態は不整形で、南北にのびる溝。北端はSD090に切られ、南端は土抗に接合。長さ1.3m、最大幅0.7m、最大深0.08mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は灰黄褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD089（図面016・017・159）：平面形態はＬ字型で、SD078から西に向かい北にのびる溝。北端はSD160に切られ東端はSD078に切られる。長さ33.0m、最大幅0.75m、最大深0.13mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は北側ａセクションでは灰黄褐色砂質土層、中央ｂセクションでは黄灰色砂質土層、南側ｃセクションでは第１層：灰オリーブ砂粘質土層、第２層：灰色砂粘質土層となる。出土遺物は認められない。

SD090（図面016・017・159）：平面形態は直線的で、南西から北東にのびる溝。西端はSK496に切られ、東端は消失する。長さ2.3m、最大幅0.5m、最大深0.08mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD091（図面016・017・159）：平面形態は不整形で、南東から北西にのびる溝。南端はSD090に切られ北端はSD092に切られる。長さ1.7m、最大幅1.0m、最大深0.09mを測る。断面形態はＵ字型で、覆土は褐灰色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD092（図面016・017・159）：平面形態は直線的で、南西から北東にのびる小溝。西端はSK496に切られ東端は土抗に接合。長さ0.9m、最大幅0.7m、最大深0.1mを測る。断面形態はＵ字型で、覆土は灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD095（図面017・159）：平面形態は不整形で、北西から南東にのびる溝。北端は土抗に接合、南端はSK133に接合。長さ4.8m、最大幅0.8m、最大深0.08mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD096（図面017・159）：平面形態は直線的で、東西にのびる溝。西端はSD078に切られ東端は消失。途中SD066に切られる。長さ5.2m、最大幅0.6m、最大深0.17mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD098（図面009・159）：平面形態は直線的で、南東から北西にのびる溝。南端、北端とも消失する。長さ5.5m、最大幅0.4m、最大深0.06mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD099（図面009・159）：平面形態は直線的で、南東から北西にのびる溝。南端は壁、北端は土抗に接合。長さ29.0m、最大幅2.5m、最大深0.54mを測る。断面形態は不整形で、覆土は黒褐色粘質土層を基調とする。出土遺物には、土師器皿、八尾、珠洲、須恵器、鉄滓、石製品の砥石などがみられる。

SD100（図面009・159）：平面形態は直線的で、南北にのびる溝。南端、北端とも外側に開放する。長さ7.6m、最大幅0.5m、最大深0.11mを測る。断面形態はU字型で、覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD101（図面009・159）：平面形態は直線的で、南東から北西にのびる溝。南端は開放、北端は消失。長さ3.8m、最大幅0.4m、最大深0.03mを測る。断面形態はU字型で、覆土は暗褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD102（図面009・168）：平面形態は不整形で、南東から北西にのびる溝。南端は壁、北端はSD032に切られる。長さ15.5m、最大幅3.5m、最大深0.18m。断面形態は不整形で、覆土は第1層：にぶい黄褐色砂質土層、第2層：暗赤褐色粘質土層。珠洲、鉄滓が出土。

SD103（図面009・010・159）：平面形態は不整形で、南東から北西にのびる溝。南端は壁、北端はSD106に切られる。長さ41.5m、最大幅2.0m、最大深0.34mを測る。断面形態はU字型で、覆土は第1層：暗灰黄色砂粘質土層、第2層：オリーブ褐色砂層、第3層：黄褐色細砂層。出土遺物には土師器皿、八尾、珠洲、須恵器、鉄滓がみられる。

SD104（図面010・014・168）：平面形態は直線的で、南北にのびる溝。南端は消失、北端はSD113に切られる。長さ44.0m、最大幅0.9m、最大深0.36mを測る。断面形態はU字形で、覆土は灰黄褐色粘質土層のみの単層となる。土師器皿、珠洲、須恵器が出土。

SD105（図面009・159）：平面形態は直線的で、東西にのびる小溝。東端は溝に切られ西端はSK243に接合。長さ1.6m、最大幅0.9m、最大深0.34mを測る。断面形態はU字型で、覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD106（図面009・010・014・159）：平面形態は直線的で、南西から北東にのびる溝。西端はSD268に切られ、東端はSX015に接合。SD128と重複しているため不明瞭。長さ23.0m、最大幅2.08m、最大深0.30mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は、aセクションでは第1層：暗灰黄色粘質土層、第2層：黄灰色砂質土層、bセクションでは第1層：黄灰色砂質土層、第2層：黄灰色砂粘質土層となる。出土遺物には土師器皿、瀬戸美濃、八尾、珠洲、鉄滓、刀子、棒状、釘状の金属製品、古銭などがみられる。

SD107（図面010・014・159）：平面形態は直線的で、東西にのびる溝。東端はSD104に切られ、西端はSK271に接合。長さ3.0m、最大幅1.3m、最大深0.32mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD108（図面009・013・014・159）：平面形態は「コ」字状で、東西にのびて北に折れ、西にのびる溝。基端はSD113に切られ、先端はSD275（SD286より分岐）に続く。長さは南側東西20.0m、北側東西21.0m、南北25.0m（SD275含む）、最大幅0.8m、最大深0.28mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は褐灰色粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

SD109（図面013・014・159）：平面形態はL字形で、北西から南西にのびた後、北東に円弧を描いて

のびる溝。東端はSD104に切られ北端はSD288に続く。SD110と重複している。長さは東西24.0m、南北58.0m（SD288を含む）、最大幅2.0m、最大深0.26mを測る。断面形態はU字型で、覆土はaセクションでは褐灰色砂粘質土層、bセクションでは第1層：黄灰色砂質土層、第2層：黄灰色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

SD110（図面013・014・159）：平面形態はL字型で、SD109と重複している。北西から南東に円弧を描きのびる溝。東端はSD109に切られ、北端は外側に開放する。長さ34.0m、最大幅1.3m、最大深0.26mを測る。断面形態はU字型で、覆土はaセクションでは褐灰色粘質土層、bセクションでは灰色粘質土層。出土遺物には土師器皿、珠洲がある。

SD111（図面012～015・159）：平面形態は不整形で、北東から南西にのびる溝。東端は周壁で、西端は礫に切られる。途中SD125、SD104に切られ途切れる。古代面のSD265が大きく重複している。長さ66.0m、最大幅2.0m、最大深0.15mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は各セクション観察では、上層は黄灰色（2.5Y 5／1）砂質土層を基調とし、中層～下層は黒褐色粘質土層ないし黄灰色（2.5Y 4／1）砂質土層を基調とする。出土遺物には珠洲、瓦質土器、金属製品の棒状、椀形滓などがみられる。

SD112（図面014・159）：平面形態は直線的で、南北にのびる溝。北端はSD280へ続き消失する。南端はSD109に切られる。途中SD108、SD113に切られ途切れる。長さは12m（SD280含む）、最大幅0.5m、最大深0.09mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は褐灰色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

SD113（図面013・014・160）：平面形態は不連続なL字型で、北側のSD286より続き、北東に折れてのびる溝。北端はSD286に続き、東端は周壁となる。途中SE36に切られ途切れる。長さは東西37.0m、南北50.0m（SD286含む）、最大幅1.0m、最大深0.19mを測る。断面形態はU字型で、覆土は灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD114（図面013・014・159）：平面形態は不整形で、南東から北西にのびる溝。北端、南端とも消失。長さ5.7m、最大幅0.9m、最大深0.12mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は第1層：にぶい黄褐色粘質土層、第2層：褐灰色砂粘質土層。出土遺物は認められない。

SD115（図面013・014・160）：平面形態は直線的で、東西にのびる溝。西端は消失、先端は消失。長さ3.0m、最大幅0.3m、最大深0.14mを測る。断面形態はU字型で、覆土は第1層：褐灰色砂粘質土層、第2層：灰黄褐色砂粘質土層。出土遺物は認められない。

SD116（図面013・160）：平面形態は直線的で、南西から北東にのびる小溝。西端、東端ともに消失する。長さ3.0m、最大幅0.5m、最大深0.43mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は暗灰黄色砂粘質土層。出土遺物は認められない。

SD117（図面009・013・014・160）：平面形態は直線的で北端は消失、南端はSD128に切られる。長さは2.5m、最大幅0.7m、最大深0.11mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は褐灰色粘質土層。出土遺物は認められない。

SD118（図面009・013・160）：平面形態は不整形で、北西から南東にのびる溝。南端はSD128に切られ、北端はSD111に切られる。長さ31.7m、最大幅2.5m、最大深0.34mを測る。断面形態は不整形で、覆土は各セクション観察では、上層は褐灰色砂粘質土層を基調とし、中層～下層では褐灰色粘質土層を基調とする。出土遺物には、土師器皿、瀬戸美濃、八尾、珠洲、石製品は砥石、金属製品は鉄滓、板状がみられる。

SD119（図面013・160）：平面形態は直線的で、北西から南東にのびる溝。南端、北端とも消失する。長さ4.4m、最大幅0.4m、最大深0.04mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は褐灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD120（図面013・160）：平面形態は直線的で、北西から南東にのびる溝。南端、北端とも消失する。SD121、SD146に重複し、切られている。長さ12.5m、最大幅1.0m、最大深0.09mを測る。断面形態はU字型で、覆土は褐灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物なし。

SD121（図面013・160）：平面形態は直線で、北西から南東にのびる溝。南端は開放、北端はSD146に切られている。長さ16.5m、最大幅0.8m、最大深0.2mを測る。断面形態は逆台形で、覆土はにぶい黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD122（図面013・160）：平面形態は直線的で、北西から南東にのびる溝。途中重複しており途切れる。北端はSD146に切られ、南端は消失する。SK392、SD111・121・146に切られている。長さ28.0m前後、最大幅0.6m、最大深0.09mを測る。断面形態はV字型で、覆土はaセクションで第1層：灰色砂質土層、第2層：黄灰色粘質土層、bセクションで褐灰色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

SD123（図面013・160）：平面形態は不整形で、南北にのびる溝。両端とも土抗に接合して消失。長さ4.3m、最大幅0.9m、最大深0.12mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は褐灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD124（図面013・160）：平面形態は直線で、南北にのびる溝。南端、北端とも消失する。長さ8.0m、最大幅0.5m、最大深0.09mを測る。断面形態はU字型で、覆土は灰黄褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD125（図面009・013・160）：平面形態は不整形で、北西から南東にのびる溝。南端はSK318に接合、北端は開放。長さ26.0m、最大幅1.5m、最大深0.17mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は、aセクションは第1層：黄灰色砂質土層　第2層：黄灰色砂粘質土層、bセクションは第1層：褐灰色粘質土層、第2層：灰黄褐色粘質土層となる。出土遺物には瀬戸美濃、珠洲、土師器皿、八尾、五輪塔の地輪、金属製品の棒状、鉄滓などがみられる。

SD126（図面008・009・013・160）：平面形態は直線的で、南西から北東にのびる小溝。西端は土抗に接合、東端はSK322に接合。長さ3.0m、最大幅0.5m、最大深0.12mを測る。断面形態はV字型で、覆土は褐灰色粘質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD127（図面008・013・160）：平面形態は直線的で、南西から北東にのびる溝。両端とも土抗に切られる。長さ3.0m、最大幅1.1m、最大深0.08mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は褐灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物には鉄滓がみられる。

SD128（図面009・010・014・160）：平面形態は不整形で、南西から北東にのびる溝。西端はSD106に接合、東端はSD104に接合。長さ24.5m、最大幅1.5m、最大深0.24mを測る。断面形態は不整形で、覆土は暗灰黄色砂粘質土層となる。土師器皿、珠洲、鉄滓が出土。

SD129（図面009・010・014・160）：平面形態は直線的で、南西から北東にのびる溝。西端は消失、東端は開放。長さ3.5m、最大幅0.5m、最大深0.12mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黄灰色粘質土層のみの単層。出土遺物には土師器皿、八尾、珠洲がみられる。

SD130（図面009・160）：平面形態は直線的で、南北にのびる溝。北端はSK344に接合、南端は消失。長さ14.0m、最大幅1.3m、最大深0.24mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は第1層：褐灰色砂粘質

土層、第２層：褐灰色粘質土層。珠洲、鉄滓が出土した。

SD131（図面014・160）：平面形態は不整形で、北東から南西に延びる溝。断面形態は不整形で、覆土は灰黄褐色粘質土層のみの単層。八尾、珠洲、金属製品の刀子が出土した。

SD132（図面013・014・160）：平面形態は不整形で、南北にのびる溝。南端はSK251に接合、北端は消失。長さ2.5m、最大幅0.8m、最大深0.12mを測る。断面形態はＵ字型で、覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD133（図面013・014・160）：平面形態は不整形で、南北にのびる溝。南端はSD128に切られ北端は消失。長さ5.0m、最大幅0.9m、最大深0.07mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD134（図面009・013・160）：平面形態は不整形で、南北にのびる溝。南端は開放、北端はSD125に切られる。二股に分かれている。長さ12.0m、最大幅1.8m、最大深0.07mを測る。断面形態は不整形で、覆土は第１層：褐灰色粘質土層、第２層：灰黄褐色砂粘質土層、第３層：褐灰色砂粘質土層となる。出土遺物は認められない。

SD135（図面014,・160）：平面形態は不整形で、南北にのびる溝。北端はSD269へと続く。南端はSD104に接合。途中SD113に切られる。長さ5.5m、最大幅2.1m、最大深0.21mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は暗灰黄色粘質土層の単層。出土遺物は認められない。

SD136（図面014・160）：平面形態は不整形で、南北にのびる溝。北端は開放、南端はトレンチに切られる。途中SD109～111、113に切られる。長さ29.0m、最大幅4.0m、最大深0.54m。断面形態はＵ字型。覆土はにぶい黄褐色砂粘質土層を基調とする。珠洲が出土。

SD137（図面013・160）：平面形態は不整形で、南北にのびる溝。南端は消失、北端は消失。長さ3.5m、最大幅0.5m、最大深0.08mを測る。SD239と重複している。断面形態はＵ字型で、覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物には金属製品の板状がみられる。

SD138（図面013・160）：平面形態は直線で、南北にのびる溝。南端、北端とも消失する。長さ1.8m、最大幅0.4m、最大深0.13mを測る。断面形態はＵ字型で、覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD139（図面013・160）：平面形態は直線的で、東西にのびる溝。西端、東端とも消失する。長さ4.0m、最大幅0.4m、最大深0.15mを測る。断面形態はＵ字型で、覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD140（図面013・160）：平面形態は不整形で、南北にのびる溝。南端はSD139に切られ北端は消失。長さ3.5m、最大幅1.0m、最大深0.16mを測る。断面形態はＵ字型で、覆土は第１層：黄灰色砂質土層、第２層：暗オリーブ褐色粘質土層。出土遺物は認められない。

SD141（図面013・160）：不連続に途切れる溝で、東西方向にのびる。西端はSD147に切られ、東端はSD140に接合。途中SD111に切られる。長さ6.0m、最大幅0.8m、最大深0.08mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物なし。

SD142（図面013・160）：平面形態は不整形で、北西から南東にのびる溝。南端はSK314に接合、北端はSD111に切られる。長さ14.5m、最大幅2.5m、最大深0.14mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は第１層：黄灰色砂質土層、第２層：暗オリーブ褐色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

SD143（図面013・160）：平面形態は直線的で、北西から南東にのびる溝。南端はSK392に接合、北端は消失。途中SD111に切られ、SD122と重複する。長さ4.3m、最大幅1.0m、最大深0.13mを測る。

断面形態は逆台形で、覆土は黄灰色砂質土層となる。出土遺物なし。

SD144（図面013・161）：平面形態は直線的で、南北にのびる溝。南端は土抗に接合、北端は消失。長さ3.8m、最大幅1.3m、最大深0.12mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物には中国製青磁、珠洲がみられる。

SD145（図面013・161）：平面形態は不整形で、北西から南東にのびる溝。南端はSD111に切られ、北端はSD185に切られる。長さ6.5m、最大幅5.0m、最大深0.13mを測る。断面形態は不整形で、覆土は黄灰色砂質土層を基調とする。瀬戸美濃施釉陶器が出土した。

SD146（図面013,・124）：平面形態は直線的で、北西から南東にのびる溝。南端、北端とも消失する。長さ14.5m、最大幅0.6m、最大深0.05mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD147（図面012・013・161）：平面形態はL字型。西端はSK579に接合し、東西にのび、SE045に接合して南東に折れる。南東端はSK372に接合。長さ東西18.0m、南北23.0m。最大幅1.0m、最大深0.1mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は第1層：灰色粘質土層、第2層：オリーブ褐色粘質土層、第3層：黄灰色砂質土層。出土遺物は認められない。

SD150（図面018・161）：平面形態は直線的で、南北にのびる溝。南端は開放、北端はSD151・152に分岐。長さ4.0m、最大幅1.2m、最大深0.15mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黒褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD151（図面017・018・161）：平面形態は直線的で、南北にのびる溝。南端はSD150に合流、北端はSK404・426に接合。長さ1.5m、最大幅0.4m、最大深0.12mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は灰黄褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD152（図面017・018・161）：平面形態は直線的で、南北にのびる溝。南端はSD150に合流、北端はSD170に接合。途中SD154に切られる。長さ6.0m、最大幅0.6m、最大深0.08mを測る。断面形態はU字型で、覆土は黒褐色砂質土層のみの単層。出土遺物なし。

SD153（図面017・018・161）：平面形態は直線で、東西にのびる溝。西端、東端とも消失する。長さ1.5m、最大幅0.4m、最大深0.1mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD154（図面017・018・161）：平面形態は直線的で、東西にのびる溝。東端はSK404に接合、西端は消失。長さ3.5m、最大幅0.8m、最大深0.25mを測る。断面形態は不整形で、覆土は褐灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD155（図面017・018・161）：平面形態は不整形で、南北にのびる溝。北端はSK134・135に接合、南端はSK092に接合。長さ5.5m、最大幅1.7m、最大深0.13mを測る。途中土抗に切られる。断面形態はV字型で、覆土は第1層：にぶい黄色砂粘質土層、第2層：黄灰色砂粘質土層、第3層：黄灰色（2.5Y 4／1）砂粘質土層。出土遺物は認められない。

SD157（図面016・161）：平面形態は不整形で、北西から南東にのびる溝。南端はSD066に切られ、北端はSD183に切られる。長さ19.5m、最大幅0.9m、最大深0.1mを測る。断面形態は不整形で、覆土はaセクションで褐灰色砂粘質土層、bセクションでにぶい黄褐色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

SD159（図面016・161）：平面形態は直線的で、北西から南東にのびる溝。南端、北端とも消失する。長さ5.5m、最大幅0.8m、最大深0.08mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は暗灰黄色砂質土層のみ

の単層となる。出土遺物は認められない。

SD160（図面016・161）：平面形態は直線的で、東西にのびる溝。西端はトレンチに、東端は消失する。長さ2.3m、最大幅0.9m、最大深0.06mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD161（図面016・017・161）：平面形態は直線的で、北西から南東にのびる溝。北端は概報へ開放、南端は消失する。長さ5.5m、最大幅1.0m、最大深0.28mを測る。断面形態はV字型で、覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SD162（図面017・161）：平面形態は直線的で、北西から南東にのびる溝。北端はSK461に接合、南端はSD089に切られる。長さ12.5m、最大幅0.7m、最大深0.04mを測る。断面形態はU字型で、覆土は、黄灰色砂粘質土層の単層となる。瀬戸美濃施釉陶器が出土。

SD163（図面017・161）：平面形態はL字型で、南北にのびる溝。南端は土抗に接合、北端は消失。長さ14.0m、最大幅1.8m、最大深0.15mを測る。断面形態は不整形で、覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD164（図面017・161）：平面形態は直線的で、北東にのびる溝。東端は開放、西端はSD163に切られる。長さ1.8m、最大幅0.7m、最大深0.01mを測る。断面形態は不整形で、覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD166（図面017・161）：平面形態は不整形で、北西から南東にのびる溝。南端はSD157に接合、北端は消失。長さ8.0m、最大幅0.7m、最大深0.1mを測る。断面形態は不整形で、覆土は第1層：黄灰色砂質土層、第2層：黒褐色砂粘質土層となる。出土遺物なし。SD167（図面017・161）：平面形態は直線的で、東西にのびる溝。西端はSD157に切られ、東端はSD166に切られる。長さ0.8m、最大幅0.5m、最大深0.13mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD168（図面017・161）：平面形態は直線で、北西から南東にのびる溝。北端は開放、南端は土抗に接合。長さ10.0m、最大幅0.7m、最大深0.12mを測る。断面形態はU字型で、覆土は第1層：褐灰色砂粘質土層、第2層：褐灰色砂質土層。出土遺物は認められない。

SD169（図面017・161）：平面形態は直線的で、東西にのびる溝。西端、東端とも消失する。長さ4.3m、最大幅0.3m、最大深0.05mを測る。断面形態はU字型で、覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD170（図面017・161）：平面形態は直線的で、東西にのびる溝。西端、東端とも消失する。長さ2.0m、最大幅0.3m、最大深0.11mを測る。断面形態はU字型で、覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD171（図面017・018・161）：平面形態は直線的で、東西にのびる溝。東端はSK428に接合、西端は消失。長さ2.8m、最大幅0.4m、最大深0.11mを測る。断面形態はU字型で、覆土は灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD173（図面017・018・161）：平面形態は不整形で、北西から南東にのびる溝。北端は外方へ開放、南端は消失する。長さ3.5m、最大幅1.6m、最大深0.06mを測る。断面形態は不整形で、覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD174（図面016・161）：平面形態は不整形で、東西にのびる溝。東端はトレンチに切られ、西端は消失。長さ16.5m、最大幅3.8m、最大深0.03mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黒褐色粘質土層を

基調とする。出土遺物は認められない。

SD175（図面016・161）：平面形態はＬ字形で、南北にのびる溝。南端、北端とも消失する。長さ3.5m、最大幅1.0m、最大深0.12mを測る。断面形態は不整形で、覆土はオリーブ褐色砂層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD176（図面016・161）：平面形態は直線的で、北西から南東にのびる溝。南端、北端とも消失する。長さ2.0m、最大幅0.4m、最大深0.07mを測る。断面形態は逆台形で、覆土はオリーブ褐色砂層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD177（図面016・021・161）：平面形態は不整形。北西から南東にのび、北西側壁に切られる。SD198が分岐し、南端側は消失する。長さ40m、最大幅4.3m、最大深0.42mを測る。断面形態はＶ字形。覆土はａセクションでは第１層：にぶい黄褐色砂質土層　第２層：灰黄褐色砂質土層　第３層：黄灰色細砂層に分層される。ｂセクションでは黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SD178（図面016・161）：平面形態は直線的で、北西から南東にのびる小溝。南端、北端とも消失する。長さ3.0m、最大幅0.4m、最大深0.06mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黄褐色砂層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD179（図面016・161）：軽い円弧を描き、北西から南東にのびる溝。南端はSK496に接合、北端はトレンチに切られる。長さ3.5m、最大幅0.7m、最大深0.1mを測る。断面形態は不整形で、覆土は第１層：オリーブ褐色砂質土層、第２層：暗灰黄色砂質土層、第３層：黄褐色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

SD180（図面017・161）：平面形態は直線的で、北西から南東にのびる溝。北端は外方へ開放する。南端は消失。長さ6.0m、最大幅1.2m、最大深0.08mを測る。断面形態はＵ字型で、覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD181（図面017・161）：平面形態は不整形で、南端はSD164に合流、西端はSD163に切られる。長さ10.0m、最大幅3.0m、最大深0.06mを測る。断面形態はＵ字型で、覆土は黒褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD182（図面017・022・161）：平面形態は不整形。南端はSD163に切られ、北端はSD187に切られる。長さ3.0m、最大幅3.5m、最大深0.09mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黒褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD183（図面017・022・161）：平面形態は直線的で、北西から南東にのびる溝。南端はSD163に、北端はSD187に切られる。長さ2.8m、最大幅0.8m、最大深0.09m。断面形態は逆台形。覆土は第１層：黒褐色粘質土層、第２層：黄褐色砂層となる。出土遺物なし。

SD184（図面017・161）：平面形態は直線的で、北西から南東にのびる溝。南端はSD186に切られ、北端はSK465に接合する。長さ1.5m、最大幅0.9m、最大深0.06mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黒褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD185（図面012・013・161）：平面形態は不整形で、東西にのびる溝。東端は消失、西端は井戸に接合。長さ15.5m、最大幅2.5m、最大深0.19mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物には土師器皿、珠洲が見られる。

SD186（図面016・017・022・162）：平面形態は直線で、北東端は消失し、併走するSD187と西側で合流する。長さ5.3m、最大幅１m、最大深0.14mを測る。断面形態は逆台形で、覆土はにぶい黄褐色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD187（図面016・017・022・162）：平面形態は不整形で、北東端はSK462・463に接合し、西端はSD186と合流する。長さ７ｍ、最大幅1.2m、最大深0.1mを測る。断面形態はU字形で、覆土はオリーブ褐色粘質土層の単層を有す。出土遺物は認められない。

SD188（図面016・167）：平面形態は楕円形で、北西から南東にのびる。両端とも消失。長さ8.5m、最大幅1.5m、最大深0.13mを測る。断面形態はＵ字形で、覆土は灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は珠洲がある。

SD189（図面016・167）：平面形態は不整形で、SD186・187に大きく重なり不明瞭。SD188に切られる。西端は消失。長さ15m、最大幅1.5m、最大深0.3mを測る。断面形態はＵ字形で、覆土は第１層：黄褐色砂質土層、第２層：黄灰色粘質土層、第３層：暗灰黄色細砂に分層される。出土遺物には土師器皿、珠洲がある。

SD190（図面016・021・162）：平面形態は直線的で、両端とも消失している。長さ3.6m、最大幅0.5m、最大深0.09mを測る。断面形態はU字形で、覆土はオリーブ褐色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD191（図面016・021・162）：平面形態は直線的で、北端は消失し、南端はSK485に切られる。長さ2.6m、最大幅1.1m、最大深0.42mを測る。断面形態はU字形で、覆土は暗褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SD192（図面021・162）：北東がＬ字形の溝と、北西端が消失している直線の溝が重複したように検出され、Ｌ字形の方が一段深くなっている。南端は、SK488、SD191に接合する。長さ15.5m、最大幅2.5m、最大深0.36mを測る。断面形態はＵ字形で、覆土はａセクションでは上層は灰黄褐色砂粘質土層、下層は褐灰色砂粘質土層を基調とする。ｂセクションではオリーブ褐色砂質土層の単層となる。出土遺物には珠洲がある。

SD193（図面018・162）：平面形態は直線的で、北端はSE059に切られ、南端はSD172に切られる。長さ1.7m、最大幅0.7m、最大深0.35mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黄灰色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SD194（図面018・162）：平面形態は直線的。西端はSK439に接合し、東端はSD193に切られる。長さ３ｍ、最大幅0.2m、最大深0.08mを測る。断面形態はU字形で、覆土はオリーブ褐色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD195（図面018・162）：平面形態は、北端が開放されているＬ字形。南東端はSE059に切られる。長さ5.3m、最大幅0.3m、最大深0.07mを測る。断面形態はU字形で、覆土は黄灰色砂粘質土層の単層となる。 出土遺物には土師器皿、珠洲、砥石などがある。

SD196（図面016・021・162）：西壁から北東にのびる直線の溝で、北東端は消失。長さ10.4m、最大幅0.3m、最大深0.08mを測る。SD177を南北に横切る。断面形態はＵ字形で、覆土は灰黄褐色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD197（図面016・021・162）：北西から南東にのびる直線の溝で、両端は消失する。長さ11m、最大幅1.5m、最大深0.16mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は第１層：黄褐色砂粘質土層（礫混）、第２層：黄灰色砂粘質土層となる。出土遺物には中国製青磁がある。

SD198（図面016・021・162）：北側SD177より分岐し、南端壁に切られる直線の溝。長さ３ｍ、最大幅0.5m、最大深0.12mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD199（図面021・162）：西壁より北東にのびる直線の溝。長さ8.6m、最大幅1.0m、最大深0.06mを測る。断面形態はＵ字形で、覆土は暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物なし。

SD200（図面021・162）：北側SD208より分岐し、北西から南東にのび、南端は消失する。長さ16.5m、最大幅0.6m、最大深0.14mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は灰黄褐色砂質土層となる。出土遺物には土師器皿がみられる。

SD201（図面021・162）：北西から南東にのびる直線の小溝で、両端とも消失している。長さ3.3m、最大幅0.4m、最大深0.06mを測る。断面形態はＵ字形で、覆土は灰黄色砂質土層の単層である。出土遺物は認められない。

SD202（図面021・162）：北西から南東にのびる直線の小溝で、途中が途切れ、両端とも消失している。長さ5.8m、最大幅0.3m、最大深0.09mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黄灰色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD207（図面021・162）：平面形態は不整形。南西端は消失し、北端はSD208に切られ、東端はSD210に分岐する。長さ4.5m、最大幅1.2m、最大深0.08mを測る。断面形態はＵ字形で、覆土は黒褐色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD208（図面021・162）：北壁沿いにのびた後、南東側でSD200に分岐し、北東側でSD233に合流する不整形の溝である。長さ20m、最大幅0.9m、最大深0.15mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は第１層：暗灰黄色砂粘質土層、第２層：灰黄色砂粘質土層となる。出土遺物は認められない。

SD209（図面021・162）：北西端はSD208に切られ、東端は開放している直線の小溝である。長さ0.8m、最大幅1.0m、最大深0.12mを測る。断面形態はＵ字形で、覆土は褐灰色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD210（図面021・162）：北端はSD207より分岐し、南東に蛇行した後、東端は消失する。長さ４m、最大幅0.6m、最大深0.1mを測る。断面形態はＵ字形で、覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD211（図面021・162）：平面形態は直線的で、途中一旦途切れる。西端は消失し、東端はSE058に切られる。長さ６m、最大幅１m、最大深0.07mを測る。断面形態はＵ字形で、覆土は暗灰黄色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD212（図面018・162）：西端はSE051に切られ、東端はSK436に切られる直線の小溝である。長さ1.3m、最大幅0.4m、最大深0.17mを測る。断面形態は不整形で、覆土は暗灰黄色砂粘質土層の単層である。出土遺物は認められない。

SD213（図面023・162）：平面形態はＬ字形で、北端付近は東側に落ち込み状に浅く大きく拡張し、南東にのびた後に東側に折れる。南東端はSD292に続き、さらに北側に折れる。長さは南北19m、東西は22m、東側南北７mとなる。最大幅3.5m、最大深0.28mを測る。断面形態は不整形で、覆土はａセクションでは上層は黄褐色砂質土層を基調とし、中層は暗灰黄色砂質土層、下層は黄灰色砂質土層となる。ｂセクションでは黄褐色砂質土層を基調とし、ｃセクションでは第１層：暗オリーブ褐色砂質土層、第２層：暗灰黄色砂質土層に分層される。ｄセクションでは暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物には土師器皿、八尾、珠洲、鉄滓、石製硯などが見られる。

SD214（図面018・023・162）：平面形態はＬ字形で、北東端はSD291に続き消失、南端もSK664に接合・消失する。長さは東西11m、南北7.5mとなる。最大幅1.2m、最大深0.17m。断面形態は不整形で、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD215（図面018・023・162）：北西側SD216より続き、南東にのびる直線の溝。南端は消失。南側付近でSD286を切り込む。長さ16m、最大幅1.5m、最大深0.28mを測る。断面形態は不整形で、覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物には珠洲がある。

SD216（図面023・162）：北西壁より南東にのびる直線の溝で、西側にSD217が併走し一部合流す。南端はSD215に続く。長さ23m、最大幅1.8m、最大深0.16mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物には瀬戸美濃施釉陶器、中国製青磁、八尾、珠洲、鉄滓、釘、古銭、石製砥石などがある。

SD217（図面023・162）：北壁より南東にのびる溝で、併走するSD216に一部合流している。南端は消失。長さ21m、最大幅1.2m、最大深0.12mを測る。断面形態は逆台形で、覆土はa、bセクションとも暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物には石製品の板碑がある。

SD218（図面022・023・163）：北壁より南東にのび南西側に折れるL字形の溝で、トレンチに切られる。南西先端はT字形になり消失する。南側に併走するSD221と一部合流している。長さは南北23m、東西12m、T字形先端部分4.5mとなる。最大幅1m、最大深0.25mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は上層は暗灰黄色砂質土層、下層は黄灰色砂質土層に分層される。出土遺物には土師器皿、瀬戸美濃、八尾、珠洲、鉄滓などがある。

SD219（図面018・023・163）：平面形態は直線の小溝で、南西側は溝に切られ、北東端は消失している。長さ0.7m、最大幅0.3m、最大深0.06mを測る。断面形態はU字形で、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD220（図面017・018・022・023・163）：東西にのびる不整形の溝で、東端は消失している。西側に浅く拡張して西端も消失。長さ13.4m、最大幅1.9m、最大深0.06mを測る。断面形態は不整形で、暗灰黄色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD221（図面017・018・022・023・163）：SD218の南東側に北東から南西にのびる直線の溝で、一部合流している。両端とも消失する。長さ9.5m、最大幅0.5m、最大深0.12mを測る。断面形態はU字形で、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層となる。珠洲が出土。

SD222（図面022・163）：平面形態は不整形で、先端は消失する。長さ5.5m、最大幅1.4m、最大深0.12m。断面形態はU字形で、覆土は黄褐色砂質土層の単層。出土遺物なし。

SD223（図面022・163）：直線にのびる溝で、両端とも消失する。長さ5.5m、最大幅1m、最大深0.06m。断面形態は不整形で、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層。出土遺物はなし。

SD224（図面022・163）：北西側はSD225に切られ、南東側に直線的にのびる。南端は消失している。長さ6.2m、最大幅0.7m、最大深0.11mを測る。断面形態は不整形で、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD225（図面022・163）：北西から南東にのびる直線の溝。北端はSE074に切られ、南端付近でSD224を切り消失している。長さ8m、最大幅0.8m、最大深0.12mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD226（図面022・163）：北壁より南東にのびる直線の溝で、南端はSD163に接合する。長さ31.5m、最大幅0.8m、最大深0.38m。断面形態はU字形で、覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：暗オリーブ褐色砂質土層となる。出土遺物には八尾、珠洲、釘がある。

SD227（図面022・163）：北壁に部分的に切られながら、これに沿って東西にのびる。西端は消失しており、東端もまた不明瞭である。長さ30m、最大幅3m、最大深0.12mを測る。断面形態は不整形で、

覆土は暗灰黄色砂質土層の単層。出土遺物には土師器皿がある。

SD228（図面022・163）：北壁より南東に溝に平行してのび、途中SE076に切られて一つの溝となる。南端は消失。長さ16.3m、最大幅0.8m、最大深0.25mを測る。断面形態は不整形で、覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SD229（図面016・022・163）：北西から南東にのびる直線の溝で、両端とも消失する。長さ5m、最大幅0.7m、最大深0.07mを測る。断面形態はU字形で、覆土は黄灰色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD230（図面016・022・163）：北西から南東にのびる直線の溝で、両端とも消失する。長さ5m、最大幅1.7m、最大深0.11mを測る。断面形態はU字形で、覆土は第1層：灰黄褐色砂質土層、第2層：暗灰黄色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SD231（図面022・163）：東西にのびる直線の小溝で、SD232を切り、両端とも消失する。長さ1.8m、最大幅0.3m、最大深0.06mを測る。断面形態はU字形で、覆土は黄灰色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD232（図面022・163）：平面形態は直線で、北西から南東にのびる。両端とも消失する。南端付近でSD231、SK556に切られる。長さ18.3m、最大幅1.8m、最大深0.12mを測る。断面形態はU字形で、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD233（図面021・022・163）：平面形態は直線的で、西側SD208より分岐し東西にのび、東端は消失する。長さ16m、最大幅0.6m、最大深0.08mを測る。断面形態は不整形で、覆土は灰黄褐色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

SD234（図面021・022・163）：東西にのびる直線の溝で、西端は消失し、東側は壁に切られる。長さ6m、最大幅0.5m、最大深0.14mを測る。断面形態は不整形で、覆土は黄灰色砂質土層の単層となる。近世の遺物が混入する。

SD235（図面023・163）：北西から南東にのびる不連続な直線の溝で、両端とも消失する。長さ5.5m、最大幅0.3m、最大深0.04mを測る。断面形態はU字形で、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD236（図面023・163）：北西から南東にのびる不整形の溝で、南側は併走するSD218に切られ、北端は消失する。長さ8.2m、最大幅0.6m、最大深0.15mを測る。断面形態はU字形で、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD239（図面013・163）：不整形の溝で、北端で拡張して消失し、北側付近でSD137が重なっている。中央部分はSK373、374などに切られる。南端は開放している。南側SD123に切り込まれる。長さ17m、最大幅2.2m、最大深0.12mを測る。断面形態はU字形で、覆土は黒褐色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD240（図面013・163）：土抗と重複する小溝で、長さ1.4m、最大幅0.5m、最大深0.08mを測る。断面形態はU字形で、覆土は黄灰色砂粘質土層の単層となる。出土遺物はなし。

SD251（図面012・163）：北西から南東にのびる直線の溝で、大部分がトレンチに切られる。北西端はSK041より分岐し南東端は消失している。長さ4.5m、最大幅0.8m、最大深0.1mを測る。断面形態はU字形で、覆土は灰黄褐色砂質土層の単層となる。出土遺物はなし。

SD252（図面017・018・163）：北東端はSD064に切られ、南東端は消失する直線の小溝。長さ2m、最大幅0.5m、最大深0.08mを測る。断面形態はU字形で、覆土は褐灰色砂粘質土層の単層となる。

出土遺物は認められない。

SD256（図面016・017・163）：短くのびる溝で、北端は消失、南端はSK115に接合する。長さ1.8m、最大幅0.5m、最大深0.1mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は褐灰色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD257（図面013・163）：直線にのびる小溝で、SD111に重複している。両端とも消失している。長さ2.6m、最大幅0.3m、最大深0.12mを測る。断面形態はU字形で、覆土は暗褐色粘質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD258（図面013・163）：不整形の小溝で、両端とも消失する。SD138に重複している。長さ1.5m、最大幅0.5m、最大深0.24mを測る。断面形態はU字形で、覆土は第1層：灰黄褐色粘質土層　第2層：褐灰色粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SD259（図面013・163）：平面形態は不整形で、北西端は消失、南西端は外方へ開放する小溝。長さ1.2m、最大幅0.4m、最大深0.09mを測る。断面形態はU字形で、覆土は暗褐色粘質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD263（図面013・163）：SD111に重なる直線の溝。東北端は消失し、南西端はSD122に切られる。長さ4m、最大幅0.9m、最大深0.14mを測る。断面形態はU字形で、覆土は褐灰色粘質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD265（図面013・163）：SD111に重なり、北西から南東にのびる直線の溝。西端は消失し、東端はSK384に接合する。中央部分で深く落ち込みがある。長さ13.5m、最大幅1.3m、最大深0.4m。断面形態はU字形で、覆土は黄灰色粘質土層の単層。出土遺物はなし。

SD266（図面013・018・163）：北側のSD289より続き、南端は壁側に消失する直線の溝。長さ34m（SD289部分を含む）、最大幅1.1m、最大深0.05mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黄灰色粘質土層の単層となる。出土遺物には鉄滓がある。

SD267（図面014・160）：平面形態は不整形で、南北にのびる溝。南端はSD136に合流、北端は消失。途中SD111に切られる。長さ7.0m、最大幅0.5m、最大深0.1mを測る。断面形態はU字型で、覆土は暗褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物なし。

SD268（図面009・013・160）：不整形で、南北にのびる溝。北端はSD134に切られ南端は消失。SD134と重複する。長さ14.0m、最大幅1.3m、最大深0.1m。断面形態は不整形。覆土は上層はにぶい黄褐色砂粘質土層、下層は灰黄褐色砂粘質土層。出土遺物なし。

SD269（図面019・020・163）：西端はSD286に切られ北東にのび、東側で南に折れ南東にのびるL字形の溝。SD272・276が分岐している。SD273・281に切られるが、南端はSD135付近までのびる。長さは東西29m、南北41.5mとなり、最大幅1m、最大深0.06mを測る。断面形態はU字形で、覆土は褐灰色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD270（図面019・163）：SD269の西側に沿ってのびる直線の溝。北端はSK03に接合し、南端は消失する。南端付近でSD269に切られている。長さ23.5m、最大幅0.6m、最大深0.09mを測る。断面形態はU字形で、覆土は第1層：にぶい黄褐色砂質土層、第2層：黒褐色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SD271（図面019・023・164）：北西から南東にのびる直線の溝。南北両端は開放し、途中SD269・272・273に途中切られる。長さ43m、最大幅1.7m、最大深0.33m。断面形態は逆台形で、覆土は上層オリーブ褐色砂質土層、下層はにぶい黄褐色砂質土層。出土遺物なし。

SD272（図面018・019・164）：北東から南西にのびる直線の溝で、東側はSD269より分岐し西端は消失する。長さ27.5m、最大幅0.7m、最大深0.14mを測る。断面形態はU字形で、覆土はにぶい黄褐色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD273（図面019・163）：北東から南西に蛇行してのび、東端は消失し、西端はSD286に切られる。長さ29m、最大幅1.2m、最大深0.13mを測る。断面形態は逆台形。覆土はaセクションでは第1層：黒褐色砂質土層、第2層：灰黄褐色砂質土層、bセクションでは黒褐色砂質土層になる。出土遺物には中国製青磁がある。

SD274（図面014・019・164）：北西から南東にのびる直線の溝で、北端は消失し南端は開放している。途中SD281に切られている。長さ22m、最大幅0.7m、最大深0.07mを測る。断面形態はU字形で、覆土は灰黄褐色砂質土層の単層となる。出土遺物はなし。

SD275（図面014・018・019・164）：西側SD286より分岐し北東にのびる。東側では南に折れてのびSD108に続き、南端で西に折れるコの字形の溝である。南西端はSD113・286に切られる。長さは北側東西21m、南北25m、南側東西20mとなり、最大幅0.9m、最大深0.2mを測る。断面形態はU字形、逆台形で、覆土は黒褐色砂質土層の単層となる。出土遺物には土師器皿、珠洲がある。

SD276（図面019・164）：東側SD269より分岐し南西にのびる直線の溝で、西端はSD275に切られる。長さ3m、最大幅0.6m、最大深0.1mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層である。出土遺物は認められない。

SD277（図面019・164）：東端はSD275に切られ、南西にのびる直線の溝。西端は消失する。長さ13m、最大幅1m、最大深0.03mを測る。断面形態はU字形で、覆土は黒褐色砂質土層の単層となる。出土遺物には金属製品の釘状がある。

SD278（図面024・164）：北壁から南東にのびる直線の溝で、南端は消失する。西側にSD279が併走する。長さ4m、最大幅0.4m、最大深0.08mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD279（図面019・020・024・164）：北壁より南東にのびる直線の溝で、中央部分約8m途切れる。南側部分よりSD281が分岐し、南端は消失する。長さ50m、最大幅0.3m、最大深0.05mを測る。断面形態はU字形で、覆土は黒褐色砂質土層の単層となる。出土遺物はなし。

SD280（図面014・019・164）：南北にのびる直線の溝。北端は消失し、南側A地区SD112に続き、SD109に切られる。長さ12m、最大幅0.5m、最大深0.1mを測る。断面形態はU字形で、覆土は黒褐色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD281（図面014・019・164）：SD279より西側に分岐し東西にのびる直線の溝で、西端は消失する。長さ4.2m、最大幅0.6m、最大深0.18mを測る。断面形態はU字形で、覆土は第1層：黒褐色砂質土層、第2層：暗褐色砂質土層に分層される。出土遺物はなし。

SD282（図面014・019・164）：北端は消失し南西にのび、SD113に続く。南西端はSE036に切られる。長さ3.3m、最大幅1.1m、最大深0.12mを測る。断面形態はU字形で、覆土は黄灰色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD283（図面018・019・164）：平面形態は直線の小溝で両端とも消失。長さ3m、最大幅0.5m、最大深0.19m。断面形態は逆台形で、覆土は暗灰黄色砂質土層。出土遺物なし。

SD284（図面013・018・164）：北端は消失し、南端は溝に切られる直線の小溝である。長さ1.2m、最大幅0.4m、最大深0.1mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は黒褐色砂質土層の単層となる。出土遺

物は認められない。

SD285（図面012・013・018・019・164）：西側はSD062に続く直線的な溝で、東端は消失する。長さ27m（A地区含む）、最大幅1.2m、最大深0.26mを測る。断面形態はU字形。覆土は第1層：灰黄褐色砂質土層、第2層：褐灰色砂質土層、第3層暗褐色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SD286（図面013・014・018・164）：北端はSD215に切られる。SD269・273を切り込み南東にのびSD113に続く。SD287・288と併走しており一部重なる。南側で東に折れるL字形の溝で、その先でSD113となり東にのびる。長さは南北50m、東西37mとなり、最大幅1.6m、最大深0.29mを測る。断面形態はU字形。覆土は上層は黒褐色砂質土層、中下層は黄灰色砂質土層を基調とする。土師器皿、珠洲、中国製青磁、白磁、板碑が出土。

SD287（図面013・018・164）：SD286・288に並んで南東にのびる直線の溝で、北端はSD288に切られ消失、南端はSD288に合流している。長さ18.5m、最大幅1.1m、最大深0.15mを測る。断面形態は逆台形で、覆土はaセクションでは第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：オリーブ褐色砂質土層に、bセクションで黒褐色砂質土層となる。出土遺物はなし。

SD288（図面013・014・018・164）：北端は開放され、SD286・287に併走して南東にのび、SD109に続く。南側で東に折れて北東にのびるL字形の溝である。東側先端SD104・113などに切られる。長さは南北58m、東西24mとなる。最大幅1.5m、最大深0.14mを測る。断面形態はU字形。覆土はaセクションでは第1層：黄灰色砂質土層、第2層：黒褐色砂質土層、第3層：暗オリーブ褐色砂質土層となる。bセクションでは第1層：暗オリーブ褐色砂質土層、第2層：暗灰黄色砂質土層となる。珠洲などが出土した。

SD289（図面013・018・164）：SD288の西側に南北にのびるT字形の溝で、北端は開放し、南端はSD266に続き消失する。中央部から西側にのびる部分はSE087に切られる。長さは南北33m、東西1mとなり、最大幅1.4m、最大深0.14mを測る。断面形態はU字形。覆土は第1層：黒褐色砂質土層、第2層：黒色砂質土層となる。砥石が出土している。

SD290（図面019・023・024・164）：東側SD293より分岐して南西にのび、西側で南に折れるL字形の溝で、南端はSD269に切られる。長さは東西12m、南北8.5mとなる。最大幅0.8m、最大深0.13mを測る。断面形態はU字形で、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD291（図面018・019・023・164）：東端は消失する。南西側はSD214に続き、西端で南東に折れるL字形の溝である。長さは東西12m、南北6mで、最大幅0.7m、最大深0.17mを測る。断面形態は逆台形で、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層である。出土遺物はなし。

SD292（図面023・024・164）：平面形態はコの字形で北端は消失する。他端は南東側にのび、西側に折れてSD213に続き、さらに北側に折れる。長さは東側南北7m、東西は22m、西側南北19mとなる（SD213含む）。最大幅0.8m、最大深0.12mを測る。断面形態はU字形で、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層となる。出土遺物には八尾がある。

SD293（図面019・024・164）：北西から南東にのびる直線の溝だが、途切れがみられる。両端とも消失し、途中SD290が分岐している。長さ7m、最大幅0.4m、最大深0.05mを測る。断面形態はU字形で、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層となる。出土遺物はなし。

SD294（図面017・018・164）：東西にのびる直線の溝で、東端は消失し西端は開放する。長さ3m、最大幅0.9m、最大深0.16mを測る。断面形態はU字形で、覆土は黒褐色砂質土層の単層となる。出土

遺物は認められない。

旧河道

SR01（図面009・014・018・019・093）：A地区の東壁に沿って検出された、規模の大きな河道跡をSR01とした。SR01は平成10年度調査時は西岸部のみが検出され、正確な規模は不明であったが、その下流側にあたる平成11年度調査地（旧A 1地区）で対岸側の肩部が検出され、おおよその規模が判明した。この時の知見によると10.5～10.8m、深さ1m前後の規模となる。河道自体は主軸方位をやや西側に振るものの、ほぼ直線的にのびており、A地区で検出した中世集落の東限を示す境界の役割をはたしている。このSR01はさらに下流のA 3地区でも検出されており、ここではさらにSR01から東側に分岐する支流と思われる屈曲も同時にみつかっている。SR01の肩部はほぼ直線的にのびており、自然河道をもとに、河岸の輪郭等については人工的な掘削・加工を加えている可能性が高い。またSR01内からは石組遺構が2カ所で検出されており、河川管理の一環を示す遺構とも考えられる。なお河道内からは遺物が多く出土している。出土遺物には土師器皿、瀬戸美濃施釉陶器、瓦質土器、中国製青磁、白磁、珠洲、八尾などの陶磁器類、曲物桶、底板、漆器椀、箸、下駄、刷毛、自在鉤、棒状、板状などの木製品、石製砥石、鉄滓、椀滓、刀状の金属製品などがある。

SR01石組遺構01（図面014・015・092）：SR01東岸中央付近からほぼ流れに直交する方向で、石組の張出しがみられ、これをSR01内の石組遺構01とした。石組は東岸肩部付近に集中してみられ、ここから河道の中心側に向かって7.5mほど張出して、その先端に幅1.5m・高さ0.5m前後の、平面形態が「コ」字状、横断面が台形を呈する石組を構築している。この先端部と基端の肩部との間にもまばらに石列がみられ、中央の長方形空間を囲むように石組がなされている。これを単に河道の岸側から礫を処分投棄しただけと考えるなら、わざわざ河道の中央側にまで「コ」字状の先端部が形成される理由が説明し難い。すなわちこれらの石組については、桟橋など何らかの河川構築物の一部であった可能性が指摘できよう。

SR01石組遺構02（図面093）：石組遺構01の南側上流部の川底で検出された遺構。平面形態は長方形状で、幅1.2m、長さ3.1m、高さ0.5mの規模で石積みがなされている。石積みの主軸線が河の流れに直交する点は石組遺構01に類似するが、西端側はSR01東岸の肩部に接していず、岸からやや離れて位置する。河川埋没後に上面から礫詰め土坑が切り込んだとも考えられるが、石積みの横断面は裾広がりの台形状を程しており、本来の石積みの状況を示すものであろう。やはり何らかの河川構築物の一部と考えられる。

(3) 古代の遺構

A地区のほぼ全域で、並列して連続する溝群と、水路跡、数棟の掘立柱建物が検出されている。これらの遺構は中世集落の遺構群とほぼ同一面で重複して検出されているが、切り合い関係や覆土の特徴から、中世集落に先行する時期の遺構群と考えられる。このため遺構図化の際にこれらの遺構群を下層遺構群として一括・分離した。但し時期を推察する遺物の出土はほとんどみられないことから、一応古代としたものの、古代末から中世初頭頃にかけての漠然とした時期を推定しておきたい。

掘立柱建物

SB301（図面172）：調査地の北端付近で3棟の掘立柱建物が検出されるが、SB301はこのうちSB302と重複して位置する。梁行1間（6.38m）、桁行3間（3.04m）、床面積19.4㎡の規模を数える。建物の棟方向はN87°W。柱穴形態は円形～楕円形で、径0.66～0.34m、深さ0.15～0.09mを測る。柱穴

内の覆土は黒褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

SB302（図面172）:SB302と重複して位置する。梁行１間（6.10m）、桁行３間（3.34m）、床面積20.4㎡の規模を数える。建物の棟方向はN85°E。柱穴形態は円形～楕円形で、径0.7～0.32m、深さ0.25～0.06m。柱穴内の覆土は黒褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

SB303（図面172）：SB301・302の南東側に接して位置する掘立柱建物。梁行１間（4.34m）、桁行２間（3.52m）、床面積15.3㎡の規模を数える。建物の棟方向はN36°W。柱穴形態は円形～楕円形で、径0.8～0.32m、深さ0.21～0.09mを測る。柱穴内の覆土は黒褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

溝

SD253（図面163・169～171）：調査地の中央を斜めに横切るようにして北西方向にのびる、比較的規模の大きな溝群が検出されている。これらの溝群は平面形態は直線的だが輪郭は不整形であり、自然の流路に近い形態である。該当するのはSD253・254・299である。このうちSD253は、SD254と並走しその東側に位置する溝で、南東側上流部で両者は合流してひとつの溝を形成している。上流部ではさらに北側に分岐する溝がみられるが、未掘削であり個別遺構名は省略した。SD253については長さ32.5m、幅１m、深さ0.06mの規模を有す。覆土は黒褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SD254（図面163・169～171）:SD253と並走し、西側に位置する溝で、長さ44.5m、幅１m、深さ0.24mの規模。覆土は黒褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SD296（図面161・169・172）：A地区の北東端付近に位置する。南東側はSD299を基端とし、すぐにSD298が西側に分岐し、下流側で今度はSD297が東側に分岐した後、再度SD298と合流している。溝自体は軽い円弧を描き、SD298とともに、長さ25mの楕円状の周溝を形成している。幅1.7m、深さ0.1mの規模。出土遺物は認められない。

SD297（図面172）:SD296から東側に分岐する溝。幅1.2m、深さ0.11mの規模で、長さ約３mほどでSR01と重複する。出土遺物は認められない。

SD298（図面172）:SD296とともに楕円周溝を形成する。長さ19m、幅1.0m、深さ0.16mの規模を有す。出土遺物は認められない。

SD299（図面172）：自然水路であるSD253・254より北側40m程離れて位置するが、流路の方位はほぼ同じである。掘削部分は約35mであるが、長さは50m以上におよぶ。南東端はSR01に切られる。北西端は調査地区外にのびる。幅4.8m、深さ0.94mの規模を測る。覆土は黒褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

耕作関連小溝群（図面169～171）:耕作に関連すると考えられる小溝群が、SD254の西側一帯で密に検出されている。いずれもSD254に直交する方向で、南東側に向かって20～30mほどのびるが、先端は浅くなり消失する。個々は幅0.3m～0.6m、深さ0.2m～0.4m程度の規模で、北東側の端部はSD254と接するものが多い。南西端はいずれも浅くなり途切れている。覆土はほぼ地山と同色・同質のものから黒褐色系のものまで幅があるが、同一構内でも土色は必ずしも均一ではなく、単に堆積の際に覆土の土質がそれぞれに異なった結果であろう。溝内からの出土遺物はほとんど認められない。

3　A２地区の調査

A２地区は、A地区の東限となる旧河道SR01を挟んだ東岸部に位置する。調査地は、神明社の参

道の両脇に位置する２つの調査区と、町道を挟んでさらに東側に位置し、北側の用水に沿って細長くのびるトレンチ状の調査区とに分散する(図面173)。調査面積は３カ所合計で358㎡。これらの調査区は共に後世の削平が遺構検出面にまで達している。このため耕作土直下の検出面が直接地山になるか、ないしは部分的にさらに下部の砂礫層が露出する状態であった。このなかで検出遺構としては、神社前北地区で若干の土坑を、用水路際地区で土坑・溝などを検出した。なお出土遺物には珠洲・越中瀬戸などがあるものの、同時に現代までの遺物が混入している。また遺構から直接出土する遺物はみられず、従って遺構の帰属時期も現状では不詳な点が多い。このことから当調査区周辺は、集落内でも建物群の展開する地域の縁辺に相当するものと考えられる。なお検出遺構の内容については次の通りである。

土坑

SK01（図面173）：平面形態は楕円形で、規模は長径2.23m、短径1.44m、深さ0.29mを測る。覆土はオリーブ褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK02（図面173）：平面形態は円形で、規模は径0.84～0.88m、深さ0.15mを測る。覆土はオリーブ褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK03（図面173）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.74m、短径1.35m、深さ0.47mを測る。覆土は暗灰黄色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK04（図面173）：平面形態は隅丸長方形で、規模は長辺1.18m、短辺0.78m、深さ0.1mを測る。SK05およびSD01を切り込んでいる。覆土は第１層：明灰黄色砂質土層、第２層：黒褐色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

SK05（図面173）：平面形態は不整形で、一部が調査区外にのびる。規模は幅1.61m、深さ0.16mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

SK06（図面173）：SD01・SK04に切られるため平面形態は不明。幅2.44m、深さ0.15m。覆土は上層黒褐色砂粘質土層を、下層は黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物なし。

溝

SD01（図面173）：長さ1.32m分のみが検出される。幅0.6m、深さ0.26mで、溝の横断面はＵ字状を呈する。覆土はオリーブ褐色砂層を基調とする。出土遺物は認められない。

４　Ａ３地区の調査

Ａ３地区は前述の神社北側の水路を挟んでＡ地区の北側に位置し、掘削面積は793㎡と比較的広い調査区である。基本的には南側のＡ地区で検出された旧河道SR01の下流側の流路が調査地の中央を通過しており、検出遺構はこのSR01のみといった状況である。

旧河道

SR01（図面025・174）：南壁側での規模は幅22m、深さ0.72mを測る。SR01は調査区のほぼ中央を北に向かってのびるが、西肩部が直線的にのびるのに対し、東肩部は途中でＬ字状に東側に向かって屈曲している。この屈曲はSR01から分岐する支流の付け根の一部とも考えられるが、部分検出に過ぎず、憶測の域をでない。流路内の土層は規模の大きな旧河道だけに複雑な様相を示すが、基本的には中央がへこむレンズ状堆積をみせている。なおＡ地区の旧河道内でみられたような石組遺構は、Ａ３地区では検出されていない。

5　A５地区の調査

A５地区は先の用水のさらに西側下流部分の左岸に接して設定された細長いトレンチ状の調査地区で、東端はA地区に接して連なる。当然検出遺構もA地区から続く内容のもので、中世遺構が主体となる。但し細長いトレンチ調査区のため、掘立柱建物は確認できない。また西端に行くに従い遺構密度も低下するようである。

土坑

SK01（図面175・176）：平面形態は円形で、規模は径0.3m、深さ0.08mを測る。覆土は灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK02（図面175・176）：平面形態は不整形で、後世の攪乱のため正確な規模等は不明。幅1.36m、深さ0.35mを測る。覆土は黄灰色砂質土層を基調とする。珠洲が出土する。

SK03（図面175・176）：不整形の大型土坑で南北両側が調査地区外となる。幅3.80m、深さ0.22mの規模。覆土は黄褐色砂質土層を基調とする。土師器皿、八尾が出土する。

SK04（図面175・176）：平面形態は不整形で、正確な規模は不詳。幅2.4m、深さ0.25mを測る。覆土は上層暗灰黄色砂質土層、下層は黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物なし。

SK05（図面175・176）：平面形態は不整形で、正確な規模は不詳。幅6.43m、深さ0.87mを測る。覆土は黒褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK06（図面175・176）：平面形態は不整形で、正確な規模は不詳。幅2.05m、深さ0.43m。覆土は上層、下層は黄褐色砂質土層等を基調とする。出土遺物なし。

溝

SD01（図面175・176）：正確な規模等は不詳。幅1.42m、深さ0.29mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。砥石が出土している。

6　B１地区の調査

B１地区は、A地区の北側水田中にある一町四方の屋敷地（舟木邸）の、西辺境界に沿って南北に設定した、細長いトレンチ状の調査区である。調査区全域に近代の舟木邸の堀の掘削および、土堤の築造に伴うと考えられる盛土が約1.5m余り堆積していた。地山の砂礫層上面まで掘り下げて遺構の検出を行ったが、旧地形である谷状の落ち込みを調査区の南北端でそれぞれ１ヶ所ずつ検出したのみである。出土遺物には珠洲・砥石などがあるが、砂礫層直上まで近代の遺物がみられることから、これらの遺物も掘削時の混入と考えられる。

7　道場Ⅱ遺跡の調査

道場Ⅱ遺跡は道場Ⅰ遺跡の北東側200～400mほど離れて所在する。遺跡範囲も東西50m、南北150mと小規模である。調査地区は婦中企業団地外周道路の南辺に接して位置する。調査は小規模なトレンチ調査で、掘削面積も111㎡に留まる。

(1)　基本層序

基本層序は、Ⅰ層：黒褐色粘質土層（現耕作土）、Ⅱ層：黄灰色砂質土層、Ⅲ層：灰色砂質土層、Ⅳ層：オリーブ黒色粘質土層、Ⅴ層：暗灰黄色砂質土層または砂礫層で、Ⅱ・Ⅲ層が遺物包含層、Ⅲ層上面、Ⅳ・Ⅴ層上面の２面が中世の遺構検出面となり、Ⅲ層を中世上層、Ⅳ・Ⅴ層を中世下層とした。

遺構検出はⅣ・Ⅴ層が中心となり、Ⅲ層ではSD02のみを検出した。Ⅳ層は調査区の西半部では比較的安定してみられるが、東へ向かうに従って希薄となり、東部ではⅤ層の砂礫層上で遺構を検出した。

(2) 検出遺構

検出した遺構は溝・柱穴・土坑・掘立柱建物などで、遺構は調査区の西部・東部に集中する傾向があり、中央部では希薄となっている。

掘立柱建物

SB01（図面178）：梁行１間（3.68m）、桁行２間以上の規模で、建物の北側は調査地区外となる。棟方向はＮ６°Ｅ。柱穴形態は円～楕円形で径0.32m～0.4m、深さ0.14m～0.28m。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。大型土坑SX01が重複する位置にあり、建物に伴う遺構の可能性がある。柱穴内からの出土遺物は認められない。

SB02（図面178）：建物は梁行２間（3.4m）、桁行２間以上の規模で、建物の南側は調査地区外となる。棟方向はＮ８°Ｗ。柱穴形態は円～楕円形で、径0.38m～0.6m、深さ0.9m～2.2m。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。柱穴内からの出土遺物なし。

SB03（図面178）：建物は梁行１間（3.0m）、桁行２間以上の規模で、建物の南側は調査地区外となる。配置上SB02と大きく重複するが、棟方向は斜交する。柱穴の切り合い関係も不詳で先後関係は不明。方形プランを有し、床面積11.1㎡を数える。棟方向はN36°Ｗ。柱穴形態は円～楕円形で径0.5m～0.52m、深さ0.1m～0.2m。柱穴内覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。柱穴内からの出土遺物は認められない。

土坑

SK01（図面178）：平面形態は隅丸方形で、規模は一辺1.40～1.72m、深さ0.37mを測る。覆土は第１層：黒褐色砂質土層、第２層：オリーブ褐色砂質土層、第３層：灰黄色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

SK02（図面178）：平面形態は不整形で、一部調査区外のため正確な規模は不詳。幅0.90m、深さ0.28mを測る。覆土は黄灰色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK03（図面178）：平面形態は不整形で、一部が調査外となるため、正確な規模は不詳。幅0.52m、深さ0.28mを測る。SK04に切り込まれる。覆土は上層黄灰色粘土層、下層は暗灰黄色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

SK04（図面178）：平面形態は不整形で、一部が調査外となる。幅1.05m、深さ0.21mを測る。SK03を切り込む。覆土はオリーブ黒色粘質土層。出土遺物は認められない。

SK05（図面178）：平面形態は楕円形で、長径1.39m、短径0.90m、深さ0.28mを測る。隣接土坑に一部肩が切り込まれる。覆土は黒褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

SK06（図面178）：平面形態は楕円形で、長径1.09m、短径0.69m、深さ0.30mを測る。SK07の肩を切り込む。覆土は暗灰黄色～黒褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物なし。

SK07（図面178）：平面形態は楕円形で、長径0.70m、短径0.45m、深さ0.18mを測る。SK06に一部肩が切り込まれる。覆土は暗灰黄色～オリーブ褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK08（図面178）：平面形態は隅丸方形で、規模は一辺0.60～0.67m、深さ0.15mを測る。覆土は黒褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

大型土坑

SX01（図面178）：SB01と重複する位置にある大型土坑で、北側が調査区外となる。平面形態は隅丸方形か長方形と考えられる。幅2.35m、深さ0.20mを測る。覆土はオリーブ褐色砂礫層となる。覆土中には炭化物が多量に含まれ、底面で一部に固まりがみられる。覆土中からは中世土師器片が少量出土しているのみで、焼土や焼石などは含まれない。覆土の観察から、土坑は徐々に埋まっていったものではなく、一度に埋め戻された状況と考えられる。礫層まで掘り込んだ後に、意図的に炭化物を敷き詰めたのであろう。

SX02（図面178）：平面形態は楕円形で、長径2.39m、短径1.98m、深さ0.14mの規模を測る。覆土はオリーブ黒色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

8　遺　　物

出土遺物の主体をなすのは、A地区の中世集落に伴う出土遺物である。内訳は土師器・土師質土器・瓦器・瓦質土器・中国陶磁器（青磁・白磁・青白磁・鉄釉陶器等）、瀬戸美濃施釉陶器・山茶椀・八尾・珠洲などの土器・陶磁器・漆器・箸・下駄・曲物・木札・井戸枠材・建築材などの木製品、銅製提子・刀子・釘・キセル・銅銭などの金属製品、板碑・五輪塔・石鍋・硯・砥石・石臼などの石製品、烏帽子、鉄滓などがある。またこれらの中世遺物に比べると少量であるが、古代の須恵器・土師器・土錘、近世の越中瀬戸・越中丸山・内野山・唐津・伊万里などの施釉陶磁器も出土している。A地区以外では、A２・A３・A５・B１および道場Ⅱ遺跡でも遺物の出土がみられるが、量的には多くない。報告の中心となるA地区の土器・陶磁器では、まず包含層・遺構出土の区別無く、全ての遺物を焼物別・器種別に分類し記述した。次いで遺構出土の土器・陶磁器のみ、各遺構単位で実測図を再掲載した。他地区の土器・陶磁器については量も多くないことから、地区ごとの記述とした。木製品、石製品、金属器製品その他については、各地区毎の出土遺構単位で実測図を掲載・記述した。

(1)　土器・陶磁器（図面179～249）

１．A地区出土土器・陶磁器（焼物別・器種別）

土師器皿（図面179～185）

小型供膳容器で最も多いのは土師器の皿類である。道場Ⅰ遺跡の土師器皿の場合、主体となる時期が13～15世紀であることもあり、大半が手捏ねの非回転台成形の土師器皿で占められており、「ロクロ土師器」と呼ばれる回転台成形の土師器皿はきわめて少ない。土師器皿は、いわゆる広義の京都系土師器皿といわれるものに該当する。これらの土師器皿は、少数の搬入品を除いて在地生産されたと考えられるが、形態・手法には地域色がみられる。すなわち祖型となる京都系を比較的忠実に模倣するものから、形態・手法とも京都系とはかなり異なるものまで、様々な地域型が認められる。土師器皿の型式分類と編年試案については現在検討途上であるが、本書では当財団の「紀要第６号」で明らかにした分類試案を準用して記述を進めることにする。基本的な分類は次の通りである。

・**A～D類**：模倣の対象となった京都系の土師器皿を、比較的忠実にコピーしているものをA～D類とする。成形手法は基本的に手捏ねであるが、一部回転台成形のものも存在する。

・**Z類**：成形手法は基本的に手捏ねと考えられるが、口縁部の形態や成形手法などに在地的特色が顕著なものをZ類に一括する。

・**K類**：低速回転台成形のもので、従来から「ロクロ土師器」と称されているものをK類とする。

A１類（図面179-001～008）：典型的な京都系模倣と考えられる特徴を有す。形態は、平底気味の平坦

な底部から、体部が外傾気味に深く立ち上がり、口縁部は軽く外傾するか内湾する。端部は押しナデにより面を有する。008は口縁部二段ナデ手法を有する。法量的には大・中・小３法量に分離できるが、大・中については破片資料でもあり、境界がそれほど明瞭ではない。

Ａ２類（図面179-009～012）：器高が低く平底気味の平坦な底部から、口縁部が直接浅い角度で短く内湾する。口縁端部は押しナデされ面を有する。本調査地では小皿のみ少数がみられる。

Ａ３類（図面179-013～027）：Ａ２類に比べやや深身である。平底気味の平坦な底部から体部・口縁部が屈曲・外反し、口縁端部は丸くおさめる。形式的特徴からさらに細分が可能。本調査地では小皿のみの構成で、明確な大皿の出土資料は見いだし難い。

Ｋ類（図面179-028・029）：いわゆる「ロクロ土師器」の皿類の出土はきわめて少ない。このうち028は柱状高台皿の底部破片。029は杯状の深い皿で、時期的には平安時代まで遡る可能性がある。

Ｂ１類（図面179-030～107、図面180-108～204、図面181-205～216）：丸底ないしは丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。Ｂ類の中で最も長く存続する型式だが、それだけに顕著な特色に欠ける傾向がある。法量構成では小皿が多い。中皿・大皿では両者の法量の境界はあまり明瞭でない。大皿と思われるものも、中皿的な中途半端な法量のものが多い。

Ｂ２類（図面181-217～284）：扁平だが、丸底ないしは丸底風の底部から体部が内湾気味に開く。口縁部との境界はあまり明瞭でない。口縁部は短く外傾するか、ないしは軽く外反する。端部は鋭く仕上げるものが多い。法量構成では大皿と小皿に概ね二分され、中皿的な法量ものもは少ない。

Ｂ３類（図面181-285～305）：体部が明確でなく、丸底ないしは丸底気味の扁平な底部から口縁部が外傾気味に短く直線的に開く形態。端部は鋭く仕上げるものが多い。大皿と小皿の２法量がみられる。

Ｂ４類（図面182-306～320）：扁平な丸底の底部から、口縁部を短くつまむように内側に屈曲させる。口縁端部は丸く納めるものが多い。本調査地では小皿のみで、大皿に該当するものはみられない。

Ｂ５類（図面182-321～336）：「紀要第６号」にはなく、後述のＺ１類から分離して新たに設定した型式。平坦で平底の底部から口縁部が強く内湾して立ち上がる形態。口縁端部は丸くおさめる。

Ｚ１類（図面182-337～354）：器高は低く扁平である。平底の底部で体部はなく、底端部から口縁部を短く折り曲げ上方につまみ上げる。端部は鋭く仕上げる。本調査地の場合小皿のみの構成で、大皿に該当する型式のものはみられない。

Ｚ２類（図面182-355～376）：やや丸みを帯びた平坦な底部から、体部が強く屈曲して立ち上がり、軽く外反する形態である。口縁部は幅広で端部は丸く納める。器壁も薄く、仕上げも良い。かなり特徴的な器形である。法量構成も独特で、10～12cmの中・大皿的法量のものが過半を占める。

Ｚ３類（図面182-377）：１点のみだが、典型的なＺ３類が出土している。径の小さな平底の底部から体部が斜外方へ開き、口縁部は短くＳ字状に屈曲させる形態。このＳ字状口縁がＺ３類の大きな特徴である。復元口径11.8cmで中皿的法量である。

Ｚ５類（図面182-378～410、図面183-411～416）：底部はやや扁平な丸底で、体部との境界は明瞭でない。体部は緩やかに内湾して開き、口縁部は短く強く外反させる。口縁端部は鋭く仕上げる。また法量については大・中・小の３法量構成と考えられる。

Ｚ６類（図面183-417～424）：完存するものがなく、あまり良好な資料はみられないが、417～424をＺ６類とする。底部は丸底風で、体部は緩やかに内湾した後、口縁部は直線的に外傾する。体部と口縁部の境界付近が最も肥厚し、端部に向かって鋭く仕上げる。

Z９類（図面183-429～445）：器壁はやや厚めで、丸底の底部から幅広の口縁部が大きく外反し、口縁端部は鋭く仕上げる。形態は、いわゆる「へそ皿」の二次的模倣と考えられるが、口縁端部のＳ字状屈曲はみられない。大・中の２法量構成で、大皿の法量はあまり明確でない。

Z12類（図面183-425～428）：やや丸みを持った平底の底部から体部が浅く直線的に開き、その先端部分を狭い幅の口縁部とする。端部は鋭くおさめる。小皿・中皿相当の２種の法量がみられる。

Ｃ１類（図面183-446～453）：丸底で深みのある底部から体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部は幅広で屈曲しながら軽く外反する。体部の立ち上がり部から口縁端部までが大きく緩やかなＳ字状を描くものが多い。かなり特徴的な器形なので識別は比較的容易である。法量は中・大皿相当のものとなる。小皿に該当するものは、本調査地では認められない。

Ｃ２類（図面183-454～500、図面184-501～561）：Ｂ１・Ｂ２と並んで、数量的に最も多い型式のひとつである。形態的特徴もシンプルなもので、丸底の底部から深みのある体部強く内湾して立ち上がる。口縁部は直立気味につまみあげ、端部は鋭く仕上げる。一応大・中・小の３法量構成と考えられるが、大皿と中皿の法量的な境界はあまり明確でない。図示したＣ２類のうち前半の454～520がＣ２類の典型例と考える。続く521～561は器高が低く扁平気味のＣ２類である。

Ｃ３類（図面184-562～582、図面185-583～617）：狭い丸底基調の底部と体部を有するが、器高が低く扁平である。口縁部も浅く斜外方へ大きく開く。口縁部は端部に向かい鋭く仕上げる。一応大・中・小の３法量を基本構成とするようである。

Ｃ５類（図面185-618～635）：器高は低く扁平で、丸底の底部から体部・口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。とくに口縁端部は鋭くつまみあげるように仕上げる。かなり特徴的な器形で、識別は比較的容易である。一応大・中・小の３量がみられる。

Ｃ６ａ類（図面185-636～643・650）：径の小さな平底の底部から体部・口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。内底面の見込み外縁に沿って、圏線上の凹線が巡るものがみられる。口縁端部は軽くつまみあげ鋭く仕上げる。いわゆる「へそ皿」の模倣と考えられる器形。但し、成形手法は手捏ねではなく、回転台成形である点が大きく異なる。これは底部外面に残る回転糸切り痕から確認できるが、大半の事例においては、この回転糸切り痕はナデ消しされ残されていない。このためこれまでは手捏ね成形のものに含めて記述していた。しかしその後この回転糸切り痕が消しきれずに残存する事例を数例確認することができ、手捏ね成形でなく回転台成形であることが判明した。このＣ６ａ類は、器壁も薄く精良で、焼成も良好なものが多い。現状では小皿が過半を占めるが、中皿相当の法量のものも１点（650）みられる。以上からもわかるように、Ｃ６ａ類は形態・手法ともきわめて特徴的な型式であり、小破片でも識別は比較的容易である。

Ｃ６ｂ類（図面185-644～648）：基本的な形態が「へそ皿」模倣である点Ｃ６ａ類と同様で、当初一括してＣ６類としていたが、底部が平坦な平底でなく丸底で回転糸切り痕も未確認なため、両者を分離しＣ６ａ類・Ｃ６ｂ類とした。このうち644～648がＣ６ｂ類に該当する。小皿以外に647・648のように大皿の法量が見られる点も、Ｃ６ａ類とはやや異なる。

Ｃ６ｃ類（図面185-651～653）：基本的にＣ６ａ類と同形態だが、こちらは法量が大きく大皿の器形である。またいずれもは破片資料であり、底部の回転糸切り痕も確認できていない。このため一旦はＣ６ａ類とは区別し、Ｃ６ｃ類に分離しておく。

Ｄ１類（図面185-654）：径の小さな平坦な底部の底端を強く折り曲げ、体部から口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。端部は上方に丸くつまみあげる。本調査地では１点のみが該当する。全般に道場Ｉ

遺跡ではＤ類の出土は少ない傾向にある。

Ｄ２類（図面185-655～658）：径の小さな底部から体部・口縁部が「S」字状に屈曲するが、屈曲の度合いは弱く直線的で、端部のつまみあげも弱い。やはり破片資料が主体で、完存例に欠けている。

Ｄ４類（図面185-649）：器高が低く底部は丸みを帯びる。底部から口縁部にかけての屈曲は弱く、浅い角度で側方に大きく開く。端部のつまみあげは弱い。

本調査地出土土師器Ⅲの形式分類は以上である。次いで各型式の相対編年上の位置づけについて簡単に触れておく。Ａ１類：001・004～007＝前Ⅵ期、002・003・008＝前Ⅶ期、Ａ２類：009～012＝前Ⅴ～Ⅶ期、Ａ３類：013～018＝前Ⅴ期、019～022＝前Ⅵ期、024～027＝前Ⅶ期、Ｋ類：028・029＝前Ⅶ期以前、Ｂ１類：030～034、108＝前Ⅵ期、035～107、109～138＝前Ⅶ～Ⅷ期、139～189＝前Ⅸ～後Ⅰ期、190～204、206～216＝後Ⅰ～Ⅱ期、205＝後Ⅲ期、Ｂ２類：279＝前Ⅵ期、217～278、280～284＝前Ⅵ～Ⅶ期、Ｂ３類：285～305＝前Ⅵ期、Ｂ４類：306～310＝前Ⅴ～Ⅵ期、311～320＝前Ⅶ～Ⅷ期、Ｂ５類：321～325＝前Ⅴ～Ⅵ期、326～336＝前Ⅶ～Ⅷ期、Ｚ１類：337～345＝前Ⅳ～Ⅵ期、346～354＝前Ⅶ～Ⅷ期、Ｚ２類：355～357＝前Ⅴ期、358～362＝前Ⅵ期、363～370＝前Ⅶ期、371～376＝前Ⅷ期、Ｚ３類：377＝前Ⅳ期、Ｚ５類：378～385＝前Ⅷ期、386～397＝前Ⅸ期、398～410＝後Ⅰ期、411～414＝後Ⅱ期、415・416＝後Ⅲ期、Ｚ６類：417～422＝前Ⅶ～Ⅷ期、423・424＝前Ⅸ期、Ｚ９類：429～437＝後Ⅱ期、438～445＝後Ⅲ期、Z12類：425～428＝後Ⅲ期、Ｃ１類：446～453＝前ⅧＣ２類：454～520＝前Ⅷ～後Ⅰ期、521～561＝後Ⅰ期、Ｃ３類：562～597＝前Ⅷ～Ⅸ期、598～616＝後Ⅰ～Ⅱ期、617＝前Ⅸ期、Ｃ５類：618～620＝前Ⅸ期、621～626＝後Ⅰ期、627～635＝後Ⅱ期、Ｃ６ａ類：636～643、650＝後Ⅰ期、Ｃ６ｂ類：644～648＝後Ⅱ期、Ｃ６ｃ類：651～653＝後Ⅰ～Ⅱ期、Ｄ１類：654＝後Ⅱ期、Ｄ２類：655～658＝後Ⅱ期、Ｄ４類：649＝後Ⅲ～Ⅳ期。

以上の土師器Ⅲに関する型式分類と編年は、もとより記述の便宜を計るために行ったものであり、個々の遺構における他遺物との共伴関係などを検討した上での結論ではない。周知のように土師器Ⅲは形態・手法とも型式属性に乏しい傾向にあり、破片資料にあってはその傾向はさらに加速する。とくに単独出土の土師器Ⅲ１点をもって時期を正確に比定することは、困難な場合が多い。従って他の年代観の明確な遺物との共伴関係や遺構からの出土状況も勘案したうえで、より慎重に帰属時期を推定する必要があろう。以上の理由により、上記の土師器Ⅲの相対編年上の位置づけは、あくまでも参考とし、詳細時期については他出土遺物を含む個々の遺構単位のなかで再度検討していきたい。

中国陶磁（図面186・187・189）

Ａ地区出土の中国陶磁には青磁・白磁・青白磁・鉄釉陶器などがある。最も多いのが碗・Ⅲ類で、四耳壷や水注といった袋物の器種は少ない。また少量だが、瀬戸美濃の鉄釉天目茶椀に混じって、中国製の鉄釉天目茶椀が出土している。

青磁（図面186-659～686、688～717、図面187-718～722）：659～679は外面に鎬蓮弁を有する龍泉窯系青磁碗の破片。概ね大宰府分類のＩ５ｂ類に相当する。680～686、688～692は、口縁端部を強く外反させるタイプの龍泉窯系青磁碗。上田分類のＤ-Ⅰ～Ⅱ類に相当する。大半が無文だが、681のみ内面にヘラ描きの花文がみられる。693は口縁端部が短く内湾する青磁碗。694は口縁部外面に雷文帯を有する青磁碗の破片。上田分類のＣ-Ⅱ類に該当する。内面にもヘラ彫りの文様がみられる。695は口縁部を欠失するが、上田分類のＥ類に相当すると考えられる青磁碗。内底面中央に崩れた花文のスタンプがみられる。696は底部のみの破片だが、古手の龍泉窯系青磁碗と考えられる。内底面の見込みにはヘラ片彫りで花文を描く。大宰府分類のＩ２ａ類に該当する。711～714はいずれも青磁碗の底部破片

である。697・699・701・702・712・713は内面見込みにスタンプやヘラ描きで花文を表現したもの。700は底部外面に「十」文字状の記号を朱で描いている。内面は蛇の目釉剥ぎされる。706は外面に鎬蓮弁が確認できる。715、716は口縁端部を短く外反させて丸くおさめ、体部外面にヘラ彫りの平行凹線を巡らす青磁の碗。717も龍泉窯系青磁碗と考えられる。外面にヘラ描き凹線と縦方向の櫛描き文が、内面にもヘラ描きとスタンプ文が施される。718は龍泉窯系青磁の小碗。体部は短く内湾し、口縁端部は丸くおさめる。719は同安窯系青磁の小皿。内面見込みに櫛描きのジグザグ文とヘラ片彫り文を組み合わせて描く。体部外面にも斜方向に細かな櫛描き文を施す。やや上げ底となる外底面は施釉されず露胎とする。720は口縁部が大きくS字状に屈曲・外反する皿と考えられる。721は小型の壷の体部破片。722は水注の体部破片と考えられる。

白磁（図面186-687、図面187-723～743、図面189-857）：687は白磁碗の口縁部破片と考えられる。733・734はいわゆる華南産の白磁碗。733は玉縁状口縁の碗で、大宰府分類のⅣ類に該当する。734は端反りの碗で、大宰府分類のⅤ類ないしはⅧ類に該当する。723～732は、森田分類D群に相当する白磁杯・小皿と考えられる。723～725は多角杯の体部破片。723は体部外面に凸スタンプ文がみられる。成型時に当てる外型に文様を掘り込んだのであろう。726～729、857は高台付き小皿の底部破片である。外面は体部下半以下が露胎となっている。730～732は白磁高台付き小皿で、いずれも高台に抉り込みをいれている。また内面にはこの抉り込みに呼応する個数の目跡が残る。体部外面の下半以下は施釉されず、露胎となる。735は口縁部が内湾する白磁の小皿。736・737は口縁端部が露胎となる、いわゆる口禿げの白磁である。739は白磁小碗の口縁部破片で、口縁端部は面取りされる。740は白磁合子の蓋で、天井部に蓮弁文が凸線スタンプされる。741は白磁四耳壷の底部破片である。高台および外底面は露胎となる。742・743は白磁水注の破片。742は頸部破片で、折損した取っ手接合部が残る。743は注口部分の破片である。

青白磁（図面187-744）：744は青白磁の梅瓶の底部破片である。体部外面にヘラ彫りによる文様の一部が観察される。高台接地面から外底面は露胎となる。

鉄釉天目茶椀（図面189-828）：中国建窯系の鉄釉天目茶椀の底部破片である。外面の施釉は体部中位までで、以下削り出し高台部を含めて露胎となる。

山茶椀（図面187）

山茶椀（図面187-746～752）：道場Ⅰ遺跡A地区では、富山県内では珍しい東海地方産の山茶椀が出土している。口縁部は屈曲外反するもの（748）と、小さな玉縁状に肥厚させるもの（749～752）がある。底部には断面三角形の簡単な貼り付け高台が付く。体部の器壁は薄く、精良な胎土で堅緻に焼き上げられている。東海系山茶椀窯のなかでも富山県寄りに位置する、東濃・明和窯の製品に相当し、藤澤編年の7型式に相当する。

瀬戸美濃施釉陶器（図面187～189）

瀬戸美濃施釉陶器の出土量は、中国陶磁よりはるかに多く、器種も多様である。量的には灰釉平椀が最も多く、次いで灰釉卸皿がこれに続く。鉄釉では天目茶椀が多く目に付く。また四耳壷、瓶子、水注といった袋物の出土もみられる。

無釉入子（図面187-745）：745は無釉入子の破片で、口縁部がわずかに内湾しながら開く形態。内面側には焼成時に付着した自然釉が観察される。

灰釉四耳壷（図面187-753）：753は灰釉四耳壷の口縁部破片で、口縁部は外側に肥厚した玉縁状口縁となる。藤澤編年の前Ⅱ期に相当する。

灰釉・鉄釉花瓶（図面187-754・755、図面189-830・831・833・858）：754は灰釉花瓶Ⅲ類（尊式花瓶）の体部破片で、藤澤編年の後Ⅳ期古段階に比定される。755は鉄釉花瓶（大）の体部破片で、体部外面にはヘラ描きで草花文が描かれる。所々釉が剥脱している。藤澤編年の中Ⅰ～Ⅱ期に比定される。830・831は小型の鉄釉花瓶。830は頸部の、831は体部の小破片である。いずれも藤澤編年中Ⅰ～Ⅱ期に比定される。833は灰釉花瓶の口縁部破片。体部中位から口縁部が内側にすぼまるように内湾し、口縁端部は短く上方に屈曲させる。体部中位最大径付近に３条の沈線が施される。口縁部内外面および内面は露胎とする。藤澤編年中Ⅲ～Ⅳ期に比定される。858も灰釉花瓶の体部破片。藤澤編年後期のなかでに位置づけられる。

灰釉水注（図面187-756、図面189-832）：756は灰釉水注の体部破片で、外面に３条の沈線がみられる。藤澤編年中Ⅰ～Ⅱ期に比定される。832は灰釉水注の口縁部破片。口縁部は外反して開いた後に端部を内側に短く屈曲させ、玉縁状とする。口縁端部直下まで貼り付けられた取っ手の接合部が外面に残存している。藤澤編年の前Ⅱ期に比定される。

灰釉・鉄釉瓶子（図面187-757～763）：757～759、761・762は青白磁の梅瓶模倣の瓶子Ⅰ類である。757・761が鉄釉、758・759・762が灰釉の施釉となる。757は体部中位の最大径付近の破片で、外面にヘラ描きの花文が描かれている。藤澤編年中Ⅰ～Ⅱ期に比定される。758・759は類似した形態だが、３条の沈線の施文部位が異なり、別個体と知れる。ともに前Ⅲ～Ⅳ期に比定される。761は欠損部位を図上で復元し一個体としたもので、頸部と体部最大径付近に３条の沈線がみられる。また底部の外面にも凹線を数条巡らしている。底部は平底無高台で露胎となる。中Ⅰ～Ⅱ期に比定される。762は底部破片で、こちらはやや古く前Ⅲ～Ⅳ期に比定される。760は鉄釉瓶子Ⅱ類で、同一個体の破片をつなぎ合わせて復元している。体部は全体をヘラ描きの唐草文で飾り、体部下半は蓮弁文とする。底部は平坦な平底である。藤澤編年中Ⅰ～Ⅱ期に比定される。763は灰釉瓶子の口縁部破片で、中Ⅰ～Ⅱ期に比定される。

灰釉平椀（図面188-764～777・779～782・784～797）：径の小さな高台付きの底部から、体部が斜外方に向かって大きく開く形態で、瀬戸美濃施釉陶器のなかでは最も出土量が多い。藤澤編年後Ⅰ期以降のものが主体で前期に遡るものは現状では認められない。後Ⅰ期に比定されるものとしては767・768・770・771・775・785・786・789・790・793がある。後Ⅱ期では764～766・772～774・777・782・784・787・788・791・792・794・797がある。以下後Ⅲ期では779・795・796（以上３点は後Ⅲ期以降）、後Ⅳ期古では769・780・781、後Ⅳ期新では776となる。以上からも後Ⅰ～Ⅱ期の製品が過半を占めていることがわかる。

灰釉椀型鉢（図面188-778・783）：灰釉平椀に似た形態だが、より大振りな法量となる。778が藤澤編年後Ⅰ期、783が後Ⅱ期に比定される。

灰釉卸皿（図面188-798～813）：灰釉平椀に次いで出土量の多いのがこの灰釉卸皿である。形態は回転糸切りされた平底の底部から体部が外傾して開き、口縁端部は受け口条に内側につまみ出す。内底面にヘラ刻みの格子状の卸目を施し、口縁部の一カ所に片口をつくる。施釉は口縁部のみの漬け掛け。藤澤編年の中・後期の製品がみられる。中期には806・807に２点が比定される。後Ⅰ期では801・802・804が該当する。後Ⅱ期では798・803が、後Ⅲ期以降では799・800が、他底部（805・808～813）は後期の時期幅のなかで捉えられる。

灰釉浅椀（図面189-814）：814は天目茶椀に類似したＳ字状に大きく屈曲・外反する口縁部を有する灰釉浅椀の破片。藤澤編年の後Ⅰ期に比定される。

鉄釉天目茶椀（図面189-815～827）：815～827は鉄釉天目茶椀。径の小さな削り出し輪高台から体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部はＳ字状に屈曲・外反するものが多い。施釉は内面および体部外面過半に及び、以下高台部は露胎とする。厚い釉が高台にまで釉垂れするものがある。藤澤編年後Ⅰ・Ⅱ期が主体だが、大窯期のものも若干含まれる。816・819・825～827が後Ⅰ期、818・820・822・823が後Ⅱ期、821が後Ⅲ期、815が後Ⅳ期新、817・824が大窯Ⅰ期にそれぞれ比定される。

灰釉小壷蓋（図面189-829）：829は灰釉小壷の蓋。底部の受け部に栓状の突起を有し、天井部は傘状に開く。天井部中央に小さな乳頭状つまみが付く。天井部外面には菊花文を３個散らして描く。灰釉は薄く、天井部のみの施釉とする。藤澤編年中Ⅰ～Ⅱ期に比定される。

灰釉折縁深皿（図面189-835～838・840）：835～838・840は灰釉折縁深皿の口縁部破片である。斜方向に直線的に開く体部の先端を水平方向に折り曲げて口縁とする。口縁端部内面に受け口状の段を付けるもの（835・837・838・840）と、付けないもの（836）とがある。835～838が藤澤編年後Ⅰ期に、840が藤沢編年中Ⅳ期に比定される。

灰釉卸目付大皿（図面189-839）：839は灰釉卸目付大皿で、口縁内端に断面三角形状のつまみだしの段を付ける。藤澤編年後Ⅳ期新に位置づけられる。

灰釉盤類（図面189-841）：灰釉施釉の盤類の底部破片。藤澤編年後Ⅰ～Ⅱ期に比定される。

灰釉燭台（図面189-842・859）：842は灰釉燭台の底部破片である。裾広がりの底部の端面は鋭く切り落とし、外端のみが接地する。藤澤編年後Ⅰ～Ⅱ期に比定される。859は灰釉燭台の体部破片。藤沢編年後Ⅰ～Ⅱ期に比定される。

灰釉香炉（図面189-843・844）：843・844は灰釉香炉である。法量は異なるが形態は類似する。平底の底部から体部が直立して立ち上がり、口縁端部は水平かやや内径する平坦面を有する。底部には小突起条の三足が貼り付けされる。体部中位付近まで、灰釉が漬け掛けされる。以下は露胎となる。843が藤澤編年後Ⅳ期古、844が後Ⅰ～Ⅱ期に比定される。

鉄釉擂座茶入（図面189-845）：845は鉄釉擂座茶入の体部破片である。弱い張り腰の体部から口縁部が直立し、端部は外方に短く玉縁状につまみ出す。口縁直下に乳頭状の小突起を等間隔に貼り付け、間を沈線で繋ぐ。体部と口縁部の境界は数状の沈線で区画し、体部は縦方向の櫛描き沈線を密に施す。全面施釉で、残存部位に露胎部は認められない。藤澤編年中Ⅲ期に比定される。

灰釉広口壷蓋（図面189-846）：846は灰釉広口壷の蓋の口縁部破片である。天井部は丸みをもち、口縁部は短く屈曲・外反させる。藤澤編年中Ⅰ～Ⅱ期に比定される。

灰釉底卸目皿（図面189-847）：847は灰釉卸目皿の口縁部破片である。口縁端部は受け口状に屈曲する。施釉は外面は口縁直下までとし、以下露胎となる。藤澤編年中Ⅰ期に比定される。

灰釉縁釉小皿（図面189-848・850・856）：土師器皿に似た形態で、平底の底部から体部が内湾気味に開き、口縁部は屈曲・外反させる。施釉は口縁端部内外のみに留まる。848が藤澤編年後Ⅲ～Ⅳ期に、850が後Ⅳ期に、856が後Ⅲ～Ⅳ期に比定される。

灰釉縁釉挟皿（図面189-849・853）土師器皿に似た形態。窯道具の一種。口縁部の内外面のみ施釉する。底部は回転糸切り痕が残る。２点とも藤澤編年大窯Ⅰ期に比定される。

灰釉腰折皿（図面189-852）：腰の部分が「く」の字状に鋭く屈曲し、口縁部は短く外反する。体部外面下半は露胎となる。藤澤編年後Ⅳ新期に比定される。

灰釉（器種不明）（図面189-851）：口縁部が強くＳ字状に屈曲外反する。藤澤編年後Ⅲ～Ⅳ期に比定。

灰釉柄付片口（図面189-860）：860は灰釉柄付片口の破片である。直立気味に立ち上がる体部と、受け

口状の口縁を有する。藤澤編年の中Ⅱ期に比定される。

土師質土器（図面189・190）

土師質香炉（図面189-861～863）：奈良火鉢など畿内の瓦質土器の器形を模倣した土師質土器。火鉢の形態だが、法量が小さいとこから香炉と考えられる。底部には逆台形の三足の脚が付く。863は体部画面がヘラ削りされる。内面はいずれも成型時のロクロ目による凹凸が顕著である。

土師質盤（図面190-886）：底部のみの破片で口縁部を欠失するため、器形の全容は窺い知れないが、平底の径の大きな底部から体部が斜外方。体部の内外面に横方向の荒いハケ調整がそのまま残る。

瓦器（図面189）

瓦器小皿（図面189-866）：中世の畿内で通有にみられる瓦器椀とセットとなる小皿。但し瓦器椀に比べ量ははるかに少ない。基本的には畿内の手捏ね土師器皿と同形態・手法のもので、焼成のみ瓦質焼成となっている。866もそのひとつで、畿内からの搬入品と考えられる。焼成は良く黒銀色を呈する。13世紀代の大和・楠葉あたりの製品か。

瓦質土器（図面189・190）

瓦質擂鉢（図面189-864・865・867）：864・865は瓦質擂鉢の口縁部破片。体部は斜外方へ直線的にのび、口縁端部は断ち切ったような幅広の端面となる。また口縁内面1.5cmほど下方に、一条の沈線を巡らす。瓦質焼成はそれほど良くなく、黒褐色を呈する。867は底部の破片で、摩滅が著しい。

瓦質火鉢（図面190-868～871・873～876）：868～871・873は、「花かたにやくならひばち」で知られる奈良火鉢座の瓦質火鉢に相当する。いわゆる浅鉢型の火鉢で、径の大きな底部から体部が外傾気味に立ち上がり、口縁端面は水平な面を持つ。869・872・873については「花かた」の言葉のもととなった輪花の切り込みが確認できる。すなわち上からこの火鉢を俯瞰した場合、口縁部は正円形ではなく波打つ花弁状を呈する。またこの手の浅鉢型火鉢には、底部に逆台形の三足の支脚が付くが、本調査地では脚部の出土資料に欠く。口縁部外面直下には菊花のスタンプ文を横一列に連続的に施文する。体部外面は横方向に緻密な暗文ヘラ磨きを施す。内面のヘラ磨きは縦方向にジグザグに施すため、間に磨き残しの隙間ができる。口縁内端付近のみ横方向に緻密にヘラ磨きを加える。焼成は比較的良いものは黒銀色を呈する。いずれも14世紀代に位置づけられる。874～876はやはり浅鉢型の火鉢だが、口縁部の形態が異なる。内傾する口縁部の端面は幅広で水平の面を持つ。口縁外面には２条の凸線文を巡らせ、間を花菱文の連続スタンプで飾り、文様帯とする。時期的にはやや後出し、15世紀前後に位置づけられる。

瓦質風炉（図面190-877～885）：877～885はいずれも瓦質風炉であるが、877～879と880～882、883～885の３形態がある。877～879は肩の張る球形の体部から口縁部が短く直立するもので、口縁端面は水平の面をもつ。口縁外面直下と頸部接合部付近に凸線文を巡らせ、間を梅花文の連続スタンプで飾り、文様帯とする。877は、体部中位上半にも凸線文を一条巡らし、凸線の下端に接して火窓をあける。体部の外面は隈無く細かなヘラ磨きを加えている。これに対し880～882は、頸部の立ち上がりがなく、球形の体部から口縁部がそのまま内傾し、端部は切り立つ垂直の面となっている。体部最大径から上位の火タブに２条の凸線を配し、その間を文様帯とし、花菱文・菊花文といったスタンプ文と乳頭状の円形の貼付け文で交互に飾る。この文様帯の上端に接して火窓をあける。体部外面には横方向ないしは縦方向に細かなヘラ磨きを施す。体部下端付近にも凸線文が１条巡る。底部は径が大きな平底で、本来はここに３足の支脚が付くが、脚部片の出土は未確認である。883～885は底部付近の小破片のみだが、上記の風炉とは型式を異にする。このうちある程度復元可能な884では、体部下半に二条の凸線

を巡らし、間を円形貼り付け文などで飾る。さらに底端部にも凸線１条を巡らせ、この間５～６㎝の長さで縦方向に三角柱状に稜線を鋭く削り出し、襞状の文様帯とする。底部の支脚は猫足の可能性が高いが、本調査地での出土は確認されていない。

瓦質土器（器種不明）（図面190-872）：バンドコ状の形態だが、小破片で器形の全容を窺い知れない。

八尾（図面191～197）

甕（図面191-887～897、図面192-898～907、図面193-908～916、図面194-917～997、図面195-998～1019）

八尾のなかでは甕類が最も出土量が多いが、形を留めるものはなく、ほとんどが破砕小片と化している。これら多量の破片の中から口縁部のほぼ全てと、実測可能な底部を選びだし図化した。このうち頸部より上半の残るものを検討すると、口縁部にかなり多様な形態のあることに気付く。そこでまず口縁部形態の型式分類をおこない、以下この分類に沿って記述を進めることにする。

（Ⅰ類）：口縁端部が直立・尖頭形を呈するもので、外面の顎部の張出も未発達なものをⅠ類とした。

Ⅰａ類（図面194-917）：現状で917の１点のみみられる。口縁端部が直立し、端部を上方に三角形に摘み出している。

Ⅰｂ類（図面194-918・920・921）：口縁端部が直立・断面が三角形を呈する。口縁部の内側に一条の沈線状の窪みが巡り、口縁部と頸部との境界をなす。

（Ⅱ類）：口縁部が受け口状に屈曲し顎部が「く」の字状を呈するものをⅡ類とした。

Ⅱａ類（図面191-889・891、図面194-919・922～933）：口縁部が受け口状に屈曲するが、受け口部は低く未発達である。外面の顎部も丸みを帯びてゆるやかに屈曲している。

Ⅱｂ類（図面191-887・890・892、図面194-934～943）：基本的にはⅡａ類とほぼ同形態だが、外面の顎部の先端が鋭く尖り、断面が三角形状を呈するものをⅡｂ類とした。

Ⅱｃ類（図面191-983～897、図面192-898・899、図面194-944～965）：口縁部は依然受け口状に屈曲するが、口縁端部に内傾する端面が生じ、断面が角状を呈するものをⅡｃ類とした。

（Ⅲ類）：口縁部外面の顎部が下方へ拡張し、Ｎないしは Ｔ字状を呈するものをⅢ類とした。

Ⅲａ類（図面図面192-900、図面194-966～972）：基本形はⅡｃ類に似るが、口縁外面の顎部がさらに斜外方に鋭く拡張したものをⅢａ類とした。

Ⅲｂ類（図面192-901、図面194-973～977・986）：口縁端部の角状部分が丸みを帯び、端部が外傾せず上方へ摘み出されて立ち上がる。これに顎部の張出しと相まって、幅広の口縁帯を形成していく。

Ⅲｃ類（図面192-904～907、図面193-908～911、図面194-978～985・987）：幅広の口縁帯が形成され、断面形がＮないしは Ｔ字状を呈する。口縁帯の上端と下端は、それぞれ丸くおさめる。

Ⅲｄ類（図面192-902、図面193-912～914、図面194-988・989）：口縁帯の幅がなくなると同時に中央が窪み、上・下端は断面三角形状に鋭く尖るものに変化している。

（Ⅳ類）：口縁部全体が萎縮し、端部が先鋭化・断面三菱状を呈するものをⅣ類とした。図面194-970～995がこれに該当する。

（Ⅴ類）：口縁部外面の顎部の下方張出がわずかな突起となるものをⅤ類とした。図面194-997がこれに該当する。

甕の口縁形態については以上のように型式分類しておく。口縁部の成形について補足するならば、Ⅲｂ・ｃ類については一端口縁部を丸く仕上げ、これにさらに口縁帯となる粘土を貼り付けて形成している（例えば908・914）。これに比べ、Ⅰ・Ⅱ類は口縁部を単に受け口状に折り曲げて形成している可能性が高い。体部外面の成形痕は、口縁部付近は横ナデされて痕跡が明確でないが、肩部以下では

縦方向の幅広のヘラ削りが観察できるものが多い。この連続縦ヘラ削りは、体部上半から底部付近まで分割成形の単位毎に施されている。また破片のみの出土だが、分割成形の接合部に施されたスタンプ状の叩き痕（押印帯）がいくつかみられる（図面195-1010～1019）。また押印帯の代わりにハケ状調整を行っているものある（図面193-916）。体部内面は口縁部から頸部付近までは横ナデされているが、以下には指頭圧痕や横方向の指ナデ、ハケ状削りがみられ、粘土紐巻き上げの際の接合痕を残すものも多い。底部は平底・円盤状を呈する（図面195-998～1009）。

壷（図面191-888、図面192-903、図面197-1052～1063）

壷は甕に比べ量が少ないが、形態や法量にいくつかのヴァリエーションがみられる。

中型壷（図面191-888、図面192-903）：甕との区別が明確ではないが、頸部が長く、外反して大きく開くものを一応壷とした。888と903の２点が該当する。口縁部の形態は888がⅡａ類、903がⅢｃ類に分類できる。

小型壷ａ（図面197-1054・1055・1057）：頸部は直立するかやや外傾して開き、口縁端部は外側に折り曲げて斜め下方を指す。一見玉縁状の形態で、珠洲壷Ｔ種・Ｒ種に似た形態の口縁のものがある。

小型壷ｂ（図面197-1056・1058）：頸部が外反しながら開き、口縁部は外傾する端面を有する。やはり同種の形態の口縁が、珠洲壷Ｔ種・Ｒ種などにみることができる。

小型直口壷（図面197-1052）：体部の腰が張り、頸部が短く直立し端部を丸くおさめる形態のもの。

その他壷破片（図面197-1053・1059～1063）：1053は肩部破片だが、直口壷の可能性がある破片。1059～1061は小型壷ａ・ｂに対応する底部破片と考えられる。1062・1063は体部・底部の破片で、壷・甕の区別はつきにくいものの、法量が小振りであることから一応壷に考えておく。

擂鉢（図面196-1020～1040、図面197-1041～1050）

八尾の場合甕に比べると擂鉢の量ははるかに少ない。道場Ⅰ遺跡でも擂鉢は甕よりは出土量は少ないものの、一遺跡としてはかなりまとまった量がみられる。口縁部の形態は甕ほど顕著に変化しないが、一応次のⅠ～Ⅲ類に分類できる。

擂鉢Ⅰ類（図面196-1020・1021）：口縁端部に端面が明確でなく、断面が三角形状に上方につまみ上げるか、単に丸くおさめている。1020・1021の２点がこれに該当する。

擂鉢Ⅱ類（図面196-1022～1040、図面197-1044～1047）：口縁直下１～２cmが最大肥厚部となり、先端がこれより先細りとなり、口縁端部が面を持つものをⅡ類とした。量的には最も多いが、端部の形状には内端をつまみ上げるもの（1031・1032など）、逆に外端がつまみ出されるもの（1046、1047など）、端面の中央が窪むもの（1036・1037など）があり、さらに細分できる可能性がある。

擂鉢Ⅲ類（図面197-1048・1049）：口縁端部の端面が発達し、幅が広く外傾した平坦面を有するものをⅢ類とした。1048・1049の２点が該当する。とくに後者は破片ながら口縁端面が器壁の最大厚となっている。

これらの擂鉢の基本形態は平底の底部から体部が斜外方へ開き、口縁端部は大なり小なり面を有すものが大半である。片口の残存するものは、両方から口を窄めるようにしてあまり大きくない片口部を形成する（1023・1028・1036・1045）。内面には擂目を有するものと無いものの二者がある。前者では幅のあるハケで文様風にまばらに擂目を施したもの（1033・1036・1042）と、幅の狭いハケで疎らな放射状に擂目を施すもの（1040・1043）などがあるが、いずれも内面全体に密に擂目を施すものはみられない。使用痕も認められるものの、珠洲擂鉢ほど顕著なものはみられない。成形痕は外面は顕著で、内面はやや観察しづらいが、横ナデされた口縁部以下は、甕などと同じように指圧痕と縦方向

の幅のあるヘラ削り痕が観察できる。

鉢（図面197-1051）

あまり類例はないが鉢の形態のものが一例（1051）見られる。平坦で径の大きな底部から体部がやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は内傾して口縁内端を嘴状に尖らせる形態である。

陶製加工円盤（図面197-1046～1073）：主に甕の体部破片を二次転用して、円盤状の形態に細かく周囲を打ち欠いたものを陶製加工円盤と仮称しておく。径は0.7cmから1.8cmまで大小さまざまがある。八尾以外にも珠洲でも陶製加工円盤があり、とりわけ八尾のみが選んで使われた訳ではなさそうである。用途は不明だが、子供の遊技具の一種か。

珠洲（図面198～218）

珠洲は本遺跡でも多く出土しており、土師器皿と共に中世の主要な出土遺物を構成している。器種も壷・甕・擂鉢等多様であるが、とくに擂鉢類が多く目に付く。これに比べ甕類は多くない。甕類の口縁部はできるだけ小破片でも抽出するようにしたが、それでも総数は多くなく、もともとの個体数事態が少なかったことが予測される。壷は大・中型法量の壷Ｔ種や装飾壷、小型法量の壷Ｒ種などが多くみられる。以下吉岡分類・編年を準用しながら記述を進める。

壷（図面198-1075～1118、図面199-1120～1128、図面202-1210、図面204-1244～1256、図面205-1257～1267）：まず図面198-1075～1118、図面199-1120～1128の壷について記す。1074は頸部が短く立ち上がり、口縁端部を心持ち屈曲・外傾させ端部は丸くおさめる。1076～1084は、外反気味に開く口縁部の先端を水平ないしは下方に折り曲げ、先端は鋭く仕上げる。このため断面は嘴状を呈する。小型法量の1084以外は壷Ｔ種の口縁部であろう。吉岡編年Ⅱ～Ⅲ期に比定できる。1085～1087・1114・1089～1097、1100～1105は「く」の字状に屈曲し外傾する口縁部を有す。口縁端部は外傾する端面を有しとくに下端を鋭く側方につまむため、断面は三角状を呈す。このなかで1101は口縁端面と頸部外面に波状文が施される。1085～1087・1114は吉岡編年Ⅱ期に、1089～1097、1100～1105は吉岡編年Ⅲ～Ⅳ期に比定される。1088は口縁部外端の摘み出しが強く、側方に先端が突出する。吉岡編年Ⅱ期に比定される。1098は口縁端部が短く外傾下のち内端を上方につまみ上げる。吉岡編年Ⅱ期か。1099は直立する口縁部の上面は幅の広い端面となり、外端が水平方向に張り出す。吉岡編年Ⅴ期に比定される。1107は口縁部が短く直立し、端部は短く屈曲・外傾する方頭となる。口縁端部直下に沈線状の窪みが巡る。吉岡編年Ⅱ期に該当か。1106・1108・1110は、頸部から口縁部が大きく屈曲・外反する形態で、端部は肥厚して丸味を帯びる。1106・1110は口縁内端が窪み、1108は外端が下方にわずかに垂下する。1110の外面には「十」字状のヘラ刻み文がみられる。以上は吉岡編年Ⅳ期に比定される。1109・1111～1113は、口縁部中位が外方に肥厚した後に端部直下が窄まり、先端が丸く肥厚して短く外方へお辞儀する。吉岡編年Ⅳ期に比定される。1115は口縁部が中位で屈折外反するもので、端面は隅丸方角状を呈する。吉岡編年Ⅳ期か。1116・1117・1119は、短く「く」字状に屈曲した口縁部の先端は端面をもち、内端は軽く上方に摘まれる。1116・1117は口縁端面に波状文が巡る。吉岡編年Ⅱ期の壷Ｔ種の口縁部と考えられる。1118は短く屈曲・外傾する口縁部の先端は方頭を呈する。吉岡編年Ⅴ期に相当か。1120～1128は小型法量で体部径に比べ器高の低い壷の体部か底部である。このうち1124は口縁部の端面が広く手兵で、外端が側方に張り出すもので、吉岡編年Ⅴ期に比定される。1120では体部外面に「田」の字に似た線刻が施される。1125・1126は体部外面に２条以上の波状文を巡らす。1127・1128は体部外面にヘラ削りの痕跡を残す。図面202-1210は短く「く」の字に外反する口縁部の先端は丸くおさめる。吉岡編年Ⅴ～Ⅵ期の壷Ｔ種と考えられる。次いで図面204・205に移る。図面204-1244は図

上で完形復元できる壷Ｔ種である。楕円形の体部に平底底部を有し、体部外面は綾杉文状の叩き目を、内面には円形の当具痕が頸部付近から体部下半まで残る。口縁部は直立気味に立ち上がった後短く外反する。口縁端部は外傾する端面を有し、外端が斜下方に短く外屈する。肩部にプラスネジの頭を押しつけたようなスタンプ文を近接して２カ所押印する。吉岡編年Ⅲ～Ⅳ期に比定される。1245～1250は壷Ｔ種の体部ないしは底部破片である。1251・1252・1254～1256は壷Ｒ種の底部破片と考えられる。図面205-1257は装飾壷で、口縁部を欠失している。体部外面全体を12条におよぶ波状文で飾る。体部下半の分割成形の接合部付近に一部叩き目が残るが、以下は内外とも横ナデされる。体部内面は上半に指圧痕が、中位から下半は縦方向にヘラ削りする。1258～1263も外面を波状文で飾る装飾壷で、1257と同一個体の可能性が高い。1264・1265は格子目の中に×字を配したスタンプ文、1266は十字交差文、1267は叩き目の上からヘラで「U」字状に刻み目を入れている例である。

甕（図面198-1074、図面199-1129～1157、図面200-1158～1190、図面201-1191～1201、図面202-1202～1209、図面203-1211～1234、1235～1243）：図面198-1074は、口縁部が逆「ハ」字状に直線的に開く甕で、口縁外端は側方に鋭く摘み出される。器壁も薄く精良なつくりである。吉岡編年Ⅰ期でも古段階に遡る可能性の高い甕と考えられる。1129～1131は口縁部が短く屈曲し、外端部が嘴状に尖るもので、先端は下方へ外屈するもの（1129）と、水平方向に突出するもの（1130・1131）がある。吉岡編年Ⅰ期に比定できる。1132～1134・1191は口縁部が強く屈曲し、先端が側方に突出するもので、先端は外湾して水平よりやや下方を向く。吉岡編年Ⅱ期に比定できる。1135・1136・1139・1142・1194・1195は短く外反した口縁部の先端が方頭となる。隅丸方形の端面は外傾するもの（1135・1136・1142・1194）と、端面が垂直になるまで屈曲するもの（1139・1195）とがある。1137・1138は短く屈曲した口縁部先端の円頭がさらに下方にまでお辞儀するもの。1140・1141・1196・1197は嘴状の口縁部の先端やや上を向くもの。1143・1192・1193は、直立する口縁部の先端円頭部のみを短く横方向に折り曲げたもの。以上について吉岡編年Ⅱ～Ⅲ期に考えておく。1145～1149・1152・1198～1201は短く外反させた先端を外傾する方頭としたもの。1150・1151は短く肥厚したような円頭を呈するもの。1153～1157は方頭の口縁部を水平に近い斜外方に強く屈曲させたもの。以上については吉岡編年Ⅲ～Ⅳ期と考えておく。1158～1160・1162・1163は口縁外端が嘴状に側方に短く突き出るもの。1161・1202・1205は方頭の口縁部が斜外方へ短く直線的にのびるもの。1165～1167・1203は肥厚させた円頭口縁部の下端がやや垂れ下がるもの。1171・1172・1204は「く」の字に外反した円頭の下端が角張り稜線となるもの。1170～1178は口縁部を短く屈曲し、肥厚した円頭とするもの。1206は1205の口縁に似るが、先端が円頭となるもの。以上については吉岡編年Ⅳ期に比定しておく。1179～1183・1207は短い円頭を「く」の字状に外反させたもの。また体部外面の叩き目が口縁下端にまで及んでいる。1184～1188・1208は方頭を「く」字状に外反させたもの。1189・1190・1209は円頭部の屈曲が弱く外傾気味に立ち上がるもの。以上については吉岡編年Ⅴ期と考えておく。1235～1243はいずれも甕の底部破片である。底部は静止糸切り痕が、体部外面は叩き目、内面は当具痕が残る。1211～1234は珠洲の陶製加工円盤。甕の体部が多いが、擂鉢製のものも混じる。

擂鉢（図面206-1268～図面218-1614）：擂鉢は日常の生業活動に密着に関連するせいか、珠洲のなかでは最も出土量が多い。製品の時期幅も長期にわたっている。以下吉岡分類・編年を参考に記述していく。図面206-1268は、体部が内湾しながら立ち上がる。口縁部は幅の狭い面を持ち、内端を軽く摘み出すようにおさめる。また本例の場合、片口部分が残存している。図面206-1269は体部が直線的に外傾し、口縁端部は丸味を持った端面とする。両例とも残存部位で擂目は認められない。以上の２点に

ついては吉岡編年Ⅰ期に遡上するものと考えておく。図面206-1272～図面207-1296は、体部から口縁部が直線的に外傾するか、わずかに内湾気味に開く形態。口縁端部には面を有し、内端を上方につまみ上げるものと、内傾して摘みだすものがある。内面に櫛描きの擂目がみられるものがあるが、それほど密には施さない。1307の櫛描きの擂目は一筆書きしたような文様風の緻密なもの。図面207-1297～1307は口縁端部が玉縁状を呈するもの。内端は上方につまみ上げるものが多い。図面207-1308～1317は体部から口縁部が直線的に開き、口縁部の端面は上端が上方に軽く摘み上げ、下端は側方に鋭く突出する。図面207-1318～1327は、体部から口縁部が直線的に開き、口縁の端面に丸味を持たせる形態のもの。1324は口縁内面に竹管文がみられる。以上の諸例については吉岡編年Ⅱ期に比定しておく。図面208-1328～図面209-1365は、多少の形態差はあるものの、単純方頭の口縁部を有するものとして一括しておく。このうち1328・1329・1331・1340・1341～1349をやや古めの吉岡編年Ⅲ～Ⅳ期に、1330・1332～1339・1350～1365については吉岡編年Ⅳ期に比定しておく。図面209-1366～1382は体部はわずかに内湾しながら開き、方頭の口縁部の下端が側方に大きく張出し、嘴状を呈する。1378がやや古手にみえるが、一応これらは吉岡編年Ⅲ～Ⅳ期に比定しておく。図面209-1376～図面210-1408もやはり外傾する口縁端面の外端が側方に張り出す形態で、端面は鋭く仕上げられるものが多い。吉岡編年Ⅳ期に比定される。図面210-1409～1411は口縁部平坦面の両端が角状に内・外方へ小さく突き出している。また端面の幅も広く1410・1411についてはここに波状文を施す。内面の擂目も比較的密に施している。吉岡編年Ⅳ期に比定される。図面211-1412～1422は内湾しながら開く体部の先端口縁部は断ち切ったような方頭で、端面は水平か心持ち外傾する。吉岡編年Ⅲ～Ⅳ期に比定される。図面211-1423～1438は、口縁部端面が水平な方頭で、一端ないしは両端がわずかに摘み出されものが多い。1436～1438については、口縁部端面に波状文を施している。吉岡編年Ⅳ期に比定される。図面212-1439～1452は幅の広い水平な口縁部端面を有するもの。図面212-1453～1459は水平かやや外傾する幅広の端面を有す、その外端が側方に大きく嘴状に張出すもの。図面212-1460～図面213-1471は内端は角状に上方に摘み上げ、外端は側方に嘴状に突き出すもの。以上については吉岡編年Ⅳ期に比定される。図面213-1472～1476は、口縁端部直下で折り曲げるように屈曲させ、「く」の字状に短く外反させるようにして三角頭を作り出すもので、口縁の端面は内傾する。擂目は密に施すものが多い。1472については口縁端面に波状文が施される。図面213-1477～1484は鋭く外端が突き出る口縁部で、端面は水平かわずかに内傾する。擂目は密に施す。1482～1484は口縁の端面に波状文を施す。吉岡編年Ⅴ期に比定される。図面213-1485は、口縁部が玉縁状に丸く肥厚するもの。Ⅳ期か。図面214-1486～1499は、口縁部の外端は張り出さず、逆に内端側が突き出る形態で、幅の広い端面は内傾する。1494～1499は口縁の端面に波状文を施す。吉岡編年Ⅴ期に比定される。図面214-1500～1505は体部が浅く外方へ直線的に開く。口径に比べ器高が低く扁平で・器壁も薄い。口縁端部は外方へ突き出るように先端を細く・鋭く仕上げる。端面は内傾・軽く内湾するものが多い。吉岡編年Ⅴ期に比定できる。図面214-1506～1508は器壁が厚く口縁部も幅広で角に丸味のあるものとなっている。端面は内傾し、とくに内端は内側に軽く突き出ている。吉岡編年Ⅴ期に比定される。図面214-1509は器壁が厚手で口縁端部が三角頭、端面は幅広・水平となる。吉岡編年Ⅴ期か。図面215-1510～1512・1514は口縁端部の端面が水平な三角頭の角を落として丸めたような口縁形態を有す。図面1513・1515は、体部から外反気味に開く口縁部の先端を単に丸めたような形態である。図面215-1516～1518は、口縁部直下が肥厚し、端面に向かって窄まる形態のもの。以上については吉岡編年Ⅴ期に比定される。図面215-1519～1526・1532は体部から口縁部が直線的に開き、口縁部の端面が大きく幅広に内傾するもの。波状文を施文している。櫛

描きの擂目は内面全体に密に施すが、使用痕の著しいものが多く、内面下半は擂目が摺り切れて消失しているものが見られる。また体部の器壁が底部に行くに従い極めて厚くなっていくのも特徴的である。吉岡編年Ⅵ期に比定される。図面215-1527～1531は擂鉢の片口部を集めたもの。図面216-1534・1535は、平底の底部から体部が口縁部まで直線的に開く形態。口縁内端の内傾する面と体部の境界が不明瞭であるが、依然この部分に波状文を飾り文様帯としている。吉岡編年Ⅵ～Ⅶ期に比定される。図面215-1533、図面216-1536は、口縁部の文様帯が消失し単に口縁の先端を丸めた形態で、口縁部内面に波状文のみを巡らせている。吉岡編年Ⅶ期に相当するものと考えられる。図面216-1537～図面218-1614は珠洲擂鉢の底部である。体部上半および口縁部を欠失するため型式的特徴を把握し難い面があるが、一応図面216-1537～1542を吉岡編年Ⅰ～Ⅱ期、図面216-1547～図面218-1594を吉岡編年Ⅲ～Ⅳ期、図面218-1595～1608を吉岡編年Ⅴ～Ⅵ期、図面218-1609～1614を吉岡編年Ⅵ～Ⅶ期に一応比定しておきたい。

古代土器（図面248-1615～1639）

A 地区では少量ではあるが古代の須恵器、土師器、土錘が出土している。これらの遺物は遺構に伴うものではなく、遺構から遊離した状態で中世の包含層や中世遺構の混入として出土している。

須恵器（図面248-1615～1623、1625～1628、1630～1633）：1615～1619は須恵器蓋である。1615～1617は口縁部の破片で、端部は短く下方に折り曲げるもの（1615・1616）と、丸く肥厚させるもの（1617）がある。1618・1619は天井部破片で、中央に宝珠状つまみが付く。1620～1623は無高台平底の須恵器杯である。1625～1632は高台の付く底部破片。1625・1626・1630～1632は高台付杯、1627・1628は壷の底部であろう。1633は広口壷の口縁部破片と考えられる。

土師器（図面248-1624・1629・1634～1637）：1624・1634～1636は平底無高台の土師器杯で、回転台成形のもの。1629も同様だが、底部に貼り付けの輪高台を有する。1637は甕の底部である。

土錘（図面248-1638・1639）：いずれも環状土錘で、土師質焼成のもの。破片だが樽型の形状を呈す。

近世陶磁器（図面189-834・854・855、図面248-1640～1669）

A 地区では調査地の南側で近世の遺構を検出している。但し住居家屋や井戸などの屋敷地は伴っておらず、耕作に関連する遺構が若干検出されたに過ぎない。従ってこれらの遺物も、遺構から検出されたものでも、基本的には近世人の生活区域から離れた場所での出土ということになる。出土した近世の遺物としては、伊万里・唐津・内野山・越中瀬戸・越中丸山などの陶磁器類が主体となる。

伊万里（図面248-1640～1644・1655・1664～1667）：肥前系磁器を称して伊万里といっておく。1640～1644は白磁紅皿。1655は内底面に蛇の目釉剥ぎがみられる白磁の皿。1664は青磁釉の掛かる香炉の底部破片である。1665～1667は磁器染め付けで、1665が蓋付碗の蓋、1666・1667は皿で、内面に呉須で文様を描く。18世紀～幕末頃に位置づけられる。

唐津（図面248-1657～1659）：1657は削り出し輪高台を有する灰釉椀。1659は半球形の体部に足の高い輪高台が付く京風唐津の灰釉椀。外面に鉄釉彩文がみられる。

内野山（図面248-1656・1659）：1656・1659は、内面に蛇の目釉剥ぎのみられる銅緑色釉の皿である。

越中瀬戸（図面189-854・855、図面248-1645～1654・1668・1669）：854は灰釉小皿、1645～1648は鉄釉小皿である。854・1645・1646は底部に三角形の輪高台を有す。855は灰釉のヒダ皿である。1647・1648は底部切り離しのみの平高台となる。1650は鉄釉向付、1651は鉄釉椀、1652は鉄釉香炉の底部破片、1653は鉄釉鉢の底部破片、1654は平高台の鉄釉小杯である。1668は鉄釉擂鉢の口縁部破片で、内面には櫛描きの擂目が密に施される。1669は無釉の短頸壷である。

越中丸山（図面248-1661～1663）：1661・1662は越中丸山の灰釉椀。1663は磁器染め付けの碗だが、伊万里や瀬戸の磁器染め付けとは趣がやや異なり、在地産と考える。越中丸山の製品の可能性が高い。

施釉陶器（図面189-834）：産地不明の灰釉壷の口縁部破片である。

２．Ａ２地区出土陶磁器（図面249-1670～1673）

施釉陶器（図面249-1670）：産地不明の施釉陶器。灰釉丸椀の外面に鉄釉の彩文がみられる。

越中瀬戸（図面249-1671）：1671は鉄釉秉燭（ひょうそく）で、ほぼ完存している。

伊万里（図面249-1672）：1672は伊万里の磁器花瓶で、底部に削り出しの輪高台が付く。

越中丸山（図面249-1673）：1673は越中丸山の陶胎染め付けの皿で、いわゆる半磁器と呼ばれるもの。

３．Ａ３地区出土土器・陶磁器（図面249-1674～1687）

土師器皿（図面249-1674～1682）：いずれも手捏ねの土師器。1647～1677は小皿の法量である。1674～1676はＢ１類、1677はＣ５類に比定できる。1678～1681は中・大皿の法量。1678～1680はＢ１類に比定される。1682は典型的なＺ２類で、前Ⅴ～Ⅵ期に比定できる。

瀬戸美濃施釉陶器（図面249-1683）：1683は瀬戸美濃の灰釉卸皿の口縁部破片である。

中国陶磁（図面249-1684）：1684は白磁高台付小皿の底部破片で、森田分類Ｄ群に相当する。

珠洲（図面249-1686・1687）：1686は壷Ｒ種の底部、1687は壷Ｔ種の口縁部破片と考えられる。

越中瀬戸（図面249-1685）：1685は越中瀬戸鉄釉椀の底部破片で、削り出しの角高台を有する。

４．Ａ５地区出土土器・陶磁器（図面249-1688～1697）

土師器皿（図面249-1688～1690）：いずれも手捏ね成形の小皿で、Ｂ１類に分類される。

瓦質土器（図面249-1693）：瓦質擂鉢の口縁部破片で、Ａ地区出土のものと同形態である。

珠洲（図面249-1694・1695・1697）：1694は擂鉢の片口部破片。1695は口縁部の端面が内傾する擂鉢の口縁部で、内面の擂目は密に施す。1697は擂鉢の底部破片で、内面の使用による摩滅が著しい。

八尾（図面249-1696）：1696は擂鉢の底部破片で、外面には縦方向のヘラ削りの痕跡が残る。

越中瀬戸（図面249-1691・1692）：２点とも底部平底の切り高台を有する鉄釉の小皿である。

５．Ｂ１地区出土土器・陶磁器（図面249-1698～1705）

伊万里（図面249-1698・1702・1704・1705）：1698は白磁の紅皿。1702は磁器染め付けの筒茶碗で、外面には菊花文が呉須で描かれる。1703は磁器染め付けのそば猪口で、内底面に手描き五弁花文がみられる。1705は青磁の香炉。口縁内端が内側に張出、底部は蛇の目凹高台となる。

越中瀬戸（図面249-1699）：鉄釉小皿の破片で、内面見込み中央に菊花文のスタンプがみられる。

越中丸山（図面249-1703）：1703は陶胎染め付けの皿で、白色の化粧土の上から草花文を描く。

珠洲（図面249-1700・1701）：1700は擂鉢の口縁部破片で、単純方頭の口縁端部を有する。1701は壷Ｔ種の肩部の破片と推定される。

６．道場Ⅱ遺跡出土土器・陶磁器（図面249-1706～1713）

土師器皿（図面249-1706～1708）：いずれも手捏ね成形の土師器皿である。小皿（1706・1707）と大皿（1708）の２法量があるが、ともにＢ１類に分類される。

中国陶磁（図面249-1709・1711）：1709は青磁小杯の底部破片。1711は青磁碗の口縁部破片で、ヘラで蓮弁文を外面に刻む。上田分類のＢ-Ⅲ類に該当する。

瓦質土器（図面249-1710）：小破片であるが、瓦質土器の火鉢ないしは風炉の底部破片と考えられる。

珠洲（図面249-1712・1713）：1712は壷の底部か。1713は擂鉢の体部破片である。

(2) 木製品（図面250～300）

道場Ⅰ・Ⅱ遺跡の調査では木製品の出土も多くみられる。その過半はＡ地区からの出土である。これらの木製品は、水つきのよい井戸内からの出土が最も多く、次いで旧河道SR01内から多く出土している。井戸から出土した木製品には、井戸枠材に使われた桟や縦板の類が多い。また生活関係の製品では、各種の漆器、曲物桶、箸、下駄、匙、自在鉤、刷毛などがみられる。変わったものでは花押と年号の記載のある墨書木札や墨書呪符の木札、斎串状木製品などがある。これに比べ柱穴内に残存する柱根、杭などの建築部材の出土は少ない。以下に各地区・各遺構ごとに記述していく。

Ａ地区

井戸

SE001（図面250-001～007）：001～007は井戸枠である。001～004は横桟に使われた棒状の木製品。方形に組み合わせる接合部となる両端の加工部は現状で認められない。005～007は井戸底面で横桟を方形に組んで固定するための杭。上端は凹ないしは凸型に削り出し、下端は鋭く仕上げる。

SE002（図面250～251-010～014）：010は曲物の底板の残欠。011～014は側板で、011は側板の綴じ代と、結束に使用した桜材が一部残存する。012～014の内面ケビキの刻目は縦方向である。

SE004（図面250-009）：009は曲物の底板である。外周に沿って木釘が２カ所、これに側板が一部付着している。木釘の孔は６カ所。底板自体は一枚板作りである。

SE008（図面250-008）：008は板状である。残欠のため用途不明。

SE010（図面251-015～018）：015～018は井戸枠である。４点で方形に組む横桟を構成する。両端の組み合わせ部は、互い違いのＬ時型に加工している。

SE012（図面252-019・020）：019は板状の木製品。020は石組み井戸の底に設置された曲物の側板の残欠である。内面ケビキの刻目は縦方向である。

SE014（図面252-022）：022は板状の底板で、きわめて薄く仕上げられている。復元径21.0cmを測る。

SE015（図面252-021）021は曲物である。内面ケビキの刻目は縦方向。木釘孔が１カ所残る。

SE016（図面252-023・024）：023・024は曲物の側板である。いずれも内面ケビキの刻目は縦方向である。また023では綴じ代が一部重ね合わさって残存している。

SE017（図面280-307・309）：307・309は曲物の側板である。307の内面ケビキの刻目は縦方向で、309はさらに一部斜方向のケビキがみられる。

SE019・020（図面252～255-025～059）：025～028は木枠の横桟を支えるための縦杭である。029～050・052は木枠井戸の桟の外側に差し込まれる縦板である。051は曲物で、底板を抜いて井戸底に設置されていたもの。高さ48.4cm、径44.0cmを測る。樹種はスギである。05も曲物の側板。こちらは残欠で、綴じ代と、結束に使用した桜材が一部残存する。054・059は曲物底板で、054は径21.9.cm。055は底板で、内外面に刀子で付けられたような刻み目が無数に残る。径22.0cm、厚さ0.55cmと薄いつくりである。樹種はヒノキ。056～058は箸で、両端を削りだす両口箸である。

SE024（図面255～257-060～068）：060・061は両口箸。062は漆器片。内外とも黒漆仕上げでこれに朱漆で文様を描く。樹種はケヤキである。063は板状木製品。065は曲物桶で、底板・側板ともに残存する。径19.9cm、高さは８cm前後。樹種はスギ。066～068は木枠井戸の横桟となる板状の木製品。067は両端を凸状に、066・068は凹状に加工し、それぞれを雄雌として方形に組み合わせる。

SE027（図面257-075・076）：075は底板である。径19.3cm、厚さ0.6cmと薄い。076は漆器の蓋で、内外面黒漆仕上げ。径19.6cm、厚さ0.9cmを測る。樹種はヒノキである。

SE033（図面257-078）：078は曲物で、底板を欠失するが、側板はほぼ完存する。石組井戸の底に設置されていたもの。径36.8cm、高さ26.6cm。内面ケビキの刻目は縦方向。樹種はヒノキである。

SE034（図面257～259-077・079～088）：077・079は曲物で、底板を欠失するが、側板はほぼ完存する。共に石組井戸の底に設置されていた。077は径44.0cm、高さ29.8cm。079は径56.4cm、高さ32.4cmを測る。内面ケビキの刻目は共に縦方向。樹種は077はヒノキ、079はスギである。080～083は井戸枠の横桟となる棒状木製品。080・083は両端を凸状に、081・082は凹状に加工し、それぞれを雄雌として方形に組み合わせる。084・088は曲物の側板。083の内面ケビキの刻目は縦方向。084は綴じ代と結束に使用した桜材が一部残存する。085～088は板状の木製品である。

SE036（図面259・260-091～095）：091～093は井戸枠の横桟に用いられた板状木製品。094・095は桟の結束に用いられた部材で、方形の孔を上に、下端は互い違いの方向に逆凹型に切り込みを入れ、横桟を方形に結束する際のジョイントの役割を果たしている。

SE039（図面260-096）：096は曲物の残欠。内面ケビキの刻目は縦方向である。

SE043（図面259～261-089・090・097～103）：089・090は木枠組井戸に使われた棒状の木製品。089は両端を鋭く削り出すが、090はあまり削り込んでいない。099は木枠の縦板の残欠で、固定用の釘の孔が一カ所残存する。100～103は井戸枠の横桟となる板状木製品で、101・102は両端を凸状に、100・103は凹状に加工し、それぞれを雄雌として方形に組み合わせる。なお100～103の樹種はいずれもスギである。097は曲物で、木枠組井戸の底に設置されていた。径49.6cm、高さ35.4cm。底板は抜かれており残存しない。樹種はスギである。098は斎串状木製品である。上端の一部と、中央から下端側が斜方向に折損している。現存で幅5.3cm、長さ52cm、厚さ0.9cmを測る。上端部は両側から切り込みを入れて、頭部とする。下端にも一部切り込みの痕跡が残る。樹種はスギである。

SE044（図面261～263-104～124）：104～111、116～119は木枠組井戸の縦板の部材である。106～109、116には木枠固定用の釘孔が下端側に一カ所残る。112～115は木枠の横桟となる棒状の木製品。112・114は両端を凸状に、115は凹状に加工しているが、114は何故か凹状ではなく方形の臍孔状に穿孔している。120は呪符で、薄く細長い板状の素材の上端を三角形に加工し、そのすぐ下に両側から二カ所切り込みを入れ頭部とする。この頭部付近を最大幅に、下端に向かって徐々に先細りとなる。最下端は折損・欠失する。卒塔婆に似た形態を有す。墨書は頭部の切り込み付近から始まり「南無大日如来」と書かれる。裏面には墨書はみられない。現存で幅2.85cm、長さ19.9cm、厚さ0.5cmを測る。樹種はスギである。121は漆器皿で、内外とも黒漆仕上げだが、外底面のみ漆が残存しない。樹種はケヤキである。122は両口箸である。123はへらで、下端を丸く削りだしている。樹種はスギである。124は下駄で、台と歯を別々に製作せず原材から直接切（刳）りだす、いわゆる連歯下駄である。台の形状は平面が小判形、縦断面は厚みがない台形である。現状で幅8.2cm、長さ18.6cm、厚さ2.7cm。前壺は前歯の前方に、横緒穴は後歯の前方に穿孔する。樹種はケヤキである。

SE046（図面263・264-125～133・141）：125・126は曲物の側板で、綴じ代と結束に使用した桜材が一部残存する。133も曲物の側板で、内面ケビキの刻目は縦方向である。127・128・131は木枠組井戸の横桟となる棒状木製品。127・128は両端を凸状に加工しているが、128は加工部位がよくわからない。129・130・132・141は木枠の縦板となる板状木製品である。

SE047（図面264～266-134～140・142～156）：134・135は曲物の側板で、ともにほぼ完存するが、底板は抜けている。水溜めに転用されて井戸底に２つが重ねられて設置されていた。現存で134が径42.0cm、高さ24.5cm、135が径39.8cm、高さ20.8cmを測る。樹種はともにスギである。136～139は横桟に使

われた棒状の木製品。本例はこれまでに多く報告したような両端を凸あるいは凹状に加工したものではなく、一端が凸部、他端が凹部にそれぞれ加工し、４本ともが同型となる。140･142～154は木枠組の縦板を構成する板状の木製品である。144～146については下端中央に方形の穿孔がみられる。樹種は144・148がサワラ、145・146・150がスギである。155は漆器皿で、内外とも黒漆仕上げ。樹種はケヤキである。156は曲物桶で、底板もありほぼ完存する。径20.0cm、高さ10.05cmを測る。底板は一枚作りで、側板の内面ケビキの刻目は斜方向に施す。樹種はスギである。

SE049（図面266-157～159）：157・158は木枠組井戸の縦板と考えられる。159は棒状である。

SE050（図面267-160・161）：160は曲物の側板で、内面ケビキの刻目は縦方向と斜方向がみられる。161は曲物の底板で、径16.7cm、厚さ0.6cmを測る。樹種はヒノキである。

SE051（図面267・272-162・163・210）：162は曲物の側板の残欠。163は石組井戸の井戸底に設置された曲物の側板である。現存で径49.4cm、高さ29.2cmを測る。210は板状で、樹種はスギである。

SE052（図面271-192～200）：192・193は漆器皿で、ともに内外とも黒漆仕上げ。193はさらに内面に朱漆で文様を描いている。192は口径8.5cm、器高2.85cm。193は口径8.6cm、器高2.9cmを測る。樹種は192はケヤキ、193はブナである。194･195は漆器椀の残欠。194は内外面黒漆仕上げで、外面に朱漆で文様を描く。195も内面に朱漆の痕跡がわずかに残る。樹種はブナである。196は蓋状の円形の木製品。径23.0cm、厚さ0.65cm。下端側に小さな穿孔が数カ所みられる。197は刳物の匙で、柄は匙先から短く上方に内湾した後、折れ曲がって斜めの角度で直線的にのびる。匙部幅7.5cm、長さ8.1cm、厚さ1.7cm、柄部は幅2.2cm、長さ23.8cm、厚さ1.8cmを測る。漆塗りは認められず、木地のみの仕上げ。樹種はムクノキである。198・199は板状の木製品で、199の樹種はヒノキである。200は井戸枠の結束部材である。

SE054（図面271・272-201～209）：201・202は曲物の底板で、201は径21.7cm、厚さ0.55cm、202は径20.0cm、厚さ0.65cmを測る。201の樹種はヒノキである。203～209は結桶の側板で、下端にタガによる結束痕がみられる。

SE055（図面272・273-211～218）：211は漆器椀で、内外とも黒漆仕上げで、内面には朱漆で文様を描く。樹種はトチノキである。212～214は両口箸で、樹種はヒノキである。215･216は曲物の底板。215は口径20.8cm、厚さ0.8cmで、樹種はスギである。、216は径1.4cm、厚さ0.7cm、樹種はヒノキである。217は曲物の側板で、上部を欠損するものの残りは良く、側板の綴じ代や結束に使用した桜材が一部残存する。内面ケビキの刻目は縦方向である。樹種はスギである。218は板状の木製品である。

SE058（図面273-219～222）：219～221は底板。219は径16.0cm、厚さ0.5cm、220は径20.4cm、厚さ0.7cm、221は径13.0cm、厚さ0.65cmを測る。樹種は220・221についてはヒノキである。222は曲物の側板の残欠である。側板の綴じ代と結束に使用した桜材が一部残存する

SE061（図面273・274-223～237）：223～226は木枠組井戸の横桟となる棒状木製品である。224・226は両端を凸状に、223･225は凹状に加工し、それぞれを雄雌として方形に組み合わせる。227は曲物の側板の残欠である。内面ケビキの刻目は縦方向。綴じ代と、結束に使用した桜材が一部残存する。228～231は両口箸である。232～236は板状木製品。237は杭状の形態のものである。

SE064（図面274-241～244）：241は曲物の側板残欠、242は底板の残欠。243・244は両口箸である。

SE065（図面274-238・239）：238・239は曲物側板の残欠で、綴じ代と結束用の桜材が一部残存する

SE066（図面274-240）：240は曲物側板の残欠である。

SE067（図面275-247・248）：247・248は曲物の側板残欠。247には底板をとめるための穿孔が残る。

SE069（図面279-297）：297は両口箸で、上端を欠失する。

SE070（図面275-245・246）：245は器高の低い浅い曲物桶で、底板も残っている。径25.0cm、高さ5.1cmを測る。246は曲物の側板残欠で、綴じ代と結束用桜材が一部残存する。樹種はヒノキである。

SE071（図面279-298・300・301）：298・300・301は曲物の側板の残欠である。298・301は側板の綴じ代と、結束に使用した桜材が一部残存する。300の内面ケビキの刻目は縦方向である

SE072（図面275～278-249～292）：249～252は木枠組井戸の隅柱である。253～274は木枠の縦板となる側板である。275～279は横桟となる棒状木製品で、275～277は両端を凸状に、278・279は凹状に加工し、それぞれを雄雌として方形に組み合わせる。また280・281・283は両端とも未加工のもので、282は両端が凹凸状を呈する棒状木製品である。また樹種については、275・276・278・279はスギである。284は曲物の底板で、径20.0cm、厚さ0.85cmを測る。樹種はスギである。285・288は板状である。286・287は棒状。289～292はいずれも曲物の側板の残欠である。

SE073（図面279-299）：299は曲物の側板の残欠である。内面に残るケビキの刻目は縦方向である

SE076（図面279-302～304）：302は曲物で、底板を欠失する。石組井戸の底に水溜として設置されていたもの。径38.8cm、高さ25.6cmを測る。樹種はヒノキである。303は両口箸で、樹種はヒノキである。304は刳物匙の先端部破片。幅10.3cm、長さ17.1cm、厚さ1.3cm。樹種はケヤキである。

SE077（図面279・280-293～296・305・306・308）：293は漆器椀で、内外面黒漆のうえから朱漆で扇文を描いている。口径15.0cm、器高5.6cmの法量。樹種はブナである。294～296は両口箸である。305・306・308は内面にケビキの刻目が残り、いずれも曲物の側板残欠であることが知れる。

SE078（図面280-310～312）：310は曲物側板の残欠。樹種はスギである。311・312は板状である。

SE079（図面280-313・314）：313・314は板状の木製品で用途等は不明。

SE081（図面280-315・316）：315は板状の木製品で用途不明。316は両口箸で、樹種はヒノキである。

SE083（図面280-317・318）：317は漆器椀の残欠で、内外とも黒漆仕上げで、内面に朱漆で文様を描く。318は底板で、表面に刀子で刻まれたような痕跡が残る。径18.0cm、厚さ0.3cmを測る。

SE084（図面281-319～321）：319は曲物の残欠、320・321は両口箸で、樹種はヒノキである。

SE086（図面281-322）：322は曲物の側板の残欠である。

SE087（図面281-327）：327は漆器の皿で、内外面とも朱漆仕上げされる。口径9.5cm、器高1.8cm。

SE088（図面281-323）：323は曲物の側板の残欠である。内面ケビキの刻目は縦方向である

SE091（図面281-325・326）：325・326は底板。325は径18.6cm、厚さ0.75cmで、表面に刀子による刻目のような痕跡が無数に残る、樹種はヒノキである。また326には結束用の綴じ孔が残存する。

SE092（図面281-324）：324は曲物側板の残欠。側板の綴じ代と結束用の桜材が一部残存する

SE093（図面286-393～396）：393は石組み井戸の底に設置されていた曲物で、底板を欠失する径41.6cm、高さ10.8cmを測る。394は漆器残欠で、小破片のため器種は不明。内外面とも黒漆塗りで、内面はさらに朱漆で文様が描かれる。395・396は両口箸である。

SE095（図面286-398・400～403）：398は井戸底に設置されていた曲物で、底板を欠失する。径44.8cm、高さ15.0cmを測る。401は曲物の側板の残欠。400・402は井戸枠の桟の一部と考えられる。樹種は400がスギである。403は底板で周囲に沿って側板結束用の孔がみられる。樹種はヒノキである。

SE096（図面281-328～331）：328は底板で、径20.6cm、厚さ1.3cm、樹種はスギである。329・330は井戸枠部材で、横桟をささえる杭材であろう。331は曲物側板の残欠である。

SE097（図面282-332～343）：332は方形木枠組井戸の底面に据えられていた曲物で、底板を欠失する。

現存で径41.6cm、高さ7.2cmを測る。333～337、342･343は井戸枠材で、木枠の縦板に使われた板材である。338～341は木枠組井戸の横桟となる棒状木製品。339・341は両端を凸状に、338・340は凹状に加工し、それぞれを雄雌として方形に組み合わせる。樹種は333・338～341がスギである。

SE098（図面283-344・345）：344は曲物の側板の残欠。345は底板の残欠である。

SE100（図面283-346～356）：346～349は木枠組井戸の縦板に使われた板材である。353～356は井戸枠の横桟に使われた棒状木製品で、355・356は両端を凸状に、353・354は凹状に加工し、それぞれを雄雌として方形に組み合わせる。樹種は353・355・356がスギで、354がヒノキである。350～352は曲物の側板の残欠である。比較的残りの良い351は復元径54cmを測る。

SE102（図面284～285-357～390）：357～361は両口箸で、樹種は360がヒノキ、他はスギである。362は結桶の側板で、下端側にタガによる結束痕が残る。樹種はスギである。363は曲物の側板の残欠である。364～370は井戸枠の横桟に使われた棒状木製品で、367～369は両端を凸状に、365・366・370は凹状に加工し、それぞれを雄雌として方形に組み合わせる。371～389は井戸枠の縦板に使われた板材である。樹種は、364～370・376～381・383・385・389がスギとなる。390は板状である。

SE103（図面286-391・392）：391・392は井戸枠に使われた板材で、樹種はスギである。

SE105（図面286～292-397・399・404～490）：404～408は横桟に使われた棒状木製品で、404～406は両端を凸状に、407･408は凹状に加工し、それぞれを雄雌として方形に組み合わせる。409～415、433～439も棒状木製品だが、410～412、414・415は両端加工のない横桟部材、409・423～439は桟を支える縦杭の部材である。074・416～432、440～490は木枠の縦板を構成する板材である。430・459・475・477・481については、下端側に方形の穿孔が一カ所みられる。樹種は404～412・415～440・442～453・455～465・467・470・475～478・480・481・484・485・487はスギ、473はヒノキである。399は木枠組井戸の底に設置された曲物で、底板を欠失する。径40.0cm、高さ26.8cm。側板の綴じ代と、結束に使用した桜材が残存する。内面ケビキの刻目は縦方向である。397は墨書木札である。幅3.5cm、長さ8.7cm、厚さ0.45cmで、長方形を呈するが、上端は浅く三角形に削り、左側面の上下二ヵ所に切り込みを入れる。墨書は両面にみられる。表は３行以上にわたる文言で、２行目は片仮名で「□□□ベシ」と読める。３行目は「□□五年二十三日」という年号が記されている。裏面には下端付近に大きく花押が書かれている。他遺跡での出土例から山札・茅札の類と考えられる。

SE107（図面256・257・267～270-069～074・164～191）：164～170は木枠組井戸の横桟となる棒状木製品。164・167・168は両端を凸状に、165・166は凹状に加工し、それぞれを雄雌として方形に組み合わせる。169･170は両端の加工がないもの。069～074、171～191は井戸枠の縦板に使われた板材。190の下端側には方形の穿孔が一カ所みられる。樹種は182・184・188～190がスギである。

土抗

SK175（図面300-683）：683は柱根で、上端は腐食のため先細りになっている。樹種はクリである。

SK667（図面300-682）：682は柱根である。土中の腐食によりわずかな残存状況である。

SK668（図面300-680）：680は柱根である。やはり土中の腐食により、残りが良くない。

大型土抗

SX003（図面300-681）：681は柱根である。土中の腐食によりわずかな残存状況である。

旧河道

SR01（図面293～300-491～678）：491・492は高台のつかない漆器皿で、ともに内外とも黒漆仕上げで、491はさらに内面に朱漆で文様を描く。法量は491が口径9.8cm、器高0.7cm、492が口径9.1cm、器高1.45

cm。樹種はともにブナである。493・499・501は漆器残欠で、いずれも黒漆の単色仕上げ。樹種は499・501についてはケヤキと考えられる。494～498・500・502は漆器椀。494は、深く内湾しながら立ち上がる体部を有し、底部にはほとんどわからないほど低い輪高台が付く。黒漆をベースに、朱漆で内外に文様を描く。樹種はケヤキである。他の漆器椀も概ね494に類似した形態。494は内外とも黒漆の上から朱漆の文様を描く。495も内外黒漆仕上げで、内面に朱漆で花柄の文様を描く。496～498・500・502は黒漆単色塗りである。503～506は下駄で、全て連歯下駄と考えられる。台の形状は平面が小判形か隅丸長方形、縦断面は厚みがない長方形である。完存する504については、現状で幅10.15cm、長さ24.2cm、厚さ2.05cmを測る。前壺は前歯の前方に、横緒穴は後歯の前方に穿孔している。樹種は503～505がケヤキである。507は下駄の歯で、樹種はスギである。508は曲物の底板で中央に円孔が一カ所みられる。口径20.7cm、厚さ0.7cmを測る。樹種はスギである。509・510は曲物の側板残欠で、内面ケビキの刻目は509が縦方向、510は斜方向を交差させている。511は曲物桶で、側板の一部を欠損するが底板は残っている。口径15.0cm、器高6.9cmを測る。内面ケビキの刻目は斜方向。樹種はスギである。512は蓋で、中央に小さな円孔を穿っている。内側の受け部は外径より一回り小さな径に削り出している。口径7.4cm、厚さ0.7cmを測る。樹種はヒノキ亜科。513～588は全て両口箸。樹種は522・539・564がスギである。589は８の字形をした自在鈎である。樹種はスギである。590は木トンボで、中央の円孔を境に羽の部分を互い違いの角度で削り出す。樹種はスギである。591は先端を凸状に削って差し込みとする棒状の木製品。592はやはり差し込みのある組み合わせ部材。593は、長方形の板状木片の片側縁に沿って上端から７cmほどギザギザの鋸歯状の切り込みが入るもの。樹種はスギである。594は長方形の透かしの入った板に別の長方形の板を木釘で留めたもの。595は四花の蓮弁形をした薄い板状のもの。樹種はスギ。596は上下端がのびた六角形状の薄板で、樹種はやはりスギである。597は台形状のもの。598は刀形、588は剣形の板状木製品。樹種はともにスギである。600は棒状で、二カ所に木釘が残る。601・602は羽子板状のもの。樹種はスギである。603～605は、形態はシャモジ形。このうち604は刷毛である。樹種は３点ともスギである。606～608は板状に穿孔や木釘の残るもの。609～634は方形・長方形を基調とする板状のもの。このうち620・629・634の３点には円孔がみられる。635～658・677・678は幅が狭く細長い板状で、一端ないしは両端が斜めに断ち切られるか、円弧を描くなどの加工を施したもの。659は棒状の先端を尖らせて突き棒状にしたもの。660は組み合わせの部材だが、用途などは不明。661も部材の一部と考えられる。662～676は棒状の木製品である。674～676については、下端を鋭く削り出している。

包含層

包含層（図面300-679）：679は径の小さな円形の底板の破片である。復元径10.0cm、厚さ0.55cm。

(3) 金属製品（図面301～306）

金属製品の出土は、土器・陶磁器類と比較して著しく少ない。金属製品のうち図示したものは193点で、銅銭以外はすべて鉄製品である。種類が判別できるものとしては銅銭、釘、刀子、鉄鏃、鍋、煙管、簪、火打金、提子がある。出土量で最も多いのが、釘であり、次に刀子があげられる。判別できないものは、その形状から棒状、板状、環状などと仮称してした。以下にまず銅銭のみを一括提示し、次いで井戸、土抗、溝といった遺構の種別ごとに遺物の記述をしていく。これらの金属製品の大半はＡ地区からの出土だが、一部他地区出土のものも含まれる。図面では一括図示しているが、本文では必要に応じてＡ地区以外の地区名を表示し記述している。

銅銭（図面301-001～028）

宋銭を中心に28枚出土している。これらの内、遺存状態が良好ですべて判読できるものは13点であった。判読可能な銅銭のうち、天聖元寳（北宋、初鋳1023年）の３点出土が最も多い。

SK073（図面301-001）：001はSK073から出土したもので、景祐元寳（北宋、初鋳1034年）である。

SK292（図面301-002）：002はSK292からの出土。政和通寳（北宋、初鋳1111年）と判読できる。

SK471（図面301-003）：003はSK471から出土。元□□寳と二文字は判読できるが、他は不明。

SK602（図面301-004）：004はSK602から出土したもの。天聖元寳（北宋、初鋳1023年）と読める。

SX07（図面301-005・006）：005・006はSX07から出土したもの。005は四文字すべて判読不明である。006は皇宋通寳（北宋、初鋳1038年）と判読できる。

SX22（図面301-007・008）：007・008はSX22から出土したもの。007～008は判読不明である。

SD106（図面301-009）：009はSD106からの出土。□□通寳と二文字は判読できるが、他は不明。

SD216（図面301-010）：010はSD216から出土したもの。洪武通寳（明、初鋳1368年）と読める。

SR01（図面301-011）：011はSR01から三枚重なって出土したもの。四文字すべて判読できない。

包含層（図面301-012～026）：012は三文字が判読可能で、元□通寳と読める。013は□□□寳の一文字が判読できるが、他は不明。014は□宋通寳と判読できる。015は宋通元寳（北宋、初鋳960年）と判読できる。016は□元通寳と三文字は判読できるが、他は不明。017は四文字すべて判読不明である。018･020は寛永通寳で、背面は無文。いわゆる新寛永（1668年～）である。019は四文字すべて判読できない。021は二枚重なり合う。一枚目は祥符元寳（北宋、初鋳1008年）と判読できる。022は天聖元寳（北宋、初鋳1023年）と判読できる。023は破片で１／４ほど残存している。寳の一文字だけが読める。024・025は一部分が欠損している。024は□□元寳の二文字が判読できるが、他は不明。025は□元通寳の三文字が読める。026は天聖元寳（北宋、初鋳1023年）と読める。

Ａ5地区包含層（図面301-027・028）：027・028は背面無文の新寛永（1668年～）の寛永通寳。

遺構出土遺物（図面301～304-029～133）

井戸

SE001（図面301-029・039）：029・039はSE001から出土したもので、どちらも釘である。029は断面正方形の角釘で、頭部は「Ｌ」字状に折り返した折頭を呈す。現存長9.4cm、幅0.65cm、厚さ0.6cmを測る。039は断面正方形を呈する角釘で、下端は欠損している。現存長4.3cm、幅0.25cm厚さ0.3cmを測る。

SE002（図面301-040）：040は、長さ1.45cm、幅0.2cm、厚さ0.2cmの棒状を呈す。

SE003（図面301-041～044）：４点は棒状鉄製品で、いずれも釘とみられる。041・043は胴部で著しく変形している。042は現存長は4.45cm、幅0.6cm、厚さ0.35cmを測る。044は大型の釘である。

SE009（図面301-030）：030はSE009から出土した板状鉄製品である。平面形は先端が切形を呈する半月形である。現存長は9.1cm、幅3.3cm、厚さ0.2cmの板状を呈し、長さ1.2cm、直径0.2cmの棒状がつく。下端は欠損している。鋳造品の可能性があり、金具類の一種であろう。

SE014（図面301-033）：033は釘。頭部は「Ｌ」字状に折り返した折頭である。断面正方形を呈す。

SE036（図面301-032）：032は棒状鉄製品である。断面は長方形を呈す。長さ5.25cm、幅1.2cm。

SE046（図面301-034）：034は釘。頭部はやや厚みがある。断面正方形を呈す。厚さ0.5cm。

SE052（図面301-031）：長さ5.1cm、幅0.5cm、厚さ0.4cmで、釘と考えられる。断面正方形を呈す。

SE100（図面303-095）：095は鉄滓である。長さ6.3cm、幅7.5cm、厚さ2.4cmを測り、重量88.9ｇ。

その他の遺構

SX03（図面303-107）：107は釘の頭部である。頭部は「L」字状に折り返した折頭を呈す。断面は角状を呈するいわゆる和釘である。現存長1.85cm、幅0.4cm、厚さ0.4cmを測る。

SX05（図面303-108）：108は釘の一部とみられる。幅0.4cm、厚さ0.6cm。断面は角状を呈する。

SX10（図面303-096）：096は棒状鉄製品。幅0.75cm、厚さ0.35cmを測る。断面は方形を呈す。

SX11（図面303-097～100）：097は断面が角状を呈する和釘である。頭部は「L」字状に折り曲げている。完形品である。長さ6.0cm、幅0.35cm、厚さ0.35cmを測る。098は棒状鉄製品で、頭部はやや球形を呈する。現存長6.0cm、幅5.5cm、厚さ0.4cmを測る。断面は方形を呈す。099は釘で、断面は正方形を呈す。長さ5.9cm、幅0.5cm、厚さ0.6cmを測る。100は棒状鉄製品で、断面は円形にちかい。一端は欠損している。箸の可能性がある。現存長13.0cm、幅0.6cm、厚さ0.7cmを測る。

SX17（図面303-090）：090は釘とみられる。現存長5.0cm、幅0.5cmを測る。断面長方形を呈す。

SX22（図面303-103・105）：103は刀子で、茎部は一部欠損している。峰は直線的で、茎部との境界は段を持つ。現存長21.2cm、幅2.6cm、厚さ0.4cmを測る。刃部長24.8cm、幅2.6cm、厚さ0.4cmを測る。105は断面が角状を呈する和釘である。長さ5.2cm、幅0.4cm、厚さ0.45cmを測る。

土抗

SK001（図面301-035）：035は板状を呈し、一部分が二枚に重なっている。長さ3.05cm、幅0.75cm、厚さ0.25cmを測る。種別・用途などは不明である。

SK002（図面301-036）：036は棒状鉄製品。断面正方形～長方形を呈す。長さ3.65cm、幅0.35cm。

SK003（図面301-037・038）：037は釘で、三本がまとまった束になっている。断面は四角形を呈す。038は刃部の一部が欠損している刀子。茎は完存。現存長13.1cm、刃部の幅1.2cm、厚さ0.4cmを測る。

SK039（図面303-109）：109は棒状鉄製品である。長さ5.9cm、幅0.5cm。断面は鈍い方形を呈す。

SK041（図面302-045・046）：045は釘で、頭部は「L」字状に折り返した折頭を呈す。断面正方形の角釘である。現存長5.4cm、幅0.4cm、厚さ0.45cmを測る。046は棒状鉄製品。断面円形を呈す。

SK043（図面302-047）：断面が正方形の棒状鉄製品。現存長4.7cm、幅0.5cm、厚さ0.4cmを測る。

SK044（図面302-048）：断面長方形の釘である。現存長3.9cm、幅0.5cm、厚さ0.3cmを測る。

SK045（図面302-049・050）：049・050ともに釘。049は頭部が欠損している。現存長8.9cm、幅0.6cm、厚さ0.5cmを測る。050は頭部を折り返した折頭を呈す。断面正方形の角釘である。長さ5.4cm、幅0.3cm、厚さ0.45cmを測る。残存が良好な完形品に近いものである。

SK046（図面302-055）：055は釘の完形品。頭部はやや「L」字状に折り返したタイプである。断面は正方形で、長さ9.9cm、幅0.6cm、厚さ0.5cmを測る。頭部の幅は1.3cmである。

SK047（図面302-057）：釘の一部で、断面正方形を呈す。現存長3.7cm、幅0.5cm、厚さ0.4cm。

SK048（図面302-058）：釘の一部とみられる。断面正方形を呈す。胴部で変形している。

SK049（図面302-059）：折損している釘。断面は正方形。現存長5.9cm、幅0.35cm、厚さ0.5cm。

SK052（図面302-060・061）：061は釘で、060についても釘の一部と考えられる。061は完形で、長さ5.7cm、幅0.3cm、厚さ0.35cmを測る。断面正方形を呈す。060は現存長3.3cm、幅0.5cmを測る。

SK059（図面302-062）：062は釘の一部。現存長7.4cm、幅0.5cmを測る。断面は正方形を呈する。

SK060（図面302-063・064）：063は棒状鉄製品で、変形している。長さ5.8cm、幅0.5cm、厚さ0.35cmを測る。064は変形している釘で、長さ5.0cm、幅0.7cm、厚さ0.55cmを測る。断面正方形を呈す。

SK077（図面302-065・066）：065は釘で、長さ5.15cm、幅0.55cm、厚さ0.65cmを測る。断面は正方形

を呈す。066についても釘の一部と考えられる。現存長3.1cm、幅0.5cm、厚さ0.5cmを測る。

SK081（図面302-067・068）：067・068は釘の一部である。067は現存長4.4cm、幅0.6cm、厚さ0.55cmを測る。断面は正方形を呈す。068は現存長3.7cm、幅0.3cm、厚さ0.6cmを測る。断面は長方形。

SK087（図面302-069）：069は釘で、下部は欠損している。頭部は折り返した折頭タイプである。断面は正方形を呈す。長さ3.8cm、幅0.4cm、厚さ0.6cmを測る。

SK101（図面303-110）：110は刀子の一部と考えられる。現存長4.6cm、幅1.2cm、厚さ0.3cmを測る。断面が三角形を呈するため、刃が付いていたと考えられる。

SK147（図面302-070）：070は折頭タイプの釘である。断面正方形を呈す。長さ4.5cm、幅0.5cm。

SK160（図面302-071）：071は釘である。断面は正方形。長さ5.7cm、幅0.3cm、厚さ0.3cmを測る。

SK191（図面302-072）：072は釘で両端が欠損している。現存長8.1cm、幅0.5cmを測る。

SK213（図面302-074）：074は下端を欠損している釘で、断面は正方形を呈す。幅0.6cmを測る。

SK223（図面302-073）：073は棒状鉄製品である。長さ9.8cm、幅1.7cm、厚さ1.25cmを測る。

SK254（図面302-075）：075は折損している釘。断面正方形で、現存長4.0cm、幅0.4cmを測る。

SK255（図面302-077）：077は釘である。断面は正方形。長さ4.8cm、幅0.55cmを測る。

SK257（図面302-076）：076は頭部を欠損している釘。断面は長方形を呈す。現存長3.85cmを測る。

SK260（図面302-079）：079は釘である。断面は正方形。長さ6.8cm、幅0.8cm、厚さ0.4cmを測る。

SK299（図面302-078）：078は釘の一部である。断面は正方形。長さ5.5cm、幅1.0cmを測る。

SK307（図面302-080）：080は釘である。断面は正方形。長さ4.6cm、幅0.5cm、厚さ0.3cmを測る。

SK332（図面302-081）：081は茎部が欠損している鎌である。茎部と刃部とは約130度で屈曲している。現存長11.4cm、幅2.7cm、厚さ0.6cmを測る。刃部長10.3cm、幅3.2cm、厚さ0.9cmを測る。

SK333（図面302-082）：082はほぼ完形の刀子である。峰は直線的で、茎との境界は段を持つ。長さ20.65cm、幅2.7cm、厚さ0.9cmを測る。刃部長は23.8cm、幅3.6cm、厚さ1.2cmを測る。

SK355（図面303-083・084）：083は環状鉄製品と考えられる。断面は長方形を呈す。著しく変形しているため、実際の径の大きさは不明である。084は鉄滓である。重量は262.1ｇを量る。

SK392（図面303-085）：085は棒状鉄製品。085は両端がやや尖り、断面は長方形を呈す。長さ7.0cm、幅0.7cm、厚さ0.55cmを測る。

SK395（図面303-086）：086は一端が尖り、反対側は欠損している。

SK424（図面303-087・088）：087・088は棒状鉄製品である。087は断面は正方形。長さ3.5cm、幅0.6cm、厚さ0.45cmを測る。088は断面は正方形。長さ4.0cm、幅0.4cm、厚さ0.3cmを測る。

SK440（図面303-089）：089は棒状鉄製品。現存長4.45cm、幅1.8cm、厚さ0.7cmを測る。断面は鈍い長方形を呈す。刀子の茎部の可能性が考えられるが、ここでは棒状鉄製品として報告しておく。

SK452（図面303-111）：111は鍋の一部。鋳造品。現存長5.0cm、幅8.35cm、厚さ0.7cmを測る。

SK605（図面303-091～093）：091は板状鉄製品。現存長4.7cm、幅2.2cm、厚さ0.7cmを測る。断面は鈍い三角形を呈す。おそらく刀子の刃部にあたると考えられるが、ここでは板状鉄製品として報告しておく。092は棒状を呈する製品である。長さ2.65cm、幅0.4cm、厚さ0.3cmを測る。093は板状鉄製品。現存長4.8cm、幅1.2cm、厚さ0.4cmを測る。断面は扁平である。刀子の可能性がある。

SK607（図面303-094）：094は釘である。頭部はやや厚みがあり、断面は正方形を呈す。長さ3.9cm、幅0.7cm、厚さ0.7cmを測る。先端は折損している。

SK611（図面303-104）：104は釘と考えられる。現存長4.4cm、幅0.6cm、厚さ0.5cmを測る。

SK673（図面302-051～054）：051・052・054は釘で、053も釘の可能性が高い。051・052・054の頭部は小さく「L」字状に折り返した折頭を呈す。断面正方形を呈する。051は長さ6.0cm、幅0.4cm、厚さ0.5cmを測る。052は長さ4.2cm、幅0.2cm、厚さ0.4cm。053は変形している。

SK674（図面302-056）：056は煙管で、長さ7.1cm、径0.95cmを測る。吸い口の部分である。

SK677（図面303-101・102・106）：101・102は釘である。101は頭部が円形の丸釘で、断面が角状を呈する。下端は欠損している。現存長12.3cm、幅0.5cm、厚さ0.65cmを測る。102は釘で、断面は方形を呈す。現存長8.85cm、幅0.5cm、厚さ0.75cmを測る。106は鉄鏃で、逆刺のあるタイプである。刃部の現存長2.8cm、幅1.4cm、厚さ0.45cmで、断面は両凸レンズ形を呈する。箆被の断面は四角形を呈する。長さ3.9cm、幅1.1cm。茎部は欠損しているが、残存長1.05cm、幅0.65cmを測る。

SK706（図面306-181）：181はSK706出土の銅製提子で、胴部の約１／２が欠損している。鋳造品。法量は径15.5cm、高さ8.1cm、厚さ0.8cm、注口の長さは3.5cmを測り、底は平底である。口縁端部は0.8cmほど内側に傾く。鉉の断面は四角形を呈し、胴部との繋ぎは金具を用いている。金具と胴部の装着は注口側で注口を挟む形で２カ所、反対側で１カ所を鋲止めされている。提子の出土例は、県内では富山市の金屋南遺跡、砺波市宮森廃寺出土のものがある。

溝

SD021（図面303-112）：112は釘で、断面が角状を呈する。長さ6.4cm、幅0.5cm、厚さ0.4cmを測る。

SD032（図面303-113・114）：113は釘の完形品である。断面が角状を呈する和釘である。現存長6.1cm、幅0.5cm、厚さ0.55cmを測る。114は棒状鉄製品である。現存長7.8cm、幅0.55cm、厚さ0.3cmを測る。断面は角状を呈する。胴部の中央部でやや変形している。

SD097（図面303-116）：116は棒状鉄製品で、断面は長方形を呈する。現存長5.6cm、幅0.65cm。

SD099（図面303-117）：117は棒状鉄製品である。断面は長方形を呈する。現存長7.0cm、幅1.4cm。

SD106（図面304-118～121）：118・119は刀子である。118は刃部の一部は欠損しているが茎は完存している。現存長14.25cm、刃部の幅1.5cm、厚さ0.45cmを測る。119はほぼ完全な形で残存しているもので、長さ16.8cm、幅1.9cm、厚さ0.5cmを測る。茎部には目釘穴がある。断面は長方形を呈する。120は棒状鉄製品である。断面は長方形を呈する。現存長6.65cm、幅1.0cm、厚さ0.6cmを測る。121は釘で、頭部は環状を呈する。断面は角状を呈する。現存長6.6cm、幅0.7cm、厚さ0.6cmを測る。

SD111（図面303-115・図面304-122）：115は棒状鉄製品で、断面は角状を呈する。長さ7.4cm、幅0.5cmを測る。122はいわゆる椀形滓である。長さ8.8cm、幅11.1cm、重さ302.4ｇを量る。

SD118（図面304-123）：123は棒状鉄製品である。断面は長方形を呈する。上端部は1.5cmほど折り返して二重となる。現存長8.6cm、幅1.8cm、厚さ0.35cmを測る。

SD125（図面304-124・125）：124・125は棒状鉄製品である。断面は方形を呈する。釘の一部か。124は現存長6.65cm、幅1.0cm、厚さ0.55cmを測る。125は現存長2.7cm、幅0.4cm、厚さ0.3cmを測る

SD131（図面304-126）：126は刀子の一部である。残存部は刃の一部のみで、全体を把握できるにはいたっていない。現存長8.7cm、刃部の幅1.7cm、厚さ0.6cmを測る。

SD137（図面304-127）：127は鎌で、ほぼ完形を呈する。中央部で折れ曲がった状態で出土している。茎部と刃部とは約155度で屈曲している。刃部の推定長18.2cm、幅2.8cm、厚さ0.65cmを測る。

SD216（図面304-128）：128は釘と考えられる。断面が角状を呈する。現存長4.6cm、幅0.55cm。

SD226（図面304-129）：129は棒状鉄製品である。断面はやや扁平を呈する。現存長2.8cm、幅0.7cm、厚さ0.3cmを測る。釘の一種である可能性があるがここでは棒状鉄製品として報告しておく。

SD277（図面304-130）：130は断面が角状を呈する釘で、胴部で90度に折損している。現存長4.1cm。

旧河道

SR01（図面304-131～133）：131～133は旧河道出土のもの。131と133は刀子である。131は刀子の一部である。残存部は刃の一部のみで、全体を把握できるにはいたっていない。現存長5.15cm、刃部の幅1.1cm、厚さ0.4cmを測る。133はほぼ完形のもの。峰は直線的で、茎部とは段を持って分かれている。現存長17.3cm、幅1.25cm、厚さ5.5cmを測る。132は板状鉄製品で、鍋の一部と考えられる。厚さは均等で0.7cmを測る。鋳造品であろう。現存長3.7cm、幅3.3cmを測る。

包含層出土遺物（図面304-134～148、図面305-149～180、図面306-182～190）

134～190は包含層出土の金属製品である。134～160は棒状鉄製品である。これらのうち134～136・138・142・143・145～147・150・153・155は断面四角形のいわゆる和釘と呼ばれる釘である。法量は様々である。頭部の形態は「L」字状に折り返した折頭をもつものとして134・135・150がある。139～141・144・148・151・152・154・158も全体の形状が判別できないため種別がはっきりしない。しかし、断面形態がほぼ正方形であることから釘の可能性が高いと考えられる。137は棒状鉄製品で、一端が欠損している。現存長10.0cm、幅0.4cm、厚み0.4cmを測る。149は長さ13.5cm、幅0.8cm、厚み0.55cmを測る棒状鉄製品で、両端に向かって細くなる。156・159は棒状鉄製品で、156は著しく変形しているもの、159は厚みのあるもので1.4cmを測る。161～164は環状鉄製品である。161は直径2.6cm、断面形は方形を呈す。162は直径2.8cm、厚み0.2cmの完形品。164は直径3.8cm、厚み0.55cm。163は半分が欠損しているもの、直径3.3cm、厚み0.4cmを測る。165は火打金の完形品。長さ7.85cm、幅2.5cm、厚さ0.75cm。166は板状鉄製品で２破片である。推定の長さ8.3cm、幅2.15cm、厚さ0.4cm。167～169・174～176・178～180は刀子。167・168・169・178・180は茎部の一部分。167は残存長5.4cm、幅1.45cm、厚さ0.4cm。168は残存長5.9cm、幅1.0cm、厚さ0.5cm。169は残存長6.7cm、幅1.0cm、厚さ0.35cm。178は茎部と刃部の一部が残る。180は断面三角形で、残存長9.1cm、幅0.9cm、厚さ0.45cm。174・175・176・179は残存部が刃部を含むもの。174・175は刀子の切先とみられる。176は刃部のみ残存する。残存長10.5cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm。179は刃部と茎の一部である。180は鉄製の茎に銅板が巻いてある。172は棒状鉄製品で、推定長19.2cm、幅2.15cm、厚さ0.65cm。断面は薄く、形状も三角形であることから、刃を有する形状であったことが容易に想定される。工具類の一種かもしれない。173は棒状鉄製品で残存長3.7cm、幅0.75cm、厚さ5.5cm、断面が鈍三角形を呈す。170は断面四角形の棒状金属製品。長さ10.1cm、幅1.9cm、厚さ1.1cm。171は飾金具と考えられる。長径2.7cm、短径2.1cm、厚さ0.05cmを測る。177は鎌の一部で、茎と刃の部分に相当する。茎部と刃部とは約140度で屈曲している。182は用途不明の鉄製品で、長さ3.65cm、幅0.6cm、厚さ4.65cm。鍋の足かもしれない。183は鍋の一部。厚さ1.15cmを測る。184～186はキセルの首部である。板を曲げて円筒をつくり、先端を垂直に上向きに屈曲させ、火皿となる。186は火皿の部分が欠損している。187は火打金で、径2.5cmの紐通しの穴を有する。厚さ0.7cm。188・189・190は鉄滓で、重さが188で65.1ｇ、189で163.9ｇ、190で148.6ｇをそれぞれ量る。

Ａ２・Ａ３・Ｂ１地区出土遺物（図面306-191～193）

191は和釘で残存長6.2cm、幅0.32cm、厚さ0.38cm。Ａ２地区の包含層から出土している。192はＡ３地区の包含層から出土した釘で、断面四角形の和釘である。残存長6.85cm、幅0.56cm、厚さ0.6cm。193は簪で、完形品である。一端に耳かきが付く。長さ18.9cm、幅0.8cm、厚さ0.2cm。Ｂ１地区の包含層から出土している。

(4) 石製品（図面307～314）

A 地区

井戸

SE016（図面307-009）：009は縄文時代の打製石斧である。本調査地では縄文時代の遺構は確認されておらず、どのような状況で中世遺構に混入したのか判然としない。石斧には折損・欠失がみられる。形態は現状では短冊型で、刃部の両側縁に沿って調整剥離を施す。背面側に自然面は残存せず、荒く調整剥離を施す。現存で長さ17.5cm、幅8.6cm、厚さ4.0cm、重さ910ｇを測る。石材は安山岩。

SE035（図面307-001）：001は長方形で角柱状の砥石。両端を欠失している。現存で幅5.2cm、長さ11.0cm、厚さ4.2cm、重さ538ｇを測る。石材は砂質凝灰岩である。

SE047（図面307-003）：003は方形の砥石。幅5.8cm、長さ6.8cm、厚さ2.4cm、重さ112.8ｇを測る。

SE052（図面307-004・005）：004・005は破損した砥石の残欠である。石材はともに凝灰岩である。

SE060（図面307-006）：006は小型長方形の砥石で、上下端が折損している。現存で幅2.3cm、長さ3.9cm、厚さ0.65cm、重さ11.8ｇを測る。石材は泥岩である。

SE070（図面307-010）：010は石臼である。主として粉挽きに用いるいわゆる「粉挽き臼」で、これは上臼（雌臼）の方である。直径28.3cmの車輪形を呈す。最大厚12.4cm、最小厚9.0cmを測る。上臼の上面は一段窪んでおり、中軸よりややはずれた位置に「ものいれ」と呼ばれる円孔（供給口）が穿たれる。側面に挽き木を打ち込むための孔は残存しないが、いわゆる横打ち込み式の石臼と考えられる。摺り合わせ側の中心軸の芯棒受けは、直径3.4cm、深さ２cmが残存する。臼目のパターンはやや均等に欠くものの、主溝６本の六分画で標準型、副溝は９～13本で、目の切り合いから逆まわし臼と考えられる。摺り合わせ面には貫通した「ものいれ」と、これから続く「ものくばり」が回転方向とは逆方向にみられる。石臼の石材は安山岩である。

SE073（図面307-007）：007は破損した砥石の残欠で、正確な法量は不明。石材は凝灰岩である。

SE091（図面308-011）：011は板碑である。板碑とは板形をした石製卒塔婆で、その名の通り薄い板状のものが多いが、本例は厚みのある角柱状でシンプルな形状のもの。ちょうど将棋の駒の身を厚くしたような形態である。頂部の山形と身部（軸部）とは線刻区画されておらず、高さのない三角錐状の山形が頭頂部に作り出されている。身部表面には図像にかわる種子として梵字を刻んでおり、いわゆる梵字板碑に該当する。梵字は大日如来を表す「バン」の字が一字、軸部やや上側に陰刻される。下端は破損するため高さは不明。幅19.2cm、厚さ12.2cmを測る。石材は安山岩である。

SE093（図面307-008）：008はやや不整形だが角柱状の大型の砥石。現存で幅6.7cm、長さ11.8.cm、厚さ3.8cm、重さ508ｇを測る。石材は流紋岩である。

SE102（図面309-035）：035は方形で角柱状の砥石の残欠である。現存で幅5.7cm、厚さ2.3cmを測る。

SE106（図面308-012～014）：012～014は板碑である。いずれも厚みのある角柱状でシンプルな形状のもの。頂部の山形と身部（軸部）とは線刻区画されておらず、高さのない三角錐状の山形を頭頂部に作り出す。身部表面には図像にかわる種子として梵字を刻む。梵字は大日如来を表す「バン」の字が一字、軸部やや上側に陰刻される。法量は012が長さ45.2cm、幅19.4cm、厚さ12.3cm。013は長さ38.4cm、幅20.0cm、厚さ10.4cm。14は下端を欠損するため現存で長さ33.0cm、幅21.7cm、厚さ15.9cmを測る。石材は全て安山岩である。

土坑

SK009（図面308-015）：015は角柱状の小型の砥石で、上下端を欠失する。幅3.55cm、厚さ0.4cm。

SK016（図面310-048）：048は石臼の下臼である。直径29.2cm、厚さ4.4cmを測る。中心軸の芯棒受けは直径2.0cmで貫通する。臼目のパターン摩滅のため読みとりにくいが、やや均等に欠いた六分画と考えられ、４・５本程度の溝を刻む。石材は砂岩である。

SK041（図面308-016、309-040）：016は小型・長方形の砥石で上下端を欠失する。幅1.65cm、厚さ0.6cmを測る。石材は流紋岩である。040は硯の破片で、長方硯と考えられる。材質は泥岩である。

SK068（図面310-042～044）：042～044は五輪塔の火輪（笠）である。法量は、042が小型で一辺14×14.6cm、高さ8.6cm、043は一辺14.7×23.0cm、高さ14.4cm、044はやや大型で一辺19.1×27.8cm、高さ19.2cmを測る。石材は全て安山岩である。

SK072（図面310-050）：050は板碑である。形態は他出土品と同様に、厚みのある角柱状でシンプルな形状のもの。頂部の山形と身部（軸部）とは線刻区画されず、高さのない三角錐状の山形を頭頂部に作り出す。身部表面には図像にかわる種子として梵字を刻む。梵字は大日如来を表す「バン」の字が一字、軸部やや上側に陰刻される。法量は長さ46.8cm、幅20.8cm、厚さ17.5cm。材質は安山岩。

SK141（図面308-017）：017は砥石の残欠である。幅3.3cm、厚さ0.3cm。石材は泥岩である。

SK171（図面309-038）：038は硯である。摩滅・破損が著しいが、長方硯と考えられる。硯尻側の残存で、陸の中央部分が楕円形に窪み、使用痕跡を残す。幅6.3cm、厚さ1.0cmを測る。表面に被熱の痕跡が残る。石材は凝灰岩である。

SK214（図面308-018）：018は砥石の残欠である。厚さ0.9cm。石材は凝灰岩である。

SK250（図面308-019）：019は砥石の残欠である。厚さ1.45cm。石材は凝灰岩である。

SK265（図面309-039）：039は小型・楕円形の硯である。内面全体が一段低く窪むが、縁は全体に欠失している。長径7.0cm、短径5.4cm、厚さは現存で1.05cmを測る。石材は泥岩である。

SK280（図面308-020）：020は砥石の残欠である。厚さ0.7cm。石材は凝灰岩である。

SK296（図面308-021）：021は砥石の残欠である。厚さ2.3cm。石材は凝灰岩である。

SK302（図面308-022・023）：022・023は砥石である。022は長方形の砥石で、表・裏面が使用に伴い、中央の厚みが減じている。幅3.9cm、長さ9.5cm、厚さ1.25cmを測る。石材は凝灰岩である。023は半円形状に残存する大型の砥石。表・裏面の中央が使用に伴い窪んでいる。現存で長さ32.8cm、幅23.6cm、厚さ11.8cmを測る。石材は閃緑岩である。

SK307（図面309-024）：024は砥石である。幅6.8cm、長さ9.6cm、厚さ1.6cm。石材は凝灰岩である。

SK333（図面309-025・026）：025・026は砥石である。025は幅5.4cm、長さ5.8cm、厚さ3.4cmで凝灰岩製、026は長方形の形態で、幅3.2cm、長さ5.7cm、厚さ0.4cm。石材は泥岩である。

SK339（図面309-027）：027は長方形の砥石で、下端を折損する。幅3.5cm、厚さ0.85cm。泥岩製。

SK355（図面309-028）：028は砥石の残欠である。幅1.9cm、厚さ1.0cm。石材は凝灰岩である。

SK392（図面312-069）：069は五輪塔の空風輪である。風と空をひとつの石材で彫ったものが空風輪と呼ばれる。下端には突起があり、この部分を火輪の凹部に差し込む。上端を少し欠失するが、高さ約20cm、幅15.2cm、重さ5.4kgを測る。石材は安山岩である。

SK394（図面309-029）：029は砥石である。幅8.0cm、厚さ2.8cm。石材は凝灰岩である。

SK397（図面307-002）：002は方形の砥石で、上端を欠失する。幅4.5cm、厚さ1.9cm。凝灰岩製。

SK465（図面309-030）：030はバンドコと考えられる小破片である。石材には泥岩が使われる。

SK569（図面310-046）：046は、特定できないが、何らかの石造物の破片と考えられる。幅13.8cm、高さ28.0cm、厚さ7.0cmを測る。石材は凝灰質砂岩である。

SK574（図面311-062）：062は砥石で、下端を欠失する。幅6.75cm、厚さ2.4cm。石材は凝灰岩。

SK601（図面309-037）：037は温石である。滑石製で円孔の痕跡が残る。厚さ1.7cmを測る。

SK606（図面309-034）：034は長方形で角柱状の砥石。幅4.9cm、厚さ2.9cmを測る。凝灰岩製。

SK619（図面309-033）：033は折損して不整形を呈す砥石。幅5.7cm、厚さ1.8cm。石材は凝灰岩。

SK627（図面309-036、310-047）：036は砥石の残欠である。幅6.75cm、厚さ3.2cm。石材は凝灰岩である。047は石臼で、上臼の残欠。挽き木を打ち込むための方形の孔の痕跡が残る。石材は安山岩。

SK653（図面310-049）：049は板碑である。形態は厚みのある角柱状でシンプルな形状。頂部の山形と身部（軸部）とは線刻区画されず、高さのない三角錐状の山形を頭頂部に作り出す。身部表面には図像にかわる種子として梵字を刻む。梵字は大日如来を表す「バン」の字が一字、軸部やや上側に陰刻される。法量は現存で長さ37.2cm、幅16.2cm、厚さ12.2cm。石材は安山岩である。

大型土坑

SX017（図面309-032）：032は欠損部のある砥石である。幅3.7cm、厚さ0.9cm。石材は泥岩。

溝

SD005（図面311-064）：064は県内では出土例の少ない滑石製石鍋の破片。他では包含層でも何点か破片が出土している。内外面とも成型時の加工痕が顕著に残る。厚さ0.95cmを測る。出土部位は体部下半の一部分であるため、型式分類にあてはめる特徴に欠く。長崎県西彼杵郡の産であろう。

SD032（図面312-068）：068は五輪塔の火輪。一辺26.2×36.4cm、高さ26.0cmを測る。安山岩製。

SD099（図面311-057）：057は砥石で、上下端を欠損する。幅5.9cm、厚さ2.9cm。砂質凝灰岩製。

SD118（図面311-058）：058は欠損のある砥石。幅3.9cm、厚さ1.45cm。石材は安山岩である。

SD125（図面310-041）：041は五輪塔の地輪と考えられる。形態は完全な正立方体ではないキャラメル形で、一辺20.4×25.3cm、高さ25.3cmを測る。石材は安山岩である。

SD195（図面309-031）：031は砥石の残欠である。幅2.9cm、厚さ1.1cm。石材は凝灰岩である。

SD213（図面311-059）：059は硯の残欠で、どの部位にあたるか判然としない。石材は泥岩である。

SD216（図面311-060・061）：060・061は砥石で、欠損はみられるが、現状で長方形を呈す。060が幅3.5cm、厚さ1.9cmで凝灰岩製、061が幅5.2cm、厚さ1.8cmで、石材は泥岩である。

SD217（図面312-065）：065は板碑である。

SD286（図面312-066・067）：066・067は板碑。形態は、066は厚みのある角柱状でシンプルな形状のもの。067は角柱の中央が膨らみ丸みを帯びる。いずれも三角錐状の山形が頭頂部に作り出す。梵字は大日如来を表す「バン」の文字が一字、軸部中央より上側の山形近くに陰刻される。066は幅17.0cm、高さ48.0cm、厚さ15.0cm、067は幅18.0cm、高さ22.8cm、厚さ14.0cmを測る。ともに安山岩製。

SD289（図面311-063）：063は砥石の残欠である。幅6.2cm、厚さ4.5cm。石材は凝灰岩である。

旧河道

SR01（図面311-051～056、図面314-109）：051～056、109は全て砥石だが、完存するものは少なく、欠損部位があるものが大半である。形態は長方形（052）、台形（053）などがあるが、他は不整形である。051については硯を砥石に転用している。石材は凝灰岩ないしは凝灰岩系のものが多い。

包含層

包含層（図面310-045、図面312-070～073、図面313-074～096、図面314-097～108・110・111）：045・106・107は五輪塔の地輪ないしはその可能性のある石製品である。形態は完全な正立方体ではないキャラメル形で、107のは欠損部がみられる。045は一辺22.8×24.2cm、高さ11.8cm。106は一辺22.0×

23.8cm、高さ16.6cm。046は一辺27.6×（16.9）cm、高さ12.8cmを測る。石材は全て安山岩である。070～100、110～111は砥石である。小型長方形のものが多いが、大半は折損ないしは欠損部位が認められる。このうち088・092は完存例で、いづれも長方形の形態。088は幅2.6cm、長さ8.3cm、厚さ0.7cm、092は幅2.6cm、長さ8.3cm、厚さ1.55cmを測る。材質は凝灰岩が最も多く、この他には泥岩、砂岩などもみられる。101～104は滑石製石鍋。小破片ばかりであるが、102は口縁部、他は体部下半の一部分であろう。105は小型の長方硯である。角の一部を欠失するが、ほぼ完存している。いずれも裏面は平坦で削り出しを施さず、側面は垂直に立ち上がる。陸の中央部分は楕円形に浅く窪み、使用痕跡を残す。幅3.15cm、長さ6.9cm、厚さ0.45cmを測る。石材は泥岩である。108は鉢の破片で、口縁部付近が残存する。厚さは3.7cm。石材は凝灰岩である。

※なお上記以外のその他の遺物として、漆製品の一種である烏帽子が挙げられる。烏帽子はSE034、SX04で出土している。このうちSE034の烏帽子は、本報告書では出土状況写真のみを提示している。この烏帽子の漆塗膜分析は、漆器文化財科学研究所の四柳嘉章氏に分析を依頼しているが、分析結果については、次年度刊行予定の「中名Ⅴ・Ⅵ遺跡・砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告」のなかで他遺跡の漆塗膜分析と一括して報告を予定している。SX04の烏帽子については残欠の出土であり保存状況も悪いことから、出土事実の記載のみを行っている。

第Ⅳ章　総　　括

以上道場Ⅰ・Ⅱ遺跡の調査成果について概述してきた。最後に最も調査面積が多かったＡ地区を中心に、今回の調査で検出された中世集落遺構とその出土遺物の二点から簡単なまとめを試み、本調査の一応の総括としたい。

(1)　中世遺構の変遷

Ａ地区で検出された中世の遺構には、確認できたものだけで掘立柱建物102棟、半地下式建物３棟、井戸107基、土抗、溝多数などがある。これらの遺構群の広がりをみると、旧河道SR01を東限に、南と西は大溝によって区画され、遺構群の領域が明確に認識できる。これに対し遺構群の北限は明確でないが、Ａ５地区での遺構分布のあり方をみても、これを越えて遺構群がさらに北側に大きく拡張する様相は認め難い。従って大きくは東西80～100m、南北140～160mの範囲内に遺構群の主たる分布範囲があるものと見なすことができよう。このようにみた場合、Ａ地区における調査面積は、予想遺構分布範囲の約80%に及ぶことになる。換言するならば、本中世集落の約８割を今回の調査で明らかにしたことになる。このような事例は過去の周辺部調査でもあまり類例をみない。

次いで本調査地の遺構群の存続時期だが、先行する古代は遺物量も少なく様相が判然としない。Ａ地区では中央を北西に向かってのびる自然流路と、その西側一帯にこれと直行する方向の小溝群がみられ、畑作の痕跡と考えられる。またこの自然流路から北東側の一角に掘立柱建物数棟がみられるが、遺構に伴う遺物も少なく、詳細時期を把握し難い。古代の出土遺物は、主に包含層および中世遺構内から混入として出土することが多く、まとまりにかける。時期は奈良時代から平安時代中期が中心である。近隣の同時期の遺跡としては中名Ｖ遺跡がある。Ａ地区の下層遺構である畑や数棟の掘立柱建物については、遺物は少ないものの、漠然と平安時代後期頃と予想しておく。一方近世の様相では、主に調査地区の南側で耕作関連の溝群が検出される程度で、建物跡や屋敷地、井戸などはみつかっていない。従って本調査地の中世集落が廃絶した後、周辺はすみやかに再耕地化がなされたものと考えられる。以後当地では水田・畑作景観が現代まで継続する。

さて本調査地の遺構の主たる時期を成すのは中世であると考えられるが、出土遺物の様相から、上限時期は12世紀代には遡らず、基本的には13世紀以降の形成と考えられる。下限時期については16世紀代に降る遺物はきわめて少なく、本遺跡の集落は、15世紀代の中で一旦の終焉を迎えるものと考えられる。従ってその間の250年から300年間が、本中世集落の存続時期と考えることができる。以下に各時期における集落の様相を遺構変遷図をもとに辿ってみる。但し各時期の指標となる遺構に、必ずしもその遺構の帰属時期を示す良好な遺物が伴っているわけではない。というよりもむしろ遺物が遺構内に意図的に遺棄ないしは破棄されている例は皆無といってよい。実際には井戸や土抗内などでも、出土遺物は小破片が散在して覆土に混じり込んでいる事例が大半である。また遺構の密集する度合いも高く、遺構相互の切り合いも激しい。このため遺構相互の先後関係に関わりなく時期が前後した遺物が混じり合う事例が一般的にみられる。従って今回提示した集落変遷は、あくまでも概念としての把握の段階に留めざるおえなかったことを付記しておく。

（集落の変遷）

本集落の変遷は、大きくみると周辺の現地割りに沿った方向で、屋敷地が溝などによって区画割り

される時期と、これに先行し周辺地割りの方位に規制されない棟方向を持つ建物群とに大きく二分される。建物は側柱建物が多く、平安時代後期から鎌倉時代にかけてよくみられる典型的な総柱建物は少ない。また時期が新しくなるに従い掘立柱建物の柱穴配置や形態が安定しなくなる傾向がみられる。建物に付随する最も重要な遺構としては井戸があるが、井戸の型式には、本調査地の場合、木枠組と石組の大きく二種がある。木枠組の井戸が石組井戸に先行することが過去の調査事例からも明らかで、14世紀代に漸次木枠組から石組井戸への移行が行われたものと推定される。以上の視点を考慮に入れながら本集落の変遷を大きくⅠ～Ⅳ期に、これにさらに各小期を加え7時期の変遷案を提示しておく。

① Ⅰ期（第1図）

本集落の形成期にあたる。建物は数棟を一単位にそれぞれ棟方向を異にするが、基本的には周辺地割りの方向とは斜行する東西あるいは南北方向の建物が多い。建物はおおよその棟方向から3時期3群に分離できる。

Ⅰa・b期：棟方向の一致から、SB009とSB046、SB043とSB084の大小2棟の組み合わせが考えられるが、両者の先後関係を推定する根拠に欠ける。各建物群単位となる2棟の建物間はかなり離れているが、棟方向は概ね一致する。SB009・046は雁行、SB043・084は「L」字状の建物配置である。伴う井戸は前者がSE006、後者はSE013が考えられる。Ⅰc期への建物展開を考えた場合、SB043と重複する位置にあるSB042ないしはSB038への連続的な建物系譜を想定する方が、建物変遷を理解しやすい。従ってSB009と046をⅠa期に、SB043と084をⅠb期に考えておく。なおSD009・015・103・123・157・183・184やSK041は、Ⅰa・b期の建物方向に一致した方位を有しており、この時期に伴う溝である可能性が高い。但し建物の範囲を明示するような区画溝は認められない。

Ⅰc期：次のⅠc期になると建物群の棟数に増加がみられる。建物群の構成はSB021・027・038・036・042の5棟からなる。建物の棟方向はSB021のみ南北方向、他は東西方向を向く。建物配置は該期の中心建物と考えられるSB038が北端に、その南側に近接してSB027・042が従列する。南側にはSB021とSB036が東西それぞれに離れて配置され、SB021・027・036・042の4棟で囲まれた内側が方形の広場空間となっている。すなわち東西40m、南北60mの範囲内に、中央の広場を中心に東西2群に配置される合計5棟の建物群が展開するという構成が、Ⅰc期の建物群として復元されることになる。但し周囲には建物群の領域を示すような区画溝はみられない。建物群に伴う他の遺構としては井戸が挙げられる。該期の井戸の構造は基本的に木枠組と考えられる。SB021には近接するSE022、広場中央に位置するSE001はSB027に、SE010はSB042に、北端の最大規模建物SB038にはSE019・020がそれぞれ対応する井戸と考えられる。建物群と井戸以外の共伴遺構は明確でないが、SB027の東側に展開する土抗群が本期に伴う可能性がある。これはⅡ期以降の建物群の占地と展開を考えた場合、この土抗群に重複する位置に建物群が長期にわたって存続すること、これらの建物群の柱穴が土抗群に切り合いで後出する事例がみられること、などからも傍証される。供献遺物もなく土抗群の性格は不明ながら、群集土抗墓の可能性のあることを指摘しておく。

② Ⅱ期（第2図）

A地区とその周辺に及ぶ広い地域に本格的に建物群が展開するようになるのがⅡ期である。また規模の大きな半地下式の建物が伴うのも、本期の特徴として挙げられる。単位建物群の数も、Ⅰ期の一時期1単位群から大幅に増加する。Ⅱ期では大きく4つの単位建物群がみられ、これを仮にa～d群

第１図 道場Ⅰ遺跡A地区の集落変遷（Ⅰ期）

として記述を進める。各単位建物群には規模、構成棟数にかなりの格差がみられる。

a群：4群中最大規模の建物群を擁するのがa群の建物群である。構成は、中央より東側に位置するSB003・012・015・018の4棟からなる比較的小規模の掘立柱建物群、西側に展開するSB026・028・033・039・040・045からなる大小の掘立柱建物群、南側に位置する半地下式建物SB201・202および掘立柱建物SB021からなる13棟構成の建物群が復元される。このうちSB039と040はほぼ同位置で重複しており、両者は建て替えの関係にあるものと考えられる。また半地下式建物SB201にも切り合いから新旧が認められる。まず中心となる掘立柱建物はSB039ないしは040とSB026の2棟である。前者はⅠc期のSB042を継承する建物と考えられる。この点においてa群建物のⅠc期建物群からの継続的な展開がより強く想定される。Ⅰc期のSB038の建て替えに相当するのはSB026と考えられるが、建物の棟方向は南北方向に変化し、建物構造も総柱化している可能性が高い。この建物はその後の時期において、当地における中世集落の盟主的建物として長期に渡って存続している。一方半地下式の建物は、南側で東西方向に配置される。建物構造の特徴は、まず長方形の竪穴を地面に掘り窪め、竪穴の四壁と部屋の間仕切りは石積みとする。これらの半地下式建物は、竪穴の床面の周囲（SB201a）か、ないしは竪穴部の外縁に沿って柱穴を配し（後述のⅣ期SB203）、掘立柱建物の覆屋をつくり、建物の上部構造としていたようである。とくにSB201aは大型で、平面規模はほぼSB040と同等のものを有す。a群の建物配置では、北側のSB039・040と中央のSB026・028および南側の半地下式建物群によって西側に向かって開く「コ」字状の建物配置がなされる。この中心建物群の東側にSB003・012・015・018の建物群が、また南側にはSB021の単独棟が配置される。これら周辺建物群はいずれも棟の規模が小さく、中心建物群の規模とは落差がみられる。これらの建物に伴う遺構としては井戸が挙げられる。井戸の構造は本期前後より木枠組から石組へ移行していくものと考えられる。各建物との配置・共伴関係では、まず東側の小規模建物4棟ではSE028・032の2基が該期の時期と考えておく。中央の規模の大きいSB026にはSE043・044を、SB039・040には北側に近接して位置する木枠組井戸SE047を当てておく。半地下式建物の周辺ではSE003・049が該当するが、配置に重複がみられる。このうちSE049がSB201aとSB033に伴う井戸に、SE003をSB201bに伴う井戸に考えておきたい。また南辺に位置するSB021については、隣接するSE024が建物に対応する井戸と考えられる。a群建物には区画溝は伴っていないが、建物の東西方位と一致するSD050・280・285などがa群とb～d群の建物群の境界を示す溝である可能性が考えられる。この場合のa群の領域は、東西80m、南北80m程度になるものと考えられる。

b群：a群の北側に占地する建物群の中で、b群は東端側に位置する。SB096とSB102の2棟1単位の建物群構成である。2棟の建物は、これに伴うと考えられる木枠組井戸SE097を挟んで、約25m程離れて所在する。建物は直線上に配置するが、棟方向は直行している。またSB102の南東側に近接する井戸SE103・104も、b群の建物に伴うものと考える。

c群：b～d群の中央に位置する建物群。SB063・092の2棟を1単位に、概ね直線上に配置される。井戸はSB092の東側にあるSE102・105と、西側にある木枠組井戸SE072がc群に伴うものと考えられる。とくにSE102からは花押のある墨書木札が出土しており、道場Ⅰ遺跡の性格を考える上で重要な遺物となっている。建物・井戸の配置に若干の相違はあるものの、ほぼb群の建物と似通った内容の群構成であると言えよう。

d群：西端側に位置する建物群だが、その構成はb・c群とは明らかに異なる。建物群は5棟の構成。やや離れた位置にあるSB083は、b群のSB102やc群のSB063と類似した規模の側柱建物である。こ

第２図 道場Ⅰ遺跡A地区の集落変遷（Ⅱ期）

れに比べSB087～089は、狭い地域に密集する連棟建ての構成で、他の建物群とはやや趣を異にする。建物もSB089は総柱構造、SB087・088は四隅の柱穴規模の大きな1×1間の特異な形態で、SB87については大型方形土抗SK505を伴う竪穴建物の可能性もある。建物配置においてもSB087・088は近接した連棟建てとなる。周辺にd群に付随するような井戸もみられず、生活感が希薄である。d群については、集落に伴う倉庫的建物としての機能などが想定される。

③　Ⅲ期（第3図）

Ⅲ期では、Ⅱ期のa群建物を継承する建物群が、依然調査区の南半部を中心に展開している。北半部の建物群はⅡ期のb～d群を直接継承する建物群はみられず、Ⅱ期にはあまり建物群の展開のみられなかった中央から北西側を中心に、建物群の密集配置がみられる。

また本期から、これまでにはなかった集落の周囲を区画する溝が構築されるようになる。すなわち集落の東辺を区画する南北方向の溝SD271、南・西辺を「L」字状に区画する溝SD032、西辺の北側を南北にのびる溝SD177などがこれに該当する。北辺を区画する溝は現状では検出されていない。とくにSD032は規模も大きく計画的に構築された溝で、この溝を境とした外辺部には掘立柱建物などの集落遺構はみられない。以下に建物群を中心にⅢ期の記述を進める。建物群はⅡ期のa群を継承するものをⅢ期のa群とする。次いで中央から北西側の一群の建物をb群、やや離れて北端に位置する2棟の建物をc群と仮称し記述を進める。

a群：a群は調査地中央から南半部に展開する建物群。このなかでSB024は最大規模の建物で、建物の棟方向や配置からみてもⅡ期のSB026を継承・発展させた建物と考えられる。付近の遺構重複が激しく柱穴配置は不明瞭ながら、4間×5間で南北方位の総柱建物と推定しておく。注目すべきは北東側柱列に沿ってさらに1間分の庇が付設され、この庇の束柱を支えたとみられる礎石10個が一列に検出されている。この一面庇の存在から、建物の東側を正面とする配置が復元される。この点において、Ⅱ期のa群建物が西側を開放する「コ」字状の建物配置であったこととは異なる様相が看取できる。すなわちこれまでのⅠ・Ⅱ期の建物配置は、集落東側の限界となる旧河道SR01をあまり意識しない配置であったのに対し、以後の建物群の配置はこの旧河道SR01の河岸を意識的に正面とした配置へと転換している。SB024については、さらに建物に近接してSB022・023の2棟の付属屋が伴う。またSB024の北側柱列の東側延長上に沿って柵列がみられ、その先端に石組井戸SE035が位置している。このSE035は柵列で囲まれており、周囲に重複する遺構も少なく、周辺からやや隔絶した様相を示す。SB024に伴う井戸としては、この他に建物南側に位置するSE023、西側のSE004が挙げられる。次いでSB024の西側には区画溝SD032に沿ってSB035と043の2棟の掘立柱建物が配置される。対応する井戸は両者の中間にあるSE005が考えられる。一方SB008は区画溝SD032の東端の延長上に位置する。東西に細長い側柱建物で、SE030がこの建物に付随する井戸と考えている。またSR01内にみられる桟橋状遺構（SR01石組遺構01）についても、この時期以降の構築と考えておく。以上からもa群建物の占有地域はⅡ期とはあまり変わらないものの、建物配置には明確な変化がみられる。同時にその領域内に各建物が大きく分散配置される様相が窺われる。なおSB043の西側に接して土抗の群集がみられるが、以後の周辺地域の建物群との重複関係を考えると、この土抗群の形成はⅢ期を中心になされた可能性が高い。これらの土抗群は供献遺物もなく性格は不明ながら、Ⅰc期の土抗群と同様に、群集土抗墓の可能性を示唆しておく。

b群：調査地中央付近から北西側に展開する建物群。東西の棟方向を有する側柱建物7棟で構成され

第３図 道場Ⅰ遺跡A地区の集落変遷（Ⅲ期）

る。SB049・050・051、057～060、066の８棟がこれに該当する。それぞれが近接配置で密集しているものの、さらにいくつかの建物群単位に細分できる。すなわちSB049と051の２棟、SB057・058の２棟、SB059・060の２棟およびSB066単棟の４群構成に分離できる。このうちSB059・060はSB057・058と直接の重複はないものの近接しており、時期が異なる可能性が高いが、先後関係は現状では把握できていない。SB049・057・066は、概ね南北方向に一列並行に並んでおり、この３単位については同時期併存と考えられる。これらの建物群に伴う井戸としては、SE009・014・017・018・021・045・050・051などが挙げられる。いずれも建物群の周辺に散在しており、概ね建物１棟につき井戸１基の勘定である。またｂ群建物の北側には「L」字に屈曲する溝SD163があり、ｂ群とｃ群の境界を区画する溝と考えている。

ｃ群：調査地の北端付近にみられる建物をｃ群としたが、建物群は調査地外にも所在する可能性がある。現状ではSB080・085の２棟の建物のみがｃ群となる。この２棟はやや離れて所在するものの、一応ひとつの単位建物群とみてよいものと考える。これに伴う井戸はSE071・077が挙げられる。さらに後述のⅣ期の建物群と重複するSE070・073・075も本期に含めざる終えなかったが、丁度調査地境界付近でもあり、ｃ群を構成する建物が、本来はもっと多かった可能性が、これらの井戸の存在からも窺うことができよう。

④　Ⅳ期（第４・５図）

Ⅳ期は本集落の最終形態を示す時期で、調査地のほぼ全域で建物群が検出され、このⅣ期をもって集落としての最盛期を迎えることになる。同時に、その範囲内において、屋敷地割りとでもいうべき方形の区画割りがなされる時期でもある。建物群はこの区画割りの内部でそれぞれの変遷の過程を辿っている。各区画は、それぞれが一つの単位的建物群のみで構成されているのではなく、一単位から数単位の建物群がみられる。また区画のなされる範囲にもいくつかの変化があり、必ずしも方形の区画ばかりではない。Ⅳ期は建物群相互の切り合い重複関係も顕著で、Ⅳ期を単時期で捉えることは困難である。少なくともⅣａとⅣｂの２時期に区分して各建物群の様相を提示する必要があるが、両小期とも建物群の区画の細分化と、個別屋敷地化が進展するという点では共通している。

・Ⅳａ期（第４図）

Ⅱ期のａ群以来の建物系譜が連続している中心建物群において、まず方形区画による屋敷地化の動きが顕在化する。しかしその北側に位置する建物群では方形区画化は進行せず、大きく緩やかな長方形区画を形成している。前者を区画１、後者を区画２と仮称する。また旧河道の河岸に沿った地域はこれまであまり建物群がみられなかったが、本期以降この地域にも建物群が配置されるようになる。但し周囲に明確な囲繞区画はやはりみられず、南側で東西方向の溝による間仕切りがみられる程度である。この間仕切り溝から南側を区画３、その北側の河岸に沿った長方形の細長い地域を区画４とする。

区画１　区画１では、南北棟で大型の中心的建物SB025が、Ⅱ期のSB026、Ⅲ期のSB024を継承してこの時期まで存続している。これに付随する建物としては、SB029と031の２棟がみられる。共にSB025の南・西辺に接して「L」字型にこれを囲む配置で、３棟構成の密集した建物群を形成する。SB029・031とも大型方形土抗が位置的に重複しており、半地下的な竪穴部分が建物の床面下に構築されていた可能性がある。これに伴う井戸としてはSE008・SE048・078が挙げられる。建物群の周辺はⅢ期以来の大溝SD032によって南辺と西辺を区画する。北辺と東辺はSD120・121とSD033・042によって区画

第４図 道場Ⅰ遺跡A地区の集落変遷（Ⅳa期）

し、これによって東西50m、南北60mの方形区画の屋敷地を形成している。但し北辺と東辺の溝はやや不連続で規模も小さく、他の区画に対し区画１の囲繞性を強調したものというより、単なる間仕切り溝に過ぎないような様相を示す。

区画２　区画２ではⅢ期のｂ・ｃ群建物の占有地域をそのまま継承したような領域となっている。建物群はⅢ期ｂ群の位置に２単位、ｃ群の位置に１単位がみられる。これを区画２のａ～ｃ群建物と仮称する。

ａ群：まずａ群建物は、SB052・054・072の３棟で構成される。これらの建物は区画２の南西角に接して「L」字状に配置する。この「L」字の内側にあるSE015・016・106の３基の石組井戸が、ａ群建物に伴う井戸と考えられる。

ｂ群：次いでｂ群は、ａ群の北東側に対置して展開する。これらの建物の配置はａ群に対して逆「L」字状を呈しており、両者の間が30m四方程度の広場空間となっている。ｂ群建物にはSB055・056・064・065・067・068・069の７棟がある。このうちSB064・065とSB067・068はほぼ同一場所、同一規模での重複であり、建て替え関係にあるものと考えられる。またSB069を除く他の建物にも相互に位置的重複がみられ、さらに２～３の小期に細分が可能である。一応SB056とSB067・068および069、SB055とSB064・065の組み合わせが予想されるが、組み合わせはこの他にも考えられ、先後関係も明確に把握し難いのが現状である。このｂ群に伴う井戸としてはSE053・054・059が考えられる。井戸以外では大小の方形土抗がｂ群の周辺からａ群にかけて散在してみられる。

ｃ群：ｃ群の建物は調査地の北端中央付近に占地している。一応SB074・075・076・078・079の５棟が該当するが、このうちSB078と079はほぼ同じ位置にあり、両者は建て替えの関係にあるものと判断できる。またSB076は配置が他の建物と大きく重複しており、少なくともSB075・078・079とは同時期共存できない。一応SB074・076とSB075・078・079の二つの組み合わせが考えられるが、調査地区外にも建物がある可能性が高く、建物群の全容を示すかどうかは現状で判断できない。伴う井戸もSE071を挙げられるに過ぎず、この点にも問題を残す。最後に建物群の周囲を巡る区画溝であるが、まず南辺については区画１の北辺溝と共用している。東辺溝は区画１のSD140の北側延長上にSD217・266・289が連なる。これに対し西辺の区画溝はあまり明確でなく、SD191・192が不連続に短く南北にのびている程度である。集落の後背と考えられるだけに、あまり明確に区画がなされなかった可能性が高い。

区画３　区画３は、Ⅲ期ａ群建物の南東側が独立したような様相を示す。北側の区画４とは東西溝SD106によって明確に寸断されるものの、区画１との間には長さ15m程の開放部分があり、区画１の付設・拡張部分とも解釈できる。建物としてはSB001・002の２棟、SB004・007・011の３棟の２単位に細分できる。いずれもあまり規模の大きくない側柱建物で、やはり区画１の大型中心建物群に従属する位置付けとなろう。伴う井戸はSE029・031・025・026・027・041の６基があり、建物１棟につき井戸１基の構成となっている。

区画４　旧河道SR01の左岸に沿ってのびる細長い長方形の区画で、建物群は大きく南側・中央・北側の３単位がみられる。それぞれをａ～ｃ群とする。

ａ群：ａ群は区画３との境界となるSD106に沿って２棟の建物が東西に配置され、これにSE034・038・079の井戸が伴う。次いでⅢ期以来の存続を想定するSE035を挟んで、北東側の河岸近くに１棟の建物SB019が配置される。SB019は単棟構成で規模も小さく井戸も伴わない。桟橋状遺構の可能性があるSR01石組遺構01に近接しており、何らかの作業小屋的機能を有していたのかもしれない。とくに

井戸SE035を中心とする20m四方ほどの空間は、全時期を通じて遺構の重複があまりみられない場所でもある。旧河道SR01を介して集落内への物資の取り込み、あるいは逆に取り出す際の公的な作業空間という解釈も可能である。中央のSE035井戸が、柵列を伴い規模も大きいながら、近隣の建物群から隔絶して位置することについても説明ができよう。なおa群とb群との間には本来区画溝が所在し、両者が分離していた可能性があるが、付近は近・現代まで続く水路跡によって大きく撹乱されており、区画溝そのものを判別することはできなかった。

b群：次いで中央のb群建物であるが、SB098・099の2棟が該当するが、両者はほぼ同位置で重複している。このため両者は建て替えの関係にあるものと思われるが、先後関係は不明である。伴う井戸はSE082・083・090が挙げられる。建物の北側にある井戸群については、b群建物に近接しているものの、数が多く、やはりc群との関連で捉えるべきであろう。

c群：b群のさらに北側に所在する建物がc群となる。SB091・093・094の3棟からなる。中央のSB093が東西棟、他の2棟は南北棟で、3棟の東側の柱列がほぼ一直線に揃っている。伴う井戸はSE061・099の2基を考えておく。SE060・064などの井戸は、さらに北側調査地外にも建物が所在する可能性があり、現状での帰属先は判断できない。またb群とc群との中間に所在する井戸SE092～096およびSE088は、どちらの建物群に伴うとも言えず、両者共用の井戸群と捉えておく。とくにSE092～096の井戸は、1基の井戸の作り替え重複と考えられ、場合によればSE035などと同様に、付近に建物が形成する以前から存在した可能性もある。ただし石組井戸からその使用時期の一端を示すような遺物が出土することは滅多になく、時期を推定する根拠に欠けるため、一応Ⅳ期に含めて取り扱った。

・Ⅳb期（第5図）

Ⅳb期はⅣa期の建物群を発展的に継承しながらも、建物棟数が大幅に増加し、また方形区画による屋敷地の単位も、Ⅳa期に比べてより明確に分化している。区画は区画1～7までみられる。このうち区画1と区画4のみⅣa期の区画をそのまま踏襲するが、区画2と3はⅣa期の区画2が南北に二分されたもの、区画5～7もⅣa期の区画4が南北に3分されたものとなる。

区画1　区画1はⅣa期の区画1をそのまま踏襲している。建物は1単位群の3棟のみが区画中央にみられる。SB030・032・034がこれに該当する。このうちSB030が中心建物であるが、平面規模自体はもはやそれほど大きな建物とはいえない。伴う井戸はSE002・007の2基が考えられる。区画溝は、南・西辺はⅣa期と変わらないが、東辺はSD125、北辺はSD111で区画される。このうちSD125は南端が開放され、SD111も中央付近で途切れており、両者とも四方が完結した囲繞溝とはなっていない。

区画2　区画2はⅣa期の区画2の南側3分の2の範囲に相当する。区画の溝は連続しておらず、途切れている部分が多いが、各角付近は溝を「L」字に巡らしている場合が多い。溝は南辺は区画1の北辺溝SD111と共用する。東辺溝はSD289が該当する。北辺溝は東西両端付近のみみられる。北東角はSX17を基端に、SD220が西側に短くのびる。北西角付近は区画3と共用するが、その後SD174が屈曲してのび、区画西辺の範囲を概ね明示している。区画内の建物には大きく4群がみられる。建物の密集度も高い。これらの建物群のそれぞれをa～d群と仮称して記述を進める。

a群：Ⅳa期の区画2にあるa群建物を基本的に踏襲する位置にある。SB044・048・053の3棟がこれに該当する。このうちSB044は区画1の北辺溝の西側延長上にあり、丁度両区画の境界線上に位置する。伴う井戸は3棟の建物で囲まれた広場空間の東端に位置するSE011、西端に位置するSE012が該当しよう。同時に井戸の周辺に分布する方形土抗も、a群に伴う可能性が高いと考えている。とくにSK081は石積みの方形区画を内部に有する土抗である。

第5図 道場Ⅰ遺跡A地区の集落変遷（Ⅳb期）

b群：b群は、区画2の東南角付近に占地する2棟の建物からなる。SB037とSB203がこれに該当する。とくにSB203は半地下式の建物で、東・北・西の3方向に「L」字型の柵2つを伴うなど特殊な様相を示す。竪穴の内部は石組により2室に間仕切りされ、竪穴部の周辺を1×2間の掘立柱建物で覆う。これに対しSB037は東西棟の側柱建物である。b群に伴う井戸は、SE046・084・085・086・087・101が該当する。うち5基はSB203の周辺に位置する。半地下式建物の周辺に井戸が集中する様相はSB201周辺でもみられ、SB203においても同様の傾向を示す。

c群：区画の北東角に位置する2棟の掘立柱建物SB061・062がc群となる。2棟は共に東西棟建物で、並列して所在する。これに伴う井戸はSE065が考えられる。このSE065は次に述べるd群の井戸SE055と対称的な位置関係にある。同様の事例は区画3の井戸でもみることができる。

d群：区画2の北西角に位置する建物群である。SB070・071・073の3棟が該当する。建物配置は「T」字状を呈する。伴う井戸はSE055と考えられる。建物周辺に位置する方形土抗SK115やSK128・129もd群に伴う時期のものと捉えている。

区画3　区画2の北側に隣接する。区画の溝はやはり中途が切れるものが多いが、区画の角付近は「L」字状に掘削し、区画の範囲を明確にしている。区画の北半部は調査地外にのびており、南北の長さは現状では不明。区画溝の配置は、まず南東角ではSD218・221によって溝を「L」字に巡らせる。区画南辺の西半部は区画2の北辺溝と共用となるSD186が東西に走り、さらに小溝のSD176が西側にのびている。区画西辺はSD197・200によって境界が認識されるが、SD176の北側に並行してSD199が西側にも延びており、2つの小区画を形成している。両区画とも南東角に井戸を1基ずつ（SE056と057）配しており、建物を伴う区画の可能性もあるが、残念ながら掘立柱建物などの痕跡は確認できていない。区画内の建物群は東西2群がみられ、これをa群、b群と仮称して記述を進める。

a群：区画の東側に位置する建物群で、Ⅳa期のc群建物を直接継承する配置にある。建物はSB076を1棟のみ挙げたが、これとは対照的にⅣa期の建物は同位置で複雑に重複しており、この付近においては、Ⅳa・Ⅳbの2小期だけでは、建物変遷が捉えきれないことが明確である。この中でSB076は、b群の建物群や井戸との配置上の整合性などから、1棟のみではあるがⅣb期に分離して取り扱った。伴う井戸はSE074を挙げる。この井戸はb群の井戸SE076と対置する場所にある。また建物の東側に近接するSE066～069も本期に含めて考えておく。これら4基の井戸は、もともと1基の井戸の作り替えと考えられることから、あえて建物と一部重複する井戸を含めて本期とした。

b群：SB081・082の2棟で構成され、「L」字状の配置を取る。これに伴う井戸としては、a群のSE074に対置するSE076、さらに建物群の西側に位置するSE058を挙げておく。また区画の南西角付近にみられる大型方形土抗SK483・485・488も本期に含めて考えておく。

区画4　区画4はⅣa期の区画3をそのまま踏襲している。建物群はSB005・006・011の3棟を挙げておく。建物群は密集して「L」字状に配置されている。伴う井戸はSE025・030の2基がある。建物群の周辺には数基の大型方形土抗がみられる。この区画周辺の建物群は、長期にわたる継続性を有する半面、建物規模は小さく、一時期の単位建物群は2～3棟にとどまる場合が多い。

区画5　Ⅳa期にはこの区画は明確でなかったが、Ⅳb期では区画の範囲が溝によって明確に意識されるようになる。建物群は区画の南辺に沿ってSB014と016の2棟がみられる。Ⅳa期の建物群の配置・構成をほぼ踏襲している。建物は棟方向が直交するものの、直線的に配列する。伴う井戸はSE033・037・039が考えられる。区画中央の井戸SE035は、この時期まで存続しているかわからないが、図面には一応含めて捉えておいた。いずれにせよこの区画の有する公空間的な性格は、Ⅳb期の最後まで

変化しないものと考えられる。

区画6　Ⅳｂ期の区画６は、Ⅳａ期の区画４の中央部分にあたる。区画溝は、区画５の北辺溝と共用となるSD109が、その西端付近で屈曲し、区画２と６の間をSD287・288となって、北に向かって直線的にのびる。この溝の内側をさらにSD286が区画の南･西辺に沿って「L」字状にのび、北端はSK663に接合する。さらにSD214が区画の北西角を直角に曲がり、先端はSD219として東に10m程のびて先端が消失する。旧河道SR01の河岸に沿って設定された区画だけに、方形ではなく細長い長方形を呈しており、東西30m、南北45m程度の領域を有す。区画内の建物群には２群がみられ、南の２棟の建物をａ群、北側の２棟の建物をｂ群とする。

ａ群：雁行に配置される２棟の建物SB100・101からなる。Ⅳａ期の区画４におけるｂ群建物と重複する位置に占地する。伴う井戸はSE080・081・089が挙げられる。井戸以外では２棟の建物に近接した位置にある大型方形土抗が、これに伴う可能性が高い。

ｂ群：ａ群の北側に大小２棟の建物が東西に配置され、これをｂ群とする。伴う井戸は区画の北西角付近にあるSE091・098が挙げられる。また大型方形土抗SX04およびSK663も、本期の所産と考えておく。

区画７　区画６のさらに北側に位置するが、区画のかなりの部分が調査地外となっており、区画内の建物群の全容は明らかでない。区画の東・南・西辺は、大きく「コ」字状に巡るSD213によって境界が明示される。SD213の西辺北側は、溝が大きく拡幅して落ち込み状の広がりとなっている。区画内の建物は調査面積の制約もあり、総柱建物SB090の１棟のみが確認できる。Ⅳａ期SB091に位置的に重複しており、これの建て替えと考えられる。伴う井戸としてはSE063・064の２基を挙げるが、北側の調査地区外にも他の建物が複数所在する可能性がある。

⑤　小　　結

最後に本書で示した集落変遷Ⅰ～Ⅳ期のおおよその年代観を記しておく。集落の形成は13世紀代に遡る。出土遺物の様相では13世紀代から遺物の出土量が増加し、14・15世紀代を通じて継続的に遺物の出土がみられる。下限については16世紀に降る遺物がほとんどみられず、15世紀代のなかで遺跡そのものが一旦の終焉を迎えることが予測される。この間の約250～300年間が本集落の存続時期幅と捉えることができる。これに各時期の概括的な変遷過程や各遺構から出土した遺物の様相などを加味したうえで、一応Ⅰ～Ⅳ期の時期を次のように考えておく。

Ⅰａ～ｃ期：13世紀前半～後半、Ⅱ期：13世紀末～14世紀前半、Ⅲ期：14世紀中頃～14世紀後半、Ⅳａ期：14世紀末～15世紀前半、Ⅳｂ期：15世紀中頃～後半。

以上道場Ⅰ遺跡Ａ地区検出の中世集落をⅠ～Ⅳ期に、これに小期を含めて７時期に区分し、その変遷を模式的に辿ってきた。もちろん集落そのものの実体的な変遷はより動態的で、このような任意で設定した時期幅だけのなかで十分に捉えきれるものではない。しかし本集落の歴史的な変遷の過程を、その成立時期となる13世紀代から終焉となる15世紀代までの間で、大雑把にではあるが、ある程度把握することはできたものと思う。

(2)　出土土器・陶磁器の様相

中世の建物群の検討に続いて、Ａ地区からの出土遺物の様相についても検討を加えておく。本遺跡の場合、出土遺物の主体をなすのは中世の土器・陶磁器である。とくに在地産の土師器Ⅲ以外の焼物

については、原則として何らかの流通手段・経路を経て本調査地に持ち込まれ、使用・破損等により破棄されたものと考えられる。そこにはこれらの土器を保有・使用したであろう人々の、日常の生業手段の一端や、当地でかつて生活を営んだ人々の嗜好や経済的地位、あるいは社会的な階層性などが、何らかの形で反映されている可能性が高い。従ってこれらの土器・陶磁器の種類をリストアップし、その内容や組成について検討を加えることは、建物群の構成を復元し、集落変遷を明らかにしていくことと同様、遺跡の性格を考えるうえでの、ひとつの重要な視点を提供することにもなる。そこでまず出土した土器・陶磁器の焼物別および器種別のリストを作成し、次いで各種の焼物から構成される土器・陶磁器の組成について検討を加えていきたい。分析資料は、A地区から出土した全ての土器・陶磁器を対象とした。前提として中世以外の時期の遺物（古代以前および近世以降）は事前に選別・除外した。カウントは基本的に破片数で行い、個体識別や口縁部・底部残存比率による累計といった方法は行っていない。また珠洲・八尾については、破片総数以外にも口縁部、体部、底部ごとの破片数のカウントを行った。

1．出土した土器・陶磁器の種類と特徴

出土した土器・陶磁器では、まず在地産と考えられる土師器皿や土師質土器がある。また壷・甕・擂鉢といった貯蔵・調理器には、八尾や珠洲などに代表されるように、地域色の強い在地流通品が多量にみられる。さらに広域流通品としては、青磁・白磁・青白磁などの中国陶磁、瀬戸美濃施釉陶器、山茶椀、畿内産の瓦質土器、瓦器などがある。ここではまず中国陶磁や瀬戸美濃施釉陶器といった広域流通品ないしは他地域からの搬入品について検討を加えておく。

中国陶磁（第6図）：中国陶磁は、当地では最も遠隔地からもたらされた広域流通品のひとつである。流通商品の価値は、そのものの有する品質としての価値に加えて、入手の難易度によっても左右されるが、中国陶磁は品質と入手の困難さにおいて、当時の人々にとって最も価値の高い焼物の一つであったと考えられる。その輸入は初期貿易陶磁の段階を除くと、平安時代後期以降に本格化する。本調査地では平安時代に遡る北宋の時期の製品は少なく、南宋・元代の製品が主流である。出土総点数は163点で、このうち青磁が122点（74.9%）、白磁が34点（20.9%）、青白磁が6点（3.7%）、鉄釉陶器が1点（0.6%）となる。青磁のうち大半は龍泉窯系青磁（119点）、2点のみ同安窯系青磁である。また建窯産と考えられる鉄釉天目茶椀が1点出土している。器種構成では碗、小碗、盤、大型盤、皿、多角杯、天目茶椀、小壷、壷、香炉ないしは蓋、合子、水注、四耳壷、梅瓶などがある。碗、小碗、皿といった小型供膳器種が130点（79.8%）を占める。うち龍泉窯系青磁は108点（83.7%）で、白磁18点（14%）、青白磁2点（1.6%）、同安窯系青磁は1点（0.7%）となる。器種の中で最も多い碗は106点で65%を占める。次いで皿が11点（6.75%）、小碗5点（3.1%）、他は4点以下で3%に満たない。小型供膳器種に比べ壷類、水注といった袋物は少なく、全体の14%以下である。各器種の特徴では、碗は青磁で外面に蓮弁を有するものが多く、次いで無文で口縁端部が外反するタイプのものが多い。古手のものでは大宰府分類Ⅰ-2類の可能性の高い0696をはじめⅠ-2～4類碗が3点、次いでⅠ-5-b類が15点認められる。同安窯系青磁では、皿Ⅰ-2-b類（0719）がみられるが、本調査地では、同安窯系青磁はこれを含めて3点しか認められない。白磁ではⅣ類碗（0733）、Ⅴ類ないしはⅧ類碗（0734）が、青白磁では梅瓶の底部破片（0744）や水注（0743）が古い時期に遡る。次いで大宰府分類Ⅱ類の龍泉窯系青磁　（Ⅱ-b・Ⅱ-c類）が定量みられるが、Ⅲ類は少ない。但し天目型の小碗Ⅲ-3類（0720）や大型盤など、特殊な器種がみられる点が注目される。とくに龍泉窯系青磁の大型盤類

種　別	窯	器　種	分　　類	点数
青磁	龍泉窯系青磁	碗	大宰府分類Ⅰ-5-b類	15
		碗	大宰府分類Ⅰ-2～4類	3
		碗	大宰府分類Ⅰ～Ⅱ類	2
		碗	大宰府分類Ⅱb類	21
		碗	大宰府分類Ⅱc類	2
		碗	大宰府分類Ⅲ類	6
		碗	大宰府分類Ⅲ-2-c類	1
		碗	大宰府分類Ⅲ～Ⅳ類	2
		碗	大宰府分類Ⅳ類	6
		碗	大宰府分類Ⅳイ類	3
		碗	大宰府分類Ⅳウ類	1
		碗	大宰府分類Ⅳ類以降	22
		碗	上田分類B-Ⅱ類	1
		碗	上田分類B-Ⅲ類	4
		碗	上田分類C-Ⅱ類	1
		碗	上田分類D類	1
		碗	上田分類DⅡ類	9
		碗	不明	1
		小碗	大宰府分類Ⅲ-3類	1
		小碗	不明	1
		盤	大宰府分類Ⅳ類	1
		大型盤	不明	3
		大型盤	大宰府分類Ⅲ類	1
		小壷	大宰府分類Ⅲ～Ⅳ類	1
		香炉か蓋	不明	3
		不明	不明	5
		不明	大宰府分類Ⅱ類	1
		不明	不明	1
			(小計)	119
	同安窯系青磁	小皿	大宰府分類Ⅰ-2-b類	1
		不明	不明	2
			(小計)	3
白磁		大型碗	不明	1
		碗	大宰府分類Ⅳ類	1
		碗	大宰府分類Ⅴ類かⅧ類	1
		碗か皿	大宰府分類Ⅸ類	1
		皿	大宰府分類Ⅸ類	2
		多角杯	森田D群	2
		皿	森田D群	8
		小碗	森田D群	1
		不明	森田D群	5
		碗	森田E群	1
		壷		1
		四耳壷		1
		水注		1
		不明	不明	8
			(小計)	34
青白磁		合子蓋		1
		小碗		2
		小壷蓋		1
		水注		1
		梅瓶		1
			(小計)	6
鉄釉陶器	建窯	天目茶碗		1
			(小計)	1
			合　計	163

種　別	施釉の種類	器　種	分　　類	点数
瀬戸美濃	無釉	入子		1
	灰釉	四耳壷	藤澤編年前Ⅱ期	1
	灰釉	花瓶	藤澤編年後Ⅳ期古	1
	灰釉	花瓶	藤澤編年中Ⅲ～Ⅳ期	1
	鉄釉	花瓶	藤澤編年中Ⅰ～Ⅱ期	3
	鉄釉	花瓶	藤澤編年後期	1
	灰釉	水注	藤澤編年中Ⅰ～Ⅱ期	1
	灰釉	水注	藤澤編年前Ⅱ期	1
	灰釉	瓶子	藤澤編年前Ⅲ～Ⅳ期	2
	灰釉	瓶子	藤澤編年前Ⅲ～Ⅳ期	1
	灰釉	瓶子	藤澤編年中Ⅰ～Ⅱ期	1
	鉄釉	瓶子	藤澤編年中Ⅰ～Ⅱ期	2
	鉄釉	瓶子	藤澤編年中Ⅰ～Ⅱ期	1
	灰釉	平椀	藤澤編年後Ⅰ期	10
	灰釉	平椀	藤澤編年後Ⅱ期	15
	灰釉	平椀	藤澤編年後Ⅲ期	3
	灰釉	平椀	藤澤編年後Ⅳ期古	3
	灰釉	平椀	藤澤編年後Ⅳ期新	1
	灰釉	椀型鉢	藤澤編年後Ⅰ期	1
	灰釉	椀型鉢	藤澤編年後Ⅱ期	1
	灰釉	卸皿	藤澤編年中期	2
	灰釉	卸皿	藤澤編年後Ⅰ期	3
	灰釉	卸皿	藤澤編年後Ⅱ期	2
	灰釉	卸皿	藤澤編年後Ⅲ期	2
	灰釉	卸皿	藤澤編年後期	7
	灰釉	浅椀	藤澤編年後Ⅰ期	1
	鉄釉	天目茶椀	藤澤編年後Ⅰ期	5
	鉄釉	天目茶椀	藤澤編年後Ⅱ期	4
	鉄釉	天目茶椀	藤澤編年後Ⅲ期	1
	鉄釉	天目茶椀	藤澤編年後Ⅳ期新	1
	鉄釉	天目茶椀	藤澤編年大窯Ⅰ期	2
	灰釉	小壷	藤澤編年中Ⅰ～Ⅱ期	1
	灰釉	折縁深皿	藤澤編年後Ⅰ期	4
	灰釉	折縁深皿	藤澤編年中Ⅳ期	1
	灰釉	卸目付大皿	藤澤編年後Ⅳ期	1
	灰釉	盤類	藤澤編年後Ⅰ～Ⅱ期	1
	灰釉	燭台	藤澤編年後Ⅰ～Ⅱ期	1
	灰釉	燭台	藤澤編年後Ⅰ～Ⅱ期	1
	灰釉	香炉	藤澤編年後Ⅳ期古	1
	灰釉	香炉	藤澤編年後Ⅰ～Ⅱ期	1
	鉄釉	擂座茶入	藤澤編年中Ⅲ期	1
	灰釉	広口壷蓋	藤澤編年中Ⅰ～Ⅱ期	1
	灰釉	底卸目皿	藤澤編年中Ⅰ期	1
	灰釉	縁釉小皿	藤澤編年後Ⅲ～Ⅳ期	2
	灰釉	縁釉小皿	藤澤編年後Ⅳ期	1
	灰釉	縁釉挟皿	藤澤編年大窯Ⅰ期	2
	灰釉	腰折皿	藤澤編年後Ⅳ期	1
	灰釉	不明	藤澤編年後Ⅲ～Ⅳ期	1
	灰釉	柄付片口	藤澤編年中Ⅱ期	1
			(小計)	104
	灰釉	瓶子		24
	灰釉	花瓶他		23
	灰釉	平椀		36
	灰釉	香炉		3
	灰釉	卸皿		5
	灰釉	折縁皿		6
	灰釉	大皿		4
	灰釉	小皿		1
	灰釉	不明		53
	無釉	入子		2
	鉄釉	瓶子		4
	鉄釉	天目茶椀		15
	鉄釉	蓋		1
	鉄釉	小型袋物		5
			(小計)	182
			合　計	286

第6図　中国陶磁・瀬戸美濃施釉陶器分類表

（小破片のため未実測）は一般集落での出土が希少なものであり、本集落の性格を考えるうえで重要な視点となろう。また建窯産と考えられる天目茶椀も１点出土している。本遺跡では瀬戸美濃産の天目茶椀は多数出土しているが、中国産はこれ１点のみである。白磁では口禿げの碗・皿（0736、0737）や壷（0741）がこの時期に該当する。続く大宰府分類Ⅳ類およびそれ以降の龍泉窯系青磁は、再び出土量が増加している。無文で口縁部が外反するタイプの碗が多いが、蓮弁文を有する碗では、上田分類B-Ⅱ・Ⅲ類がみられる。但しヘラ先による細かな線描蓮弁文を有する碗（上田分類B-Ⅳ類）はみられない。また少量であるが外面に雷文を有する上田分類C-Ⅱ類碗（0694）が出土している。一方白磁では森田分類のＤ群の多角杯・皿・小碗などが定量みられる。なお白磁染付は、本遺跡の場合全く出土が認められない。以上を簡単にまとめると、龍泉窯系青磁Ⅰ、Ⅱ類とこれに並行する時期の白磁がまず定量みられる。これに比べⅢ類の時期のものは少ないが、天目タイプの小碗や大型盤類など、あまり一般集落では出土しないような製品がみられる。Ⅳ類の時期は再び出土量が増加するが、15世紀代でも後半以降に降るものはみられず、15世紀中～後半頃の製品が、本遺跡出土の中国陶磁の下限時期となっている。

瀬戸美濃施釉陶器（第６図）：瀬戸美濃の施釉陶器は、数量的には中国陶磁よりも遙かに多い。本遺跡では総破片数286点の瀬戸美濃施釉陶器が出土している。釉の種別での数量比では灰釉が241点（84.3%）、鉄釉42点（14.7%）、無釉３点（１%）となる。このうち藤澤編年による帰属時期と器種が明瞭な114点の器種構成をみると、次のようになる。まず無釉の製品としては入子がみられる。灰釉では平椀が最も多く32点ある。次いで卸皿が16点、折縁深皿５点、瓶子４点、縁釉小皿３点、以下花瓶、水注、椀型鉢、燭台、香炉、縁釉挟皿各２点、四耳壷、浅椀、小壷、卸目付大皿、盤類、広口壷蓋、底卸目皿、腰折皿、柄付片口、不明各１点となる。鉄釉では天目茶椀が13点、花瓶４点、瓶子３点、擂座茶入１点となる。全体の比率では灰釉平椀や卸皿、鉄釉天目茶椀などの小型供膳具が149点（52.2%）、瓶子、花瓶、壷類、香炉など袋物他が83点（29%）、不明54点（18.9%）となる。小型供膳具の中では、灰釉が118点（79.2%）、鉄釉28点（18.8%）、無釉３点（２%）となり、灰釉製品が過半を占める。特に平椀は総数68点で、瀬戸美濃出土総数の23.8%、小型供膳具全体の45.6%、灰釉小型供膳具の57.6%を占める。これに次ぐのは灰釉卸皿の21点で、瀬戸美濃出土総数の7.3%、小型供膳具全体の14.1%、灰釉小型供膳具の17.8%を占める。一方鉄釉製品で最も多い天目茶椀は28点みられ、瀬戸美濃出土総数の9.8%、小型供膳具全体の18.8%、鉄釉小型供膳具の全てを占める。これに対し四耳壷、瓶子、花瓶などの大型製品を含む袋物その他の器種は83点で、全体組成の29%を占める。このうち灰釉製品の比率は78.3%（65点）、鉄釉製品は21.7%（18点）となる。大型品は破砕片となって数が増える傾向を考慮にいれると、実際の比率はこれよりさらに低下することが予測される。次にこれらの瀬戸美濃製品の時期であるが、藤澤編年による時期の明らかなもの103点について検討する。これによると古瀬戸前期様式に遡るものは少なく、僅か５点（4.9%）のみが挙げられる。内訳は前Ⅱ期の灰釉四耳壷１点、灰釉水注１点、前Ⅲ～Ⅳ期の花瓶２点となる。中期では19点（18.5%）が該当する。このうち中Ⅰ～Ⅱ期が12点、中Ⅲ～Ⅳ期が５点、中期のみの識別が２点となる。中Ⅰ～Ⅱ期では鉄・灰釉の瓶子が４点の他鉄釉花瓶、灰釉水注など袋物が多く目立ち、小型供膳具は少ない。中Ⅲ～Ⅳ期は数が少ないが、Ⅲ期に比定される鉄釉擂座茶入（845）は類例が少なく稀少とされる。またこの中期の段階で灰釉卸皿が当地でも出現している。後期になると瀬戸美濃製品は数が大幅に増加する。識別では後Ⅰ期23点(22.3%)、後Ⅱ期21点(20.4%)、後Ⅰ～Ⅱ期４点(3.9%)、これらの総計が48点(46.6%)となる。これからもよくわかるように、ほぼ過半に近い数量を後Ⅰ・Ⅱ期の製品が占めており、本遺

跡における瀬戸美濃製品のピークを形成している。この時期の製品ではやはり灰釉平椀が最も多く、後Ⅰ～Ⅱ期で25点、全体のほぼ4分の1を占める。また灰釉卸皿は5点がこの時期である。但し卸皿は底部破片の場合詳細時期の識別が困難で、単に後期とされるものがこの他に7点ある。灰釉折縁深皿も後Ⅰ期に比定されるものが4点ある。鉄釉製品では天目茶椀のうち5点が後Ⅰ期、4点が後Ⅱ期に比定される。合計点数は9点と、総出土点数13点中の70%弱を後Ⅰ～Ⅱ期が占めている。後Ⅲ～Ⅳ期になると、この時期の総数は19点（18.5%）と依然定量みられるものの、ピークは明らかに過ぎており、次第に出土量は減少してくる。主要器種では、平椀7点、卸皿2点、鉄釉天目茶椀2点などがある。なお大窯の時期に降る製品では、大窯Ⅰ期のものが4点が出土しており、該期が本遺跡における瀬戸美濃製品の最終段階となっている。瀬戸美濃施釉陶器については、15世紀後半頃から16世紀前後が、本遺跡出土品の下限時期となっている。

山茶椀：無釉の山茶椀が出土している。合計で16点出土しており、数個体分ありそうである。硬質緻密な胎土で東濃の製品と考えられる。藤澤編年の7型式、明和窯の段階の製品に比定される。13世紀中頃の年代観が与えられている。

瓦器：畿内産の瓦器皿の破片が1点（0866）出土している。後述の瓦質土器と区別したのは、この瓦器皿は時期がやや古く、畿内で瓦器椀が盛行する時期の製品のためである。およそ13世紀代と考えてよく、概ね山茶椀と並行する年代観が予想される。生産地は不明だが、京都山城周辺産の可能性が高いものと考える。

瓦質土器：瓦器皿より後出し、火鉢や風炉といった大型の製品が主流となる。とくに本遺跡では、奈良火鉢座の瓦質火鉢に相当する製品が出土している。いわゆる浅鉢型の輪花火鉢（0868～0873）である。口縁部外面直下には菊花のスタンプ文を横一列に連続的に施文している。また本遺跡では風炉も出土している。主に口縁部形態から3タイプの風炉が本遺跡の出土品として確認できる。瓦質製品ではこの他に擂鉢がみられるが、量的には少ない。こちらは搬入品ではなく、在地産の製品と考えられる。また瓦質土器の香炉を模倣したと考えられる土師質土器も少量出土している。

2.土器・陶磁器の組成比率と調査地内での出土状況

次にA地区出土の中世土器・陶磁器全てを対象に、その組成の比率やA地区内での出土の様相・傾向について検討してみる。土器・陶磁器組成の分析は、遺構論・遺物論双方からの複合的検討が必要不可欠で、かつ資料の出土条件にも恵まれている必要があるが、本遺跡の場合そのどちらにも恵まれていない。とくに建物群単位で短時期毎の組成が復元できるのがベストであるが、このような条件はもとより論外の状況にある。そこで漠然とした取り扱いであるが、土器・陶磁器の全体組成について、とりあえず存続時期総体の出土遺物でカウントしてみた。但し空間的広がりについては、幾ばくかの設定が可能なため、これを若干試みてみる。すなわちA地区の調査地内を3地域に分割し、各地域毎に土器・陶磁器組成を相互に比較してみる。分割地区の線引きは、中央付近を境界に南半部と北半部に二分する。具体的な範囲は、例えばⅣb期の集落変遷図を参考に説明すると、区画1・4・5が南半部、区画2・3・6・7が北半部の地域となる。さらに集落の東限をなす旧河道SR01内からの出土遺物を3つめの分割地区として取り扱う。以上のように調査地内を3分割したうえで、土器・陶磁器の破片数をカウントして集計し、その組成表を作成した。またこれとは別に、中国陶磁、瀬戸美濃施釉陶器、山茶椀などの焼物は小破片でも認識・抽出でき、かなり細かく分布を追うことができる。そこでこれらの焼物については、調査地内での出土地点をドットで落として位置を明示した図面